

ジューダス・ビショップと最強のイマジナリーフレンド

東田せんたつき

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なおイマジナリーフレンドの正体はオブスキュラス——魔法族の子どもの抑圧された闇の力の具現——の突然変異体であるとする。

ハリー・ポッターのカバー裏程度の登場人物紹介

<https://syosetu.org/?mode=kappo|view&kid||288661&uid||356274>

目次

賢者の石

友達がないなら作ればいいじゃない 1

魔法の力ってスゲー 7

いつけなーい！ 遅刻遅刻！ 15

スリザリンが良い 22

天にまします我が父よ 29

祭りに乱入は付き物 36

真実はいつも1つ……？ 43

ポッターにも箒の誤り（強制） 50

クリスマスイブイブイブイブイブ 56

ポツチで良かった 63

友情は全てを解決する 70

雨降って地固まれ 78

禁止されるとやりたくなっちゃうよね 85

イスカリオテ状態 92

強欲な者たちの祭典 99

秘密の部屋

心がぴよんぴよん 108

はじめて？ のお使い 115

絶体絶命！ ハリー退学の危機！ 一方その頃ジューダスさんは 123

混ぜるな危険 131

バカにつける薬は百薬の長しかない 140

形状記憶メンタル 148

妖精 v s 妖精 (自称)	157
クエスト：禁じられた森の採取ツアー	166
ミカの霊圧が……消えた……!?	175
エクスプロージョンッ!	183
チヨコなんかねえよ	191
マジキチ☆ブレイクスルー	201
勝手に殺すな	208
拳で妨害する29歳	217
バジリスクタイム	224
クリフハンガーの聖人	
一級フラグ建築士	236
君は幸せを吸い取るのが得意なフレンズなんだね!	244
英雄の誕生 (笑)	253
無知無知	261
藪をつついてバジリスクを出す	269

賢者の石

友達がないなら作ればいいじゃない

思えば、俺の周りでは奇妙なことがよく起こった。誰かに苛ついた時は必ずソイツはタンスの角に小指をぶつけていたし、遅刻しそうな時は時計が壊れたりした。

周囲の人間からは不気味に思われていたのだろう。孤児院で俺は距離を置かれ、いつも一人だった。

だから俺は、その力を抑えようとした。

どんなに感情が昂っても、不可解な現象が起こらないように念じた。皆と同じ普通の子どもを演じ続けた。もう一人ぼっちは嫌だった。

初めは遠巻きに見られていただけだった。でも俺はそれでも良かった。何年もかけて徐々に打ち解けられるはずだと夢想していた。だけど、拒絶された。

俺は悪魔の子だと言われた。恐ろしいから近寄るなど。悲しいやら腹立たしいやらで、気がついたら自室に駆け込んでいた。しばらく薄暗い部屋で呆然としていると、ソレは現れた。

何と俺の体から、黒い闇の瘴氣的な靄が滲み出していたのだ！

ソレは何も語らなかつた。しかもっと深い、俺の本能的な部分に囁いてきた気がした。

『憎いだろう、悔しいだろう。奴らが陽だまりで笑っているのが赦せないよなア。お前は悪くない。いつそのこと総てを壊してしまえ。そうすれば楽になれる』

まあわりかし物騒なことを言っていたと思うが、俺の耳には入らなかった。ある一つの天啓を閃いたからだ。

これで究極の友達を作ろう！

自分でもかなりぶっ飛んだ発想だと思う。でも当時の俺は最高にイカれていたから無理もない。

思い立ったが吉日。俺はすぐさま行動に移した。

まずは自分と靄の分離だ。靄が俺を取り込むように纏わりついている状態だったから、それを引き剥がさなければならなかった。だって友達っていうのは普通、癒着しないものだろう？

とりあえず靄を掴んで引っ張ってみる。するとペリッと少しだけ剥がれた。感覚としては手についたのりを剥がした時に近い。

『え？ お前何してんの？』

「俺から切り離してる」

『ハア!? アホやめろ！ すぐやめろ！ 早くやめろオ！』

靄の抗議を無視して黙々と摘む。小一時間もすると、ピクリとも剥がせなくなってしまった。まるで使っていない筋肉を酷使したかのように疲労困憊で、俺は泥のように眠ってしまった。

『そろそろ飽きただろ？ 早く世の中ぶっ壊そうぜ』

あれから俺は、毎日欠かさずに靄を引っ剥がす作業に勤しんでいた。最初はほとんど俺と同化していた靄も、根気強い処置によって体から離れつつある。

『おいッ！ シカトしてんじやねえよカス！』

「うるさいなあ。あともうちよつとだから大人しくしてて。それとカス言うな友達だろ？」

身を振って手から逃げる靄。一緒に過ごして分かったことだが、コイツはかなり口が悪い。

『あのなあ、オレはお前の破壊衝動の具現だからお友達ごっこはできねえんだよ。どうーゆーあんだすたん？』

「何言ってるんだ。既に友達だろ俺たち」

『ごめん。そういえばお前狂人だったわ』

失敬な。友達100人作れなかった俺の初友だぞ。もはやこれは親友では？

俺たちが素敵なフレンズトークをしている内に、靄の分離作業も佳境に入っていた。もう俺の胸部に靄がか細く繋がっているだけだ。

『な、なあ。今なら引き返せる。オブスキュラスの分離なんて馬鹿なことは前例がねえ。何が起こるか分からねえぞ。だからその手を下

ろせ!」

「なら史上初の偉人になれるな。スウー、いくぞッ!」

『うわっマジで離しやがった!』

果たして俺と靄の体は完全に別れた。嵐の後のように部屋中が荒れているが些細なことだ。……何故なら、目の前にローブを着た美少女が出現しているからである。俺は腰を抜かした。

「だだだ誰ー!ー!」

「ん? ……なんじやこりやー!」

濡羽色のショートヘアの少女は自身を見下ろして飛び上がった。そしてそのまま空中に浮遊している。重力どうなってるの。

ゆっくりと下降した少女が俺の胸ぐらを掴む。溶けた鉄のようなオレンジの瞳は鋭く細められていた。

「オレに何しやがった! 今すぐ元に戻せ!」

「何もしてないよ! 親友に誓ってもいい!」

「テメエ親友以前に友達居ねえだろうがッ!」

酷い。俺には靄という立派なベストフレンドが……。

「あれ? 靄が居ない!」

「オレだよ! オレがオブスキュラスだよ!」

「ウツソだろ!」

現実的に考えて靄が女の子に変身とかありえないだろ。……まあ今更か。

俺はしげしげと靄改め少女を眺める。

「むしろこっちの方がいいな。親しみやすい」

「はあ!? ふっぎけんなサノバビッチ! 大体なア——」

「ジュ、ジューダス。どうかしましたか?」

少しずつ足音が大きくなる。騒ぎすぎてしまったようだ。俺は床に散乱した家具の残骸を手にしち尽くした。

「不味い。保母さんが来たでしょう!」

「ソイツに見られたら駄目なのか?」

「駄目ってレベルじゃないよ。今度こそ追い出されちゃう」

ただでさえ腫れ物扱いの俺だ。一部屋丸ごと破壊したなんて絶対

に知られちゃいけない。

焦る俺とは対称的に、元靄は落ち着いていた。口端に笑みさえ浮かべている。

「何でそんなに余裕そうなんだよ!? 君も隠さなきゃいけない対象だつてこと忘れてない?」

「そう慌てなさんな宿主さんよオ。教えてやろう、これがお前の秘めたる力だ」

少女は踊るように手を広げた。たったそれだけの行為で、たちまち部屋が修復されていく。ビデオの巻き戻しを見ている気分だった。

「な、な、な……………」

全てを元通りにした少女は、俺の耳元に口を寄せた。危険な色香が鼻孔を嫩る。

「こんなの序の口だ。オレとお前なら、それこそロンドンを廃墟にすることだつてできる。手始めにこの孤児院でも更地に変えりゃア、スカツとすること間違いねえぜ」

少女の甘言が理性を溶かしていく。途方も無い破壊衝動に突き動かされそうになった。

キィイト、ドアが控えめに開かれた音が鳴る。そこで俺の破壊衝動と血の気が失せた。保母さんに少女がバレる!

「随分と大きな音がしましたが、大丈夫ですか?」

「…………は、はい! 今日元氣一杯オールクリアです!」

俺の想定とは裏腹に、保母さんはいつも通りの素っ気ない態度だった。まるで隣の少女が視えていないかのよう。

「まさか顔してるな。そのまさかだ。オレはお前以外には視えねえ」

早く言えや。お陰で凄イドキドキしたんだぞっ! と叫びたかったが既の所で堪えた。そそくさと帰るはずの保母さんが、まだ扉を開けて立っていたのだ。

「それとジューダス。あなたに手紙ですよ」

「あ、ありがとうございます?」

差し出された白い封筒を受け取る。表にはここの住所と俺の名前

が書かれていた。保母さんは要件は終わりだとしても言うようにさつさと去ってしまった。少女が興味深げに、手紙に封をしている蠟を指でなぞる。

「魔法の手紙か。おいお前、開けてみろよ。こりやア面白くなってきたぞ」

「ちよつと待って。その前にやるべきことがある」

俺は真っ直ぐにオレンジ色の目を見つめた。少女は虚を突かれたかのように動揺する。

「な、何だよ」

「君の名前を決めよう」

「ハア？」

少女が口をぽかんと開けた。普段の粗暴な性格は鳴りを潜めた、間の抜けた表情を晒している。俺はそのギャップに思わず笑みを漏らす。

「聞こえなかった？ 名前を決めようと言ったんだ。……もしかして既にあるとか？」

「いやねえけどよオ。オブスキュラスに名前を付けたがるアタオカ宿主はお前が初めてだ」

「前から気になってたんだけど、そのオブスキュラスって何？」

少女はバツが悪そうに虚空に視線を走らせた。言いづらいことなのだろう。俺は慈愛の眼差しで言ってくれるのを待つ。

「アー、アレだ。抑圧された魔法族のぼっちを救ってあげる妖精的なヤツだ」

「めちやくちやオブライトに包んでいることはわかった」

そんな素敵存在じゃないでしょ。少なくとも俺の中で少女は破壊教唆してくる未確認生物なんだよなあ。

「別にお前、正体は何でもいいいんだろ？ 友達にさえなってくれれば」
「もちろんだぞわが友」

「……コイツヤベーよ」

何故かドン引きしたように頬を引き攣らせる少女。俺と彼女の間には友達の定義に齟齬でもあるのだろうか。

「話を戻すが、君は名前について希望はあるかい？　というか以前はなんて呼ばれてたの？」

「呼び名は色々あるが、人気なのは悪霊、魔神、サタン辺りだな」
「酷い品揃えだ。縁起が悪いって次元を超えている。」

「余り参考にはならないなあ。うーん、天使みたいに強くて、悪魔みたいに口が悪い……」

「喧嘩売ってんのか」

少女のメンチを切っている姿は完全に街のチンピラだ。そこに魔神のような威厳は感じられない。俺は皮肉げに言った。

「ミカエラ、とかどうかな。意味は——神の如き者」

「へ、へえー。まあ良いんじゃないか」

少女は腕を組んでそっぽを向いた。心なしか上機嫌なように見える。皮肉で言ってみただけだから、他にも候補はあったんだけど。

「気に入ってくれた？」

「そんなんじゃないよ。考えるのが面倒くせえからそれにしただけだ」

「本当に？」

「しつげえな！　そう言っただろ！」

俺は手を差し出した。一回やってみたかったんだよね。

「これからよろしくなミカエラ。俺はジューダス・ビショップだ」

ミカエラはオレンジの目を僅かに瞠目すると、勢いよく俺の手を握った。ヒンヤリした感触が心地良い。

「ああ、頼んだぜジューダス。お前は臆病者のガキで終わってくれいなよ」

こうして、俺とミカエラの奇天烈な友情が始まったのであった。

魔法の力ってスゲー

俺に届いた手紙——ミカエラ曰く魔法の手紙——はホグワーツ魔法魔術学校の入学許可証だった。内容を要約すると、入学許可してやるから道具一式揃えてこい、孤児のお前は教師寄越してやるから待ってけ、というものだった。

現実世界に干渉できる系イマジナリーフレンドを見た後の俺は、すんなり魔法学校の存在を受け入れることができた。というか別のことに気を取られていた。俺にとって、ホグワーツよりも一大事な関心事があったからだ。

そう、初めての友達である。

友達、なんていい響きだろうか。二人なら今まで一人でやってきた遊びの楽しさも無量大数倍だ。チェスに腕相撲、ババ抜きや神経衰弱などなど。一人ですると正気が削られるような遊戯に俺は没頭した。最初は渋っていたミカエラも、やっていくうちに熱中していたように見えた。

そんなこんなで、あつという間に教授が派遣される予定の日がやって来た。俺は孤児院の職員に客間まで連れて行かれた。入り口を前にして、俺はミカエラに確認する。

「本当にミカエラは魔法使いにも視えないんだよね？」

「くどいぞチキンハート。オレを視ることは伝説の透明マントを看破することと同義だつて言っただろ」

「この部屋でお客様がお待ちです。無礼のないように」

ドアを三回ノックする。一拍置いて、くぐもった声が聞こえてきた。何て言ったのかは聞き取れない。ミカエラが悪態をつく。

「ケツ、教師ならはきはき喋れや」

まあここまで来て駄目つてことはないだろう。俺は扉を開けた。

「失礼します」

ソファアーには一人の女性が座っていた。大きなメガネに、スパンコールで飾った服、他にも指輪や腕輪などをたくさん身につけている。痩せたその容姿はまるで……。

「カラフルなトンボみてえな女だな」

ミカエラの正鵠を射た一言に、俺は吹き出しそうになる。意志の力で抑え込み、表情筋の損害は中破程度で済ませた。女性はメガネを上げて俺の顔をまじまじと見た。想定通り、ミカエラの姿は視えていないようだ。

「……やはり、あなたはフィデス——あなたのお母さんにそっくりですわ」

「ええ!? 俺の母を知っているんですか!？」

「ええ!? ジューダスって木のまたから生まれたんじゃないのか!？」

実の子の俺は顔さえ見たことがないのに。複雑な気分だ。それとミカエラは俺を何だと思っている。女性は霧の向こうから聞こえてくるような声で言った。

「それはもちろん。あたくしとフィデスは同じレイブクロードしたもの。ああ申し遅れました、あたくしは『占い学』担当のトレローニー教授と言います」

「ご丁寧にありがとうございます先生。知っているかと思いますが俺はジューダスです」

「ええよく知って——」サッカーしようぜ! お前ボールな!」

ドタバタと、子どもたちの足音が通り過ぎた。今日も孤児院のキッズたちは活きが良い。しかしトレローニーは眉を顰めた。俺も彼らにハブられた過去を思い出してそれに倣う。

「俗世は騒がしくて敵いませんわ。ここを出る準備は済んでいますね?」

「はい、廊下に荷物があります」

「それでは行きましょうか」

トレローニーは杖を一振りして自分のバッグに荷物を纏めた。そして俺を一瞥すると、満足気に頷いた。

「流石はフィデスの息子ですわ。この程度では驚きませんか」

魔法はミカエラの時に散々驚いちゃっただけなのだが……。何故か俺の株が上がってしまったようだ。

疑問が顔に出ていたらしい。トレローニーが訳知り顔で言った。

「安心しなさい。ホグワーツについては移動中にでも説明するつもりでしょう」

母親とトレローニーの関係が知りたいんだけど。ミカエラが鼻で笑った。

「ジューダス並に会話できないなコイツ」

「おい」

孤児院を出た俺たちは、『漏れ鍋』というパブに来た。俺たちがパブに入ると、人々の喧騒が出迎えてくれた。しかしトレローニーは周りには目もくれず、むしろ邪魔だとも言うように突っ切る。店内を物珍しそうに見回していたミカエラが、ケラケラと笑った。

「おいジューダス、あのターバンのヤツ見てみるよ！ スゲーニンニク臭えぞ！」

ミカエラの白い指は、紫色のターバンを何重にも巻いた男の人を差している。神経質に視線を動かしていて、どこか怯えているかに見える。突然、男は振り返ると、トレローニーに話しかけた。

「こ、こ、こんにちはトレローニー、教授。いつも占い学の、きよつ教室に引き籠もっているのに珍しい、ですね」

「残念ながらクイレル教授には察することも出来ないようですね！ あたくしが俗世に降りないのは内なる心眼を曇らせないためですわ！」

「そつ、そうでしたか。すすすすみません」

クイレルと呼ばれた男は酷く恐縮したようだった。肩を縮こませている。俺はクイレルの後頭部を凝視しているミカエラに小声で囁く。

「ミカエラ、どうしたの？」

「んー……………コイツ、ハゲを隠すためにターバンしてるんじゃないかと思ってたただけだ」

「やめてさしあげなさい」

言われてみれば、ミカエラの推測は正解なんじゃないだろうか。クイレルは若い先生だし、生徒にハゲいじりされたくないのかもしれないな

い。

「き、君は新入生かな？ はじめまして、私はクイリナス・クイレルです。やっ『闇の魔術に対する防衛術』の教室で会えるのを楽しみにしています」

「よろしくお願いしますクイレル教授。俺の名前はジューダス・ビショップです」

俺が名乗ると、クイレルは大きく目を見開いた。挙動不審が激しくなった気がする。

「び、ビショップ君ですか。君のち、父君を、存じ上げていますよ」

母親の次は父親か！ もしかして俺の両親はフリー素材か何かなのだろうか。クイレルが言葉を継ぐ前に、強引にトレローニーが会話を打ち切った。

「こんな喧しい場所に長居はできませんわ。行きますよミスター・ビショップ」

ツカツカと先を急ぐトレローニーを慌てて追いかける。漏れ鍋を抜けると、赤い煉瓦の壁に突き当たった。トレローニーが幾つかの煉瓦を叩く。すると、ひとりでに入り口が開けた。

「ここがダイアゴン横丁です。必要な物は全て揃っていますわ」

まず俺たちはグリーンゴッツという魔法使いの銀行に行った。ゴブリンが働いていたり、ジェットコースターばりのトロッコで移動したりと、刺激的なことは多々あった。しかし、ビショップ家の金庫のインパクトには負けた。

『清貧を貫くべし』

達筆な文字で書かれた紙切れが一枚と、トレローニー曰くホグワーツの7年分の学費がきっかり入っていただけだったのだ。

「先生、ファミリーネームから予想していましたが、俺の親つて……」
「あなたの父親は熱心な十字教徒でしたわ。呆れたことに、占いは神託だとよく力説していました」

ミカエラが俺と紙切れを見比べた。納得がいったのか、力強く頷く。

「蛙の子は蛙なんだな。オレ、ジューダスがビショップ家のバグじゃなくて安心したぜ」

銀行で資金を手に入れた後は、念願の買い物だ。大勢の魔法使いが行き交う通りを、足取り軽く歩く。

「杖買おうぜ杖。魔法使いはアレがなきゃ締まらねえよ」

「杖は……『オリバンダーの店』か」

トレローニーから渡された地図で場所を確認する。幸い店はここから近いようだ。因みに本人はグリーンゴツツのトロツコにノックアウトされており、今頃どこかのベンチで蹲っていることだろう。

「ここか」

歩くこと数分、古ぼけた店に着いた。ドアには剥がれかけた金の文字で『オリバンダーの店 紀元前382年創業』と書かれている。

「紀元前かア。お前を選んでくれる杖があるといいけどなア」

ミカエラが不安になるようなことを言ってくる。高鳴る心臓を抑えて、俺は店に入った。

「ごめんくださいーい」

埃っぽい店内には、うず高く細長い箱が積まれていた。あれに杖が包まれているのだろう。カウンターに歩いていくと、薄暗い店の奥から白髪のお爺さんが現れた。

「いらっしやいませ」

「えっと、杖を買いに来ました」

途端にミカエラの笑い声が木霊した。宙で腹を抱えている。

「プツ、クハハ。杖の専門店に来て『杖を買いに来ました』って」

逆にそれ以外言うことなくない？ 俺もちよっと思っただけどさあ。

お爺さんの眼鏡に、虚空に困り顔を向けている俺が映った。そんなに情熱的に見つめなくても……。

「では杖腕を。採寸しますゆえ」

「杖腕って？」

「利き腕のことじゃ」

俺は右腕を差し出した。お爺さんのポケットから取り出したメ

ジャーが、勝手に体中を測っていく。

「杖は芯となる魔力を持った材料と、それを覆う木材で作られます。ワシは度重なる試行錯誤の末、芯として最高の3種類を見つけたのじゃ」

「その3つとはなんですか？」

「不死鳥の羽、ユニコーンの毛、ドラゴンの心臓の琴線じゃ。他の材料にも良さはあるが、いかんせんアクが強くて扱いづらいのだな」

オリバンダーはそう言つて、役目を終えたメジャーを回収した。手には一振りの杖を握っている。

「これを振つてみなさい。黒檀とドラゴンの心臓の琴線、26センチ。硬く、持ち主に忠実」

受け取つて振つてみる。杖の先から黒とオレンジの靄——ミカエラの元の姿のようだった——が飛び出し、花瓶の花に直撃した。花は茶色く枯れてしまっている。

「ふむ。アカシアにユニコーンの毛、37センチ。柔軟で取り回しやすうい」

今度は靄が花瓶の水を根こそぎ蒸発させた。頭上のミカエラが黙つてそれを眺めている。

「これも駄目か。リングの木と不死鳥の羽、24センチ。一途で純情」説明が村娘みたいなんです。しかし俺が手に取つた瞬間、杖から靄が放たれ、花瓶を粉々に粉碎した。花瓶に何の恨みがあるんだ。

「ああー！今日は面白い客が多くて飽きないのうー！漲ってきたわい！」

オリバンダーは銀色の瞳を輝かせた。喜色満面、本当にいい空気を吸つてる。

次々と新しい杖を渡されたが、どれも靄が物を破壊して終わった。オリバンダー的にこれはよろしくないようで、首をひねりながら杖を引つた。店がだいぶ散らかった頃に、今まで静かだったミカエラが口を開いた。

「ああもう罫が明かねえ！ここの杖はオブスキュリアルが持ち主だと不服らしいな！」

ミカエラはオリバンダーの前まで行くと、手をかざした。嗜虐的な笑みを浮かべている。

「インペリオ。杖の材料がある所まで案内しろ」

オリバンダーが一瞬とぼけた顔をした。そして恭しく頭を下げると、言われた通りに店の奥に俺たちを誘う。

「オリバンダーに一体何をしたんだ？」

「……えーつとだな、……そうだ！ 『懐柔の呪文』をかけたんだ。これは自分のお願いを聞いてもらうって効果だな」

何だ今の間。俺が訝しげな視線を送っていると、ミカエラはお茶を濁すように話題を変えた。

「それよりも喜ベジューダス！ お前の杖はオレが拵えてやることにした！」

「えっ!? そんなことしていいの!?!」

「いいよなア? オリバンダー?」

「もちろんでございます」

先行しているオリバンダーが振り向かずと言った。ミカエラは愉しげにオレンジの目を歪ませる。俺はミカエラがオリバンダーに耳打ちしていたのを見逃さなかったからな。

やがてオリバンダーの仕事場に着いた。大小様々な素材と作りかけの杖が置かれている。ミカエラは飛び回って物色していたが、ある一つの木を取った。

「オリバンダー、これは何という木だ？」

「月桂樹にございます」

「ふーん」

杖の木材は月桂樹に決めたようだ。ミカエラは作業机にそれをほっぽり出すと、自分の漆黒の髪を塗った。

「ミ、ミカエラ何してるの?」

「何って、杖の芯を採ってるに決まってるんだろ」

ミカエラは抜いた中で一番長い髪の毛を見繕うと、両手を机の上に翳す。初めに髪が宙に浮いた。そして月桂樹がひとりでに加工され、芯となる黒い髪を覆っていく。10分もすると、一振りのシンプルか

つ美しい杖が出来上がった。ミカエラが額に浮いた汗を拭う。

「月桂樹にオブスキュラスの髪、19センチ。良質で手に馴染むって所か？」

「あ、ありがとう。ミカエラって杖も作れたんだ」

「オレにかかれば朝飯前だ。いいから振ってみろ」

杖の握り心地は素晴らしかった。まるで失っていた体が戻ってきたようだ。軽快に振ると、先端から火花が飛び出した。『サンキュー親友！』とネオン色で文字を結んでいる。

「その杖で決まりだな！」

ミカエラはいたずらっぽい笑顔を見せる。持つべきものは友、そんな格言が思い浮かんだ。

いつけなーい！ 遅刻遅刻！

キングス・クロス駅は、新学期シーズンとあって数多くの人で賑わっている。その誰もが忙しく動く様はちよつとした迫力があつた。しかし俺は刻々と高まる新生活の期待を胸に、立ち尽くしている。ついでに大量の学用品を載せたカートも手にしている。

「9と4分の3番線ってどこ……？」

空中から頭髮の薄い人を捜す遊びをしていたミカエラが疑問を溢した。

「トレローニーに聞いてたんじゃねえのか？」

「この切符を渡されただけだったよ。先生、調子悪そうで質問しづらかったし」

どうやらグリーンゴッツは数日前に強盗に遭つたらしく、警備強化の一環でトロツコも激しくなっていたらしい。そのせいでトレローニーは具合が悪く、説明不足になったのだろうか。

「あのカラフルトンボは占い学の教師なんだろう？ ならオレらがコレで困ることも予見できたんじゃないかねえのかよ」

「あはは、まだ本調子じゃなかったとか？」

「いや、ヤツは雰囲気こそ出してるが本物の占い師じゃねえとオレは思う」

ミカエラは怠そうに頭をガシガシとかくと、再び飛び上がった。そして白魚のような人差し指を少し舐めて、ピンと立てた。オレンジの瞳は細められている。

「何してるの？」

「魔力の流れを読んでる」

「え？ なんで？ というか魔力の流れってそんな風向きみたくわかるの？」

ミカエラはやれやれと言いたげな表情で首を振った。サラサラの黒髪が一緒に揺れている。出来の悪い生徒に教えるようにもう一方の指を左右に動かした。

「あのなア、オレを誰だと思ってたんだ。闇の……ゲフンゲフン、光の魔

力の化身様だぞ？　こんなのお茶の子さいさいだぜ」

「闇の魔力？」

「……んなことア言つてねえよ」

「言った」

「言つてねえ」

「言った」

「言つてねえって」

「言つてない」

「言つたつつてんだろカス！　………ん!？」

ミカエラは咄嗟に口を手で抑えた。しかし時既に遅し。決定的な一言を俺は聞いてしまった。

「引つかかったなミカエラ！　まあ俺は闇の力とかカツコいいからむしろ歓迎なんだけどね！」

「……気にしてるオレの方がバカなのか？」

あごに手を当てて唸るミカエラ。おそらく哲学的な問が生まれたのだろう。その間に俺は駅構内の時計を見た。針は列車出発の5分前を指している。不味い。

「ちよつと待つて！　列車の出発まであと5分しかない！」

「んア？　そりやアヤベーな」

「どうしてそんなのんびりといられるのさ!?!　ああもう！」

かくなる上は自らの足で見つけ出すしかない。名前からして9番線と10番線の間にあるのだろう。なきや困る。

「すみません、すみません」

ホグワーツのローブを着たまま人の群れを潜り抜けるのは大変だ。特にヘンテコな物品満載のカートを押しながらでは尚更である。

俺は注目の的になつてもめげずに目を皿にする。9と4分の3……9と4分の3……。

「違う右だ右」

頭の上からミカエラが言った。俺は藁を掴む思いでそれに従う。

「そのままそのまま………ああ行きすぎだアホ………そこだ」

目の前には一本のコンクリート柱が建っている。丁度9番線に4

つある柱の数えて3本目だ。

「これが9と4分の3番線？」

「魔力はこの柱の中に向かって流れてる。何事も挑戦だ、いつペン突っ込んでみろ」

「そんな気軽に言われても」

だが躊躇している時間はないこともまた事実。俺はカートを押し走った。どんとコンクリートの壁が迫ってくる。ほ、本当に大丈夫だよね……？

衝突する寸前に目を閉じた。一瞬五感が消えたが、すぐにざわめきに囲まれる。恐る恐るまぶたを上げると、視界いっぱい魔法使いの群れが広がった。

「ほら着いた」

知らぬうちについてきてたミカエラが得意げに言った。俺は周りを見回す。

「俺は何に乗れば良いんだろう？」

「バカか、こういうのは汽車つて相場が決まってるんだよ。………ねえな」

そう、駅のホームには何も停まっていけないのだ。それどころか周囲の魔法使いたちは次々と消えていく。まるで我が子の見送りが終わったかのように。

「あら、もしかしてあなた新入生？」

後ろから燃えるような赤髪の婦人に声をかけられた。同じ赤毛の小さな女の子を連れている。

「そうですけど……ホグワーツに行くにはどうすれば良いんですか？」

「ああ何てこと！」

婦人は赤毛を振って天を仰いだ。俺の嫌な予感が急速に膨らんでいく。

「落ち着いて聞いて頂戴ね、ホグワーツ特急は——ついさっき出発してしまっただわ」

喉がカラカラに渴く。やってしまった、入学前からやらかしてし

まった。脳内では遅刻、叱責、侮蔑など暗い未来が渦巻いた。

「ど、どうしよう」

婦人の背後に隠れていた女の子が、かん高い声を出した。

「ママ、パパに頼んで何とかならないの？」

「アーサーは今朝から魔法省だし、箒も家に置いてきちゃったわ」

詰んだ。ジューダスのワクワクホグワーツ編、完！ いや笑えない。

そんな時、大きなため息が聞えた。ミカエラだ。

「つたく、つくづく世話が焼ける宿主だぜ」

「ミカエラ！」

「ほれ掴まれ、ちったア飛ばすぞ」

ミカエラの手を掴むと、ふわりと地面から足が離れた。それを見た婦人が慌てて言う。

「ちよ、ちよつと、自棄になるのはやめなさい」

「大丈夫です！ 親友が助けてくれたので！」

「凄いよママ！ あの子飛んでる！」

ミカエラに導かれるままに線路の上を飛ぶ。残っていた魔法使いたちから、ギョツとしたように見られるが気にならなかった。いつしか景色は駅のホームから草原に変わる。

「アハハハハ！ 鳥になったみたいだ！」

「あんま暴れんなよ。うっかり手を離しちまうかもしれねえぞ」

「お、大人しくしておくよ」

しばらく移りゆく地上を楽しんでいると、遠くに紅い点が見えた。モクモクと黒煙を吐いている。ホグワーツ特急だ。

「アレだな？ よっしゃ、加速するから肩掴め」

「わかった」

ミカエラの肩に手をかける。小さな背中が、今は誰よりも頼もしく思えた。

そして徐々に汽車の容貌がはっきりしていく。数分もしないうちに、俺とミカエラは並走？ した。

「どうやって中に入るの？」

「それは、こうするんだよッ！」

車窓に近づいたミカエラは、勢いよくガラスを蹴破った。二人で空いた穴に転がり込む。

「ハアハア、間に合った。ありがとうなミカエラ」

「別に、お前が遅刻したらオレも困るからな。仕方なくやっただけだ」

ミカエラはバツが悪そうに横を向いた。そして目を大きく開いた。どうしたんだらう。気になって俺は視線を辿る。

「ああ」

驚愕で表情を染めている三人組と目があつた。さて、どう挽回しようか。さっきの親子と似た赤毛の男の子が口火を切る。

「ぼ、僕パーシー呼んでくるよ。監督生ならなんとか出来るかも」

「ちよつと待って。俺は怪しいものではない」

丸メガネをかけた男の子が胡散臭そうな目を向けた。

「走ってる列車の窓ガラスを割って入ってきた人が何だつて？」

「オーケーオーケー、窓ガラスが割れてなきや良いんだな？」

俺は杖を取り出すと、ミカエラに目配せした。ミカエラが面倒くさそうに振るう手に合わせて、杖を振る。あつという間にコンパートメントは元に戻った。

「これで良いでしょ？」

呆気にとられて見ていた三人組だったが、ボサボサの金髪の女の子が気を取り直した。優等生然と言う。

「私知ってるわ！ それレパロの無言呪文よ」

「レパロってさっきハーマイオニーがハリーのメガネにかけた？」

「そうよ。難易度はそんなに高くないけど、あれぐらいの物を直すにはかなりの魔力が必要はず。あなた一体何者？」

赤毛の少年からハーマイオニーと言われた少女が探るような視線を送る。しかし先程の不審者を見る目ではない。知的好奇心が刺激された人のそれだ。

「ホグワーツ魔法魔術学校の新入生のジュードス・ビショップだ。よろしく」

そう言つて手を差し出した。ファーストコンタクトは最上とは口

が裂けても言えないが、友情とはどこから生まれるかわからないもの。俺はそれを追いかけていきたい。

「よ、よろしく。僕はロナルド・ウィーズリー、みんなはロンって呼んでる」

茶髪の少年がロンに小声で囁く。大方、信用していいのか論争が勃発しているのだろう。静かに笑顔で待っていると、金髪の少女がはきはきと言った。

「私はハーマイオニー・グレンジャー、私たちも新入生だから気軽にハーマイオニーで良いわ」

「よろしくなハーマイオニー」

「あとさっきの呪文も興味深いけど、等なしの飛行も聞いたことがないわ。教えてくれるかしら」

「あー、それはまた追々」

ほんの少しだけ話してわかったことだが、ハーマイオニーは優等生のような。仲良くしておこう。

茶髪の少年が諦めたように握手に応じた。

「よろしくジューダス、僕の名前はハリー・ポッターっていうんだ」

「ハリー・ポッターってあのハリー・ポッター?」

「多分そのハリー・ポッターで合ってると思うよ」

ハリー・ポッターとヴォルデモートのことについてはトレローニーから軽く教わっていた。しかし有名人と知り合いとは、なんだか変な感じだ。

その時、ロンの足元のネズミが鋭く鳴いた。デブで愛嬌はあまりない。

「静かにしろってスキヤバーズ。どうしちゃったんだろコイツ」

ロンに摘み上げられたスキヤバーズはジタバタと暴れている。何かあるのかと思つて周りを見ると、ミカエラが良い笑顔で手を翳していた。

「何しとん?」

「暇潰し」

「やめてあげなよ」

「チッ、後悔したって知らねえぞ」

謎の捨てゼリフを吐くと、ミカエラはふわふわとコンパートメントの外に出ていった。まあ遠くに行くことはないだろう。ミカエラの受け売りだが、俺から離れすぎると魔力の供給が滞るから近くにいざるを得ないらしい。

スキャバーズのジタバタも収まったようで、今は怯えるように警戒している。

「もうすぐホグワーツに到着します。荷物は別で持っていくしますので、車内に置いていってください」

いつの間にか車外の景色は山になり、列車も徐々に減速している。さあ、ジューダスのワクワクホグワーツ編（2回目）の始まりだ。

スリザリンが良い

「イツチ年生はこっちだ！ イツチ年生は全員揃ったかー？ よし、みんなついてこい！」

ひげもじやの大男が先導して歩き出す。汽車から降りた俺たちは、列になって狭く険しい夜道を進んでいた。一年生たちは緊張からか口数も少なく、木々のざわめきと土を踏む音がいやに大きく聞こえた。

「みんな、ホグワーツが間もなく見えるぞ」

大男が振り返りながら言った。やがてその宣言通り、湖を抱えた壮大な城が姿を見せた。一斉に歓声上がる。

「おお、こりやアスゲーな」

ホグワーツ城の無数の窓から光が漏れ出し、尖塔が幾つもそびえている。幻想的な光景だった。

「こっちだイツチ年生！ 4人ずつボートに乗って！」

大男が岸辺につながれた小船を指した。俺は知り合いのハリーたちを探した。だがもう彼らの船は満員のようだ。仕方なく1人分空いているボートに座る。

「よし、では進めえ！」

大男の掛け声で、一気にボートは湖面を滑るように動き出した。みんな黙って城を見上げている。

「全く、ハリー・ポッターは見る目がないね。この僕の誘いを断るんだから。クラップ、お前もそう思うだろ？」

相席の男の子が静寂を破った。取り巻きらしき大柄の男子が頷く。男の子は気を良くしたのか饒舌に語った。

「それに忠告を無視して血を裏切るものと関わるなんてどうかしてる。父上が言ってただけけど、あいつの父親のアーサー・ウィーズリーは能無しの落ちこぼれらしい」

取り巻きの2人が低く笑った。それに合わせてボートが揺れる。あれ？ もしやこのボートハズレ？ しかし友人をバカにされて黙っているのはジューダスの名折れ。俺は口を開いた。

「そうかい？ 俺は良い人だと思うけどな」

「へえー。君、名前は？」

「え？ ジューダス・ビショップだけど。もしかして友達になりたいの？」

金髪の男の子は手を口に当てて嘲笑した。取り巻きもそれに追随する。

「誰がビショップなんて聞いたこともない家の子どもと友達になるんだい？ 寝言は寝てから言っつてよ」

「友情に家は関係ないぞ」

「……馬鹿な君に教えてあげるよ。僕はドラコ・マルフォイ、聖28一族の出身だ」

マルフォイはUNOと宣言した時ばりのドヤ顔を決めた。何がそこまでの自信を彼に齎すのだろうか。俺は首をひねる。

「何それ」

「純血も知らないのかい？ もしかして君、穢れた血？」

「だから何それ」

「もう話しかけないでくれる？ 穢れた血に利く口はないんだ」

それからマルフォイはだんまりを決め込んだ。俺がどんな話題を出しても虚しく響くだけ。ただローブの裏のタグに『ごいる』と書かれた男の子は、ハンバーガーの話に興味を引かれたようだった。すぐにマル書いてフォイに止められたが。

そしてボートは地下の船着き場に到着した。全員が岩と小石の上に降り立つ。明るい赤毛のロンが、俺の肩を叩いた。

「あいつら汽車の時からあだから気にすんなって」

「友達として当然のことをしたまでだよ」

「そ、そうか」

ミカエラが呆れたように言った。

「友達が出来たらしたいことリストを埋められて満足か？」

「もちろん」

大男の後に続いて石階段を登った。大男がカエルを握りしめた男の子が躓きそうになったのを受け止めた。櫛の木の扉の前で立ち止

まった大男は、振り向いて言う。

「みんな、ついてきてとるか？ お前さん、ちゃんとヒキガエル持つとるな？」

大男が大きな拳で城の扉を叩いた。扉がバツと開いて、厳格そうな魔女が出迎えた。

「マクゴナガル教授、こちらがイツチ年生のみなさんです」

「ご苦労さまでした、ハグリッド。ここからは私が預かりましょう」

俺たちはマクゴナガル先生に連れられて、ホール脇の小さな部屋に案内された。生徒たちは不安そうにキョロキョロと見回している。

「ホグワーツ入学おめでとうございます。新入生のみなさん——」

マクゴナガルが寮の組分けについて説明した。その後、マクゴナガルが出ていくと部屋中に新入生の話し声が溢れた。今ならミカエラと話しても気付かれないだろう。

「組分けってどうするんだろう」

「脳みそでもパカツと開けて調べるんじゃないの？」

「何それ怖い」

突然、後ろの方で一年生の悲鳴が鳴った。驚いて振り向く。原因はすぐに判明した。壁から20ものゴーストがフワフワとすり抜けてきたのだ。

「ミカエラの仲間？ でもあの人たち半透明だ」

「お前明日からジューカスって呼ぶぞ。オレは妖精、アイツら幽霊。おわかり？」

「ご、ごめんって」

そうだよな。種族を間違えるって親友失格だよな。俺はミカエラは闇の妖精さんだと頭に叩き込んだ。

「もうすぐ組分け儀式が始まります。さあ一列になつて」

戻ってきたマクゴナガルが誘導を始めた。指示に従ってホールに入る。蝋燭が宙を舞い、天井が星々で輝いている。その美しい光景に、誰かが息を呑んだ。

一方で俺は緊張から心臓が早鐘を打っていた。しかし、頭の後ろで腕を組んで寝っ転がっているミカエラを見ると、自然と落ち着いた。

こんな時でも平常運転かよ。

マクゴナガル先生が一年生の前に台とその上にボロボロのトンがり帽子を置く。大広間が静寂に包まれ、大勢の視線が汚い帽子に集まった。すると、帽子がピクリと動き出した。つばのへりが口のごとく裂け、歌を歌い出す。

「私はきれいじゃないけれど、人は見かけによらぬもの——」

低い声が広間に響き渡る。そんな中、ある歌詞の一節を俺の耳が捉えた。

「——古き賢きレイブンクロー、君に意欲があるならば、機知と学びの友人を、ここで必ず得るだろう——」

意欲あります。超あります。4つの寮なんて碌に知らなかったけどレイブンクローがいいかもな。ミカエラがジト目で俺を見た気がした。

「——スリザリンではもしかして、君はまことの友を得る、どんな手段を——」

まことの友！ まことの友って言ったのかあの帽子！ ああもうスリザリン一択だろ。他を選ぶなんてどうかしてる。以降の歌詞は耳に入らなかつたけど、スリザリンって心に誓ったから大丈夫だろう。

「アボット・ハンナ！」

マクゴナガルの凜とした声で、家名のABC順に呼ばれていく。一年生が帽子を被り、次々と寮に振り分けられた。それぞれ寮生たちが歓声とともに新入りを迎え入れる。B i s h o pの俺の番はすぐに回ってきた。

「ビショップ・ジューダス！」

ゆっくりと前へ歩み出る。みんなの視線が質量を持って突き刺さっているように感じた。古めかしい帽子を手に取り、頭にのせる。視界が遮られ、横で漂うミカエラも見えなくなった。寮って個人の意向も反映されるのかな。

「スリザリンが良い。スリザリンが良い」

「グリー——！ え？」

組み分け帽子が何かを叫びかけた。しかし、俺の言葉が届いたのか、咄嗟に飲み込んだ。生徒たちのざわめきが聞こえる。

「ふーむ。スリザリンが良いのかね？」

「スリザリンが良い。まことの友欲しい。スリザリンが良い」

「しかしだね、強大な闇の力にも臆さない君の勇氣は光るものがある。グリフィンドールに入れば大成できるのだが、どうかね？」

そんなもんいらん。俺はスリザリンが良い。スリザリンで友達100人作るんだ。

「おいアンポンタン。友達なんてどこの寮でも出来るだろ。それに、オレじゃ不満か？」

「あ、それもそうだね。じゃあグリフィンドールでお願いします」

「グリフィンドオオオオオオオオオオ！」

帽子を取られた俺は、グリフィンドールの席に向かった。グリフィンドール生たちから、口々に歓迎の言葉を浴びせかけられる。席に座ると、隣のメガネをかけた上級生に話しかけられた。

「ようこそグリフィンドールへ！ 僕は『監督生』のパーシー・ウィーズリーだ。困ったことがあったらなんでも訊いてくれ」

「どうも。俺はジューダス・ビショップです」

パーシーと名乗った赤毛の生徒の張られた胸には、キラリと光るバッチがついている。ウィーズリーということはロンの兄だろうか。俺とパーシーは握手を交わした。

「それにしても珍しいね。5分以内のハットストールはたまに見かけるけど、組み分け帽子が寮の名前を言いかけるなんて聞いたことがないよ」

「あの、ハットストールって何ですか？」

「帽子が組み分けで悩むことさ」

話している間にも組み分けは進行していた。ロンやハーマイオニーたちはグリフィンドールに来たし、高飛車なマルフォイは速攻でスリザリンに決まった。ハリー・ポッターがグリフィンドールに決定すると、このテーブルは一際大きく沸いた。そして、全ての組分けが終わった。

鼻が折れ曲がったザ・魔法使いのお爺さんが、教職員テーブルの中央で立ち上がった。手を大きく広げ、満面の笑みを浮かべている。

「おめでとう！ ホグワーツの新入生、おめでとう！ わしが校長のダンブルドアじゃ。歓迎会の前に、一言言わせていただきたい。それ！ わっしょい！ こーらしょい！ どっこらしょい！ 以上！」

ダンブルドアは席につき、出席者全員が拍手喝采した。ミカエラが口笛を吹く。

「あんなのが校長とか最高だな」

テーブルに置かれた金の皿が、たちまち美味しそうな料理で溢れた。奪い合うように取り分け、俺はステーキにかぶりつく。肉汁が口いっぱい広がった。

「クハハ、なんだアレ！ まるで蝶番いじゃねえか！」

爆笑しているミカエラの視線の先には、首をパカパカとさせているゴーストがいた。ほとんど首なしニツクとロンが言っているのが耳に入る。

そういえばトレローニーはどこだろう？ ふと教職員テーブルを見ると、ダンブルドア校長と目があった。俺が会釈すると、校長は優しげに目を細めた。このような眼差しを受けたことがないので、なんだかムズムズする。しかし隣席のマクゴナガルに呼ばれて、目を逸らしてしまった。因みにトレローニーは本当に引き籠もっているらしい。

「全てを見透かされてるみてえで気持ち悪いな」

「ミカエラは誰にも感知できないんじゃないやなかつたっけ？」

「魔法の深淵を覗いてるような変態は別だ。オレの溢れ出る魔力に気付いたのかもな」

忌々しそうに吐き捨てると、ミカエラは俺のテーブルに潜り込んだ。足の間の奥に溶けた鉄色の双眼が浮かぶ。

「それより飯だ飯。こんな大勢から飯テロ喰らって我慢できるわけねえだろ」

「何でそこで食べるの？」

「脳たりん、何も無い所で物が消えたら不審がられるだろうが」

それもそうか。俺はステーキやヨークシャーピングを皿に取った。誰にも見られていないことを確認してから、テーブルの下に降ろす。小さい口に次から次へと料理が吸い込まれていった。

「こりゃア旨え。ここの屋敷しもべ妖精は腕がいいな」

「屋敷しもべ妖精？ 人が作ったんじゃないの？」

「こんな大量の料理、作りたがる奇特な人間はそうそういねえ。こういう家事雑用は大体、屋敷しもべがパパッとやってんだよ」

童話で見たような妖精が実在するらしい。俺はカボチャジュースを煽った。

「へえー。妖精ならミカエラの仲間だね」

「ハア!? 何言って……………いや、当たらずといえども遠からずか。とにかく！ あんな奴隷根性全開のイカレポンチどもとオレを一緒にするな！ ぶつ殺すぞ！」

「はいはいわかったわかった」

宴もたけなわになると、ダンブルドアの音頭で変な校歌を大合唱した。そして、監督生のパーシーの引率で寮に向かう。道中、ピーブズの来襲があったものの、無事に太ったレディまで辿り着いた。余談だが、相部屋の仲間はネビル・ロングボトムという男の子だった。

天にまします我が父よ

翌日から目まぐるしくも刺激的な授業が始まった。『変身術』の担当はマクゴナガル先生だった。マクゴナガルは予想通りの厳格な先生で、ふぎけた生徒には二度とこの教室の敷居を跨がせないと言い切った。そんな中、マツチ棒を針に変える授業を受けたのだが、ハーマイオニーが僅かに変えられたただけだった。ミカエラがクラス全員のマツチ棒を完璧に針に変えるという暴挙を俺が阻止できなかつたら、マクゴナガルはハーマイオニーを褒めるよりも、犯人探しに躍りになっていったことだろう。

地下室で行われた『魔法薬学』は生き残った男の子の公開処刑と化した。スネイプ先生がハリー・ポッターに次々と質問をし、答えられないと嫌味を言うのだ。スネイプはスリザリン鼻屑というロンの事前情報は大きい当たっていた。ただ俺の印象に残ったのは、その日授業で扱ったおできを治す薬のレシピではなく、出席確認でビシヨップと呼ぶときの苦虫を噛み潰したようなスネイプの顔とマルフォイの高笑いだった。

因みに『闇の魔術に対する防衛術』はクイレル先生の後頭部を眺めてたら終わってました。

清々しい朝の空気が肺に満ちる。忙しい毎日の束の間の休憩だ。大広間は、朝食を食べる生徒で埋まっていた。トーストに目玉焼きを載せながらネビルが言う。

「午後の授業って何だったけ？」

「確か『飛行訓練』だったと思う」

「も、もしも箒から落っこちて家に送り返されたらどうしよう。おばあちゃんに殺されちゃうよ」

「ハハハ、ネビルは心配性だな。友情パワーがあれば何とかなるって」
キョトンと首を傾げるネビル。友愛の真理を理解するにはまだまだ鍛錬が足りないようだ。後で教えてあげよう。机の下からぶつきらばうな声が出た。

「シーザードレッシング取ってくんね」

「ほい」

伸ばされた手にサツと小瓶を渡す。タイミングは完璧だ。少しして返却されたドレッシングを机の上に戻す。それをネビルが手に取りながら、不思議そうな目を向けた。

「さつきからテーブルの下でゴソゴソしてるけど……どうしたの？」

「ゴフツゴフ……！」

「大丈夫!？」

い、意外と鋭い。危うくオレンジジュースを向かい側のシエーマスにぶっかける所だった。ヒリヒリとした酸味が鼻を焼く。俺はハンカチで口元を拭いた。

「ちよつとむせたただけだから、気にしないで。……そんなことよりあれ!」

俺の雑な話題そらしにネビルは反応してくれた。一緒に窓を見上げる。一斉にフクロウの軍勢が飛来している光景は圧巻だ。

「あれ? ああ、あのフクロウ……僕ん家のだ!」

一羽の茶色いフクロウがネビルの前に小包を落とす。ネビルは嬉しそうにそれを持つ。

「おばあちゃんからだ。入学プレゼントだって」

「開けてみたら?」

「そうするよ。……ああっ!」

小包にネビルが気を取られている隙に、ロングボトム家のフクロウがネビルの目玉焼きを掻つ攫った。ネビルが手を伸ばした時には、もう大広間へ羽ばたいてしまっている。

「ああ、僕の目玉焼きが……」

「俺のやつ食べる? ケチャップかけちゃってるけど」

「ごめんね。僕ウスターソース派なんだ」

異端者め。目玉焼きにはケチャップが至高。異論は認める。食べ終わったのかテーブルからミカエラが這い出た。この食事形態には慣れそうにない。

「ジューダスには郵便来ねえのか?」

「来たら嬉しいけどなー」

「ああそうか………悪イな」

「いいっていいって。俺には親友がいるし」

「あつそ、能天気なこった」

ミカエラはネビルの持った玉に視線を向けた。たった今小包から出てきたそれは、ネビルが強く握ると赤く光った。

「思い出し玉だよ。忘れたものがあると反応するんだけど……」

「何か忘れてる？」

「そうみたい……」

ネビルが忘れた何かを思い出そうとしている時、マルフォイがグリフィンドールのテーブルのそばに通りかかり、思い出し玉を引ったくった。ハーマイオニーの箒講座を聞き流していたハリーとロンが弾かれたように立ち上がる。俺もやってみたかったのでハリー達と肩を並べた。クラブとゴイルがバキボキと拳を鳴らす。

「どうしたのですか？」

厄介事の気配を目ざとく見つけたマクゴナガルが割って入った。すかさずロンが言い募る。

「マルフォイがネビルの思い出し玉を取ったんです！」

「本当ですか？ ミスターマルフォイ」

「見てただけですよ」

マルフォイはそう言うのと、思い出し玉をネビルに押し付けた。劣勢を悟ったのか、クラブとゴイルを引き連れて蛇のようにスルスルと生徒の群れに紛れる。ミカエラが心底残念そうに言った。

「ちえっ、つまんねーの」

その時、ほとんどのフクロウが引き揚げているさなかに、左目に傷跡のあるメンフクロウが降り立った。足にはネビルよりも小さい小包と手紙が括り付けられている。

「あ？ よもや、よもや我への文なりや？」

「昂りすぎて口調おかしくなってるぞ」

指先が震える。冷え性でもないのに、血が止まったかのように冷たい。間違いない、俺は緊張している。

「こここここういう時は深呼吸だ。スウーッ！ ハアーッ！ スウーッ！ ハアーッ！」

「それは過呼吸だ不審者。あとクイレル以上に吃りが酷いぞ」

「あ、開けるよ。開けちゃうかな！」

鎮まれ俺の右手！ 開封したくてもできないだろうが。辿々しく、しかし細心の注意を払って包みを解く。周りにグリフィンドール生が集まっている気がするが、構わずに手紙を読んだ。

『ジューダス・ビショップへ

入学おめでとう。わしがお前を見たのは10年以上前だから、今はさぞかし凛々しく成長していることだろう。いつか会う機会があれば、色々話を聞かせてほしい。ホグワーツは楽しいことで溢れているが、いつ闇の魔術に侵されるかわからぬ。よく学び、力をつける。油断大敵！

アラスター・ムーディより

追伸——生前、お前の父親に託されたロザリオを同封しておく。強力な魂保護の呪文が刻まれているようだから肌身離さず着けるように。』

封筒から銀の十字架のネックレスを取り出す。朝日に照らされたロザリオは、俺の心と同じでキラリと輝いていた。首から下げると、洗礼を受けた気分だ。

「やったー！ 初プレゼントだ！」

「良かったね。差出人は……アラスター・ムーディ？」

手紙を覗き込んでいたハリーが言った。その声色には嫉妬が混ざっている。そういえばハリーも孤児だったな。その発言を聞いたハーマイオニーが目を丸くした。

「ジューダス、あなたマッドアイ・ムーディーから手紙を貰ったの!？」

「そうだけどなんか凄い人なの?」

「史上最も優秀な闇祓いの一人よ！ 魔法史や闇の魔術に対する防衛術の教科書にも載っているわ！」

「ごめん。俺はそんな隅々まで教科書読んでないんだ」

ロンやネビルも読んでいないのか、しきりに頷いている。安心し

た、マイノリティなのはグレンジャー女史のようだ。俺は改めて手紙を読み直すと、感慨深く言った。

「にしても、俺この人と面識ないんだよなあ。文脈から察するに父さんと知り合いっぽいけど」

思い出し玉を大事にしまったネビルが、おずおずと口を開いた。

「もしかしてだけど、ジューダスのお父さんってダニエル・ビショップさんだったりする?」

「俺はそう聞いてるけど」

瞬間、沈黙の帳が降りた。この状況をフランス語では『天使が通る』というらしい。

「どういう反応? ダニエル・ビショップって実は死喰い人なの?」

ロンが慌てて否定した。手をブンブン横に振っている。

「違う違う! むしろ逆だよ! 君のお父さんは例のあの人に表立って対抗していた一人だって僕の父さんが言ってた!」

ますます腑に落ちない。俺が疑問符を大量に浮かべていると、フレッドとジョージがニヤニヤしながらやって来た。

「ロンの言う通りだ。ダニエル・ビショップは例のあの人も手こずらせる程の『十字狂徒』だった」

「死喰い人に隣人愛を説いた話は傑作だぜ? 一説ではベラトリックス・レストレンジの腹筋に磔の呪文をかけるためだったらしい」

ひよっとして俺の親父は黄色い救急車に運ばれなきやいけない人なんじゃなからうか。そうとしか考えられない。

「いずれにせよ、ダニエル・ビショップは闇の魔術に最も縁遠い人だった。『神』に誓ってもいい」

双子のどっちかが、そう締めくくった。メンフクロウは知らぬ間にいなくなっていた。

午後の飛行訓練は中庭集合だった。スリザリンとの合同授業だ。鷹のような目をしたマダム・フーチが生徒たちを整列させる。

「さあみなさん箒のそばに立って。やり方はこうです。手を翳して、そして『上がれ!』と言う」

生徒たちが上がれ！ と口々に叫んだ。朝食の席でクイディッチ自慢をしていたマルフォイや、父親がクイディッチ選手だったらしいハリーはすぐに成功している。

「上がれ！ あれ？ おかしいな。上がれ！」

俺のボロい箒は上がれ！ に反応して震えるのだが、何か大きな力に押さえつけられたように上がらないのだ。授業はどんどん進行する。

「では次にまたがって。そして軽く地面を蹴ってください。軽くですよ軽く」

何度言っても箒は言うことを聞かない。それどころか地面にめり込んでいつてるように思える。ミカエラが不機嫌そうに言い放った。

「ジューダスに箒の才能はねえんじゃねえか」

「な、何だと。俺はどうやって空を飛んだらいいんだ……」

「それは、しょうがねえからこないだみたくオレが運んでやるよ」

「いや申し訳ないって」

ミカエラに頼り切りも良くない気がする。『友人とは互いに支え合うものである——ジューダス・ビショップ。』全く、格言が溢れ出るのも考えものだな。

「う、うわああっ！」

そんなことを考えていると早速友人に危機が訪れた。ネビルが高く飛び上がりすぎてしまったのだ。

「助けなきゃー！ アクシオ——ネビルよ来い！」

しかし俺の貧弱な呼び寄せ呪文は軌道を少しズラシただけだった。ネビルが城の窓に激突する。

「大丈夫ですかミスターロングボトム！ みなさん、私はロングボトムの様子を見に行くので、ここで待っていてください。くれぐれも箒に触らないように」

マダム・フーチはそう言って駆け込んでいった。咄嗟に俺が声をかける。

「先生！ 俺も行かせてください！」

「いいでしょう。医務室に運ぶ場合は手伝いなさい」

果たして、ネビルは三階廊下で倒れていた。左腕がガラスでズタズタで、即席で担架を作って医務室に搬送した。マダム・ポンフリーによると、命に別条はないそうだ。あと、戻ってきたらハリー・ポッターがグリフィンドールのシーカーになってたのはまた別の話。

祭りに乱入は付き物

俺は月光が差す廊下を歩いてきた。石造りの床なのに足音は全くしない。完全なる無音だ。それが、どうしようもなく俺が孤独だと感じさせる。

トロフィー室を通り過ぎた頃に、ガシャガシャと金属が擦れる音が遠くで吠えた。徐々に近づいてきている。何だろう。

程なくして、音源がわかった。ポルターガイストのピーブズだ。廊下に立ち並ぶ騎士像を揺さぶりながら飛んでいる。丁度、上がりたい階段までの進路にかち合う場所だ。迷惑極まりない。

ピーブズを黙らせようと思った。そして、オレは習うまでもなくその術を知っていた。淀みなく右手をポルターガイストの小男に向ける。すると、赤の閃光が迸った。

再び廊下に静寂が満ちた。自然と頬が吊り上がる。白目を剥いて失神したピーブズを蹴飛ばした。これが『ステューピファイ』の正しい使い方だとも言うように。

階段は4階西廊下に繋がっていた。入学式でダンブルドアが説明していた『禁じられた部屋』のある所だ。記憶が正しければ、今いる場所も生徒は立ち入り禁止のはず。立ち去らなきや。しかし意思に反して、オレはその奥、『禁じられた部屋』の扉の前に来てしまった。

『アロホモラ』を無言呪文で使うと、あっさりと錠前は陥落した。なんだ、簡単じゃないか。スルリと中に滑り込む。だがその先へは行けなかった。凶悪な顔をした三つ首の獣——ケルベロスの鼻面があったのだ。ケルベロスは匂いを嗅ぎつけたのか、歯を剥き出しにしてうなった。

ダンブルドアのお膝元で許されざる呪文を使うのは不味い。しかしそれら抜きで眼前の狂犬を突破するのは時間がかかる。刹那の逡巡の末、一度撤退することにした。

ケルベロスから目を離さずに引き返す。出口の敷居を跨ぎかけた時に聞いたのは、地響きのような心胆寒からしめる唸り声。

「クソっ、畜生風情が！」

裂けた大きな口には鋭利な牙が生え揃っている。喉奥の赤を視認したときにようやく俺は気付いた。この化け物に襲いかかられているのだと。

ガバツとベッドから跳ね起きた。おびただしい寝汗が寝間着に張り付いて気持ち悪い。ハイテンポで鼓動する心臓が、恐ろしい殺気の残滓を俺に伝えている。寝起きは最悪だ。

「よう、随分と良い目覚めだなア？」

先に起きていたであろうミカエラが景気良くカーテンを開けた。朝の強い日差しが我が網膜を蹂躪した。

「おはようミカエラ。君も朝日に目ん玉を破壊されたのかい？」

「オレの目は至って正常だ。それに………ん？ 何だアこの匂い？」

片眉を上げてスンスンと匂いを嗅ぐミカエラ。言われてみればどこからか甘い香りが漂っている。

「あ！ わかった！ これカボチャパイを焼いてる匂いだ！」

「カボチャパイ？ アー、そういやア今日はハロウィーンだったな」「すっかり忘れてたよ！ いやー楽しみだなあ、ハロウィーン」

他宗教に厳しめの十字教ですら、ハロウィーンは広まりすぎてて駆逐できなかつたと聞く。そんな最高の祭りは悪夢の憂鬱を俺から吹き飛ばしてくれた。テンションは朝から最高潮だ。

「ハロウィーンってのはそんなに良いもんだったかア？ オレは知ってるぞ。孤児院でのお前にはトリックもトリートもなかった」

「でもここでは別さ！ パーシーが言ってたんだけど、夜にはパーティーがあるらしいよ！」

「前向きなこった。お喋り守護霊かよ」

橙色の瞳で弧を描くミカエラ。いやはや、ミカエラがみんなに見えるのが残念でならない。一緒に仮装してマルフォイたちと肝試しでもしたら絶対にいい思い出になったのに。

そしてハロウィーンというものには人を惑わす魔力があるらしい。夢中に喋ってて注意が及ばなかったが、ここは相部屋だ。そして先

日、ネビルは怪我から完治している。つまり……………。

「ジュ、ジューダス…………？ 誰と話してるの…………？」

引き攣ったネビルの声。目を丸くしてこちらを見ている。ミカエラとの会話を聞かれてしまったようだ。そのことを理解した途端、冷や汗が吹き出す。

「ああいやこれはだね……………独り言だよ！ 独り言！」

「それはちったア無理があるんじゃないかねえか？」

「ええ…………？」

ネビルは怯えたように視線を固定していた。このままでは俺が狂っていると思われてしまう。そしたら『第13次友達補完計画』がおじゃん。そんなのあんまりだ！

「今日ハロウィーンでしょ！ そのせいで興奮しちゃってさあ！」

「そ、そうなんだ…………。ジューダスは聖マンゴって知ってる？」

「何それ美味しいの？ マンゴー製？」

「違うよ！ 魔法病院だね。僕、そこのお癒者さんと知り合いでさ。よ、良かったら診てもらったら？」

「俺は正常だ！」

駄目だ。口を開けば開くほど状況が悪くなっている気がする。ネビルは可哀想な人を見るような、同情の籠もった目を向けてくる。同情するなら信じてくれ。

そこでふと思った。ミカエラなら何とか出来るんじゃないかと。実際、俺とネビルのやり取りをミカエラはあくびをしながら眺めている。

『友人とは互いに支え合うものであるが、役割分担も大事だ——ジューダス・ビショップ。』これでよし。

「助けて！ ミカえもん！」

「自分で付けた名前もちゃんと呼べないのか？ ジューカスは」
「どうかお力をお貸しください神の如き者、ミカエラ様」

ベッドから起き上がったネビルがオロオロとし始めた。

「本当にどうしちゃったの？ 錯乱呪文でもかけられたのかな…………？」

ミカエラはブツブツと「全く、オレがいなきやジュードスはダメダメだな……」と呟きながらネビルに人差し指を向けた。

「オブリビエイト——忘れよ」

指先から飛び出た緑の光線がネビルを撃ち抜いた。気を失ってしまつたネビルを支え、ベッドに横たわらせる。

「ありがとう。頼んでおいて何だけど、その呪文って安全なヤツだよね?」

「ただの忘却呪文だ。多分魔法省はしよっちゅうマグルにコイツをかけるぞ」

信頼と実績のある魔法省がばかすか使ってるなら大丈夫だろう。ネビル、これは全て『計画』のためなんだ。許せ。

その日の『妖精の呪文学』は浮遊魔法だった。ちっちゃなフリットウィック先生が、積み重ねた本の上で言った。

「ウインガーディウム・レビオーサ——浮遊せよ」

先生が杖を振ると、カエルのトレバーが天井近くまで浮き上がった。クラス中でどよめきが起こる。

「それではみなさん、ペアになって。配られた羽根ペンにやってみよう」

俺は偶然近くにいたシエーマス・フィネガンとペアになった。トレバーの主人のネビルは、ハリーと組むようだ。シエーマスが、自信ありげに言った。

「先にやってみても良い? 何だか出来そうな気がするんだ」

俺が了承すると、シエーマスは杖を手を取った。大きく息を吸って、杖を振る。

「ウインガード・レビオーサ」

「伏せろ!」

ミカエラに頭を抑えられた次の瞬間、羽根ペンが爆発した。もう一度言う、羽根ペンが、爆発した。

「何だ何だ!?!」

「クククッ、呪文を言い間違えたんだよ。それにしてもミスって爆破

するとか、フフツ、センス良いな」

「笑ってる場合か。シエーマス生きてる？」

シエーマスは黒焦げになって呆然としていたが、暫くすると笑いだした。つられて俺とミカエラも笑う。うっかりトレバーを高速飛行させてしまったネビルも笑ってやった。なお、予備の羽根ペンを持ってきたフリットウィック先生に呆れられたのは言うまでもない。

授業が終わり、寮に帰る途中。ハーマイオニーが駆けているのが視界に入った。呪文学の教科書を握りしめ、その目には涙が光っている。

「どうしたんだろ？　ハーマイオニーのペアはロンだったけど。喧嘩？」

「あのゴブリンの末裔先生に褒められて嬉し泣きかもなア」

「そこまで極まってると思うけど」

ハーマイオニーは『魔法薬学』以外の授業では大体褒められているから、嬉し泣きではないだろう。喧嘩か花粉症の説が濃厚か。まあ何にせよ、友達にはいつもスマイルでいて欲しいものだ。

日が暮れると、待ちに待ったハロウィーンパーティーが開幕した。大広間はジャック・オー・ランタンで飾り付けられ、数多のコウモリが羽ばたいている。俺は金の皿に載ったご馳走にありつきながら、ネビルに言った。

「あれ？　そういやハーマイオニーがいないね」

「本当だ。午後の授業でも見なかったかも。ハーマイオニー、一度も授業を休んだことないのに」

やはりあの涙は何かあったのだろうか。もし今も一人で泣いているなら何とかしなくちゃ。『友達が出来たらしたいことリスト』の未達成ミッションでもある。

対面に座っていたグリフィンドール寮生のラベンダー・ブラウンがカボチャジュースを飲み干すと、口を開いた。

「今はハーマイオニー一人にしてほしいみたい。あんまり詮索しない方が良いよ」

なんと、そこまでの悩みを抱えていたとは。これは敏腕心理カウンセラーの俺の出番じゃないのか？俺は全力で振ったコーラのように立ち上がった。

「尚更放っておけない！ さあ行くぞネビル！ 友を救いに！」
ラベンダーが溜息をついた。頬杖について俺を眺めている。何だその目は。

「ジューダスって残念な感じだよー。黙ってればもつと人気出ると思うんだけど。意外と成績良いし」

「僕は発作だと思っただけよ」

「オレも今回ばかりはコイツらに同意だ」

「何だよみんな揃って！ これがあるのままの俺だ！ 隣人愛を忘れるな！」

俺が言うと同静かになった。何とも形容し難い表情を浮かべている。リー・ジョーダンにいかにもフィルチが間抜けだったかを演説していたフレッドとジョージが言った。

「これがビショップ家の血筋か……」

「そんなんじゃないから！」

バタン！ と激しく扉が開かれる音が鳴り響いた。大広間の人々が一斉に振り向く。そこには、息を切らしたクイレル先生の姿が。

「……………トロールが地下室に……………お知らせしなくてはと思っ……………キユウ」

謎のうめき声を発して倒れるクイレル。その弾みに、室内は大混乱に陥った。しかしそれは長くは続かなかつた。ダンブルドア校長が杖から紫色の爆竹を炸裂させたのだ。

「静まれ！ 静まれー！」

生徒たちの注目を一身に受けたダンブルドアの声が、重々しく轟いた。

「監督生よー！」

意気揚々とパーシーが立った。監督生の仕事をするのが楽しくて仕方ないらしい。

「すぐさま自分の寮の生徒を連れて帰りなさい！」

監督生の誘導に従って生徒たちの大群がうねる。喧騒の中で、ミカエラのワクワクが抑えきれない声が耳に残った。

「さアて、犯人捜しと洒落込むか」

真実はいつも1つ……？

人の波に押されて俺たちは大広間から出た。一旦、入口付近の壁際に避難すると、ミカエラが口火を切った。オレンジの瞳はランランと輝いている。

「ジューダス、オレはトロールの侵入を手引したヤツがいると考えている。異論はねえな？」

「ああ、ホグワーツはイギリスで一番安全な場所だつて言われてるし、トロールがダンブルドアの目をかいくぐれるとは思えない」

ウンウンと満足げに頷くミカエラ。この騒ぎが始まってからどうにも機嫌がいい。初めて会った時も破壊だの何だのと言っていたし、秩序が崩れるのが好きなのかもしれない。テロリストかな？

ズイツとミカエラは俺に近付いた。風につてカボチャジュースの匂いが漂ってくる。この妖精はさっきまでに何リットルカボチャジュースを飲んだのだろうか。

「そこでだ。その犯人をオレたちが捕まえちまおうって訳だ」

「いやそんなお手軽感覚で言われても。大体、危ないだけでメリットなんてないよね？」

虚を突かれたようにミカエラが固まった。まるで俺なら二つ返事でオーケーすると思っていたみたいに。俺はリリースしたミカエラの前で手を振る。

「おーいミカエラ？ やっぱハイリスクノーリターンなんでしょ？」

「……バカが、リターンならちゃんどあるぞ」

「じゃあ言ってみてよ」

「……………えーつと、そうだなア。た、例えば！ 特別功労賞が貰える、とか？」

賞のためだけに規則を破るのもなあ。俺があまり芳しい様子ではないのを見て取ると、ミカエラが畳みかけた。

「その賞のおかげで友達大量追加もあるかもな！ 知らんけど！」

「よし行くか」

「他にも……………へ？」

ミカエラがポカンとした顔を晒した。また何か俺言っちゃいました？

「それじゃあどうやって犯人を捜す？ コツとかつてあるのかな？」

「待て待て待て」

「どうした？」

ミカエラは頭痛をこらえるように額に手をついた。言うことがあ
るなら早く言っしてほしい。こうしている間にも、事態は刻々と動い
ているんだ。

「お前さっきまで日和ってただろ。意見変えるのが急すぎんだよ。多
重人格なのか？ いや、記憶喪失？」

「俺はただ、まだ見ぬ友を追い求めようとしただけ——」

「アーはいはい、もういいから。お友達教名誉信徒の思考を理解しよ
うとしたオレが悪かった」

何その宗教。俺が入りたいくらいだ。後でミカエラに紹介しても
らおう。

「それで、ミカエラは怪しいと思ってる人いる？」

「この状況で犯人が取る行動は2つだ」

そう言っつてミカエラは指を2本立てた。俺は近くを通りががった
スネイプ先生を石像の影に隠れることでやり過ぎしていた。

「1つ目は単独行動。この混乱に乗じて、進行中の別の目的があるの
かもな」

「それならスネイプ先生が怪しいね」

見ると、スネイプはトロールの現れた地下室ではなく、4階に繋が
る階段を上がっていった所だった。確かその先は『禁じられた部屋』
があるはずだ。

ミカエラが口を開きかけた時、誰かが俺にぶつかった。ロンと共に
走っているその人物は振り向きつつ謝った。額にある稲妻型の傷跡
が見え隠れしている。ハリー・ポッターだ。

「おっと」

「ごめんジューダス！」

「おい！ どこ行くんだよ！」

ハリーとロンはかなり急いでいるようで、気がついた頃には人混みの奥に消えてしまった。ミカエラが鼻を鳴らして、話を再開する。

「フン、次点で犯人は静観を決め込むだろう。その場合は、トロールを解き放った時点で犯人の目的は果たさていると考えられる」

「黙って見てるってこと？ そんなことしてるのは失神してるクイレル先生ぐらいだけだ」

「つまり、容疑者は絞られた訳だ。シャンプーしてないスネイプか、ハゲ疑惑のクイレルになア」

「また髪の話してる……」

しかし、いつもオドオドしてるクイレルがトロールを引き入れるとは到底思えない。となると犯人はスネイプなのだろうか？

「よし、とりあえずスネイプ先生を尾行してみよう」

俺は駆け足でスネイプの登っていった階段に向かう。2段飛ばしで上がり、3階に差し掛かった。そこでは半透明の何かが倒れていた。走り寄ると、すぐに正体がわかった。

「この人って……ピーブズだ！ ポルターガイストのピーブズが気を失ってる！」

「ピーブズウ？ ……あ」

「何かわかった？」

「わかる訳ねえだろ！ このすつとこどつこい！」

そんなに怒らなくても……。しかしなぜか既視感が凄い。これをデジャヴと言うのだろうか。

ミカエラが嫌そうに蘇生の呪文をかけると、ピーブズは目を覚ました。

「うん？ ここは……？ ってその胸の十字架！ お前さてはビショップ家か！」

「え？ そうだけど……」

俺のロザリオにピーブズは一瞬たじろいだ。しかしすぐに空中に浮き上がる。始めに中指を立てた手を額に持っていく、次に親指を下に立てつつ胸に動かす。そして左から右へ首を斬るジェスチャーを

した。なんて汚い十字の切り方だ。

「ケツ、くそつたれの十字教徒め。エンガチヨエンガチヨ」

散々悪態を吐くだけでは飽き足らず、城のカーテンをメチャクチャにしながらピーブズは飛び去っていった。相当ビショッポという苗字に恨みがあるらしい。

「あんなガキどもの悪戯心の集合体なんて放つて置け。先急ぐぞ」

「了解。でも雰囲気がミカエラに似てた気が……」

「二度とその減らず口利けなくしてやろうか？」

「すみませんでした」

ミカエラに平身低頭謝罪しながら、ラストスパートをかける。なんとか間に合ったようで、禁じられた部屋の扉が閉められた所だった。

「さあ行くぞ！ あの陰険教師の企みを暴いてやれ！」

ミカエラの言葉の端々から、期待が感じ取れる。スネイプ先生を捕まえる事がそんなに楽しいのか？ それともこの部屋の先にあるもの？

廊下の突き当り、重々しい門で封じられた扉に手をかける。中から獣の悍ましい声が聞こえる度に、俺の心音が激しさを増していく。頬に冷や汗が伝った。俺はこの感覚を知っている？

意を決して戸を引いたその時。スネイプ先生が跳び出した。何かから逃れるようにもんどり打って倒れる。ミカエラはこの間にサツと中へ入り込んでしまったようだ。俺は杖を構えながらスネイプににじり寄った。

「スネイプ先生……？ 何をしていたんですか？」

ガバツと顔を上げたスネイプは、普段以上に土気色の不健康そうな顔色だ。俺の姿を認めたスネイプが目を見張ったのは一瞬で、瞬く間に鉄面皮を被り直した。

「それは我輩のセリフだビショッポ。貴様の方こそなぜここにいるのだ？」

「それは……先生が地下室ではない方へ行ったから……」

「なるほど、グリフィンドルお得意の蛮勇を発揮した訳だな？」

スネイプは不愉快そうに唇をめぐり上げた。徐ろに壁に手を付き

立ち上がろうとする。しかし止めどない脂汗が浮き、苦しげなうめき声を上げた。スネイプの足は、獣の咬傷で痛々しく血が流れていたのだ。

「大丈夫ですか!？」

「他人の前に自分の心配をしたまえ。それとも、トロール程度恐るるに足らんとでも思っているのか？」

いつの間にか俺とスネイプ先生は大きな影に飲まれていた。荒い息遣いに、鼻を刺す異臭。ぎこちなく振り向くと、俺はスネイプが立ち上がるうともがいている理由を知った。知りたくなかった。

「ぐおおおおお!!」

トロールが棍棒を横薙ぎに払う。俺は咄嗟に前転して回避した。とんでもない風圧が、人間程度プチつとされてしまう事を主張している。自分の足に応急処置したスネイプが俺の前に出た。

「下がっていたまえ。1年生が相對していい魔法生物ではない」

「でもスネイプ先生は怪我を!」

スネイプは返答の代わりに、呪文を紡いだ。

「インカーセラス! 縛れ!」

トロールの足を頑丈そうな縄が括る。トロールはバランスを崩して、前に転倒した。スネイプがそれを回り込んで避けながら、雨あられの如く魔法を繰り出す。

「ステューピファイ! ステューピファイ! 麻痺せよ!」

幾本もの赤い閃光がトロールの胸を貫いた。効いてはいるのだが、トロールを気絶には至らせていないようだ。そうこうしている内に、トロールの足の縄が切れた。

「ふんぬッ!!」

怒れるトロールは棍棒を床に叩きつけた。横っ飛びに避けるスネイプ先生だが、着地の衝撃で小さく呻いた。やはり傷のダメージがあるのだろう。

「セクタムセンプラ! 切り裂け!」

不可視の斬撃はトロールの分厚い皮膚に阻まれた。かすり傷しか入っていない。お返しとばかりに棍棒が振り上げられる。このまま

ではスネイプ先生が挽き肉に！

俺は何も考えずにトロールとスネイプの間に割って入った。1年生で覚えている呪文なんて、たかが知れている。しかし俺は、1つだけ殺傷力のあるものを知っていた。

「ウインガード・レビオーサ！ 爆破せよ！」

トロールの目玉付近が爆発し、トロールが怯んだ。その隙をスネイプは逃さない。

「インペディメンター！ 妨害せよ！」

トロールの巨体が後ろに揺らいだ。イける。この勢いで攻め続ければ。それは、明確な油断。

「ビシヨップ！」

スネイプの声が飛んだ。急いで盾の呪文を張っているが間に合わない。俺に、どこからか飛来した赤い閃光が迫っていた。

「危ねえなア」

予見した痛みは襲ってこなかった。黒い髪に小さな背。ミカエラが、赤の閃光を握り潰す。

「あのクソ犬の先にもたアくさん守備があつたしよオ。ただでさえ苛立ってるのに。ああ、キレそう」

ミカエラがトロールに手を向け、握り締める動作をした。それだけで、トロールが青い顔で首を掻き始める。

「いくら魔力タンクとはいえ、ジューダスを連れてきたのは失敗だったか。まあいい。問題は……誰が失神呪文を撃ちやがったのかだ」

失神呪文が飛んできた方向に、下手人は見えない。つまり、撃ち逃げされたということだった。ミカエラは不快そうにトロールをノックアウトすると、無言で飛び去った。有無を言わさぬ迫力だった。

「どういうことだ……？」

対してスネイプ先生は、急展開を飲み込めていないようだった。呆然と立ち尽くしている。無理もない。先生視点では、突然失神呪文が消失したかと思えば、トロールが倒されていたのだから。

マクゴナガル先生やフリットウィック先生の足音が聞こえる中で、俺はやっと一息ついた。まあ、ミカエラが来た時点で勝確だったのだ

が。

その後、マクゴナガル先生からは盛大にお小言を頂戴し、グリフィンドールの点数も差っ引かれた。しかし不機嫌そうなスネイプ先生の「グリフィンドールに1点」が聞けたので良しとしよう。点数としては全然釣り合っていないけど。

それと、念の為の健康観察で医務室を訪れた時に、ハリーマイクロニートの3人組と会った。彼らもトロールとリアルファイトしていたらしい。

とどのつまり、あの日ホグワーツには2体トロールが侵入したようだ。PTAにダンブルドアが吊るし上げられるのは避けられないだろう。

しかし、ミカエラ、スネイプ、失神呪文撃ち逃げ犯はなぜ禁じられた部屋に行ったんだろうか。案外、フレッドとジョージの言うようにお宝が隠されているのかもしれない。その謎を解明すべく、我々調査隊はアマゾンの奥地へと向かった……。

ポッターにも箒の誤り（強制）

11月に入ると、外は一層冷え込んだ。学校を取り囲む山々は灰色に覆われ、湖ではアイススケートができそうだった。しかし外の景色とは対象的に、ホグワーツは日に日に熱気が増していた。クイディッチの季節が到来したのだ。

土曜日には、因縁のグリフィンドール対スリザリン戦が予定されている。その前夜ともなれば、グリフィンドール談話室が盛り上がるのは当然だろう。呪文学の宿題を広げる俺の近くでは、デイーン・トーマスとシエーマス・フィネガンが大論争を繰り広げていた。

「だから！ スニッチを取ったら150点でゲーム終了なんておかしいだろ！ それなら全員シーカーでいいじゃないか！」

「それを言うならマグルのサッカーの方が意味不明だよ！ ボールが1個で誰も飛んでいない試合のどこが面白いんだ!？」

因みにクイディッチ派がシエーマスでサッカー派がデイーンだ。個人的にはクイディッチのルールが謎なのでデイーンの気持ちもわからなくもない。

スポーツは友情を育むと言うし、どっちでも良いからみんなで作ってみたいな。スリザリンの連中も誘ってサッカーとか楽しそうだ。マグルのスポーツで汗を流せば、純血主義と親マグル派の確執も水に流せるかもしれない。

マルフォイが背番号10を背負ってマウンドに立っている姿を想像しながら、黙々と浮遊呪文のレポートと格闘する。ウインガーディ・アム・レビオーサと爆破の関係を考察したいのだが、これが中々難しい。

誰か同じ宿題をやっている人はいないのか？ 談話室を見回してみる。

推しのクイディッチ選手を語りあうラベンダーとパーバティ・パチル。

監督生バッチを丹念に磨いているのはパーシーだ。それをフレッドとジョージが邪魔している。

ネビルは相変わらずトレバーを探して這いずっていた。今日も獅子寮はカオスだ。

そんな中、ハリーとロンがハーマイオニーにアドバイスを貰っているのが目に入った。あの3人はハロウィーン以降仲が縮まった気がする。これがトロール効果か。

呪文学の教科書と羊皮紙を広げているのを見るに、俺と同じく宿題だろう。俺は自分の羊皮紙を纏めて、腰を浮かした。

「ん？ どうしたんだ？」

振り返ると、ミカエラが羊皮紙を覗き込んでいた。少し癖のある黒髪が乱れている。外から帰ってきたばかりのようだ。

「呪文学の宿題が難しくてさ。ハーマイオニーにでも質問しようと思っただけだ」

「あのガリ勉ちゃんにイ？ ちょっと見せてみる」

羊皮紙を渡すと、オレンジの瞳が結構な速度で右から左へと繰り返して動いた。書きかけだが、自分のレポートを目の前で読まれるのはドキドキする。しばらくして、ミカエラは顔を上げた。いつかテレビで見たジャパニーズ能面のような無表情だ。

「そ、それで、どうだった？」

「……お前、シラフでコレ書いたのか？ ……書いたんだろうなア」

俺が首肯すると、ミカエラは手で顔を覆った。天を仰ぐ姿は、なぜか嘆いているようだ。そのままミカエラは口を開いた。

「浮遊呪文を言い間違えると爆発するのはまあいい。オレも見たからな」

バツとミカエラは顔から手を取り払った。瞳孔全開で俺を睨みつける。

「だがなア！ なんでその原因が朋友の絆云々になる!? 母親の腹に頭のネジでも忘れてきたのか!?!」

「いやーよく分かんなかったから。朋友の絆って何か起こせそうだし」

「朋友ってカツコつけてんのも腹立つウ！ コレは冒涇だ！ テメエは魔法の神秘を踏み躪ってる！」

一頻りミカエラは大騒ぎした後、ゼーゼーと膝に手をついた。やっぱり妖精的に譲れない部分があるのだろうか。ポツリとミカエラの眩きが聞こえた。

「……………やる」

「え？」

「オレが呪文学でもなんでも教えてやる。今夜は寝られると思うなよ」

「お、お手柔らかに…………」

俺の後ろでは、いつの間にかシエーマスとディーンが固く男の抱擁を交わしていた。

「欠陥スポーツ呼ばわりしてごめんなシエーマス。確かにクイディッチも駆け引きがあつて奥深い」

「僕も玉蹴り遊びとか言つてごめん。サッカーにクイディッチみたいな陣形があるなんて知らなかったんだ」

クイディッチとサッカー、どちらも違つてどちらも良い。彼らのように俺とミカエラの魔法観が一致できるのだろうか。できなければ本当に眠れないだろう。俺はそれだけが不安だった。

翌朝、クイディッチのスタンドは観客で満席だった。ホグワーツ生の熱気が、晩秋の寒さを吹き飛ばしている。ミカエラの深夜授業で寝過ごしたが、俺はなんとか席を確保できた。斜め前にはスネイプ先生、2列後ろにはクイレル先生がいた。

「こんなののが面白えんだか。ジューダスのドミノを台無しにする方が遙かに有意義だ」

「あれ本当にやめてよ。俺の人生って何だったのか考え直したくなるから」

今でもちよつとしたトラウマだ。3時間が一瞬で無に帰すのは堪えるものがある。俺があくびを噛みながらミカエラと話している間に、試合の火蓋は切つて落とされたようだった。

赤と緑のユニフォームが、スタンドを散り散りになつて飛んでいく。クイディッチ初心者の俺からすれば、誰がビーターで誰がチェイ

サーか区別がつかない。こんな時にロンやシエーマスといったクイ
ディッチに一家言持っている人がいれば解説してくれるのだろう。
しかし寝坊した俺はネビルにすら置いていかれていたから、同じく初
心者のミカエラとしか見れなかった。流石にネビルよりも遅起き
だったのはシヨックだった。

「アー、あのキョドってるチビがハリー・ポッターじゃねえか？」

「んー？ どちらかと言えばキョロキョロしてる感じじゃね？ シー
カーってそんなもんじゃない？」

「あれがバランスブレイカーのシーカー様か」

バランスブレイカーならミカエラも大概だと思ったが口にはしな
かった。ハリーは初陣ということもあつて緊張した面持ちでスニツ
チを探しているようだ。

その後は両チームのシーカーに大きな動きもなく試合は進んで
いった。クアツフルがゴールに入るたびに、入れたチームの寮では歓
声が上がリ、反対に敵の寮ではブーイングの嵐が巻き起こる。

このスポーツが英国紳士の嗜みに入れていいのかは甚だ疑問だっ
た。リー・ジョーダンの実況を聞けば、それは更に強く感じられる。

「おおっと！ スリザリンキャプテン、マーカス・フリントの顔面にブ
ラッジャーが直撃だあ！ その鼻っ柱が折れれば良いのに！」

「ミスター・ジョーダン！」

「いえ、冗談ですよマクゴナガル先生。……そして我らがオリバー・
ウッドがクアツフルを防ぐ！ まさに鉄壁の守りい！ ぎまーみる
スリザリン！」

「いい加減にしなさい！ マイクを取り上げますよ！」

「あー！ ちょっと待ってくださいいって！」

実況席ではリー・ジョーダンとマクゴナガル先生の熾烈な攻防戦が
行われているようだ。彼の実況はクイディッチと同じくらい過激だ
が、面白いのもっと聞いてみたい。

フレッドとジョージが見事なコンビネーションでブラッジャーを
叩き落とすのを見ながら、ミカエラが言った。

「始まってみると案外見応えあるなコレ。とりあえずブラッジャーと

かいう鉄の塊を飛ばすのを考えたヤツは天才だ」

「いや天災の間違いでしょ。下手しなくても死人出るよ」

「ソコが良いんだろ」

何が良いのかわからなかったが、ミカエラ的には気に入ったらしい。一進一退の戦いが続く中で、悲鳴ともつかないどよめきが上がった。近くの女子生徒の眩きが聞こえる。

「あれハリー・ポッターじゃない？ 箒にしがみついて危なっかしいけど大丈夫かな？」

箒が上手いと評判のハリー・ポッターが振り落とされそうになっていた。そんな馬鹿な。ハリーが箒から落ちるなんて、フィルチが生徒に罰則を課し忘れるぐらいありえないことだ。

「なーんか闇の魔術かけられてるなア。クイディッチってそんなこともアリなのか。ますます気に入ったぜ」

「いや駄目でしょ。流星に魔法族もそこまで倫理観壊れてないと思いたい……」

一時は転落まで秒読みか、とまでなっていたハリーだったが、今はなんとか持ちこたえている。ただ2つの力が拮抗した不安定な感じだけ。ミカエラが顎に手を当てて口を開いた。

「反対呪文かけて打ち消し合ってるっほいぞ。よっしゃ、オレも参戦するか」

「え？ それってどういう……？」

「ほーれ、ラジコン・ポッターだ」

ミカエラが操り人形の糸を繰るように手を動かす。すると、その動きに連動してハリーの箒が縦横無尽に飛行しだした。錐揉み回転しながら落っこちたと思えば、急旋回して上昇するといった具合に。

「いやちよっ、何やってんの!?!」

「ポッターを巡って呪い掛け合ってるヤツがいるなら掻き乱してやるのが礼儀だろ？」

「そんな礼儀くそくらえだ！ 何でも良いから、やめたげてよおー！」

マジで心臓に悪い。今にハリーが落ちないか心配だ。観衆の目も、ラジコン・ポッターに釘付けになっている。そんな中、スタンディン

グオベーションしていたクイレル先生が誰かに押されたのか、席から転げ落ちた。もうめちやくちやだよ。

ヒヨイヒヨイと人々を掻き分けて、ボサボサの茶髪が俺の前を通った。なんとなく目で追って見ると、茶髪は立ち上がっているスネイプ先生の足元にしゃがみ込む。一言三言何かを唱えると、スネイプのローブの裾が燃え上がった。野郎、テロリストか！

「スネイプ先生！ 炎上してますけど大丈夫ですか!？」
「何っ!？」

周囲の人と一緒に消火活動だ。早期発見だったので、大事にはならなくて済んだ。しかし、放火魔を取り逃がしてしまった。

「ちえっ、闇の魔術とその反対呪文の反応が消えたな。つまんねーの」
ミカエラは飽きたのか、ハリーで遊ぶのをやめたようだ。ハリーの箒の異常も終わり、試合が再開される。

ふと視線を感じて振り返った。ロンの目と俺の目がかち合う。だがロンは見てはいけないものを見てしまったかのように、慌てて目を背けてしまった。好きな子に話しかけられない小学生じやあるまいし、どうしたんだろう？

「ハリー・ポッターの口から……金のスニッチが出てきたああああああ!! 試合終了です！ やりました！ グリフィンドールがスリザリンを打ち破りましたああ!!」

生き残った男の子、ハリー・ポッターはクイディッチでも英雄になったようだ。それにしても、口でスニッチを捕えるなど見上げたシーカー根性である。俺からしても、大満足の試合だった。

「次の試合ではラジコン・フリントも愉しそうだなア」

早速次の獲物を探すのはやめなさい。俺よりもミカエラの方が満喫してる気がしてきた。いや別にいいんだけど。

クリスマスイブイブイブイブイブ

12月の半ばになると、ホグワーツの一带は雪によって銀世界に染められていた。窓の外ではコンコンと雪が降りしきり、ここ地下牢では隙間風が四方八方から入ってきた。お陰で魔法薬学はかじかむ手で授業を受ける羽目になっている。

俺は大鍋の火で暖を取りながら、カサゴの脊椎を計った。吐いた息が、白い霧となって散る。

「はあく」

「ジューダス、カサゴの脊椎はもっと少ないんじゃないやねえか？」

俺の気分は日に日に下がる一方だ。原因はわかっている。クリスマスだ。

……自分でも何考えてんだこいつとは思いますが、実際そうなのだからしょうがない。他の生徒——ハリーやネビル、あのマルフォイでさえ、クリスマスを待ちわびている。なのに、俺は焦りを募らせていた。「おい、ウスノロ。盛りすぎだぞ」

ミカエラへのクリスマスプレゼントが決まらないのだ。恥ずかしながら俺は生まれてこの方、贈り物なるものをしたことがない。それに、贈る相手が初めての友達というのも悩みに拍車をかけていた。

「デメエ聞いてんのか!？」

グイツとミカエラに引つ張られる。そこで俺は気付いた。カサゴの脊椎を延々と天秤に積み上げていたことに。そこに運悪くスネイプ先生が通りがかった。

「ビショップ、授業中に上の空とはどういう見だ？」

「すみません先生、大切な人に贈るクリスマスプレゼントを考えてました」

「そ、そうか……しかし今は授業に集中したまえ。魔法薬の作製とは、繊細な芸術を仕上げるのと同義なのだ」

そう言うときスネイプ先生は、マントを翻してマルフォイのテーブルに歩いていった。隣で大鍋を掻き混ぜていたネビルが小声で言う。

「減点されなくて良かったね」

「逆になんてしなかったんだらう？ 隙あらば減点してるのに」

「確かに……」

まあ、毎回減点されてるのはハリーとネビルぐらいで、他のグリフィン・ドール生は3回に1回程度だからな。たまたま今日はスネイプ先生の虫の居所が良い日なのかもしれない。

俺が盛りすぎてしまったカサゴの脊椎をしまっていると、クイクイと袖に抵抗を感じた。俯いたミカエラが俺のローブの端を握っている。

「ジューダス」

「何？」

「誰にあげるんだ？ プレゼント」

今訊きます？ さつきスネイプに集中しろって言われたばかりだから怖いんだけど。それに渡す相手にそれを話すなんてどんな羞恥攻めだ。何よりサプライズじゃないとつまらない。俺は口元に人差し指を当て、片目をつぶった。

「ヒ・ミ・ツ」

「はっ」

数秒間硬直したミカエラだったが、再起動すると顎に手を当てて腕を組んだ。俺はその姿勢がミカエラが考え込む時の癖だと最近知った。こういう時のミカエラは自分の世界に入ってるので、そっとおいた方が良くいことも。

「……最近……が離れる……多かったから……でもこんな短時間……」

ミカエラが垂れ流している独り言をBGMに、魔法薬作りを進めていく。適分量のカサゴの脊椎を火にかけられた大鍋にぶち込み、時計回りに混ぜる。そして液体の入った小瓶を手に取ると、その手をガツチリと白い手に掴まれた。顔を上げると、オレンジの瞳の中の俺と目が合った。

「あのー……何でしょうか？」

「その羊の胆汁はまだ入れねえぞ」

「ああそうだった。ありがとう」

こんな初歩的なミスをするなんて、俺は疲れているのだろう。プレゼントの内容を考えて昨日も一晩中起きていたし、当然か。

ミカエラは目を合わせたまま、ゆっくりと手を離していった。最後に舌打ちしたのは聞かなかったことにしておこう。ミカエラに嫌われたら禁じられた部屋に飛び込む自信がある。

ミカエラは終始イライラした様子で、授業の終わりを待たずして地下牢から飛んでいってしまった。外の空気を吸ってくるこのことだが、絶対違う。城の出口とは逆方向に向かっていた。

結局、完成した魔法薬はギリ及第点といった出来だった。因みにスネイプ先生基準でグリフィンドル生の及第点とはスリザリン生の落第点と同じである。終わった。

地下牢から大広間までの帰り道、ハグリッドがモミの木を運んでいるのが見えた。通行の邪魔になっていようだが、仕方ない。ハリーやハーマイオニーと共に前を歩いていたロンが口を開いた。

「ハグリッド、手伝おうか？」

「いんや大丈夫、これが最後だからな」

クリスマスツリーの準備もそろそろ終わりそうなのか。もう時間がないな。俺は焦燥感から肩を落とした。薄ら笑いを貼り付けたマルフォイがやって来る。

「ウイーズリー、もうハグリッドに媚びを売っているのかい？」

「どういう意味だ」

「君にしては良い判断だと思うよ。君たちの家と比べたら、ハグリッドの小屋は宮殿に見えるだろうからね」

可哀想に、マルフォイは構ってほしいのだ。思えば、マルフォイは大体クラップとゴイルとばかりつるんでいた。クリスマスを祝うのに、新しい友が欲しいと考えるのは想像に難くない。

「何だ?!」

ロンは頭に血が上り、真っ赤になってマルフォイを睨みつけた。一触即発だ。これはいけない。マルフォイは仲良くなりたいたけなのだ。ただ、不器用なだけで。このままでは不幸なすれ違いが起きてしまう。

俺は割って入ろうと一步踏み出した。しかし、ロンはまさに掴みかかろうとしている。間に合わない。その時、スネイプ先生が階段から上がってきた。

「ウイーズリー!!」

即座に2人は距離を取った。スネイプは靴音を鳴らしながら寄っていく。ハグリッドがロンを庇うように前に出た。

「マルフォイがちよっかいを出しとったんです」

「しかし暴力は立派な校則違反だハグリッド、グリフィンドール3点減点」

スネイプはそう言うのと去っていった。その後続くマルフォイは、勝ち誇ったようにロンたちに振り返る。俺がその脇を通ると、一部始終を見ていたハリーの声を耳が捉えた。

「僕、あの先生大っ嫌いだ」

まあ良い先生とは言えない。あからさまにスリザリンをえこひいきするし。だが、そこで敢えて俺はノーと言おう。スネイプ先生が俺たちに厳しいのは、きつと愛の鞭なのだ。甘やかしているように見えるスリザリン生にも、裏ではしっかりと指導しているはずだ。でなければ、ハロウィーンの日スネイプは俺を守るためにあそこまで体を張らなかつたららう。

大広間の手前まで来ると、誰かが走ってくる足音が聞こえた。追いついたのは、少し息を乱したハーマイオニー。

「ジューダス、聞きたいことがあるわ」

「ハーマイオニーが俺に質問なんて珍しいね」

「きつきハリーがスネイプ先生の悪口を言ったときに首を傾げてたけど、どうして?」

俺の渾身のボケはハーマイオニーに素気なく無視されてしまった。悲しい。

「どうしてって、俺はそんなにスネイプ先生が嫌いじゃないからかなあ?」

「ジューダスって先生と仲良いわよね」

仲が良い? 俺とスネイプが? 確かに他のグリフィンドール生

よりは接点があつた気がするが、それだけだ。むしろハリーの方が絡まれている分仲が良いと言えるかもしれない。

「そうかい？ 普通の生徒と先生だと思ふけど」

俺がそう答えながら前に進むと、ドンツと誰かとぶつかった。急いで謝って目を上げる。そこに立っていたのは、腕を組み眉を釣り上げたミカエラだった。

「ふーん、そうか。まあどうでもいいが。ジューダス、ちよつとこつち来い」

「え？」

万力のような強さでミカエラに腕を引つ張られる。俺はなるべく不自然に見えないように、ハーマイオニーに言った。

「ごめんハーマイオニー、急用を思い出しちゃった」

「そ、そう……」

呆氣にとられたハーマイオニーを尻目に、俺はミカエラにされるがままだ。見事に装飾を施された大広間を通り過ぎ、エントランスホールを経由して外に出る。冬の張り詰めた空気が肺に流れ込んだ。雪に反射した日光が眩しい。

「ちよ、ちよつと！ いきなりどうしたんだ！」

「別に？ 散歩したくなっただけだ。ジューダスがいねえと碌に魔法使えねえしな」

ミカエラはやつと俺の腕を解放して、湖に向かって飛んでいった。置いていかれないように小走りで追いかける。道中、適当な話を振ったが、曖昧な言葉を返されるだけだった。

湖の畔に腰を降ろす。そばに生えている木の影の下を、心地良い風が通り抜けた。湖は一面に氷が張り、ここで寮合同のフィギュアスケート大会をしたら楽しそうだった。お互いに暫く無言だったが、体が冷えてきた時にミカエラが重く口を開いた。

「ジューダスは、オレのことどう思ってるんだ？」

「どうって？」

「うざったく思ってるんじゃないかねえのか？ 口は悪いし、お淑やかとは言えねえし」

「そんなことない!!」

ビクツとミカエラの肩が跳ねる。ごめん、今のは自分でも声が大きかった。俺はミカエラと正面から向き合った。

「大事な初めての友達だ！ ずっ友達だ！ どうしてそんなこと言うんだ!?!」

その時、一陣の風が吹き抜けた。咄嗟に目を閉じる。俺がもう一度まぶたを開けると、ミカエラの暗い顔は吹き飛ばされていた。陽光に照らされ、笑んだ口角がよく見える。この瞬間を切り取りたい、ふと思った。

「なあ、ジューダスは——「グルルウ!! ワンワン!!」

後半は聞き取れなかった。駆けてきた犬の吠声に掻き消されたのだ。灰色の大型犬は、歯をむき出しにして唸る。

「何だアコイツ」

「今にもミカエラに噛みつきそうだけど」

「何でだよ！ どの犬もオレの邪魔ばかりしやがって！」

そう、犬はミカエラに向かって吠えていた。見えないはずなのだが、居ることを確信しているかのようにだ。

どう対応したものかと悩んでいると、のんびりとハグリッドが歩いてきた。

「おうジューダス、うちのファングがすまん」

「これハグリッドの犬だったの？」

ハグリッドはヒョイとファングを抱き上げた。が、なおもファングはミカエラに吠え続けていた。

「そうだ。いつもはおとなしいんだが、こんなに興奮しするのは久しぶりだ」

「へえー、ファングが吠えるのはどんな時なの？」

「良くねえもんを見つけとる時だな。犬は人間よりも危険に対して敏感だ」

俺はミカエラに振り返った。ミカエラは額から汗を流しながら、ブンブンと首を振る。

「このクソ犬はオレに吠えてねえ！ デミガイズに吠えてんだ！」

「ハグリッド、デミガイズって何？」

「どうした藪から棒に？ まあ勉強熱心なのはええことだ。デミガイズってのはな、平たく言えば透明になれる猿だ。熱帯原産のいたずら好きで、犬が何も無い所に吠えとる原因の1つでもある。それで――」

ハグリッドは魔法生物の話になると止まらないタイプらしい。デミガイズの解説が終わると、今度はニフラーの話を始めようとしたので、申し訳ないが俺は話を遮った。

「オツケーありがとうハグリッド！ 寒くなってきたし俺は戻るよ！」

「氣いっつけてなー」

帰り道に、最初の頃悩んでいたプレゼントの迷いはない。独りで俺の頬は吊り上がっているようだった。

ボツチで良かった。

クリスマス休暇に入ると、生徒たちの大半は実家に帰っていった。それは俺のルームメイトのネビルも例外ではない。残った俺とミカエラは、昼間は自室で堂々と魔法使いのチエスをしたり、ホグワーツを散歩したりして過ごした。

そして夜は、俺はミカエラに悟られないようにプレゼントの準備を進めた。ミカエラはかなり前から、外出することが多くなっていたので、意外と出し抜くのは簡単だった。

楽しい時間は矢のように過ぎ去っていった。俺は苦心して描き上げたプレゼントを荷物の中に隠して、ベッドに潜り込んだ。

その夜は不思議な夢を見た。俺はどこかの教室に座っていた。目の前には古い大きな鏡があり、上部には意匠が掘られていた。

『すつうを みぞの のろっこ のたなあ くなはで おか のたなあ はしたわ』

その鏡の中には、体操座りしたミカエラと、白髪に碧い眼をした若い男が映っていた。隣のミカエラの表情は抜け落ち、幽鬼のようだ。男はミカエラの肩に手を置き、憐憫の光を目に宿していた。彼らの背後には破壊された時計塔——ロンドン塔だろうか？——やおびただしい瓦礫の山が広がっていた。

「まさか先に君がこの鏡に囚われるとはもう」

オレはすぐさま振り返った。穏やかな声の持ち主は、月光が降り注ぐ場所にゆつたりと立っていた。

「ダンブルドア……」

老人はアイスブルーの瞳でしっかりとオレを射抜いていた。そんな、ありえない。オブスキュラスは基本的に不可視のはずだ。

「わしにはどうも、人の形の霞が見えるのじやが。老眼かのう？」

「つまんねえ冗談はやめろ。何が目的だ？ 言え」

「ホツホツホツ、若人は元気が一番じゃ」

ダンブルドアはそう言つて、俺の側まで歩み寄った。この悪魔の鏡を前にしても、堂々としたその姿は、大魔法使いの貫禄だ。

そうだ、コイツは赤子に負けた闇の帝王でさえ一目置いていた男だ。オレの存在に気づいていたとしてもなんらおかしくねえ。オレは不敵に口角を上げた。

「あくまでもはぐらかすつもりか？ 大魔法使いさんよオ。テメエが賢者の石を持ち込んでんのは知ってたんだよ。今度は何を企んでる？ 言わなきや hogwarts を地獄に変えるぞ」

手の平に汗が滲む。魔力で出来た心臓は、さっきからうるさく鼓動していた。そんなオレとは対称的に、ダンブルドアは静かに長いひげを撫でた。

「君は大きな矛盾を抱えておる。君の存在自体が矛盾と言っても過言ではない。だからこそ、悩んでおるのじゃ」

「煙に巻きやがって老害が。オレはこの世をぶっ壊すために生まれた魔力の塊だ。それ以上でもそれ以下でもねえ」

ダンブルドアは悲しげに眉を下げた。そして鏡を一瞥すると、口を開いた。

「彼はそう思っていないのじゃろう？」

「だからどうした？ アイツはいずれ死ぬ」

「いいや生きる。君が生かすのじゃ。わしはそう信じておる」

確信めいた調子で、力強くダンブルドアが言った。とうとう頭もボケてきたのかこのジジイは。アイツが死ぬ原因はオレだというのに。

ダンブルドアは、先程までの老獪な雰囲気霧散させて、手を擦った。

「イブの夜は冷えるのう。クリスマスプレゼントはウールの手袋が欲しいのじゃが、誰も贈らなんだ。わしの知り合いは毎年本ばかり贈りたがるのじゃ」

俺は徐々に意識が浮上しているのを感じた。ダンブルドアの半月眼鏡や折れ曲がった鼻が、どんどんぼんやりとしていく。夢の記憶は、手で掬った水のように次々と零れ落ちていった。

はい、やってきましたクリスマス。何か変な夢見た気がするけど枕元のプレゼント認識した瞬間どうでもよくなった。まずはこの紙袋

に入った装飾もへったくれもないやつから開けていこうと思います。ミカエラいないけど待てないからいいよね。

紙袋からはタロットカードが出てきた。差出人を見れば案の定、トレローニー先生だ。俺を占い学に引きずり込む強い意志を感じる。

小綺麗にラッピングされた包を解くと、そこそこ分厚い本が現れた。題名は『私はマジックだ』。著者にギルデロイ・ロックハートとある。本には彼のものと思われるサインも入っているし、有名人なのだろうか。書く暇がなかったのか、クリスマスカードが入ってないのでどういふ繋がりなのかはわからない。

端が金箔で装飾され、豪華な『F』の紋章で封蝋された手紙には、1枚の写真が入っていた。どこかの屋敷で、十数人が並んでいる。灰色の髪の夫妻や、しかめっ面をした軍人風のお爺さん等が目を引く中、中央の人物が一際気になった。俺と同じ白髪の、キャソックを着た男性と、碧眼の女性が柔和な笑みを浮かべていた。どちらも俺の面影がある。

「……いや、俺に彼らの面影があるんだ」

「急にどうした？」

チラリと横を見ると、ミカエラが宙を漂っていた。そのことを認識した瞬間、顔が熱を持ったのを感じた。

「ぬわーっ!?! い、いつからいたの!?!」

「いつからって、来た時にはお前は写真に食い入ってたな」

「絶対聞いてたじゃん! あああああ、恥ずかしくて死にそう」

「キチガイでも恥って感じるんだな……」

もういつそ、笑ってくれ……俺は布団に顔を埋めた。そのまま言葉にならない呻きを上げる。薄めで見たミカエラは、さっき俺が眺めていた写真を摘んでいた。

「この真ん中のヤツラ、ジューダスに似てるなア」

「多分それ俺の父さんと母さんだよ。この白髪は父さんと一緒だし、俺の碧眼は母さんからの遺伝だと思う」

「ふーん」

ミカエラは暫く形のいい眉を顰めて見入っていた。俺はその横で

プレゼントの開封に勤しむ。ハグリッドは自家製のロックケーキをたくさん贈ってくれた。後で食べてみよう。

「なあ、この写真はどこのドイツが送りつけて来たんだ？」

「んー？　そういえば何も書かれてなかったかも。俺の父さんか母さんの親戚じゃない？」

見たところ親戚の集合写真っぽいし、それが最有力候補だろう。俺はネビルからのクリスマスプレゼントである思い出し玉を握った。すると、中の煙が何故か赤色になった。首をひねっていると、ミカエラが呆れたように言う。

「アホか、じゃあ何でお前を孤児院から引き取りに来ねえんだよ」

確かに、もし俺に親族なる人たちが存在しているのならそれが妥当だ。ますます送り主がわからなくなってきたぞ。首にかけたロザリオを弄りながら考えるが一向に思いつかない。そんな時、コンコンと窓の叩かれる音がした。

「フクロウ？　わざわざこの部屋まで飛んできたのか？」

ミカエラの言う通り、左目に傷跡のあるメンフクロウが窓の外に留まっていた。足には長方形の包を縛り付けられている。

「クリスマスプレゼントでも届けてくれたのかな？」

「だとしたら遅刻だ。間抜けなフクロウだぜ」

窓を開けてフクロウを招き入れる。それにしても既視感があるフクロウだ。つまり、俺とこのフクロウは前世、或いは今世で友達だった可能性が高い。

フクロウの運んできた荷を解くと、出てきたのはなんと聖書だった。差出人はメアリー・スーとある。同封されたカードに『神の愛を信じよ』とだけ書かれていた。新手の宗教勧誘かな？

「ある意味クリスマスに最も相応しい贈り物だなア」

「メアリーさんは十中八九、十字狂徒だと思う」

「違えねえ」

フクロウに礼を言い、ハグリッドのロックケーキを割って渡す。ささやかなプレゼントだ。フクロウは手から岩のようなケーキを啄むと、飛び去っていった。

「そうだ！ ミカエラに渡したい物があるんだった。すっかり忘れてたよ〜」

嘘である。ミカエラが来た時から機会を伺っていた。俺は努めて平静に振る舞う。

「ななな何だよ突然に。またいつもの発作かア？」

枕の下から一枚の紙を引つ張り出す。それが正面を向くようにして、ミカエラに差し出した。紙には黒髪にオレンジ色の瞳を持った少女の、笑んだ似顔絵が描かれている。

「メリークリスマス、ミカエラ！ お金もない俺にはこれぐらいしかあげられないけど、良かったら受け取って欲しい」

ボツチには幾つかのメリットが存在する。そして、絵描き等の一人遊びが上達するのはその内の1つだ。俺はここ半月、湖の時のミカエラを描こうと格闘していたのだ。

「メ、メリクリだな！ ジューダスにしては良い出来じゃねえか？ しようがねえから貰つといてやるよ」

ミカエラはいそいそと自分の似顔絵を受け取ると、素早く懐にしまった。ローブを翻して、出口に向かって言う。

「よし！ 腹も減ったし大広間に行くぞ！ 4秒で支度しな！」

「それは無茶だつて！」

「だ、だな！ じゃあしようがねえからオレがやってやる！」

「ミカエラ、しようがねえが口癖になってない？」

「ジューダスがしようがねえのが悪いんだろ！」

それは暴論だと思うけど…… まあ、ミカエラが言うならそうなのだろう。俺は黙っておくことにした。

ミカエラが指揮者のように指を振ると、一斉に俺の持ち物たちが動き出す。ローブは無理くり俺に着られようとし、杖はグリグリと右手に振じ込まれた。

「本当に4秒で支度出来てしまった……」

「大広間へレッツラゴーだ！」

「イギリス人がエセ英語使っちゃ駄目でしょ」

結局、プレゼントをあげた時のミカエラの顔は見られなかった。ど

んな反応するのか気になってただけに残念だ。

大広間は、帰っている生徒もいるせいか人口密度が低かったが、豪華なクリスマスMASの飾り付けのおかげで全然寂しさは感じなかった。壇上のテーブルにズラリと座るトレローニー先生を除く全先生方は、ワインの瓶を開けて酒盛りに興じている。

俺はロンの隣が空いていたのでそこに座った。少しロンの肩が跳ねたように見えたが、目にゴミが入っただけだろう。ロンの隣には、ハリーが席について目を輝かせている。

「メリークリスマス、ロン、ハリー」

「メ、メリークリスマスジューダス」

「ジューダス、メリークリスマス」

ハリーは普通に返してくれたが、ロンはなぜか目を伏せたままだった。ロンはこんなにシャイだったのだろうか？

「どうしたのロン、体調でも悪い？」

「ぼ、僕は大丈夫だよ。それよりもほら、このローストビーフ凄く美味しそう」

「バカジューダス、オレにもそのイギリス料理で唯一旨いその肉を寄せ」

それは言い過ぎ……ではないか。何はともあれミカエラにせつつかれてしまったので、例によって切り分けたローストビーフをテーブルの下に流す。

ロンがギョツとした目を向けてきたが見られてはいないだろう。俺とミカエラの連携は神業の域に達している。目撃するのはロンの推しのクイディッチチームであるチャドリーキャノンズが優勝するくらい難しいと思う。

因みにローストビーフは大変美味しゅうございました。

日中はミカエラの提案で図書館の本を借りた。曰く、たまには静かに過ごすのもいいだろうとのことだ。傍から見たら、俺はポッチ道を極めしエリートポッチに見えるだろうが気にしな—い気にしな—い。

自室で本を読み耽る。

「ジューダスはクリスマスプレゼントのお返しに何か欲しいのはあるか?」

『トロールでも分かる錬金術』という本を読んでいたミカエラが言った。俺は『ヴィーラ流 人に好かれる10の方法』から顔を上げる。「特にないかなあ。それに、杖も貰っちゃってるしなんか申し訳ないというか」

「へー、オレからは何もいらないと」

「いや、貰えば貰ったでめっちゃ嬉しいよ?」

一瞬ミカエラの瞳が、冷えた鉄の色になってビビった。すぐに元の溶けた鉄に戻ったから見間違えか?

ミカエラは開いていた本のあるページを指差した。中央に深紅の石が描かれている。

「じゃあ今度、コレでもやるよ」

「えーと、何々? 賢者の石? 幾ら何でも無理でしょ」

「ニコラス・フラメルが出来てオレに出来ねえ訳ねえだろ?」

ニヒルに笑うミカエラを見ると、そのうちポンと賢者の石を出してきそうだ。そんな気がした。

友情は全てを解決する

新学期が始まると、クリスマス休暇中に帰省していた生徒たちが戻ってきた。談話室は久方ぶりに賑わっている。クイディッチの試合が近づいているのも関係しているのかもしれない。俺は端っこで静かに読書していた。

「うわああああ!!」

『ヴィーラ流 人に好かれる10の方法』から目を上げる。ネビルが入口付近に倒れ込んでいたのが目に入った。

「クハハッ！ なアにやっつてんだアイツは」

生徒たちはミカエラのように笑っている。しかし俺は血相を変えて駆け寄った。ネビルの足はピツタリとくつついている。『足縛りの呪い』をかけられたに違いない。となると、談話室までウサギ跳びしてきたことになる。

笑わなかったハーマイオニーがネビルに杖を向けて唱えた。

「フイニート・インカンターテム 呪文よ終われ」

パツとネビルの両足が離れた。俺はネビルをハリーとロンの間に座らせる。

「どうしたんだネビル、自分に呪いなんてかけて」

「違うって！ 僕はそんな変態じゃない！」

「なんだと!? ホグワーツに呪うような人がいるはずないし、何が起きたんだ!?!」

「ジューダスはもうちよつと人を疑った方が良いと思うな！」

そんなバカな。さつき俺が読んでいた本には『人間を疑ってはいけない、微笑むべし』と書かれていた。どっちを信じれば良いんだ？

俺をジト目で見て、ため息を吐くハーマイオニー。

「それで、ネビルは誰にやられたの？」

「……………マルフォイに、図書館の前で突然杖を向けられたんだ。新しく知った呪文の実験台だって言われて……………」

俺はポンツと手を打った。マルフォイの意図が瞬時に脳内を駆け巡ったからだ。

「なるほど。気になる子にはちよつかいをかけちゃうアレをしちやつたんだな」

「ちよつと黙ってて貰えるかしら」

「あつハイ」

ピシヤリとハーマイオニーに両断されてしまった。結構いい線行っただけだなあ。

ミカエラは実ににこやかに言った。なぜそんなに上機嫌なんだろう。

「まあ元気だせよコミュ障クン。きっとそんなお前でも受け入れてくれる人がいるって」

近くに人がいるから喋れないの知ってて煽ってるよね？ 真にたちが悪い。ミカエラは魔性の女？ だった。

ハーマイオニーは強い口調で言う。

「マクゴナガル先生に言った方がいいわ！ マルフォイにやられたって報告するのよ！」

「これ以上面倒は嫌だ」

ロンがチラリと俺を盗み見てから、口を開いた。俺がハーマイオニーの言いつけを守っているのか確かめたかったようだ。

「ネビル、マルフォイに立ち向かわなきゃダメだよ」

ハリーが言葉を継いだ。

「あいつはみんなを見下してる。だからといって屈服してつけあがらせちゃいけない」

ああああ、言いてえ。それは勘違いだっただけで教えてあげたい。マルフォイ検定4級の俺に言わせれば、マルフォイはネビルと友誼を結びたいに違いないのだ。しかし、ハーマイオニーから発言を禁じられている俺にはどうにもできない。

ネビルは声を詰まらせた。目に涙を浮かべ、今にも泣きそうだ。

「僕が勇気がなくてグリフィンボールに相応しくないなんてわかってるよ。さつきマルフォイにそう言われたから」

ちよつとそれは看過できないよマルフォイ君。ホグワーツ生はみな自分の寮に誇りを持っている。今度会ったらみっちり教えなくて

は。

ネビルを励ましてあげたいが、お口にチャックしている状況では無理だ。

すると、ハリーがポケットからカエルチョコレートを出してネビルを励ました。その手があったか！

「マルフォイが10人束になったってネビルには敵わないよ。だってほら、アイツは腐れスリザリンに入れられただろう？」

ぬわあああ!! ポッテイー! 貴様も寮差別主義者だったとは! 魔法界の英雄がこれでは、いつまで経ってもホグワーツは統一しないぞ。なるほど、これが社会の縮図か……

「ありがとうハリー、偉人カードはあげるよ。集めてただろ？」

そう言つて、ダンブルドアのカードをハリーに渡すと、ネビルは自室に戻っていった。慌てて俺は追いかける。

「むむむー! むむむむむむむー!」

「えっ? どうしたの?」

ネビルは目を丸くしたが、正体が俺だとわかるとすぐに平常心を取り戻した。なんか釈然としない。

ミカエラが信じられないものを見るような目で、オレンジの瞳を見開いた。

「も、もしかしてガリ勉ちゃんの命令をバカ真面目に守ってるのか?」

コクリとうなずいて気づいた。ここにはハーマイオニーはいないから別に喋ってもいいのだ。

ミカエラは「負けた……」と隅で丸まっているが、大丈夫だろう。彼女は強い人だ。

「ネビル、俺の言いたいことは1つだけだ。マルフォイとしっかり話し合おう」

「む、無理だよそんなの。マルフォイだって嫌がるに決まってる」

「君にこんな言葉を贈ろう『人は対話によって理解しようとし、理解して離れていく』」

「やっぱりダメじゃん!」

あれ? おかしいな、もつと違うことを言おうと思ったんだけど。

こんな時はミカエラだ。ミカエラは隅っこで体育座りしながら、白い手を俺に向けていた。口は三日月に裂けている。舌を操られたのだ。ネビルにはハグリッドのロックハート……間違った、ロックケーキを押し付けて、お茶を濁す。マジで万能だなこれ。

寝室から出て、談話室にとんぼ返りする。俺に赤っ恥をかかせて機嫌を直したミカエラもふわふわとついてきた。耳元であくびをされる。

「ふわああ…… 睡い、そろそろ寝ようぜ。なんで戻るんだ？」

「『ヴィーラ流 人から好かれる10の方法』を置いてきちやったんだ」

「あんなカス本、暖炉にでもくべてりやいいんだよ」

「いや、あれは人生のバイブルにしてもいいくらいの啓発本だよ。目からウロコの連続。一回読んでみ？ 飛ぶよ」

「それはもはやドラッグじゃねえか」

ホグワーツの指定教科書にしていると思う。それぐらい素晴らしい書物だ。この本を著したデラクールさんには無限の敬意を払いたい。

因みにクリスマスに貰った『聖書』と『私はマジックだ』はまだ読んでいない。読めたら読もう。

「こんなアホみたいな会話に付き合ってられねえ。オレは寝る」
「了解」

ミカエラは大きく伸びをして、寝室に飛び去った。クリスマスからたまに徹夜しているようだし、たまにはゆっくり寝るのも良いかもしれない。

談話室をキョロキョロと辺りを見回す。目当ての本は即見つかった。何やら話し込んでいるハリーたちの机に載っている。本を手にとった時、聞き捨てならないハーマイオニーの発言が鼓膜を打った。「ニコラス・フラメルは我々の知る限り、賢者の石の創造に成功した唯一の者！」

「ん？ 賢者の石って言った？」

ビクウ！ と揃って肩を跳ねさせるハリーたち。どうしたどうし

た、ロンのが感染ったのか？

脂汗を垂らしながらロンが言った。

「いいい、言ってるよ！ 何だよ賢者の石って!？」

「いやバチコリ言ってるよ？ ニコラス・フラメルがどうのーって」
ハリーとロンは困ったようにハーマイオニーに目配せした。みんなの知恵袋、それがハーマイオニー。仲良し過ぎてジューダス妬けちゃうなあ。

「もしも私が言ったとして、ジューダスは どうして訊いたのよ？」

ハーマイオニーの切り返しが鋭い。まさかうちのイマジナリーフレンドが言ってるなんて答えられる訳がない。ここは誤魔化すしかねえ。

「あー、ちよつと口笛したくなっちゃった」

「そうはならないでしょ」

俺は口笛で『怒りの日』のイントロを演奏した。かなりの自信作だ。孤児院時代の練習の賜物でもある。吹き終わった時、水を打ったような静けさが俺を迎えた。

「ブラボー！ ジューダスブラボー！」

グリフィンドール談話室は万雷の拍手に包まれた。ほとんどの生徒が、スタンディングオベーションしている。3人を呆氣にとらせれば良かったのだが、いつの間にか全員を魅了してしまったらしい。

「本当に、あなたって何者……?」

ただの友情至上主義者です。

次の日の昼過ぎ、グリフィンドールvsハッフルパフの試合が行われるスタンドに、生徒たちが詰めかけていた。今回は寝坊しなかったので、ネビル、ロン、ハーマイオニーと見ている。

ネビルが審判の顔を見て、口を開いた。

「今日の審判はスネイプ先生だ。大丈夫かなあ……」

「まああの先生なら、安心だな」

「ジューダスのその信頼はどこから湧いてるの……? 僕は心配だよ……」

みんなスネイプ先生を疑い過ぎだと思う。ロンやハーマイオニーなんかは、ハリーの箒に呪いをかけたのはスネイプだと断定していた。今も2人ともピリピリしている。俺的には、スネイプ先生を燃やした放火魔の方がヤバいのだが。

「アーア、ダンブルドアが来てるじゃん。ラジコン・ポッター出来ねえじゃねえかよ」

ミカエラが苦々しく送る視線の先には、真っ白なひげの我らが校長が座っていた。良かった。あの人が目を光らせているうちは、呪いも放火も出来ないだろう。

試合が始まると、赤と黄色の魔法使いたちが宙を舞った。ハーマイオニーは、手を組んで見守っている。

「さあ、プレイボールだ！ アイタツ！」

ロンの赤い頭を誰かが小突いた。オールバックにした金髪、マルフォイだ。

「ああ、ごめん。ウィーズリー、気が付かなかったよ」

マルフォイはクラツブとゴイルにニヤツと笑った。仲がよろしいようで何よりです。

「この試合、ポッターはいつまで箒に乗っていられるかな？ 誰か、賭けるかい？ ウィーズリー、どうだい？」

「俺は1ガリオウツ！」

ロンが答ええないようなので、俺が代わりに答えようと口を開いた。しかし、ミカエラに足を踏まれたので、うめき声しか出なかった。痛い。

「これ以上マヌケを晒すな！ ジューカスが！」

クイディッチでは、スネイプ先生の厳正なる審査の結果、ハツフルパフにペナルティキックが与えられていた。どこからどう見てもスネイプのインチキだが、それは俺の知見が浅いだけなのだろうか？

ロンに無視されても、マルフォイは続けて言った。

「グリフィンドールの選手がどんなふうに使われているか知ってるかい？ 可哀想な人から選ばれてるんだよ」

マルフォイはそう言つて、俺やネビル、ロンを見た。競技場では、ハ

リーがスニッチを探してグルグル飛んでいた。

「ウィーズリー、君もなるべきだ。実家が貧乏で気の毒だからね。脳みそがないロングボトムも選ばれるんじゃない?」

「ぼ、僕は君なんか10人束になっても敵わない価値があるんだぞ!」

ネビルがつつかえながらも、真つ赤になって反論した。偉いぞネビル。友人とは、忌憚なく物を言い合える関係だ。しかし、マルフォイたちは大笑いして、バカにした。

やれやれ、マルフォイにはSEKKYOUが必要なようだ。構ってほしくてもやり過ぎだ。

「ドラコ・マルフォイ」

厳かに立ち上がる。席を跨いでマルフォイと向かい合った。

「友達になりたいなら、意地悪するのはやめるのを強く勧める」

「はあ? 何言ってるんだいビショップ。お前がみんなに何て言われているか知ってる? 『話の通じないビショップさん』だって」

な、なんだって!?! 俺はちゃんとコミュニケーション取れてたと思っていたんだけど、まやかしだったというのか? 悲しいかな一方通行。

「ロン! ハリーが!」

ハーマイオニーが叫んだ。上空を旋回していたハリーが急降下したのだ。観衆は息を呑み、大歓声を上げた。

「ご愁傷さまに。ウィーズリー、ポッターはきつとビショップのように箒の制御を失敗したに違いない!」

今まで抑えていたようだが、ロンはどうとうブチ切れた。マルフォイに馬乗りになり、地面に組み伏せる。一瞬、ネビルは怯んだが、助勢した。

俺も眼の前のクラブから拳を振るわれる。咄嗟に横に反れて回避した。

「何するんだ! 暴力反対!」

既に、ロンとマルフォイ、ネビルとゴイルの乱闘は勃発してしまつた。辺りにネビルの悲鳴が木霊する。なんで俺も頭数に入れられて

るんだろう。

必死にクラツブの攻撃を凌ぐ。いつの間にか、ミカエラが俺の隣に浮かんでいた。黒髪を楽しげに揺らして言う。

「ジューダス、そこを避けて右フックだ！」

言われた通りにすると、綺麗にクラツブの頬に拳がめり込んだ。なんかがめん。

「そしてジャブ！　しゃがめ！　そこで左ストレート！」

ミカエラの指示に従って体を動かす。みるみる形勢が逆転していった。クラツブは驚愕の表情を浮かべながら、俺のパンチをいなしている。

「そしてアッパー！　……あ」

「そげぶっ！」

少々調子に乗ってしまったらしい。アッパーを食らわせようとしたところに、ゴイルの鉄拳が俺の顔面に突き刺さる。ネビルよ、もうちよつと持ち堪えてくれよお……

後で知ったことだが、俺たちが乱闘騒ぎしている間に、ハリーはスニッチを捕獲していたようだ。しかも最速記録更新で。凄い。

雨降って地固まれ

ようやくとゴイルから殴られた跡が、目立たなくなった日のことだ。俺はミカエラと連れ立って、ハグリッドの小屋へ向かっていた。「ウウー寒い。なア、クリスマスプレゼントの札なんて、もつと暖かくなってるからにしようぜ」

「ただでさえタイミング逃しているんだから無理だよ。それに嫌なら1人で城にいても良かったんだよ？」

「チツ」

ええ……？　なんで舌打ちするのよ。俺の発言のどこかが地雷を踏んでしまったらしい。急激に不機嫌になったミカエラは、魔法で雪だるまを作っては破壊し、作っては壊しを繰り返した。たくさんのアホ面雪だるまが生み出されていき、同じ数だけ粉碎されていく。中々にシユールな光景だ。

サクサクと白い雪に足跡を刻む。道なりに歩いていくと、ハグリッドの小屋が見えてきた。

ミカエラは雪だるまマッチポンプに飽きたようだ。適当な木の枝を拾っては楽器に加工する遊びをしている。もちろん、ぶっ壊すまでがワンセットなのは言うまでもない。

「あれ？　外に誰かいる？」

「アイツはマル書いてフォイだな。とうとうあのウスノロ2人にも見捨てられたかア？」

小屋の窓にはマルフォイが張り付いていた。近付いてみても、俺に気が付いた素振りは見せない。小屋の中に釘付けた。ハグリッドの他にも誰か小屋に居るのだろうか？

マルフォイは何故ここにいるのか。答えは単純明快、仲良しの輪の中に加わりたいたいからである。俺の推論は間違っていないことが証明された瞬間だった。

そつとマルフォイの隣に佇む。分厚いカーテンの隙間から、こつそり覗き込んだ。

ハリー、ロン、ハーマイオニーが、ハグリッドの抱いている何かを

見ていた。俺からは微妙に死角になっていて見えにくい。

「何だありやア？」

好奇心の赴くままに、ミカエラと一緒に窓ガラスに頬を押し付ける。息が窓ガラスを曇らせて、ますます見えづらくなった。

諦めずに頑張った甲斐もあり、どうにかこうにか抱いている中身を垣間見ることに成功した。そしてソレは、マルフォイを絶句させるに相応しいものだった。

「ド、ドラゴン……だと……」

「クハハ、中々見どころがあるじゃねえかあの半巨人。オレと馬が合
いそうだぜ」

ハグリッドの魔法生物愛はドラゴンにまで向けられるらしい。満面の笑みのハグリッドを見れば、ドラゴンに並々ならぬ情熱があるのは明らかだ。むしろハグリッドは危険な生物程燃えるタイプなのかもしれない。

しばし俺とマルフォイが呆然としていると、ハリーとマルフォイの視線がぶつかったようだ。マルフォイは踵を返して逃げ出した。偶然見つからなかった俺は、その背中を追った。

「ど、どこまでついてくるんだ！」

無事にハグリッドの小屋から逃げおおせた俺たちは、校庭の片隅で向き合っていた。ビシツと人差し指を俺に突きつけた姿勢のまま、マルフォイは肩で息をしている。

俺は全速力で走った疲れを癒すために、そばの木に寄りかかった。サムズアップして応える。

「別に良いじゃん。俺とドラコの仲だろ？」

「お前と友達になった覚えはない」

「またまたー、シャイなんだからー」

「失せろビショップ」

完全にマルフォイからは目の敵にされているようだ。このままではあのドラゴンについて話し合えない。それは困る。

「まあまあ、ここはーっ、矛を収めて。あのドラゴンについて考えま

「しようや」

「そんなこと言つてビショツプ、お前もポツターの仲間なんだろう。僕を騙そうつたつてそうはいかないぞ」

頭が冷えてきたのか、いつもの高慢ちきな表情に戻るマルフォイ。それを見てミカエラが口を開いた。

「このアホ解放してもいいんじゃないか？」

「いや良くない。東方には3人寄れば文殊の知恵ということわざもあるしな。俺は瞬時に組み立てた推測を語る。」

「おそらくあれははぐれドラゴンだろう。ハグリッドたちは保護しているんだと思う」

「脳天気で羨ましい限りだよ。少なくともそんな理由で飼っている訳がないね」

「流石は性善説の信奉者、人呼んでマツドのジューダスだなア」

「じゃああんたらはどう推理してるのさ」

言つてから失言に気付く。ここにいるのは俺とマルフォイの2人だけという設定だった。お茶を濁さなければ。マルフォイは怪訝そうに眉を吊り上げた。

「あんた『ら』？ まるでもう1人いるかのような言い草じゃないか」

「それではここで一曲、歓喜の歌」

「おい、質問に答えろ」

口笛で伴奏の音を出しつつ、腹話術でドイツ語の歌詞を熱唱する。初めはガミガミと文句を言っていたマルフォイも、次第に口を閉じて聴き入っていた。さあ、そのまま何を言おうとしていたのか忘れてしまえ。

ミカエラがどこか遠いものを見るような目で言った。

「もうこれだけで飯食つてけるんじゃないか？」

「いやいや、俺はまだまだだ。俺が幼い頃に孤児院にやって来た大道芸人から手解きを受けたのだが、彼は音圧、響き、音色全てで今の俺を上回っていた。それを超えなければお金を取るなんてとてもじゃないけど出来ない。」

曲を終えると、マルフォイは暫時余韻に浸っていた。純血の令息に

クラシックは刺さったらしい。俺は指揮者のようにお辞儀をした。

「ご清聴ありがとうございます」

「あ、ああ。いい演奏だった………って違う！ ビショップ、お前は……あれ？」

クククツ、計画通り……！ 俺の目論見にまんまと嵌ったようだ。

音楽は世界を救う。

「もうこれオブリビエイトしろ」

失敬な、俺は記憶を消したのではない。それ以上の感動で記憶を塗り替えただけだ。

ん？ 待てよ、そもそもこの状況おかしくないか？ 俺はマルフォイに疑問をこぼす。

「そういえば何で俺とマルフォイは集まってたんだっけ？」

「バカかビショップは。それはもちろん……いや、何でもない。僕は帰る」

「お、おい。待てよフォイフォイ」

「僕に変なあだ名を付けるな！」

マルフォイは照れ隠しに怒った振りをして去っていった。何か重大なことを忘れていている気がするが、マルフォイと仲良くなれたし良いか。

それから少し経ったある日のこと。ロンが犬に噛まれて医務室に行ったと聞いた。当然、俺はお見舞いに行くことにした。

『友達が出来たらしたいことリスト』もだいぶ埋まってきた。残っているのは高難度クエストだけだ。そしてその内の1つが、今達成される。

マダム・ポンフリーに断ってロンのベッドに向かうと、先客のマルフォイとすれ違った。雨降って地固まるとも言うし、先の喧嘩で心を通わせたのかもしれない。

「やあマルフォイ、奇遇だね」

無視された。マルフォイは俺を忌々しげに睨みながら、横を通り抜ける。その手には本が抱えられていた。

……挨拶もしてくれないなんて、実に嘆かわしい。俺はその背中に声を投げかけた。

「ドラコ、その本は何？」

「次馴れ馴れしく呼んでみる、父上に言ってお前を退学にさせてやる」
苛立ちを隠さずに立ち去ったマルフォイ。

一部始終を見ていたミカエラが、深刻そうに眉をひそめた。

「本格的にこのキチガイのネジを締め直す時が来たのかもしれない……」

「誰がキチガイだ誰が。俺は生まれた時から正気だ」

「狂ったヤツラはみんなそう言うんだぞ、コンコンチキ君」

まあ他者とは常に未知の塊だ。これからゆっくり俺が狂っているという『誤解』を解いていこう。

ベッドには顔色の悪いロンがまぶたを下ろして横たわっていた。右手にグルグルと包帯が巻かれ、傷の酷さを俺に感じさせた。

「ロン、お見舞いに来たよ」

ロンは薄目を開ける。俺と視線が交差すると、少し狼狽えた。

「や、やあジューダス。来てくれたんだ」

「友達なんだから当たり前さ。気分はどう？」

「大丈夫だ、問題ないよ」

本当に大丈夫かあ？ 今も冷や汗を垂らしているし、視線だって忙しなく動き回っている。強がっているようにしか見えない。

だが心配をさせたくないというロンの親切心かもしれない。ドラコ・マルフォイだつて気を揉んだらうしな。

「ん？ ドラコ……？ ドラコ、ドラコ……あ、ドラゴン」

ロンは思いつきり体を飛び上がりさせ、痛みでうめき声を上げた。思いついた、確かロンも共犯だったか。

尋問するために俺が口を開いた時、マダム・ポンフリーが薬を持って来た。痛みを堪えているロンを見て、血相を変えて叫ぶ。

「今日の面会はおしまいです！ 帰ってくださいー！」

「待ってください！ 患者に訊きたいことが！ 必要なことなんです！」

「患者には休養が必要です！」

取り付く島もない。あつという間に俺は医務室から追い出された。マジマーリンのひげ。

あの後、俺とマルフォイでハグリッドたちの悪事を暴く、ドラゴン探偵団を結成した……かったが出来なかった。あれよあれよと言う間に、フィルチの手によってなぜか深夜徘徊していたハリーたちは捕まってしまった。ついでにマルフォイも一杯食わされて捕まったことになっている。実際、一晩でグリフィンドールの得点が大量に失われていた。

そしてこれも不思議なことだが、ドラゴン云々はハリーたちがマルフォイを釣るためにでっち上げた嘘だということになっていた。では俺が見たアレは何だったのか？ まさかデカイトカゲということでもあるまい。

謎が謎を呼ぶ。完全に今回の一件に関して俺は、部外者、或いは蚊帳の外だ。満たされぬ好奇心を紛らわすには誰かと話すしかない。

ということ、俺はシエーマスたちに愚痴っていた。

「——つまり、ハリーたちが深夜徘徊をしていたのには深い理由があると思う」

「何が深い理由だよ。ハリー・ポッターは『塔残った男の子』になった。それだけじゃないか？」

ハリーが捕まったのが天文台の塔だったからそう言ってるのだろう。相変わらずシエーマスはギャグをかましてくれる。

黙って話を聞いていたティーン・トーマスが首をひねった。

「それで？ その理由は何なの？ 根拠は？」

「理由は……わからないけど……」

「やつぱりジューダス疲れてるんだよ。僕も最初は信じられなかった。あのハリー・ポッターが一晩でグリフィンドールを最下位にしたなんてね」

そう、ハリーは今や英雄から一転、グリフィンドールの寮杯獲得を阻止した戦犯扱いを受けている。一緒に捕まったハーマイオニーや

ネビルはまだ有名じゃなかったからマシだが、生き残った男の子となれば、その風当たりの強さは計り知れない。

だからこそ、何とかしてハリーを助けたくて情報を集めているのだが、状況は芳しくない。どうしてかハリーたちは俺を避けているようだったし、同室のネビルもあの夜の話を話すのは頑なに拒んだ。マルフォイと会話なんて至難の業だ。

俺の沈黙を見て、シエーマスが気遣わしげに言った。

「ほら、もうすぐ期末テストだしさ。気分切り替えていこうぜ！」

「ああ、そうだね」

ハリー・ポッター。君が何を企んでいるのか、絶対に暴いて見せる。

禁止されるとやりたくなっちゃうよね

無理でした。

ポッター失点事変を暴こうとしたのはいいものの、思いの外捜査は難航した。結果、入手した成果はハリーたちが賢者の石について調べていたことぐらいだ。

後から、ハリーたちが罰則として禁じられた森に連行されたと知った時には卒倒しそうになった。何考えてんのダブルドア。

カリカリと羽根ペンを羊皮紙に走らせる。生徒の誰もが集中している教室は、テスト特有の緊張感で満ちていた。今は期末テストの真っ最中だ。

しかし、全くテストに手がつけられない。思い出したら気になって気になってしょうがなくなった。野次馬根性爆発である。

『魔女狩りにおいて、マグルにわざと捕まり47回火あぶりの刑に処されたのは誰か』

いや知らんわ！ テスト前にミカエラ先生から特別講習を受けたものの、魔法史はノータッチだった。ミカエラ曰く『魔法史と開心術だけは教えられねえ。他のは出来るからな！ 他のは！』とのことだ。

というか本当に誰だ？ こんなにインパクト抜群の人なら覚えているはずだ。俺はひっそりと頭を抱えた。

「ああコイツかア。ジューダスお前、わかんねえのか？」

試験監督のビンズ先生が寝そうになったら起こすという暇つぶしをしていたミカエラが飛んできた。魔法史は苦手のはずだが、特定の時代だけ異様に詳しくかったっけ？ 魔女狩りはその最たる年代だった。

俺は机を規則的に叩く。微かに音が鳴った。トン、トトートン、トトトン。我が特技の1つ、モールス信号が炸裂する！

『ピントダケ教エテ』

ミカエラは思案するようにオレンジの瞳を宙に向ける。数拍後、思い至ったように手を打った。

「もしかしてモールス信号かア？　なんでそんな妙な特技ばっか持つてんだよ」

絵や口笛なんかも一見すると実用的ではないかもしれない。でもこれらは俺の人生を豊かにしてくれるものだと思ってる。

『元水兵サンニ習ツタ。ソレヨリヒントダケ教工エテ』

「いや解説出来るかア！　今日日モールス信号使ってるヤツなんて見たことねえぞ！」

『ジーザス！』

モールス信号は受け手にも訓練が必要でした。

結局、変わり者のウエンデルリンはテストに書けず終了した。あ、というか今思い出したわ。意味ないんですけど。

しかし学期末テストは全部終わったので嬉しい。調査とテスト勉強の両立は大変だったが、やって良かったと思う。成果は微々たるものでもだ。

ミカエラはテスト終了の宣言と同時にどっかに行ってしまったので、俺は校庭に出た。日向ぼっこする大イカを眺める。南中した日が湖を照らし、水面がキラキラと輝いていた。

……朝からなぜか胸騒ぎがする。嵐の前の静けさのような、虫の知らせのような。

初めてのテストで緊張していたのかと思っていたが、未だにこの感覚は消えてくれない。原因は他にあるのか？

ネビルからのクリスマスプレゼントである思い出し玉を握る。貰った時と同じ様に玉は赤く光った。つまり、俺は常に何か大事なことを忘れているということだ。

ああ、畜生。脳内に靄がかかったかのように思い出せない。日が沈むまで考えてみたが、喉に小骨がつつかえたみたいな気持ち悪さは残ったままだった。

夕食の席。美味しいものを食べれば気分も晴れるかと思ったが、全くそうではなかった。相変わらずハリーたち3人組はよそよそしいし、ミカエラも帰ってこなかったからだ。

無性にダンブルドア先生の達観した顔が見たくなって、教職員テーブルに目を向けた。でも、いかなかった。ど真ん中にある先生の指定席は、トレローニーの席のように空いていた。つくづくツイてない。

テーブルの上の豪華な食事も、喉を通らなかつた。俺は言いしれぬ不安から目を背けたくて、カボチャジュースを煽る。

隣に座っていたネビルが数瞬ためらって、口を開いた。

「ジューダスどうしたの？ 今日君、ちよつと変だよ」

「テストで疲れがたまっただけだって。寝れば治るさ」

「だといけど……」

周りの人に勘付かれる程、わかりやすい反応をしていたのか俺は。反省だ。

こんな時にミカエラと話せば、元気が出ると思うんだけどなあ。本当にどこ行っちゃったんだろ、うちのイマジナリーフレンド。

「ジューダスが辛気臭い顔してるなんて珍しい。いつもすすごく目キラキラさせてるのに」

顔を上げると、ラベンダー・ブラウンとパーバティ・パチルに見られていた。この2人は一緒にいるのをよく見かける。親友なのだろう。

俺はいつものキラキラお目々にするために目頭を揉んだ。というかキラキラしてたのか、俺の目。

「そうか？ 至って普通だと思うけど」

パーバティが疑わしげに目を細めた。

「絶対おかしい。元気なジューダスならここでどんちんかんなことを言うはず」

「ほら、パーバティも言ってるんだし、やっぱり何かあったんでしょ？」

「僕もそう思うな」

「お前ら俺のことなんだと思ってるんだ」

そんなことは俺が一番わかってる。ここにいると、言っではいけないことを口走ってしまいそうだった。俺は適当な理由をつけて部屋に戻った。

薄暗い自室のベッドの上には『トロールでもわかる錬金術』が放り出されていた。ページには『賢者の石』が鎮座している。ミカエラが読んでいたのだろうか？

俺は寢床に潜り込んだ。月明かりをライト代わりに文字を目で追う。

『賢者の石』は『ホムンクルス』と並び称される錬金術の極致であります。主な機能は2つで、『命の水』と『黄金』の錬成であります。『命の水』を飲んだものはいかなる損害を被っていたとしても、生き永らえることが出来るのであります。「ふあくあ」またこれによって得られる命は、『ユニコーンの血』など兇戯にも思えるような完璧な生命であります。例え魂が衰弱していても蘇るのであります。新たな身体の創造など容易なのであります。そして『黄金』は——
いつの間にか俺は、頭から本に突っ伏していた。

遂に、遂にこの日がやって来た。深夜の廊下を浮遊しながら、俺は高鳴る心臓をあやしていた。

ここまで長かった。あのバカと老害の目をかいくぐって、ホグワーツにあるはずの賢者の石の在り処を探し回る毎日。場所が『禁じられた部屋』だとわかった後も、教師どもが設置した罫を突破するために牙を研いだ。全てはジュ……………オレが身体を手に入れるために。

そして今日、ダンブルドアが不在になる今日この時。俺は決行を決意した。そのために朝から準備したかったが、一応オレの生徒であるジューダスの結果を見届けない訳にはいかないからなア。こんな深夜までかかっちゃった。

逸る気持ちを抑え、慎重に4階の突き当りまで飛ぶ。壊された蝶番を見て、オレは大きな舌打ちをした。

「畜生、クイレルの野郎に先を越されたか」

こうなりやア多少強引でも急いだ方が良いな。オレが扉を開けると、3つの犬鼻に出迎えられた。後ろ手に扉を閉め、ケルベロスと対峙する。怪物じみた牙に躍りかかられる中、オレは手をローブに突っ

込んだ。

パチリと目を覚ます。デスクにある時計の針は、随分と進んでいた。どうやら寝落ちしてしまっただらしい。俺は硬い枕から身を起こした。しかし、俺の頭を支えていたのは枕ではなかった。

「何が『トロールでもわかる錬金術』だよ。ガチの専門書じゃないか。こんなのよくミカエラ読んでたな」

ミカエラ……そういえばさっき見た夢は変だったな。まるで俺がミカエラになったみたいだった。

俺は無意識に顎に手を当て、もう片方の手で肘を支えていた。

「でも夢にしてはいやに現実味があつた。しかもこの夢は……前にも見た？」

欠けたパズルのピースが嵌っていくかののように、俺の中で点と点が繋がっていく。そうか、俺は夢を通してミカエラと感覚を共有していたんだ。ハロウィーンの日もそうだった。俺が忘れていただけで、もつとあつたかもしれない。

ミカエラは夢の中でクイレルが賢者の石を狙っていると云っていた。ならハリーたちが賢者の石について調べていたのも、クイレルを止めるためだとしたら辻褃が合う。

「行かなきゃ」

きつと、ミカエラは賢者の石を取りに行ったんだ。命の水で自分の身体を創造するために。ならば親友として、その願いが叶うのを手伝うべきだ。今こそ親友に恩を返す時。俺と離れる程、ミカエラに供給される魔力は弱まる。隣にいるだけでも、助けになると思う。

ベッドから降り、ローブに着替える。ミカエラに作って貰った杖を握ると、親友が側にいるようで心強い気持ちになった。ネビルのベッドには、誰も寝ていない。どうしたのだらうか？

答えは談話室にあった。ネビルが『石化呪文』で金縛りにされて横たわっている。マルフォイにでもいたずらされたのだらうか？ 気の毒に思った俺は、杖を振った。

「フィニート 終われ」

呪文を解くと、ネビルは怒涛の勢いで話し始めた。その瞳には涙が光っている。

「ハーマイオニーったら酷いんだよ！ ハリーたちがまた夜に出歩こうとしていたから僕、止めようとしたんだ！ そしたらいきなり呪文をかけてきて——」

ハリーたちも行っているのか。俺がミカエラを追わなければいけない理由が増えたな。賢者の石を巡って、ひよっとしたらミカエラvsハリーがあるかもしれない。もしそうなったら、俺は多分、どっちにつくか迷わない。

俺が夜間外出しようとしていると知ったら、ネビルは制止してくるだろう。俺は痛む良心を隅に押しやって、ネビルに月桂樹の杖を向けた。心なしか、杖は喜んでいるようだった。

「ジュ、ジューダス？　なんで僕に杖を向けてるの……？」

「すまんネビル。恨むなら俺を恨め。ペトリフィカス・トタルス」

『禁じられた部屋』までは誰にも遭遇せずにスムーズに行けた。危惧していたピーブズにも会わなかったのは僥倖だ。

錠前の壊れた扉の前で、首に提げたお守り代わりのロザリオを握る。そして大きく深呼吸をした。冷たい夜の空気が、早鐘を鳴らす心臓や興奮で沸騰しそうな血液を冷却してくれた。少し汗ばんだ手で、金属製の持ち手を引く。

「ヒイッー」

入った途端に悍ましい6つの目に睨まれる。その顔にあるのは、明確な殺意のみ。足元には、壊れたハーブや木でできたリコーダーが転がっていた。

「グガアッ!!」

三つ首の波状攻撃を右に左に回避する。ケルベロスは自分より遥かに小さい俺にやきもきしているようだ。ことごとく牙は俺の体軀を外した。

しかしいつまでもこんなことやっていられない。俺は先を急がなければいけないし、何よりスタミナが保たない。

「考える……こいつへの対処法を……」

ミカエラやクイレルはどう処理した？ ハリーは？ 落ちているハープやリコーダーが、俺に正解を教えてくれる。

「つまり、君の弱点は音楽って訳だ！ 俺の口笛に痺れな！」

選曲は『アヴェ・マリア』、聞いてると眠くなる賛美歌だ。俺の予想通り三頭犬は徐々にまぶたをトロンとさせていき、最後には夢の世界へ旅立っていった。

奥の床に設置された仕掛け扉を開放する。底の見えない大穴が姿を現した。風が下に吹き込んでいき、その音が巨人の唸り声を想起させる。

ここで足踏みしている時間はない。俺は意を決して、穴に身を投げた。

イスカリオテ状態

「ウインガーダイヤモンド・レビオーサあああああ!!」

地面スレスレで落下が止まる。覚悟していたとはいえ、紐なしバンジーは流石に肝が冷えた。

呪文を解くと、思いつきり地面とキスする羽目になった。顔をしかめて立ち上がる。手で払われたロープから砂埃が落ちた。

「何これ？ 植物？」

周りにはチリチリと焼かれた植物が散乱していた。この見た目は『悪魔の罨』だろうか？ なんとなくミカエラが笑顔で焼き払っている場面を想像して笑ってしまう。

俺は悪魔の罨の破片を放った。石造りの小道を進むと、広い部屋に出る。聞こえてくるのは、何かが羽ばたく音。翼の生えた無数の鍵が、縦横無尽に飛び交っていた。

この中から鍵を探し出すのか……。俺はゲンナリして肩を落とす。しかしその必要はなかった。出口の鍵穴に、羽を筆られたであろう鍵がぶっ刺されていたのだ。セキュリティなんてあったもんじゃない。

まあミカエラの作業だな。探し出すのに手こずって相当苛ついていたに違いなかった。だが物に八つ当たりはよろしくない。俺は鍵に修理呪文をかけてやり、通る時に解放してあげた。親友の失態は俺の失態だ。

その先の部屋にはショッキングな光景が広がっていた。粉々になった巨大チエスセットに、端っこで倒れ伏すロン。

さっと血の気が引いた俺は、駆け寄ろうと足を踏み出した。

「ロンに近寄らないで！」

突然の大声にたたらを踏む。その声の主は、奥の部屋からやって来たハーマイオニーだった。

ハーマイオニーは、鋭く目を細めて俺の一挙手一投足を注視していた。その手に握りしめられた杖の先は、しっかりと俺を指す。

「そのまま両手を頭の後ろに組むのよ！ 早く！」

「おいおい、どうしたんだよハーマイオニー？」

俺はすかさず両手を上げた。精一杯の無害アピールだ。

それでも尚、ハーマイオニーの表情は緩まない。

「ロンの言った通りだね。あなたは今晚、賢者の石を狙ってここに来た」

「……そ、そんな訳ないだろ！ 何でわざわざ俺が欲しがるとそんな石！」

バレテラ。でもなぜだ？ 俺が奪取を決意したのは小一時間前だ。それまでに怪しいことをした覚えはない。

「それはあなたがスネイプ先生のスパイだからよ！」

何だつてー!? 俺はスリザリン寮監兼魔法薬学教授のスパイだったのかー！ ……いやそんなことあるかあ！

俺の絶句を受けて、ハーマイオニーは水を得た魚のように推理を語っていった。

「まずは年度初めにホグワーツ特急でジューダスがした筈なし飛行。調べたら『例のあの人』が好んで使っていたことがわかったわ」

「ええ!? あれつてそうだったの!?!」

ミカエラに乗っかってただけ何だけど俺。闇の帝王と被つてたとか初耳過ぎる。

ハーマイオニーはこちらに疑念の籠もった目を向けたが、話を続けた。

「スネイプ先生とあなたのやけに近い距離も根拠ね。ハロウィーンの日は2人で何をしていたのかしら？」

「いやトロールと戦っていたんだつて！ あの時医務室で言ったじゃない！」

「信用出来ないわ。他にも、ロンはあなたが危険な魔法生物を飼っているって言ってたけど……」

「証拠はあるのか証拠は！ 大体、ハーマイオニーたちの方がヤバいだろ！ 何だあのドラゴン！」

そこで初めて、毅然としていたハーマイオニーの瞳が揺れた。突破口はここしかない！

「ほら、そもそも俺がスネイプのスパイだって証拠は何一つないじゃ

ないか。むしろ君たちの方が不味いんじゃない？ 下手すりや退学かもね」

口の端を吊り上げ、さも俺が有利なように歩を進める。実際は早く先に行きたい俺の方が切羽詰まっているのだが。

徐々に俺とハーマイオニーの距離が縮んでいく。

「ノ、ノーバートのことは関係ないでしょう！ う、動かないで！」

ハーマイオニーが両手で杖を突きつけてきたので足を止めた。俺は胸をかきむしりたい程の焦燥感に苛まれている。彼我の距離は5メートル程度になっていた。張り詰めた緊張の糸が、切れようとしていた。

「ハーマイオニー、通してくれないか。ちよつとその先に野暮用があつてさ」

「ハリーの元には絶対に行かせないわ！ インカーセラス！ 縛れ！」

ハーマイオニーの杖から発射された縄が、蛇のごとく空中をうねる。俺はそれを叩き落とすために呪文を唱えた。

「ウインガード・レビオーサ！ 爆破せよ！」

俺たちの間に煙が立ち込める。晴れると同時に、ハーマイオニーは杖を振った。

「インセンディオ！ 燃えよ！」

「アグアメンティ！ 水よ！ なあハーマイオニー、こんな不毛な争いやめない？」

噴き出された火炎を、俺は呼び出した水で消火した。じゅううと水蒸気が生み出されていく。俺の呼びかけも虚しく、ハーマイオニーは悲壮な表情で二の矢を放った。

「インペディメンター！ 妨害せよ！」

赤の閃光を跳んで躲す。着弾した床が、少し焦げた。1年生でこの威力、えげつない。

チェスボードの隅っこで、今の状況に似つかわしくない間延びした声が上がった。

「んあ？ 何だ何だ？ どうしたのハーマイオニー？」

「どうしたもこうしたもないわよ！　ロン！　あなたも杖を持って！
ジューダスを食べ止めるわよ！」

「ッ！　わかったよ！　ハリーはまだ何だね!?」
「ええー！」

ぬわあああ最悪だあああ。ロンが戦闘音で起きてしまった。これで形勢は2対1だ。

こうなつては先手必勝の先制攻撃を放つしか道はない。昨日の友は今日の敵、今日の敵は明日の友だ。

「ウインガード・レビオーサ！　爆破ア！」

「プロテゴ！　守れ！　ロン、大丈夫？」

「ハーマイオニーありがとう！　タラントアレグラ！　踊れ！」

ロン目がけた爆破攻撃がハーマイオニーに防がれるのは織り込み済みだ。どうか防いでもらわなきゃ困る。

タラントアレグラによってステップを刻みだした足を、フィニートで打ち消す。

「フリペンド！　回れ！」

矢庭に繰り出されたハーマイオニーの弾丸が俺に命中した。錐揉み回転しながら吹き飛ばされる。

「かはっ!？」

痛む体にムチを打ち、なんとか体勢を直す。歯を食いしばって顔を上げると、ロンとハーマイオニーに囲まれていた。

ああもう、埒が明かない。俺はお返しに、ミカエラがオリバンダーに使っていた『懐柔の術』を模倣することにした。記憶の中のミカエラの動きをなぞらえる。

「インペリオ！　懐柔せよ！　……あれ？」

何も起きない。ミカエラがやった時は目がトロンとしたはずだ。まさかこの期に及んで失敗か？

数秒身構えるハーマイオニー。しかし何も起きないとわかると、口を開いた。

「ブラキアビンド！　腕縛り！」

「うぐっ！」

俺は体を縄で縛られ、その衝撃で膝をついた。圧倒的不覚だ。

油断なく杖を構えたハーマイオニーが、俺の前まで歩いてきた。

「あなたはダンブルドア先生が来るまで、ここで大人しくしてもらおうわ」

「そこを何とか出来ない？ 見ての通りこちとら急いでるんだ」

「いいえ、駄目よ」

「ハーマイオニー、気をつけて。こいつ魔法生物を隠し持ってるかも」
どうすれば状況を打開出来る？ 冷や汗を垂らす。だが、よく知っている気配を感じて俺の強張っていた体が緩む。

「わかっ!？」

後ろから飛んできた紅の閃光がハーマイオニーを貫いた。気絶して俺に倒れ込む。縛られているので、俺は肩で支えることしか出来ない。

「ハーマイオニー!？」

目を見開いたロンも、同様に気絶させられた。ドサリと仰向けに倒れる。

「何の騒ぎかと戻ってみれば、随分とお楽しみだなア？ ドMくん？」

ハーマイオニーがやって来たのと同じ方向からミカエラが現れる。

人差し指から登る白煙をふっと吹き消した。

「ミカエラ！ 助けに来たよ！」

「助けられてんのはどっちだよ」

何だかんだ言いつつもミカエラは縄を切ってくれた。自由になった俺はハーマイオニーをロンの隣に寝かせる。

ミカエラが片手を漆黒の髪に差し込みながら、俺を頭から爪先まで眺め回した。

「ンで？ 何でお前がここにいるんだ？」

なんとなく夢で見たから来たとは言いづらい。そこだけ伏せるか。

「ミ、ミカエラの身体創りを手伝いたくてさ！」

「アア？ ……ああわかった。まあ丁度いい所に来た。ついてこい」

ミカエラは「んなこたア言ったかア？」と呟きつつも俺を先導していった。ドキリとするからやめてほしい。

チエスの部屋の次には、何もなかった。少々部屋が薄汚れているくらいで、何の障害も配置されていない。大丈夫か賢者の石。

「この警備もミカエラが消したの？」

「違えぞ？ この汚れ具合からトロールでもいたんじゃねえか？」

「あ、ハロウィーン」

「そういうことだ。誰が逃したんだろうなあ？」

そういえばハロウィーンの日にはトロールが現れたのは禁じられた部屋のすぐ外だった。ならば放つたのはクイレルなのだろうか？

この部屋の出口は紫の炎で塞がれていた。メラメラと揺らいで、俺たちを阻んでいる。

「ハリー・ポッターが入るとコイツが燃え上がりやがった。魔法の炎のようで、オレでさえ通れねえ」

「じゃあどうするの？」

「ちよつと手エ貸せ」

差し出すと、ミカエラに手を握られた。柔らかい感触が俺の手を襲う。

「念の為に言っておくけど、魔力供給のためだからな！」

「わ、わかってるよ。何か吸われてる感じするし……」

「わかりやいいんだよ、わかりや」

この状態のまま待つ。長いようで短い静かな時間が過ぎた。ミカエラは表情を引き締め、指を火炎に向ける。

「今から魔力でコイツをぶち抜く。オレが言ったら飛び込め」

「了解」

「3、2、……今だ！」

黒とオレンジの奔流が火炎に轟音を立てて激突した。2つはバチバチッ！ と火花を散らしながら競り合い、靄が押し勝った。僅かな間だけこじ開けられた風穴に、俺とミカエラは飛び込む。

「またかよ」

紫色の炎の向こう側は、黒色の炎でした。狭い通路の両端を火柱が挟む形だ。他には魔法薬が並んだテーブルと、看板が置いてあった。

「何これ？ なぞなぞ？」

「多分あの陰湿教師の試練だろうな。まあオレたちには関係ねえ。力
ずくで突っ切るだけだ」

「まさかの正面突破」

さつきと同じ様に魔力を吸われる。ちよつと目眩がしたが、まだ大
丈夫だと思う。

そして俺たちは、黒い炎をゴリ押しで通っていった。

強欲な者たちの祭典

黒い炎を抜けた先は、円形の大きな部屋だった。中央にはどこか既視感のある大鏡が置かれ、その前にハリーが立っている。その顔は、恐怖に必死に抗おうとしているようだ。

そしてその横には、クイレルが佇んでいた。紫のターバンを取り払ったその姿は、以前とは似ても似つかない程堂々としている。

その後頭部には、蛇のような悍ましい顔が張り付いていた。唇のないうかが開く。

「……おや、おや、おや……噂をすればジューダス・ビショップではないか……歓迎しよう」

「ジューダス!? どうして!？」

「うわア……やっぱ趣味悪いわクイレル……」

クイレル先生はやっぱりハゲだった……。俺はミカエラの予想が当たっていたことに感心していた。

ハリーはまるで、信じていいのかわからない加勢が来たような表情をしている。後頭部の顔は、俺の無言を別の意味で捉えたようだった。

「驚きで声も出ない訳ではあるまい……貴様は早くから……俺様の存在に気づいていたのだろうか？」

いや気づいてないです。確かにハゲてんのかなー? と思って後頭部凝視したことは何度もあるけど。まあここはノッておくか。

「ああもちろん気づいていたさ……ええーつと、蛇の人」

「ブツクハハ、蛇、闇の帝王が蛇かよ」

ミカエラに笑われるが仕方ないじゃないか。本当に誰だかわからないんだもの。

後頭部の後ろから悲鳴のような叱責が飛んだ。クイレルだ。

「ご主人様になんと無礼な! この御方は闇の帝王その人であるぞ!」

「よいクイレル……蛇か、悪くはない……名乗りがまだであったな、聞いてひれ伏すがいい……俺様の名は——ヴォルデモート」

「マジかよ」

俺とヴォルデモートの会話を見ているハリーの目は死んでいた。大丈夫、すぐに元の目に戻してやるからな。

ヴォルデモートはクツクツと喉を鳴らした。喉ないけど。

「……闇の帝王を前にして臆さぬその胆力……流石はあの忌々しい十字教徒の息子といったところか」

「単純に頭ジューダスだからじゃねえか？」

なんだ頭ジューダスって。変な造語作らないで欲しい。というか、さつきからミカエラが好き勝手言っているが、闇の帝王には聞こえていないようだ。

因みに俺が怖くないのにはちゃんと理由がある。ミカエラが隣にいるからだ。パット見、今のヴォルデモートは霞以下にまで弱体化してるようだし、ミカエラがいる限り俺には手出し出来ないだろう。

「ほい」

「ん？」

いつの間にか移動していたミカエラから、何か硬いものを握らされた。見ると、本にあった深紅の石。

それを見たハリーとヴォルデモートが目を見開くのは同時だった。

「賢者の石！」

ちよつと仕事早過ぎるってミカエラ。俺は賢者の石を握りしめて、徐ろに後ずさる。

クイレルが後頭部をこちらに向けたままにじり寄って来た。

「……ジューダス、お前は想像以上に利発なようだ……俺様にそれを寄越せ……ダニエルがやったことは水に流し、お前を死喰い人に取り立ててやろう」

「断るー」

「……もつと賢明だと思っていたが……捕まえろー」

命令を受けたクイレルが杖を振ると、出口が土壁で塞がれてしまった。すかさずミカエラに視線を送る。ミカエラは頷き、見えない力で土壁を爆散させた。

「何ッ!？」

「ぬはははは！　あまり俺（の親友）を見くびらないで欲しいね！」
「アホジューダス！　前見る前！」

おっと危ない。黒い火柱に突っ込んでいく所だった。急ブレーキで止まり、ミカエラに手を伸ばす。

ミカエラは俺の手を取ると、物凄い勢いで魔力を吸った。何だか頭がクラクラする。

しかし、クイレルとヴォルデモートに追いつかれそうだ。

「さあ俺様にその石を渡すのだ……！　今なら許してやろう……！
賢者の石の恩恵も与えてやる……！」

ミカエラが舌を出して、素早く振り返る。ふわりとチューベローズに似た匂いがした。

「霞の帝王に遣る石はねえんだよ！　滅びやがれ死に損ない！　アバダ・ケダブラー！」

ミカエラの手の平から緑の閃光が煌めく。刹那、驚きで表情を固めたヴォルデモートだったが、すぐにクイレルの体から抜け出した。その余波でクイレルは尻餅をつく。外れた閃光が天井の一部を鋭く砕いた。

そこで俺の体は限界を迎えた。崩れ落ちるように床にうずくまる。全身から脂汗がとめどなく浮き、動悸が激しい。何が起きたんだ？

「ああクソツ！　大丈夫かジューダス!？」

「こ、こんなところでえ……！」

懸命に立ち上がろうとするが、体は言うことを聞かない。藻掻くのが関の山だった。あと少しで、ミカエラの願いが叶うのに！　俺は歯噛みする。

再びクイレルに取り憑いたヴォルデモートが、俺を見下ろした。

「1年生が死の呪いを無言で使うとは……殺すのは実に惜しい……だが選択を誤ったな……もう貴様に魔力は残されていない……！」

朦朧とする意識の中、誰かの思考が流れ込んでくる。

『これ以上魔法を使えばジューダスは死んじまう。でもこのままではどっちにしろ蛇野郎の手にかかって詰みだ。クソツどうすれば……』

まさに絶体絶命。走馬灯のようにホグワーツでの1年が脳裏を過

ぎっていく。ああ、俺、死ぬのか。だけど最後に楽しい時間を過ごせて良かったな。

ネビル、ルームメイトとして仲良くしてくれてありがとう。あと、石化呪文かけ直してごめん。

ドラコ、短い間だったけど楽しかった。友達になつてくれてありがとう。

——なんて、一人一人に告別式をしていた時だった。

「やめろおおおお！ ヴォルデモートおおおお！」

背後から息を殺していたハリーがクイレルに飛びついた。苦痛に満ちた叫びが聞こえる。助けてくれたのか？

2人は揉み合いながら滅茶苦茶に叫び続けた。ちらりとクイレルの皮膚が爛れているのが見える。ハリーも強力な術を持っているらしい。

その時、石から俺の指が優しく解かれるのを感じた。ぼんやりと見上げると、真っ白な髪と深い森のような双眼が。もしかしてダンブルドア？

「お、お前は……！」

ミカエラの驚いた声がある。男は司祭服の懐に深紅の石をしまうと、微笑んだ。

「あなたは主を信じますか？」

比較的若い男の声だ。ダンブルドア先生ではない？

「ハリー！ ジューダス！ 大丈夫かの！」

今度こそダンブルドア先生の声があった。いつになく緊迫した表情のダンブルドアが、駆け寄って来るのが見える。俺は安心したと同時にどこか残念に思った。

ヴォルデモートはクイレルを見捨てて遁走したようだった。

ダンブルドアは気絶したハリーを抱えて言った。半月眼鏡の奥が瞠目している。

「ダニエル……！ 生きておったのか……！」

司祭服を着た男は、ダンブルドアにも笑みを見せた。宗教画のように完璧な均整の取れたその微笑みは、神々しさの中に狂気を孕んでい

る。

「残念ながら時間のようですね。皆さんに神のご加護があらんことを」

「待ちやがれ！」

「待つんじゃない！」

白髪の男は、懐に手を入れる。金の鎖が光ったかと思えば、跡形もなく消えてしまった。一瞬の出来事だった。

そこでどうとう俺は、意識を手放した。

喉が、乾いたな……。まだ微睡みたいと訴える喉をこじ開ける。知らない天井が目に飛び込んで来た。どこだここ？

「おはようジューダス。今の時間帯じゃとおそようかのう？」

「やつと目覚めたか」

ダンブルドアとミカエラが並んで俺を見ていた。段々と意識が鮮明になっていく。そうだ、賢者の石はどうなった？

「先生、『石』はどうになりました？ あの男は？」

「石はダニエルに奪われてしもうた。ジューダス、君のお父さんじゃないな」

「本つ当に忌々しいことにな」

ミカエラは苛立たしげに腕を組んで、顔を歪めた。体が手に入れられる最大のチャンスを逃しちやっただもんな。

だがここで疑問が1つ。俺の父親は既に故人のはずだ。

「でも先生、ダニエルは亡くなったのでは？」

「儂もまさか生きていたとは思わなんだ。なんと言っても彼の遺体をこの目で見たのじゃから」

「オメーの目は節穴か？ ダンブルドア」

「儂のことをそう言ってくれるのは君とアバーフォースくらいじゃよ」

ダンブルドアは愉快そうに笑った。いや何で罵倒されて喜んでるの？ あとダンブルドアはミカエラのこと見れるんだ。まああんまり驚きはないが。

そして俺は、机の上にある色とりどりの品々に気づいた。心が沸き立つ。

「君の友人からの贈り物じゃよ」

「ジューダスは誤解されながらも、ハリー・ポッターの危機に馳せ参じた勇者だからなア」

え？ 俺ってそんなことになってるの？ なんか凄い後ろめたいんだけど。

「俺はそんなに立派な人じゃありません。私利私欲で賢者の石を狙いました」

「何言っただお前!？」

「あのまま事が進んでいれば、俺はダニエルのように奪取していたでしょう——」

ダンブルドアは黙って俺の独白を聞いていた。俺が顛末を吐き出し終わると、真っ白なひげが動いた。

「……名誉を捨てるのは難しいことじゃ。それが既にあるのなら尚の事。しかし、君は正直に儂に話した。これが出来るのは大人でさえ少ない」

「正直者は馬鹿を見るってみんな知ってるからなア」

「悲しいことなのう。じゃが、儂はそうは思っておらん。誇りなさいジューダス。確かに君の動機は不純じゃったが、結果的にヴォルデモートの恐るべき計画を阻止したのじゃから」

俺はしばらく俯いていた。そんな俺の肩に、ポンと手を置くミカエラ。

「まア貰える称賛は貰っつけ。うん」

いつまでも気に病んでも仕方ないか。俺は顔を上げた。ダンブルドアはニコニコと微笑んでいる。

「最後に1つだけよろしいですか？」

「なんなりと、ジューダス」

「ハリーとクイレルはどうなりました？」

「ハリーは無事じゃ。近くのベッドで寝息を立てておるよ。クイレルは……哀れな末路じゃった」

「そうですか……」

俺は十字架を切って黙祷した。クイリナス・クイレル、ヴォルデモートに利用され破滅した男。彼は悪人だったかもしれないが、冥福を祈るぐらいいは良いだろう。

俺のお祈りが終わるのを待って、ダンブルドアは口を開いた。

「儂からお願いがある。賢者の石は儂が砕いたことにして欲しいのじゃ」

「どうしてですか？」

「賢者の石がある限り、ヴォルデモートは諦めぬ。かような石は、ない方が良いのじゃ。ニコラスともそう話した」

「……わかりました」

「あんな説教垂れてたくせに、よく言うぜ」

ミカエラの言葉を受けて、ダンブルドアは茶目つ気たつぷりにウインクした。

「大人って汚いじゃろう？」

俺は押し黙るしかなかった。否定するのも違う気がするし、同意したらしたで問題だ。どういう反応が正解なのこれ？

ダンブルドアはゆっくりと立ち上がると、パーテーションの出口付近に目を向けた。

「老いぼれはそろそろ退散するとしようかの。2人ともお入りなさい」

ダンブルドア先生と入れ違いに、バツが悪い顔をした2人組がやって来た。ロンとハーマイオニーだ。開口一番にハーマイオニーは頭を下げた。

「ごめんなさいジューダス。勘違いで呪文を撃ってしまつて。到底許される行いではないわ」

慌ててロンもそれに倣つた。

「僕もごめん。ずっとジューダスは悪いやつだと決めつけてた」

スゲー気不味い。全部運が良かったのに肯定される居心地の悪さよ。案外、祭り上げられるハリーの気持ちもこんなものかもな。

俺も一緒に頭を下げることにした。

「2人ともごめんなさい。こんなことになったのは、みんなに秘密で行動してた俺にも原因がある」

「なんだアこの状況？」

3人中3人が頭を下げあっている。そこからは謝罪合戦が始まった。

「僕が悪い」

「私が悪かったのよ」

「いんにや圧倒的に俺だ」

「僕が悪かったって！」

「俺だ俺だ俺だ！」

「どうしてそうジューダスは強情なのよ！ 悪いのは私よ！」

誰一人相手の非を認めない。なんて頑固な奴らだ。

いかに自分が悪かったか舌戦を繰り広げていると、鬼のような形相のマダム・ポンフリーが現れた。

「医務室で何人たりとも騒ぐのは許しません！ 面会は終わりです！」

そのままロンとハーマイオニーはマダム・ポンフリーにドナドナされてしまった。まあ別れ際に仲直り出来たから良いか。

戻ってきたマダム・ポンフリーは、俺の机にコトンと水の入ったコップを置く。

「青春ですね」

「え？ 何でジューダス赤くなってんだよ!? 引くわア」
うるさいぞミカエラ。

その後の学年末パーティーは、もうお祭り騒ぎだった。ダンブルドアが駆け込みでグリフィンドールに点数を与え、スリザリンを逆転して俺たちが優勝したからだ。そこからの記憶は曖昧なので、割愛させていただきます。

余談だが、ネビルは俺が自分にペトリフィカス・トタルスをかけて同じ気持ちを味わうと言ったら、半泣きで許してくれた。本当に良い友人を持った。

ホグズミード駅は、帰る生徒で溢れていた。紅のホグワーツ特急が燦然と停車している。

俺は汽車に乗り込みかけて、マクゴナガル先生に呼び止められた。

「お待ちなさいミスター・ビショップ」

「どうしました？ マクゴナガル先生」

「あなたは自分がどこに帰るべきか知っているのですか？」

「孤児院ですよね？」

ああ、嫌だなあ。ホグワーツの温かさを知ってしまったからは、あまり行きたくない場所になっていた。でも、思い出があればあの生活も耐えていける。

マクゴナガル先生は、そんな俺を見て溜息をついた。

「やはり知りませんでしたか……。良いですか、もうそこに行く必要はありません」

「え!? 俺、ストリートチルドレンになるんですか!？」

「違います! あなたの里親が決まりました」

嘘やん……。いつまでも孤児院に居たから、売れ残りと揶揄されていた俺に里親が……。ヤバい、目から汗が出てきた。

「そ、それで、どなたが里親に……?」

マクゴナガル先生は、優しく微笑んだ。

「向こうに着いてからのお楽しみです」

「ダンブルドア先生みたいなこと言わないでくださいよおお！」

「ジュ、ジューダスー! 早くおいでよー!」

汽車の窓からネビルが呼んでいた。紅い車体には、ミカエラが腕組みして寄りかかっている。俺はマクゴナガル先生に礼を言うと、ホグワーツ特急へ駆け出した。

秘密の部屋

心がびよんびよん

キングス・クロス駅はホグワーツの生徒と迎えの保護者たちでごつた返していた。久々の再開を喜ぶ声で溢れている。

俺は勢いよく首を振って見回していた。まだ見ぬ里親を探すためだ。

ミカエラはもぐもぐとカエルチョコレートを食べている。おそろく俺の見舞いの品の1つだろう。余ってるからじゃんじやん食べて欲しい。

一緒に汽車を降りたネビルが口を開いた。

「誰がジューダスの里親になるんだろうね？」

「うーん……案外スネイプ先生かもな」

「僕だったら生きていけないよ……」

「話聞く限りネビルのばあちゃんも大概だと思う」

マクゴナガル先生からお預けを喰らってから今まで、俺の心臓は期待と不安でバクバクだ。

口をチョコまみれにしたミカエラが、あつけらかなと言った。

「里親なんて誰でもいいだろ。気にするだけ無駄だ無駄」

いや気にするよ。ミカエラのどこか達観したような考え方は、俺には真似できそうにない。

「ばあちゃんだ！」

一足先に家族を見つけたネビルが駆け出した。ただ慌てて、ペットにしてカエルのトレバーを落つことすのは実にネビルらしい。

魔法使いたちに踏み潰される前に、俺はトレバーを救出した。逃げないようにはっきりとポケットに押し込む。

ネビルはハゲタカの剥製に乗つけた帽子のお婆さんと二言三言話した。あれがネビルのお婆あちゃんだろうか。すると、エメラルドグリーンのおローブを纏ったお婆さんが、真っ直ぐこちらに歩いてきた。「あなたがジューダス・フォーリーさんですね？ わたくしはネビル

の祖母のオーガスタ・ロングボトムです」

オーガスタさんから求められた握手に応じる。多数のシワが刻まれた手は、見た目に反して力強い。

「はじめまして、ミセス・ロングボトム。俺はジューダス・ビショップです」

「おや、失礼しました。わたくしとしたことが、少々早とちりしていたようです」

「お気になさらないください。いつもネビル……君のお世話になっていますし」

「お世話になっているのはこの子の方です！……ネビル、そういえばトレバーを見ませんか。どうしたのですか？」

ネビルは慌ただしくローブをまさぐり、みるみる顔を青くしていた。目が雄弁に語っている『ばあちゃんに殺される！』と。

見かねて俺はポケットからトレバーを取り出した。

「ネビル、落とし物だよ」

「ありがとうジューダス！ 本当に、本当に助かったよ……」

救世主もかくやといった眼差しを向けられる。しかしネビルは気づいていない、背後のミセス・ロングボトムが魔王のオーラを発していることに。しわくちやの手が、ネビルの丸い頭を鷲掴みにした。

「ロングボトム家としての自覚が足りないようですね。家に帰ったら覚悟しておきなさい」

ネビル、圧倒的涙目。だが俺にはどうすることもできない。強く生きろ。

オーガスタさんは俺の方に向き直ると、柔らかな微笑みを浮かべた。

「ジューダスさん、あなたに里親が見つかったらしいですね」

「ええ、ですがなぜそれを……？」

「実はその方とわたくしは旧知の仲でしてね。連れてくるように頼まれたのです」

矢庭に鼓動が速まる。油断していた所に言われたので、もろに緊張感が高まってしまった。

ミカエラはカエルチョコレートの特録である魔法使いカードの束

を、一瞬にして灰燼に帰した。妙に静かだと思っていたら、ずっとチョコを食べていたようだ。

「もう食い終わっちゃった。新しいのくれ」

ないよ。ミカエラにとつて、今の時間は退屈以外の何物でもなかったらしい。というか、ハロウィーンの時もカボチャジュースをがぶ飲みしていたし、甘党なのかもしれない。

オーガスタさんは俺の肩に手を置く。もう片方の手は、ネビルの肩に置かれていた。

「今から姿現しをします。少し衝撃がありますが、じつとしていてください。ネビルは言いつけを守らずにバラかけました」

「え？　ちよつと待つ……」

バチン！　という音と共に、俺は洗濯機の中に放り込まれたが如き感覚に襲われた。

次の瞬間には、俺たちは大きな門の前に立っていた。内臓をかき回されたみたいな不快感だ。せり上がってくる胃酸を飲み下す。

シャキツと背筋を伸ばしているオーガスタさんを挟んだ所では、ネビルが口元を抑えて這いつくばっていた。ライフはゼロのようだ。

ミカエラは光の速さで俺にくっついていたらしく、今は吐きそうなネビルを眺めている。

「さあシヤンとしなさいネビル。先方は首を長くして待っていますよ」

「うえつぷ、姿現しは嫌いだよ」

「俺も……」

超三次元移動をやったのけた直後でも、ミセス・ロングボトムは余裕綽々の様子だ。三半規管どうなってるの？

俺たちがヨロヨロと立ち上がると、鉄の門が独りでに開いた。その先には、無駄に長い玄関までの石畳が続いている。

俺は先行するオーガスタさんについていった。

「中々の豪邸だなア。ジューダス？」

「俺は一般家庭でも良かったんだけど……」

キリキリと胃が痛む。マナーに厳しい家だったらどうしよう。小市民の俺は雰囲気だけで気圧されていた。

そんな俺を見て、ミカエラがオレンジの目を細めた。

「まア、新しい友達でも出来んじゃねえか？ 知らんけど」

それもそうだな。こんなに大きな屋敷だ。使用人が1ダース単位でいても、なんらおかしくない。いっちょ本気出すか。

ふと屋敷の方から視線を感じる。顔を上げると、灰色髪の男の子が俺を見ていた。しかし目が合うと、サツと引っ込んでしまう。これは距離の詰め甲斐がありそうだ。

俺たちが玄関に辿り着くと、オーガスタさんが声を張り上げて言った。

「ヘクター！ あなたの孫を連れてきましたよ！」

時を待たずして重厚なドアが開かれた。中から糸目のゴブリンのような人が現れる。

「お待ちしておりましたオーガスタ様。お荷物はこのセバスめがお持ちいたします」

セバスと名乗った小人はオーガスタさんから荷物を受け取ると、先導して歩いていった。俺たちも後に続く。

俺の頭上でミカエラが言った。

「ゴイツは屋敷しもべ妖精だ。ア、間違ってもオレとひと括りにするなよ」

小さく首肯する。俺はミカエラが何かと一緒にされると嫌がるのを知っていた。

ネビルは豪華な調度品を見て、頻りに感嘆していた。血相を変えてオーガスタがネビルと調度品を引き離す。

「すぐにドジをするのだから、近づくのはおよしなさい！」

「わ、わかったよ。ばあちゃん」

「ここにございます」

どうやら目的地に到着したらしい。セバスは丁寧にお辞儀すると、木製の扉を開いた。

そこには、大広間とでも言うべき空間が広がっていた。長大な窓か

ら差し込む陽の光、バカ長いテーブル。まるで貴族が優雅に朝食を摂るのに使う部屋のようだ。そして端から端、10メートルは離れているであろうテーブルの先に座っていたのは――

「おう、よう来たよう来た。僕はヘクター・フォーリー2世だ。お前さんがジューダスか？」

――ウサギだ。真っ白くてふわふわした毛玉が、我が物顔で無駄に背もたれの高い椅子に座っていた。もちろんそのままではテーブルの下に隠れてしまうので、椅子にはクッションが積み上げられている。

情報量の暴力で思考が停止している所に、オーガスタさんがさらなる爆弾を投下した。

「ヘクター！ わたくしに何か言うことがあるのでは？」

「おおすまんすまん、感謝するぞオーガスタ。何分この体では碌に出歩けんのでな」

俺の里親がウサギだと確定した瞬間だった。多分今の俺は遠い目をしているだろう。

因みにミカエラはさつきから爆笑していた。

「クハハハ！ ウサギ、ウサギが里親！ 傑作だなア！」

呆然とウサギとお婆さんの会話を眺めていると、いつの間にか俺とネビルは席につかされていた。真っ白な毛玉が、渋いダンディな声を上げる。見た目とのギャップが酷い。

「セバアアアアアアアス！ 夕食をお出ししなさい！」

「御意」

あつという間にディナーが始まった。たくさんの種類のご馳走が並べられる。オーガスタさんは旨そうにファイア・ウイスキーを呑んでいた。ウサギはみずみずしい草を食んでいる。

ネビルは苦笑いしながら、ローストビーフを口に運んだ。

「ジューダスのお祖父ちゃんって、とつても……特徴的だね」

「あ、あはははは……」

先程から孫だの祖父だのと言われるが、俺は里親に会いに来たんじゃなかったのか？ 疑問をこぼす。

「あの、ヘクターさん。あなたは俺の里親ですよね？」

「厳密には違う。お前さんの母、フィデス・フォーリーは俺の娘だからな。クリスマスプレゼントを贈っただろう？」

「プレゼント？ ウサギから貰った覚えは……。そこで俺は思い出した。」

「もしかしてこの写真ですか!?!」

Fの紋章で封された手紙から写真を取り出す。俺の両親や親戚一同の背景は、よく見るとこの屋敷だった。

「そうだ。その写真はフィデスとダニエルの結婚式に撮ったものだな」

感慨深く俺は写真を見つめる。中の人物は手を振っていたり、大笑いしていたりと様々だった。

「あれ？ ヘクターさんは写っていないんですか？」

「ヘクターはこのしかめっ面の男ですよ」

オーガスタさんがささず教えてくれた。しかめっ面の男というと、大量の勲章をつけた軍服の人だろうか？

「ええ!?! 最初からウサギじゃなかったの!?!」

「当たり前だ! 俺のこの姿は、死喰い人に呪われたせいだからな!」
「ンな呪いあつたかア？」

俺は自分にウサギの血が流れていないことに、ちよつぴり安堵したのだった。

ネビルとオーガスタさんは、夕食を食べ終わると帰っていった。テーブルに残された食器類も全部セバスによって片付けられ、元の状態に戻っている。

ミカエラは眠いのか、うつらうつらと船を漕いでいた。空中で。相変わらずクッションの上に鎮座しているヘクターが、口火を切った。

「突然のことで慣れないだろうが、やっと合流できた血族だ。我が家だと思つて寛いで欲しい」

「1つ質問です。なぜ今なんですか？ 孤児院の時に引き取つても良

「かつたんじゃ？」

「……見つけれなかったのだ」

「え？」

暫時の沈黙の後、重々しく、ウサギは口を開いた。

「お前さんがホグワーツに入学するまで、その孤児院には強力な探知不可魔法がかけられていたようだ。しかも、現在その孤児院は存在していない。イギリス中のどこにもな」

背筋が凍った。今晚ちゃんと寝れるかな。

はじめて？ のお使い

明くる日の朝、よく眠れなかった俺は、目をこすりながらフォーリー邸を歩いていった。ミカエラは俺よりも早く起きたようで、散歩にでも出かけたのかいない。

そういえば、昨日見かけた男の子のことを聞きそびれていた。まあ自分が10年住んでいた場所が蒸発したのだから無理もないか。

なんてことを考えていると、曲がり角に灰色の頭が引っ込んでいくのが視界に入った。丁度いい、話しかけてみるか。

速歩きで追いかけると、男の子は目を見開いて駆けていった。何だ何だ、鬼ごっこか？

森を思わせる緑目の男の子と、鬼ごっこに興じる。男の子はどんどん屋敷の奥に逃げ込んでいった。やがて、階段を下り地下室に入られてしまう。

「ここつて入っても大丈夫だよな……？」

少し躊躇ったが、別に鍵もかかっていないので普通に扉を開けて入った。中は薄暗く、ツンとした薬品の匂いが漂っている。棚には紫色の花や月長石などが所狭しと保管されていた。

男の子は白衣を着た少女の影に隠れていた。少女の、彼と同じ深緑の目は、机上のフラスコに向いている。

「グリム、今は実験中なので用事があるなら後にしてください」

「ね、姉ちゃん、なんか変なのいる……」

グリムと呼ばれた男の子に指を差される。俺は振り返ってみるが、誰もいなかった。

「変なのとはなんだ、変なのとは。俺はホグワーツ1……ではないけど、13番目くらいには常識人だぞ」

少女の肩口で切り揃えられた灰髪が揺れる。男の子の姉と思われる少女は、初めて俺を認識したかのように眉をひそめた。さりげなくグリムを背に庇っている。

「不法侵入してくせにどの口が言ってるんですか。今度は誰ですか？ 魔法生物規制管理部の差金ですか？ それともグレイバックの手

先？」

「どつちでもない。俺はジューダス・ビショップ・フォーリー、ヘクターさんの孫だ」

姉弟は揃ってポカンと唇で円を描いた。訝しげにジロジロと眺め回される。半信半疑といった様子だ。

少女のかけた眼鏡が一瞬だけ光を反射した。

「大叔父さんからは何も聞いていませんが」

「それは知らないよ。なんなら今から訊きに行く？ ついでに朝飯も食べない？ 俺お腹空いてるんだよね」

2人は毒気を抜かれたように顔を見合わせる。少女がため息をついて、眼鏡を外した。

「……それでは食堂に行きましようか」

広間に着くと、人参のソテーを美味しそうに頬張るウサギがいた。後ろには従者のごとく糸目のセバスが控えている。

俺たちが各々の席に座る。少女は開口一番に言った。

「大叔父さん、この方がフォーリー家の直系だというのは本当ですか？」

「なんだ、もうジューダスと会ったのかレイン。そうだぞ」

「ほ、本当なんですネ……!?!」

報連相がしつかりしていなかったらしい。割と本気で少女は怒っているようだったが、ヘクターは愉快そうに耳をピクピクと動かすだけだ。赤い目が俺を捉える。

「遅くなったが紹介しよう。この几帳面なのがレイン、儂に似て寡黙なのがグリムだ。この2人は儂の妹の孫でな、ジューダスとは、ほんとに当たる」

「よろしくな、レイン、グリム」

決まった……! 挨拶は先手必勝、これはもう不変の真理だ。よつて今ここに、俺と2人が仲良くなることが決定した。

しかし予想に反して、2人の返事は色良いものではなかった。グリムは口をつぐみ、レインに至っては怒髪天を衝く勢いで俺とヘクター

を睨んでいる。

「み、認めません！　こんな……こんなぼつと出の男！　私は家族だと認めませんよ！」

テールを殴打して立ち上がると、走って去ってしまった。グリムはレインが去っていった出口とヘクターを交互に見て、オロオロしている。レインと入れ違いでミカエラが入ってきた。

「なんだアあの女。朝っぱらからブチギレとか頭ヴォルデモートかよ」

ヴォルデモート呼ばわりは言い過ぎでは？　しかしそう簡単に俺のこを受け入れてくれるとは思っていない。焦らず行こうじゃないか。

ヘクターが申し訳無さそうに耳を垂れ下げて言った。

「あの娘も色々あつてな、いつかわだかまりが溶けると良いのだが」

「ご心配なく、俺とレインはもうズツ友ですよ。なー、グリムう？」

「……絶対違う」

全く、グリムはまだまだわかってないな。あれはレインのちよつとしたじゃれ合いだということは明々白々だろうに。

ミカエラが神速で俺の皿からソーセージをつまみ食いだした。

「節操なさすぎだろ。その解釈の仕方は神の子もびっくりだぞ」

俺はミカエラにだけ聞こえる音量で、腹話術を行使した。教わって良かった大道芸。

『そんなに褒めてもジューダスポイントしか出てこないよ？』

「褒めてねえよ！　それにジューカスポイントなんかいらん！」

『照れ隠しに暴言を吐いちやうようなミカエラには、100JP（ジューダスポイント）を進呈しよう』

「そんなくだらねえことに腹話術を使うな！」

素直じゃない心友は。因みに今のミカエラの所持ポイントは総額で810563JPだ。これは長者番付で1位になる。2番目がマルフォイで1065JPだから、その差は歴然である。

視線を感じて前方を見ると、ヘクターが賢者の石のような目を細めて俺を眺めていた。謎に哀愁漂っている。

「俺の顔になんかついてますか？」

「ッ！ ああすまない、その度量の広さがフィデスに瓜二つだったの
でな」

「単に頭が逝っちゃってるだけだろ」

ミカエラの茶化しは聞こえなかったことにしておこう。この部屋
に狂人はいない。

ずっと影に徹していた屋敷しもべ妖精のセバスが時計を確認した。

「ヘクター様、そろそろオーガスタ様がいらっしゃる時刻でございます
す」

「おお、そうだな。ジューダス、ダイアゴン横丁への引率はオーガスタ
に頼んである。レインは今年ホグワーツに入学するから、その買い出
しを手伝ってやってくれ」

「次は……杖だな」

俺はレインから『マダム・マルキンの洋装店』の紙袋を受け取る。俺
たちは来学年の準備のために、ダイアゴン横丁に訪れていた。大体の
物は買い終わり、残す所後僅かだ。

あと、一緒に来ていたネビルとオーガスタは、トレバー捜索のため
に駆り出されている。逃亡プロのトレバーなら、アズカバン脱獄も夢
ではないのかもしれない。

「それぐらい自分で持てます」

深緑の瞳で軽く俺を睨みながら、レインは言った。

「大鍋一つで腕プルプルさせてるレインが持つ？ 無理でしょ」

レインはあまりにも非力だった。今も背負った大鍋に潰されかけ
ている。顔を火照らせ、歯を食いしばっている姿は、何よりも雄弁に
語っていた。限界だと。

「コイツもああ言ってるんだし、持ってやらなくても良いんじゃないやねえ
かア？」

『ミカエラ、俺はレインの兄貴分だ。助けてやらなくちゃいけない』

「あつそ、なら勝手に家族ごっこでもやってろよ」

何かが気に食わなかったのか、ミカエラはつむじを曲げて飛んで

いってしまった。人の機敏に超絶さとい俺をもってしても、たまにミカエラが何を考えてるのかわからない時がある。

歩きながら俺はレインに問うた。

「レインはあの地下室で何をしていたんだ？」

「あなたに話す義理はありません」

「あれって魔法薬だよ。入学前から調べできるなんて凄いな」

「……………」

「俺の恩師にスネイプ先生って人がいるんだけど、その人は魔法薬学の――

俺が一方的に話しかけて親睦を深めてるうちに、オリバンダーの店まで着いた。一年前と同じように入店する。

店内は変わらずにホコリ臭く、おびただしい数の箱が積まれている。

「いらっしやいませ」

薄暗がりから現れたオリバンダーの不意打ち挨拶。これは何度食らっても慣れない、俺はそう確信した。レインも小さな悲鳴を漏らした。

「これはこれは、ジューダスさんではありませんか。ええ、覚えておりますとも、あなたの杖は……………」

フリーズするオリバンダー。限界まで目を見開き、虚空を凝視している。額から、一筋の汗が流れた。

「し、信じられん……………!? 儂が、儂が売った杖を忘れるとは……………! 嗚呼、なんとということじゃ……………」

俺は杖を取り出す。漆で黒く塗られた、美しい杖。確かミカエラに作って貰ったんだっけ。

オリバンダーは俺の持っている杖を見咎めると、頬を紅潮させた。「ジューダスさん! その杖! あなたの杖を見させてはいただけぬか!？」

「ええ……………」

「今日はそのお嬢さんの杖を買いに来たのじゃろう? しかし杖にもメンテナンスが必要じゃ。サービスで診てあげましょうぞ。騙され

たと思って、さあ」

オリバンダーのテンションが怖い。職人というものはやっぱりどこかぶっ飛んでいる。

俺が杖を渡すと、オリバンダーは杖を目元に持っていき、丹念に眺めた。グレーの目は童心に帰ったかのように輝いている。

「ふむふむ……19センチ、使われているのは月桂樹じゃな。この荒々しさと繊細さが共存してる感触、芯は……ん？」

オリバンダーが杖を振ろうとしたその時、杖先から漆黒と橙の靄が吹き出した。靄は雨雲のごとくオリバンダーの頭上に展開すると、禍々しい色の雷を落とす。

「じゃあああああ!？」

店中にオリバンダーの絶叫が木霊した。倒れ伏したオリバンダーは、全身黒焦げにも関わらず、スクッと立ち上がる。

「いやあ興奮のあまりうっかりしておった。月桂樹の杖は主人以外が使おうとすると、こうして雷を落とす性質があるのじゃ。しかも、主人が墮落した場合は、その矛先は他ならぬ主人に向く。気をつけることじゃな」

ポリポリと頭を搔いて、俺に杖を返却するオリバンダー。体を張ってレクチャーするとは、杖職人の鑑である。

レインが引き気味に口を開いた。

「なんだか私、この店不安になってきました。グレゴロビッチに変えませんか？」

「大丈夫、この人杖に関しては超一流だから」

レインの杖は一発で決まった。オリバンダー風に言えば『リンゴの木と不死鳥の羽、24センチ。一途で純情』である。村娘かよ。

そして俺たちは『フローリッシュ・アンド・ブロッツ書店』に来ていた。中は大勢の魔法使いで占領されている。全体的に魔女率が高い気がする。

レインは幽鬼のように魔法薬学の本棚へ行ってしまった。会計のときに合流するか。

人垣の外で腕組みをしているミカエラを見つけた俺は、そちらへ駆け寄った。小声で話しかける。

「ミカエラ、これなんかのイベント？」

「んア？　アア、ジューダスか。あの筋力零娘はどうした？」

「あつちで立ち読みしてるよ」

「ふーん、ヘエー。……それでイベントだったな、開かれてるぞ。ロックハートを讚えようの会だ」

ロックハート？　あのクリスマスプレゼントをくれたロックハート？　俺はよく見ようと背伸びをする。

人混みの中心で爽やかに笑っている男が見える。『私はマジックだ』を携えているので、ロックハートだろう。そしてその隣には……ハリー・ポッター？

ロックハートは、ハリーと握手している所を記者に撮らせていた。著作を全部押し付けられて、ハリーは迷惑そうだ。

「君がミスタージューダス・フォーリーですね？」

唐突に背後から声をかけられ、俺は振り返った。そこにはドラコ・マルフォイトと、プラチナブロンドで青白い顔の男が立っていた。男の手には頂点に蛇の意匠をあしらった杖がある。

「ち、父上、こいつに構う必要は……」

「こいつ？　ドラコ、口を慎みなさい。フォーリー家は聖28一族に名を連ねる名門。敬意を払う価値がある」

ドラコはギョツとした目を俺に向けた。俺が純血だなんて夢にも思わなかっただろう？　俺もだ。

ここで1つ俺のポリシーを紹介しよう。友情の輪を広げるためなら、なんでも利用する。自らの血統も例外ではない。

「はい、ドラコ君とは親しくさせて貰っています！」

俺はドラコと肩を組む。ドラコは苦虫でうがいしたような顔をした。この恥ずかしがりやめ。

プラチナブロンドの男が全然面白くなさそうに笑う。

「ドラコの父としても、ありがたい限りだ。息子をよろしく頼みたい」
ドラコは嬉しさのあまり表情が抜け落ちていた。友達冥利に尽き

るぜ。

しかし少し疑問が残る。

「あの、なぜ俺がフォーリー家だとわかったんですか？」

「マルフォイの当主ともなると、実に様々な情報が入ってくる。特に人間関係は慎重に選びたまえよ」

マルフォイ。パパはローブを翻して去っていった。ドラコが乱暴に俺の腕を振り解いて、ついていく。ミカエラが耳に小指を突っ込んで掻きながら言った。

「魔法界は狭えからなア。限界集落みたいなもんだ。さては釘刺して来やがったなアイツ」

何に釘を刺しているのかはさっぱりだが、一つ学べたことがある。純血主義は、俺の友情主義と相反しているということだ。

その後、ロンの妹であるジネブラ・ウィーズリーと話していたレインを回収した。ここから小一時間に渡るオーガスタ搜索の旅が始まるとは、この時の俺は予想だにしていなかったのだった。

絶体絶命！ ハリー退学の危機！ 一方その頃
ジューダスさんは

フォーリー邸での夏休みは瞬く間に過ぎ去っていった。俺はミカエラと屋敷を探検したり、魔法薬を醸造しているレインに話しかけて怒られたり、グリムに口笛を教えたりした。

ネビルからの手紙によると、オーガスタはネビルとトレバーに永久粘着呪文をかける寸前まで怒り狂っていたようだった。それをどうやって切り抜けたのかは永遠の謎である。

そんなこんなで、ホグワーツ魔法魔術学校に発つ日がやって来た。ホグワーツ特急の出発時刻前に駅につくことができ、俺は内心安堵していた。去年の二の舞いは避けたい。

「ホグワーツに着いたらふくろう便を寄越すのだぞ」

グリムのポケットから顔を覗かせたウサギが言う。レインやセバスに止められたのだが、ヘクターは無理を言ってみ送りに来ていた。「俺ふくろう持ってないんですが」

「レインのチョコミントを借りれば良からう」

ウサギが見やった先には、若干緊張した面持ちのレインが立っていた。押しているカートの上に、鳥類の入った籠が置かれている。濡羽色の体に、シャープなフォルム。どこからどう見てもカラスだった。

「これカラスだよね？ ふくろうじゃないよね？」

憤慨してレインが口を開いた。

「チョコミントはふくろうです。だから、誰がなんと言おうがふくろうなんです」

「暴論過ぎる」

A || A理論はやめて欲しい。普段はIQ高めなんだから尚更だ。

ミカエラは空中で腰をかがめて、カラスを見下しながら言った。

「チョコミントアイス食ってるようなやつは、蛙チョコと冷やした歯磨き粉でも食ってれば良いのに」

全チョコミントアイス好きを敵に回すような発言をするんじゃない

い。聞こえてるのは俺だけなのが救いか。

ホグワーツ特急の汽笛が鳴る。もう時間のようだ。俺たちはホームと汽車の間の、数センチの溝を越え汽車に乗り込む。

ウキウキと心を踊らせつつ、俺は通路を歩く。逐一コンパートメントを覗き込んでいると、何者かに弱い力で引つ張られた。レインが俺をトイレに連れ込み、下から睨めつける。

「何しちゃってるんです!?!」

「挨拶」

「知らない人のコンパートメントを笑いながら凝視して、目があつたら笑みを深めることが!?! 控えめに言って頭大丈夫ですか!?!」

「大丈夫だ、問題ない。あれやると俺のこと覚えててくれるんだよね」
「悪い意味でな」

ミカエラがウオツシユレットのボタンを押しながら言った。駆動音が鳴った後に、勢いよく温水が飛び出す。水は放物線を描いてレインにかかった。

「キヤツ!?! ちよつ、何ですか急に! 止めてください!」

俺はポチツとウオツシユレットを停止させた。非難がましくミカエラを見る。

ミカエラは悪びれずに肩をすくめ、魔法でトイレトペーパーの端を隠蔽した。いたずらにしては凶悪過ぎる。

「……………を貶して良いのはオレだけだ」

トイレを貶す? 用もないのに神聖なるトイレに入ることは、TOILETに対する冒瀆だとも?!

「あーもう、全身ビショビショです。何なんですかこの機械!」

「最近マグルが発明したウオツシユレットだな。ホグワーツ特急にも導入されたのか。誤作動に関しては……………、故障でもしてたんじやないか?」

「導入してすぐに故障なんてとんだ欠陥品ですね! ……はあー、入学式までに乾くといんですけど」

しょんぼりと項垂れるレイン。入学前にびしょ濡れとは、心中お察しである。後でミカエラにはきつちり問いたださねばなるまい。

しっかし、このびしょ濡レインをどうしたものか。ミカエラは何もする気はないようだし、生憎と俺も乾かす手段がない。

その時、ガチャリとドアが開いた。ハーマイオニーが、一步目で俺を認識し、二歩目でずぶ濡れのレインを見やり、三歩目で杖を抜いた。「ジューダス、何か弁解はあるかしら？」

「待ってくれ！ 俺は無実オブ無罪だ！ だからインセンディオはやめてくれ！」

「いきなり燃やしはしないわ。私、去年で学習したの。コミュニケーションは大事だつて」

じゃあなんでにじり寄って来てるんですかね。状況証拠的に俺が黒なのはわかるんですけども。

だが意外にも、ハーマイオニーを止めたのはレインだった。

「待ってください！ 全てはこの『うおっしゅれつと』が悪いんです！」

「ウオツシュレット？」

「このウオツシュレットがさ、そのー……壊れていて、突然吹き出したんだ」

「本当なの？」

コクリとレインが頷くと、ようやくハーマイオニーは杖を下ろした。

「疑って悪かったわ。てつきりあなたが……新生生に、友達教の洗礼を受けさせているのかと」

「ミカエラといい、何でみんな俺がそんな素敵宗教に入信してると思ってるんだ？」

「ミカエル？」

「ああいや、なんでもない」

ハーマイオニーは不思議そうに首をひねったが、話を続けた。やべえ、普段『ミカエラ』と言い過ぎて、うっかり口を滑らせてしまった。「友達教を言い出したのは私じゃないわ。シエーマスがふざけて言っていたのよ」

「何だつて！ シエーマスめ、知っているなら俺にも教えてくれれば

いいのに。春休み中に一所懸命探したけど、友達教見つけられなくて困ってたんだ」

「これはシェーマスの自業自得ね……」

そう言っただけで遠い目をしたハーマイオニーは、気を取り直すと、小さく複雑に杖を振る。温風がたちまちレインを乾かした。

「遅くなったけど、私はハーマイオニー・グレンジャー。ジューダスと同じグリフィンドールの2年生よ。あなたは……」

「か、乾かしていただきありがとうございます！ 私はレイン・フォーリーです！」

レインの目はキラキラと輝いていた。まるで憧れの先輩を見つけたように。おい、俺も一応先輩なんだけど？

「良かったなレイン！ これでなんの気兼ねもなく友達を作れるな！」

「その……この人はいつもこんな感じなんですか？」

「ええ、こんな感じよ……」

ハーマイオニーは静かに口を閉じた。狭い個室に何とも言えない空気が流れる。だがそれも仕方がないことだろう。こん（フレンドリーでファンタステイック）な感じなのだから。

ガタンゴトンと部屋が揺れ出す。汽車が出発したようだ。再びガラリと扉が開く。

「うえっ!? ……あ、ジューダスとレイン、それにハーマイオニーも！ こんな所で何してるの？」

ビビり散らかしていたのはネビルだった。トイレで待っていれば友達と会えるようだ。世紀の大発見である。

「ハリーとロンを探してあちこち回っていたら、ここで2人にあったのよ」

「ジューダスとレインが？ ハリーとマルフォイが仲良くゴブストーンをするぐらいありえないよ」

レインとネビルは、互いの祖父母が友人だったため、顔見知りだと聞いていた。当然、レインが俺にブチ切れて、その後ズツ友になったことも知っているに違いない。

レインはネビルを押しつけて個室を出た。

「ビショップ先輩が奇行をしていたので、止めていただけですよ」

寄稿をしていた？ 確かに俺は日刊預言者新聞に寄稿をしているけど、止められてないぞ？

レインがよくわからないことを言って去った後、俺、ネビル、ハーマイオニーはとりあえずコンパートメントに腰を落ち着けることにした。幸い、ネビルが荷物で席を取っていてくれたので、さまよわずに済んだ。

対面に座ったハーマイオニーが物憂げに、移りゆく外の景色を眺めている。

「ハリーとロン、大丈夫かしら」

ハーマイオニーによると、ハリーとロンはホグワーツ特急に乗っていないらしい。何かと巻き込まれ体質な2人だ。厄介事に関わっていないければ良いのだが。

ネビルが思い出し玉を弄びながら言う。当然、玉は赤く光っていた。

「もしかしたら箒で来てるのかなあ。ハリー、箒乗るの得意だし」
「確かに。でもそんなこと出来るのか？」

「ホグワーツの歴史によると、ホグワーツ特急が作られる前は箒やポットキー、魔法生物などで生徒は通っていたそうだわ。結構な危険も伴っていたみたいだけど、出来るっちゃ出来るわね」

今日もハーマイオニーは絶好調だった。

「蛙チョコレート、蛙チョコレートはいかが？ カボチャジュースに百味ビーンズもありますよ」

車内販売のお婆さんがカートを押して通りかかった。それをミカエラが物欲しげに見ている。隠しているようだがバレバレだ。

「すみません、蛙チョコレートを10個、カボチャジュースを2杯ください」

「7シツクル3クヌートになります」

金を払って商品を受け取る。それを見ていたネビルが首を傾げた。

「なんでカボチャジュースを2杯も買うの？」

「あはは、喉が乾いてさ」

後ろ手にカボチャジュースをミカエラに渡す。ミカエラはそっぽを向きながら言った。

「さ、サンキューな」

ハーマイオニーが財布をカバンから取り出した。大量の書物が垣間見える。

「私もカボチャジュースを1ついただくわ」

「僕もカボチャジュースと百味ビーンズ買おうかな」

「毎度ありがとうございます」

ミカエラはみな之死角を突いて、一息にカボチャジュースを飲み干した。透明人間はこういう所が不便なのかもしれない。いつか肉体を作ってあげたいものだ。

車内販売のお婆さんが、チラリと俺を見た気がした。しかしネビルののお釣りを計算していたし、見間違いか？

車窓を眺めながら、ミカエラがポツリと呟いた。

「ん？ 何だアレ、車かア？」

俺もミカエラに倣って外を見してみるが、緑豊かな山が連なっているだけだった。

汽車の旅を終えた俺たちは、ホグズミード駅からホグワーツまでは、空飛ぶ馬車で移動した。何も牽引するものがないのに、ひとりだけで動く姿はどことなく不気味だ。ネビルやハーマイオニーは逆に興奮していたが、俺がおかしいのだろうか？

ミカエラは魔法で雲をトロールの形にして遊んでいただけだった。

大広間の天井は満天の星が瞬き、帰ってきたホグワーツ生を照らしていた。俺はシェーマスとネビルの隣に座り、組分けが始まるまで待っている。

余談だが俺は先程シェーマスに『お友達教』について質問した。しかしいつの間にか『芸術的爆発』についての話題にすり替えられてしまい、めぼしい情報は入手できなかった。

やがてゾロゾロとイッチ年生たちが大広間に現れた。その表情は希望、不安、期待など様々だ。

去年と同じく、マクゴナガル先生がボロい三角帽子を台の上に置いた。固唾をのんで全員が帽子に注目する。静かだ。組分け帽子のシワが裂け、歌い出した。

「はじめまして 1年生

私はただの 組分け帽子

君が組分け望むなら 被ってみよう 恐れずに

グリフィンドールは勇者の寮

正義を助け 剛気を敬する

王道徹する 豪胆さ

レイブンクローは 賢者の寮

叡智を求め 才気を称える

学道究める 聡明さ

ハッフルパフは 聖者の寮

不屈を掲げ 活気を愛する

獣道臆さぬ 堅忍さ

スリザリンは 覇者の寮

勝利を図り 英気を歎じる

邪道も辞さぬ 狡猾さ

選り取り見取り 4つの寮

偉大な4人の 4つの寮

さあさあおいで 怖じけずに

内なる才覚 今ここに

「

帽子が歌い終わると、大広間は洪水のような拍手で満ち溢れた。俺も痛くなるくらい手を叩く。ミカエラがゆったりと王族のごとく拍手した。

「帽子って組分けの時以外はこの歌考えて過ごしてるんじゃないか？

夏のサンタクロースかよ」

「サンタももうちよつと他にやることあるんじゃない？」

組分け儀式はどんどん進んでいく。マクゴナガル先生が、アルファベット順に1年生たちを呼んでいた。

「クリービー・コリー——」グリフィンドール！」

Fawleyの番は間もなく回ってきた。

「フォーリー・レイン！」

灰色の髪がちよこちよこ前に出た。レインは緊張のあまり、同じ側の手足を同時に出して歩いている。クスクスと小さな笑いが起こった。

レインが組分け帽子をすっぽり被る。グリフィンドールに来れば嬉しいと俺は思った。帽子は何事か語りかけているようだった。

数十秒とも数分とも思える時間が過ぎて、帽子が叫んだ。

「レイブンクロー!!」

レイブンクローのテーブルから歓声が湧き上がった。レインは赤く頬を染めて、輪の中に入っていた。早速、パーバティ・パチルと会話を始めている。出だしは順調、お兄ちゃん嬉しいぞ。

「スミス・ザカリアス！」

「……………ハツフルパフ！」

「ラブグッド・ルーナ！」

「レイブンクロー！」

「ウィーズリー・ジネブラ！」

赤毛の女の子が進み出た。名前からして十中十々ロンの妹だろう。というか見たことある。

ネビルが小声で囁いてきた。

「ねえ、ハリーとロンってもう来てる？」

俺はグリフィンドールの長テーブルを見回した。しかし、くしゃくしゃの髪も、目立つ赤毛……は3人程見つけられたが、ロンも見つけられなかった。

「グリフィンドール!!」

組分け帽子の音が、どこか遠くで聞こえたような気がした。

混ぜるな危険

翌朝、俺は眠たい目を擦りながら大広間に来ていた。ハリーとロンのことが心配で寝れなくて、新しくDADAの先生になったロックハート先生の『私はマジックだ』を読んでいたからだ。内容は自伝で非常に面白く、一晩で読破してしまった。

一緒にいたミカエラはページで飽きてしまい、先に爆睡していた。なので俺とは対照的に、テンションが高い。今もファイルチに足を引っ掛けて遊んでいる。

『ヴァンパイアとバツチリ船旅』を読みながらトーストをかじっているハーマイオニーの隣に、俺は座った。

「おはよう、ハーマイオニー。ハリーたちがどうなったか知らない？」
「ええ知ってるわ。あそこにいるわよ」

パターンと本を閉じて、ハーマイオニーは少し離れた席を見やる。ちよつと不機嫌そうだ。

ハリーたちは居心地悪く朝食を食べている。

「一体何をやらかしたんだ？」

「ハリーとロンだったら……もう、信じられないわ！　空飛ぶ車に乗って、暴れ柳に激突したのよ！」

「クハハハ！　傑作だなア！」

傑作なのか……？　確かにミカエラ好みの出来事ではあるが。

その時、一斉にフクロウの一団が大広間に飛来した。ホグワーツの風物詩だ。

シエーマスの声が響き渡る。

「ロンに吼えメールが来たぞー！」

ロンが恐恐と手に持つのは赤い手紙。水を打ったような静けさの中で、ロンが封を切った。

次の瞬間、ロンのお母さんの雷が炸裂した。

最初の授業、薬草学に向かうべく、廊下を歩いている道中。俺は誰かに呼び止められた。

「ジューダス先輩！」

金髪の小柄な少年が駆け寄ってくる。首から大きなカメラを提げているのが印象的だ。

「僕、同じグリフィンドールのコリン・クリービーと言います。あなたがミスター・パツパラパーのジューダス先輩ですよ？」

「はじめましてコリン。ミスター・なんちゃーは知らんが、俺はジューダスだ」

「あれ？ 親切なスリザリンの先輩がこれを言うと言くと喜ぶと教えてくれたんですけど……」

「ああドラコか。あいつはかなりのブラックジョーク好きだからな」
「あの野郎殺す」

ミカエラが放った魔力が、空気を震わせた。コリンがビクツと飛び上がる。俺は浴び慣れているからなんともない。

「それで、俺に何か用でもあるのか？ 友達にならいつでも、なんなら今すぐなろう」

「あ、ありがとうございます……。実はですね『生き残った男の子』であり英雄、ハリー・ポッター先輩とお近付きになるにはどうしたらいいのか教えてほしいんです」

「俺に話しかけたみたいになれば良くないか？」
何を言ってるんだろうこの一年生は。別にマルフォイのようなシャイにも見えないし、訊くまでもないと思うのだが。人間、眼と眼があつたらみな兄弟だ。

「いや、無理ですよそんなの。畏れ多くて僕にはとても出来ないです」
「コリン、1つ良いことを教えよう。俺たちホモ・サピエンスは今から約20万年前にアフリカで誕生した訳だが、その時の先祖の血とミトコンドリアがみんなに受け継がれている。純血にもマグルにも、イギリス人にも日本人にも、当然コリンにも。あのハリー・ポッターでさえもだ。そう考えたら、英雄が親戚の兄ちゃんぐらいに思えてくるんじゃないか？」

「確かに……!? 僕、なんだか勇気が湧いてきました！ いっぱい握手してもらって、家族の分までサイン入り写真もらって来ます！」

「おう！ その意気だ！」

「オレは今、ヤバい奴がヤバい奴に触発される瞬間を見てしまったかもしれない……」

コリンは元気に手を振って駆けていった。もうすぐ授業が始まるが、大丈夫だろうか？

俺は再び歩き出す。出口付近の辺りでレインが、教科書を抱えてキョロキョロしていた。レイブクローの一年生も一人一緒だ。

「ようレイン、昨日ぶり」

「げっ、あなたですか」

あからさまに嫌そうな顔をされた。全く、これだからツンデレは。もっと素直になろう？

隣の女生徒がのんびりと言った。

「レイン、この人と知り合いなの？」

「知り合いと言いますか、親戚と言いますか……」

「へえー、いいなあー。私一人っ子だからちよつと羨ましいかも」

「ルーナはこの人の本性を知らないからそう言えるんです！」

ルーナと呼ばれた少女が、俺に手を差し出す。俺は握手に答えた。

この子とも仲良くなれそうだ。

「私はルーナ・ラブグッド。よろしく」

「ジュードス・ビショップだ。レインは恥ずかしがり屋だけど、仲良くしてやってくれ」

「勝手に兄貴面しないでくださいー！」

ルーナは俺の斜め上、ちよつとミカエラの辺りをじつと見た。ミカエラが少したじろぐ。

「な、何だア？ オレが見えるのか？」

「あんた、魔力制御出来ないタチ？」

「え？」

「しわしわ角スノーカックが怖がりそうな感じがするもん」

チラリとミカエラに目を向ける。イマイチよくわからない。

「ルーナはわかるのか？」

「なんとなくね」

「変な人同士で変な話始めないでください！ 純粹に怖いです！」
レインが会話をぶった切る。時計を一瞥して、顔を青ざめさせた。
「私たち、魔法薬学の教室がわからなくて困っていたんです。助けてください」
「オフコースだ！ 二人ともついてきて！」
「おい、アホジューダス！ オレたちも時間ないだろ！」
「可愛い後輩のためだ！ 致し方なからう！」
『後輩が出来たらしたいことリスト』を埋める絶好のチャンス！
逃す訳にはいかない！

「ふいー。善行をした後は気分がいいねえ」

ポカポカと暖かい庭を歩く。なんとかレインたちは魔法薬学の教室に間に合うよう送り届けたが、当の俺は完全に遅刻だ。

「お人好しなものもいい加減にしるよ？ ただでさえ要介護者なんだからな、お前」

「まあまあ、スプラウト先生なら許してくれるでしょ」

「暴れ柳の養分にされそうになったら助けてやる」

ミカエラの中でスプラウト先生はどんな悪魔になっているのだろうか？ 賢者の石争奪戦の時に、スプラウト先生の仕掛けた罠に苦戦したのかもな。

「ジューダス、どこ行くんだ？ 今年から第三温室に変わったはずだぞ」

「ああ、ありがとうミカエラ。第一温室のままだと思っていたよ」

「つたく、しよーがねえ奴だな」

持つべきものはしっかり者のイマジナリーフレンドだな。俺はそう確信した。

「あれ？ もう授業は始まっているよ、どうしたんだい？」

第三温室の方向からロックハート教授が現れた。白い歯が目を浴びて光っている。

「すみません、後輩の——」

「ははあん！ さては私の本に影響されて、遅刻して目立とうとした

んだね！」

「いえ、あの——」

「確かに『トロールとのとろい旅』にヒーローは遅れてやってくるを書いてあるけれど、何も真似しなくても良いんだよ？ 私のようないヒーローになるには、焦らない精神力も重要さ」

「ジューダス以上に人の話聞かねえなコイツ。世界って広いんだな」
そんなことで世界の広さを感じないで欲しい。というか俺はSYOUTOKUTAIISHI並にコミュニケーション能力抜群だから。
ミカエラの理論は破綻してるから。

気持ちよくペラペラ語っていたロックハートは、俺の顔を見て固まった。目が点になっている。

「き、君、もしかしてジューダス君？」

「ええ、多分」

「会いたかったよジューダス君！ ああやつぱり！ その碧い瞳が先輩そっくりだ！」

何やら大盛りあがりのロックハート教授。俺の肩を掴んで凄い揺さぶってくる。首がガツクンガツクンして気持ち悪い。

「俺の親と知り合いだったんですか？」

「知り合いなんてチャチな関係じゃないよ！ フィデス先輩は私のは……」

「は？」

「初めて心から尊敬出来た人だよ！ 誰もが認めるレイブンクロー、いやさホグワーツ1の聖人さ！」

ロックハートはますます爽やか度合いを増していく。キラキラして目にも優しくない。

だが久しぶりに親の友人に会えたのは素直に嬉しい。見たところ悪い人でもなさそうだし。

「いい加減にしてくださいロックハート先生！ もう授業中です！」

温室からスプラウト先生がずんずんとやって来た。普段の温厚さは鳴りを潜めている。

ロックハートが慌てて口を開いた。

「それじゃあ『闇の魔術に対する防衛術』の教室でまた会おう！」

逃げるように、とうか実際逃げているのだろうか、ロックハートは去っていった。スプラウト先生が慈愛に満ちた目で、俺を見る。

「ビショップ、あなたも災難でしたね。ロックハート先生に捕まるなんて」

「あはははは………」

「さあ今日の授業はマンドレイクの苗の植え替えです。ロングボトムが首を長くして待っていますよ」

温室の中はグリフィンとハツフルパフの生徒でいっぱいだった。マンドレイクの鉢植えが乗った台の周りを、各々4人グループを作って取り囲んでいる。

俺はネビルのグループに加わった。他にはシエーマス・フィネガンとハツフルパフの生徒がいる。

ネビルが丸顔をほころばせた。

「遅かったじゃないジューダス。どうしたの？」

「ちよつと世界平和に貢献してた」

「さ、流石だね……」

スプラウト先生がネビルとハツフルパフの肩を軽く叩いた。

「ジューダスは後から来たので、事故が起きないようにようしつかり説明してくださいね。私は全体の監督をしなければいけませんから」

「はい、先生」

ハツフルパフ生の男の子に耳あてを渡される。俺が礼を言うと、彼はにっこりと笑った。

「アーニー・マクラミンです。君はお友達教教祖のジューダスでしょう？」

「なぜそれを？」

「爆発が得意なシエーマスが言ってたので」

「シエーマスウ？」

「事実だから良いじゃないかよ」

「事実無根なんだよなあ」

マジでこれの元凶誰なんだ？ 見つけたらギツタンギツタンに叩きのめして、友達になつてやる。

ミカエラが透明化させた耳あてをつける。

「マンドレイクは様々な身体変化系の呪いの対抗薬になるが、引っこ抜いた時の悲鳴を聞くと死ぬからな。これはまだ苗だから死にはしないが、ちゃんとつけとけよ」

「了解」

軍手もつけて準備完了。植え替え先の鉢をシェーマスとアーニーが構える。みんなで領き合い、俺とネビルはマンドレイクを土から引き抜いた。

次の瞬間、ネビルが気絶した。薬草学が得意なのとドジなのは、関係ないらしい。

変身学の授業では、ロンの杖がゼロハンテープでぐるぐる巻にされている以外は、概ね平穩に進んだ。どうやら杖を折ってしまったらしい。

ミカエラに直せないか聞くと、「作るのと直すのじゃ勝手が違い。産むのと蘇らせるぐらいにはな」と返された。俺は壊さないように気を付けよう。

昼食を終えて、ぶらぶらと歩いているとコリンを見つけた。柱の陰に隠れ、どこかをじっと見つめている。

こっそり隣に佇み、視線を追う。その先は中庭のハリーだった。

「コリン」

「わわっ!? ……なんだ、ジューダス先輩。驚かさないでください」

「サイン入りツーショットは貰えたか？」

「まだですけど……」

「そうだな。まずは俺がお手本を見せるか」

「まーた変なスイッチ入ったよ。オレは知らねえかな」

俺はコリンの手を引いてハリーの元へ歩く。ロンとハーマイオニーと談笑していたハリーが、こちらを見た。

「ハリー、今暇？」

「暇だけど、どうかした?」

「俺とツーショット撮ってくれ」

「ん?」

「俺とツーショット撮ってくれ、出来ればサイン入りで」

「いや聞こえてるよ!」

俺はハリーと肩を組むと、コリンに言った。

「よっしゃ撮ってくれ。はい、チーズタルト」

パシヤリとシャッター音が鳴り響く。コリンのインスタントカメラが火を噴いた。出てきた写真を持って、コリンが駆け寄る。

「撮れました!」

どれどれと写真を覗き込む。肩を組む俺とハリー、そして俺の右隣で腕を組んだミカエラ。いい写真だ。

「ナイスピクチャーだ! よし次はこのコリンと撮ってくれハリー!

サインはその後で頼む、マッキー借りてくるから」

「ちよつと待って! この女の子誰!」

「何言ってるんだ! 影の錯覚だろう!?! 世の心霊写真もそんなもんだ! それよりサイン入り写真を早くプリーズ!」

目にも留まらぬ速度で写真をしまう。ミカエラさんや、あんた写真に映るんかい!

「サイン!?! 誰がサイン入り写真を求めてるんだい!?!」

ロックハート教授、参戦。

あの後、サイン入り写真を茶化しに来たマルフォイや、サイン入り写真という言葉に誘蛾灯に集る蛾のように引き寄せられたロックハートにより、場は大いに掻き回された。

そのせいでコリンはサイン入り写真を手に入れられず、俺は怒り心頭だ。そのことを謝ると、コリンは「全然大丈夫ですよ師匠!」と言っていたが、無理しているに相違ない。

闇の魔術に対する防衛術はロックハートの個人テストで幕を開けた。ロックハートの好きな色や、作中での名言を答えるというものだ。満点はハーマイオニーただ一人で、俺は50点だった。『私はマ

ジツクだ』を読んでいたことが功を奏した。

そしてピクシー小妖精をみんなで捕獲しよう、という実技になったのだが……………。

「ペスキピクシペステルノミ！ ピクシー虫よ去れ！」

ご覧の有様である。大量のピクシー小妖精が無秩序に暴れ回り授業は崩壊だ。必死にロツクハートが呪文を唱えているが、あれなら殴る方が早そうだ。

引つかかれるロン、飛び交う教科書、シャンデリアに吊り下げられるネビル、奪われる俺の杖……………あ。

「死に晒せやクソ妖精——！」

闇の妖精の怒りが爆発した。

バカにつける薬は百薬の長しかない

あの昼下りから、コリンの成長は目覚ましいものがあつた。一步踏み出す勇気を得たコリンは、ことあるごとにハリーを写真に収めている。朝食、休み時間、クイディッチの練習中……。ハリーの時間割を教えてあげた甲斐がある。

俺がホクホク顔で夕食を食べていると、コリンがやって来た。

「師匠！ 今日もいっぱい写真撮ってきました！」

「流石だコリン！ おお！ このスニッチを取った瞬間の写真！ よく撮れてるじゃないか！」

毎日撮影健康生活をしているお陰か、コリンのシャッタースキルは右肩上がりだ。これにはハリー・ポッターもニッコリだろう。

ミカエラがプリンは飲み物と言わんばかりに、一口で食べた。

「もうお前らでハリー・ポッターファンクラブ作っちゃえよ！」

「それだ！」

勢いよく俺は立ち上がる。ミカエラとコリンが目をパチクリとしばたかさせた。

「どうしました師匠？」

「俺たちで、ハリー・ポッターファンクラブを作ろう！」

「良いですねそれ！」

「ア、アホ過ぎる……」

考えてみればおかしな話だ。なぜ『生き残った男の子』とあろう者が、ファンクラブの1つも持っていないんだ？ こんなことがあつて良いはずがない。

背後から肩に手を置かれる。振り返ると、そこにはチャーミングスマイル賞が。

「誰のファンクラブを作るって？」

「ハリー・ポッターです」

「んー？ 彼には早過ぎると思うよ。私のなら既にあるから、そこに入るの良い」

「俺とコリンはハリー・ポッターが良いんです！」

うんうんとコリンが頷く。ロックハートは芝居がかった動作で、顎に手を当てた。

「そういうことなら、私が顧問になろう。ホグワーツでクラブ活動がしたいなら必要だろうか？」

「良いんですか!？」

「有名人に二言はないよ。部室も私が用意するから、会員を集めておいてくれ。まあ、見つからないだろうけどね」

あっけらかんとロックハートは言った。そしてミカエラが食べようとしたさくらんぼをヒョイツと摘むと、悠々と去っていった。

俺はロックハートに呪いをかけようとするミカエラを宥めつつ、コリンに言う。

「明日はハロウィーンだ。ちようど良い、ドラゴンクラブに負けないぐらい勧誘しよう」

明けてハロウィーン。5時起きして朝食を済ませた俺は、早速大広間に来る生徒に勧誘していた。ミカエラはまだ空中で熟睡していたので置いてきた。

コリンは今頃グリフィンホール談話室で勧誘しているだろう。

俺は一人で歩いているルーナに声をかける。

「おはようルーナ! 良い朝だね!」

「おはようジューダス。今日も絶好調だね」

「それじゃあこの紙に名前を書いてくれ!」

「いいよ」

ルーナは羽ペンと羊皮紙にサラサラと記入した。俺にそれを返してから首をひねる。

「ハリー・ポッターファンクラブ入会届……?」

「おめでどうルーナ! これで会員ナンバー003は君のものだ!」

「いや、それは別に要らないんだけど……。なにこれ?」

「読んで字の如し、ハリー・ポッターのファンクラブだ」

「……まあ面白そうだしっか」

ちよろい、ちよろいぜルーナ。早くも会員をゲットだ。

ルーナは少し考え込む仕草を見ると、口を開いた。

「これの活動内容は何なの？」

「活動内容……!?!」

その時、俺の全身を衝撃が駆け抜けた。雷にでも打たれた気分だ。まさに盲点。レイブンクロー恐るべし。

「え、えーっと……クディッチでハリーを応援するとか……?」

「それっていつもやってることだよな?」

「ぐぬぬ……」

「他に活動がないならさ、ガルピング・プリンピー狩りもやろうよ」

「ガルピング・プリンピー?」

何だそれは。ガルつとでピングーなプリンPなのだろうか? ますます訳がわからなくなっただぞ?

俺が頭に疑問符を浮かべていると、ルーナが笑顔で語った。

「ガルピング・プリンピーは、空飛ぶ魔法生物なんだよ。ガーディールートで撃墜できるんだ」

「へえーそんな魔法生物がいるのか。因みにガーディールートって何?」

「ガーディールートはエシャロットに似た植物なの。ハーブティーにすると美味しいよ」

「知らなかったわー。ルーナは博識だな」

「全部お父さんに教えてもらったただだから、そんなんじゃないよ」
どうせ細かい活動なんて決めてないし、ここはガルピング・プリン

ピー狩りも追加しとくか。ガーディールートのお茶会も楽しそうだ。
「採用だ。ガルピング・プリンピー狩りも活動に組み込もう」

「やったー。それじゃあお父さんにガーディールート送ってもらう
ね」

「有能だ……! 果てしなく有能だぞルーナ……!」

これは300ジューダスポイントを贈呈しなくてはなるまい。ここに
来てダークホースの誕生だ。

「師匠ー! 一人確保してきましたー!」

我が弟子のコリンが帰ってきた。後ろに赤毛の女の子を連れてい

る。

「でかしたぞコリン！ 君は……ロンの妹のジニーじゃないか！」

「ハリー・ポッターファンクラブって言ったら一発で食いつきましたよ」

「それは言わない約束でしょ！ コリン！」

容赦なく鉄拳制裁されるコリン。弟子にちゃんと友達ができて師匠は嬉しいよ。

俺は手を叩いて3人の注目を集める。

「さて、自己紹介アンド活動内容の議論といこうか」

「——というわけで、ロックハート先生、部設立の認可と顧問就任よろしくお願いします」

雨雲で西日の差さない教室、俺と後輩3人はロックハートに部の活動内容を説明していた。議論が予想以上に白熱してしまい、こんな時間になってしまったのだ。

途中から一緒にいたミカエラは「テメエ、見ているな！」と意味深な言葉を残してどこかに行ってしまった。ハロウインパーティーまでには戻ってきて欲しい。

椅子に体を預けたロックハートが、目をもんだ。

「すまない、もう一回言ってくれるかな……？」

「ハリー・ポッターファンクラブ兼ガルピング・プリンピーハントクラブ兼生き残った男の子のプロマイドオークションクラブ兼コリンとハリーのトークショークラブくミラノ風美しい友情添えくの認可を——」

「一旦待とうか。なんでそんな闇鍋みたいなクラブになったんだい？」

『こいつです！』

俺たちは一斉に各々を指さした。俺はジニーを、ジニーはルーナを、ルーナはコリンを、コリンは俺を、という具合だ。

「まずオークションってなんだ！ 友情に金は必要ないだろ！」

「あたしん家は兄弟多すぎて家計が火の車なの！ ちよつとぐらい儲

けたって良いじゃない！ それよりガルピング・プリンピーって何よ！ 見たことも聞いたこともないわ！」

「ガルピング・プリンピーはいるモン。みんなで探したら楽しいよ。少なくともコリンとハリーのトークショーよりは確実にね」

「僕とハリーなら最高のトークショーにできるから！ とうか、師匠の似非イタリアンみたいな添え物こそ不要だと思いますけどね！」
ここに来て内輪揉め勃発である。ブレインストーミングの鉄則を遵守したのが間違いだったか。

俺たちは肩を怒らせて睨み合う。身じろぎでもしようものなら、刺されるかのような緊張感だ。そこへロックハートが、物怖じせずと言った。

「決まらないようならとりあえず『ロックハート教授のカッコ良さ研究クラブ』にしておくのは——」

『それはない』

「いやに息ピツタリじゃないか君たち！」

どさくさ紛れにクラブの私物化を図るロックハート。到底許される行いではない。

混迷を極める教室に現れたのは、意外な人物だった。扉が大きな音を立てて開く。

「勝手に人のファンクラブを作らないで貰えるかな！」

くしゃくしゃの髪に、稲妻型の傷跡。我らがハリー・ポッターだった。

結局、ハリーの一声によって、ファンクラブ設立は立ち消えとなった。非常に残念だ。ロックハートが代わりに自分のなら作っても良いと言ってくれたが、俺たちはその厚意を無下にすることで満場一致した。

そして現在、ハロウィーンパーティーは宴もたけなわだ。向こうではフレッドとジョージがパーシーの赤毛をアフロにして、爆笑の渦が巻き起こっている。もちろんパーシーが顔を真っ赤にして、ブチギレているのは言うまでもない。そろそろシエーマスが何かを爆発させ

る頃合いじゃないだろうか。

不意に灰色頭が出ていくのが目に入る。レインがボツチで大広間を後にした。どこか周囲を気にしている様子だ。孤独を感じたい年頃なのだろうか。

ミカエラが戻ってくるなり、カボチャジュースを飲み干した。祭りの騒ぎで、こちらを注目する人が誰もいないからこそ、できる荒業だ。「ミカエラ、遅かったね」

「近頃監視されてる感覚があつてな。鬱陶しいからとっ捕まえて絞つてやろうと思つたんだが、逃げられちまつた」

「そういうことなら、俺にも言ってくれても良かったんじゃない？俺たちは一蓮托生だろ？」

真つ直ぐにミカエラのオレンジの瞳を見つめる。溶けた鉄があつちこつちへ泳ぐ。

「いや、オレはお前を荒事に巻き込みたくないというか……」

「俺もミカエラが荒事に関わつて欲しくない」

ミカエラが顔を伏せて押し黙る。黒髪の奥の表情は伺えしれない。遠くでシェーマスがシャンデリアを爆発させる音が聞こえた。

「……………わかつた。ジューダスがそう言うなら——」

「ようジューダス！ ハロウィーン楽しんでるか？」

「一人でいるなんてもつたいないぜ！」

いつの間にかそばに来ていたフレッドとジョージが、肩を組んできた。手にはジョッキに注がれたビールを持っている。

「ビール!? なんでビール飲んでるの!?!」

「なんだ、バタービールを知らないのか？」

「ちよつとアルコールの入ってるホグワーツ生の嗜みだぜ」

並々とジョッキを満たす、黄金色の液体を渡される。シユワシユワと泡立っていて、なんだか美味しそうだ。恐る恐る一口飲む。

「何これ！ 美味しい！」

「だろ?」

「これを飲めば嫌なこともパーだ」

「かつたるいスネイプの魔法薬学のレポートも」

「間抜けなフィルチの罰則もな」

この世にこんな旨い液体があるなんて知らなかった。俺はグビグビとバタービールの、のどごしと甘味を堪能する。そんな俺たちのテーブルに影が差した。

「かつたるくて悪かったな」

「誰が間抜けだった？ ええ？」

眉間にしわを深く刻み込んだスネイプ先生と、肩に抜け毛の乗ったフィルチ管理人。まさかのご本人様登場である。

フレッドとジョージが悲鳴を上げて逃げ出す。

「ウワーツ！ 嫌われ者の2大巨頭が来たぞー！」

「ロックハートも加えて三銃士だ！」

「あつこら待て！」

フィルチがフレッドとジョージを追うべく走っていった。多分追いつけないだろう。

俺はそれを肴にバタービールを呷る。体がポカポカして、多幸感が溢れ出る。

「ああ、バタービールうめえ」

ぼんやりとした視界に、スネイプが2人映る。ダブルセブルスだ。

「ビシヨップ、貴様飲み過ぎではないか？」

「スネイプ先生え、いつから分身の術使えるようになったんれすかあ？」

ミカエラの呆れた声が聞こえる。それだけで耳が幸せになる。

「たった一杯でへべれけになってやがる……」

ガクガクと体を揺さぶられる。薬品みたいな匂いがするから、スネイプ先生か？ 頭に霧がかかったように、思考が鈍い。

「もうバタービールを飲むのはやめろ！ ファイネガン！ ロングボトム！ この飲んだくれを取り押さえろ！」

「そんな殺生なく！ 俺のバタービールれすよそれは！」

「ジューダスごめん！ 君のためなんだ！」

「スネイプ先生！ ジューダスを取り押さえたら評価に色つけてくださいね！」

「もう末法だ！　ここは地獄だ！　メシアなんていない！」

「何訳のわからんことを言っている！　大人しく医務室に運ばれたまえ！」

酒を寄越せ！　アルコール！　酒精！　ミカエラはどこ!?　友達だ！　神様！

あのことについては、一切記憶がない。しかしミカエラによれば、俺は随分と泥酔して暴れたようだった。鎮圧するのにかなり的人员が割かれたらしい。

そして、今後俺にはアルコールの入った飲料はおしなべて与えてはならないことになった。二日酔いで頭が痛いので、これは俺も大賛成だ。

あと、秘密の部屋が開かれたようだ。サラザール・スリザリンの作った隠し部屋で、『穢れた血』を抹殺する怪物がいるという。最初の犠牲者はファイルチの飼い猫のミセス・ノリス。今も俺の隣のベッドで石化している。気の毒に、退院したら見舞いのキャットフードを贈ってあげよう。

形状記憶メンタル

シーズン初のクイディッチ、グリフィンボール対スリザリンはグリフィンボールの勝利で終わった。それはめでたいことなのだが、ブラッジャーが狂っていたらしく、試合中ハリーを常に狙い続けていた。

そのせいでハリーは箒から墜落、骨折した。その上、骨折を直そうとしたロックハート教授が間違っつて骨を消してしまうというファインプレーで踏んだり蹴つたりである。

そして、夜の帳が降りた頃。俺はハリーのお見舞いに向かっている。新しく骨を作る時は大変な苦痛らしい。だから手土産に、俺はそれを耐える方法を図書室で調べた。コリンも来る予定だが、献上品のブドウを調達しているため、今はいない。

「秘密の部屋が開いてるんだから、こんな夜中に見舞わなくても良いんじゃないか？」

「ミカエラ、初日が一番大事なんだよ？ それにこの間の二日酔いの時も来てくれたから、行かないか？」

「お前なあ……」

それきり、ミカエラは口を閉ざした。仄暗い廊下で聞こえるのは、俺の靴音とどこかでピーブズが騒ぐ音だけだ。やがてコリンとの集合場所付近に差し掛かる。

「なあ、やっぱりやめねえ？ 猛烈に嫌な予感がする」

「何言ってるの、コリンに悪いよ」

しかし、ミカエラの言う通り嫌な感じだ。月が雲に隠されてしまったせいかもしれない。そう思いながら、俺は曲がり角を曲がる。

そこには、ブドウを一房持ったコリンが倒れていた。

「コリイイインッ！」

足をもつれさせながらコリンに駆け寄る。ひざまずいて揺さぶるが反応がない。その瞳は虚空を映している。その様は石化したミセス・ノリスのようで……。

「し、死んでる……!？」

「落ち着くのじゃジューダス。死んではおらぬよ」

知らぬ間にダンブルドア校長が隣で、膝をついていた。ミカエラがコリンの首からカメラを取り、中を開ける。モクモクと煙が上がった。

「ケホッ、ケホッ。ぶっ壊れてやがる」

「ふむ、『ふいるむ』が溶けてしまっているようじゃの」

プラスチックが溶けた不快な臭いが漂う。ダンブルドアはコリンの足を持つと、口を開いた。

「ジューダス、頭の方を持っておくれ。このまま床に寝かせるのはちと寒そうじゃ」

そこで俺は、自分がロザリオネックレスを握りしめていたことに気がついた。

コリン石像を医務室に運ぶと、顔を蒼白にしたマクゴナガル先生が走ってきた。数分間俺から事情聴取をすると、静かに言った。

「私が寮まで送ります。今日はもう寝なさい」

マクゴナガル先生は、夜間外出の減点を忘れるほどショックを受けているようだった。ハリーと話したかったが、わがままを言うのは忍びない。俺は首肯した。

とんぼ返りでもと来た道に戻る。マクゴナガル先生の後ろ姿をぼんやりと眺めていると、半透明の小男が現れた。

「死ーんじやった！ 死んじやった！ コリン・クリービーが死んじやった！ 次は誰かな！ 師匠かな！」

「失せなさいピーブズ！」

マクゴナガル先生が怒鳴る。ピーブズは食器を投げつけて、けたたましい音を鳴らした。マクゴナガル先生がそれを防ぐと、ピーブズは大笑いしながら飛び去った。

マクゴナガル先生が、自分に言い聞かせるように言った。

「気にすることはありませんよビショップ。ホグワーツには校長先生がいらっしゃるのですから。スリザリンの継承者の好きにはさせません」

その言葉を聞いても、俺は不安を拭うことができなかった。

寮の自室に着く。ネビルの小さな寝息が時折聞こえた。俺はベッドのカーテンを押し分け、布団に潜り込む。ミカエラはさっきから何も言わない。それがどうにも気にかかった。俺は小声で話しかける。

「ミカエラ、コリン大丈夫かなあ？」

「あれぐらいならマンドレイクの薬で治るだろ。心配することアねえよ」

「でも他の人達も襲われて薬が足りなくなったら？ もっと酷い襲われ方をしたら？ 俺はどうすれば良いの？」

不意に頭にひんやりとした感触がした。視線を上げると、ミカエラが顔を背けながら俺を撫でている。

「あ、安心しろ。お前はオレが守ってやるから。一蓮托生って言ったのはジューダスだろ？」

「……出来ればみんなも守って欲しいな」

「あーもうわかった！ 他の奴らも守ってやる！ だからそうビビるな！ らしくねえ！」

ミカエラなりに俺を元気づけようとしてくれているのだろうか。フツツと笑みが溢れる。

「何がおかしい!？」

「いや……ありがとうミカエラ」

一瞬、手の動きが止まったかと思えば、すぐに再開した。俺は優しく撫でられているのを感じながら、瞼を閉じた。

「良いってこった」

俺はオレが寝たのを確認して、雪のように白い髪から手を離した。すっかり安心した穏やかな表情で、すやすやと眠っている。

「さて、と」

おもむろに俺は振り返る。さっきからオレたちを盗み見ているクソネズミの方へと、オレは飛んだ。ネズミ——スキャバーズを魔法でつまみ上げる。スキャバーズは俺に気づいていないらしく、キーキー

と喚き散らして暴れた。

そのままの状態で談話室に入り、スキヤバースを放り投げる。スキヤバースは逃げようと駆け出したが、進路上に失神呪文を打ち込むと急停止した。

オレは自分のこめかみを人差し指で指し、呪文を唱える。

「レベリオ 現れよ」

スキヤバースが「キィ……」と息を飲んだ。その『人間らしい』反応をしている時点で、正体を自白したようなものだ。

「オレは姿を見せたんだ。テメエも見せるのが礼儀つてもんだろ？」

ネズミに向かって指を振る。たちまちネズミみたいなおっさんの出来上がりだ。しばし呆然としていたおっさんだったが、気がついたように土下座した。

「盗み見て悪かった。目障りなら失せる。だからどうか、どうか私をダンブルドアに突き出すのだけはやめてくれ……」

どこまでも無様な姿を見せるスキヤバース。はつきり言って拍子抜けだ。とてもアニメーガスという特異な能力を持っているとは思えない。

「スキヤバース。オレはお前が誰で、なぜネズミの振りをしているのかには興味かねえ。ただその能力は買っている」

途端にスキヤバースは媚びた笑みを浮かべた。コイツに組み分け帽子を被せたなら、間違いなく帽子は『アズカバン!』と叫ぶだろう。「私にできることならば何でもしよう。だから頼む、ダンブルドアだけはやめてくれ。アズカバンは嫌だ」

「それは結果次第だ。精々足掻け」

「そ、そんなあ……。せめて約束してくれ、アズカバンはノーだと」

「アズカバンアズカバンうっせーな! なんなら今すぐにもアズカバン送りにしてやろうか?」

苛立ちからか黒と橙の渦が漏れ、スキヤバースの脇を通り抜ける。スキヤバースが身を縮こまらせた。

「ヒイイイ! お許しく下さい、お許しく下さいミカエラ様……」

「チツ、オレが頼みたいのはたった1つだ」

「なんなりと」

オレは舌で唇を濡らす。談話室の暖炉の火が爆ぜた。

『スリザリンの継承者』を探し出せ」

呆然とスキヤバーズがオレを見る。鋭く睨むと、再度平伏した。

「なんだ、できねえのか？」

「断じてッ！ 断じてそのようなことはございませぬ！ 謹んでお受け致しますッ！」

スキヤバーズはそのまま土下座した、ゴキブリのような体勢で退出しようとする。オレはスキヤバーズを呼び止めた。

「おい」

「な、何でしょうか……？」

「オレから逃げられると思うなよ？」

「ままままさか、逃げるだなんて……。滅相もございませぬよ。ハハハ……」

スキヤバーズは引き攣った笑み見せ、ネズミに変身した。脱兎のごとく談話室を後にする。

油断ならない男だ。実際、スキヤバーズが隙を見せなければ、オレはアイツが人間だと気づけなかっただろう。

しかし、最近俺たちを監視しているのはスキヤバーズではない。スキヤバーズは俺に気づいていなかった。アー、面倒くせえ。

談話室の椅子に深々と座り、オレは独りごちる。

「まあ、継承者がウザいから探してるだけだけどな」

随分と奇妙な夢を見た気がする。ミカエラがロンのペットのスキヤバーズを、なぜだか知らないが脅迫してる夢だ。俺、疲れてるのかな。

チヨロチヨロと足元をスキヤバーズが通った。俺はしゃがんで話しかける。

「スキヤバーズが人な訳ないもんなー」

スキヤバーズが、そのずんぐりとした体型に似合わぬ飛び上がりを見せた。手足をバタつかせて駆けていく。

起きてきたネビルがギョツと目を丸くする。

「ジューダス、ネズミに話しかけてた？」

「そんな訳ないよ」

「だ、だよね……。医務室に連れていかなきゃいけないと思っちゃったよ」

「あはははは……」

もうスキヤバーズに話しかけるのはやめよう。俺は固く誓った。

グリフィンドール談話室に行くと、掲示板に人集りが出来ていた。何事かとミカエラと一緒に覗き込む。

「ディーン、この騒ぎは何？」

「先生方が『決闘クラブ』を開くらしい。最近、なにかと物騒だから行ってみようかな。ジューダスはどうする？」

俺はミカエラを一瞥して、口を開いた。

「俺は良いかな」

「どうして？」

「安全だからだよ」

「……………ああ、そういえばジューダスは去年クイレルと戦ったもん。そりゃあスリザリンの継承者なんか目じゃないか」

ディーンは納得がいったように頷いた。そういう訳ではないんだが、まあいいか。チョイチョイとミカエラにローブを引っ張つられる。

「ジューダス、決闘クラブ行くぞ」

「え？ 必要なくね？」

「オレが守れない時はどうするつもりだ？」

「そんな時があるとは思えないけど……」

ということ、一週間後。とある大部屋にホグワーツ生が詰めかけていた。もちろん決闘クラブが開かれるからである。中央の台に深緑のローブを纏ったロックハートが上がった。ざわめきが大きくなる。

「静粛に！」

次いで台上に躍り出たスネイプ先生が言った。しんと静まり返る。

闇の力に対する防衛連盟名誉会員が、口火を切った。

「ありがとうございますございます『助手の』スネイプ先生。まあ先生が言っていたかなくても、私のカリスマでどうにかなりましたけれどね」

「御託は要らないですよロックハート『教授』。さっさと始めましょう」

それからロックハートは決闘の作法について、簡単に説明した。そして、スネイプ先生と実演(完膚なきまでに叩きのめされていたが、負けを認めていない)した後、生徒に呼びかけた。

「模範演技はこれで十分！ それでは実際に生徒同士で組んでやってみましょう！」

ロックハートはキョロキョロと見回し、ハリーに目を留めた。かと思えば、突然俺を指さした。

「ハリー・ポッターとジューダス・ビショップにやってもらいましょうか！」

「待ちたまえ。ビショップには我輩の寮生と戦ってもらおうか」

そう言つて、スネイプはマルフォイを推薦した。俺とマルフォイが台上に進み出る。ミカエラが楽しげに言った。

「魔法使いの決闘において、最も重要なことは相手の魔法に当たらないことだ。これを意識して立ち回れ」

俺は肅然と頷いた。マルフォイが顎を引いて俺を睨みつける。

「いつまでもそのヘラヘラした顔でいられると思うなよ」

「ドラコはブラックジョークが上手いな」

「ファーストネームで僕を呼ぶな！」

「勝利条件は相手の杖を取ることに！ 両者構えて！」

ロックハートが声を張り上げる。空気が張り詰めていく。俺とマルフォイはお辞儀をした。

「3、2……」

「フリペンド！」

マルフォイがフライングで呪文を放つ。俺は咄嗟に飛び退って避けた。

「流石ドラコ！ 勝利に貪欲だな！」

「僕は！ ビショップのその余裕が！ 嫌いなんだよ！」

互いに杖を構え直す。ロンが口パクで『マルフォイなんてぶっ飛ばせ』と言っているのが見える。

「次はこつちからいくぞ。ウインガー——」

「フツ、浮遊呪文で何ができる？」

「ウインガード・レビオーサ！ 爆破せよ！」

「何イ!? プロテゴ！」

マルフォイが盾の呪文で爆破を防いだ。辺りに硝煙が立ち上る。晴れると同時に、マルフォイの杖が唸った。

「サーペンソーティア！ 蛇よ出よ！」

「蛇か！ スリザリンらしいな！」

しかし蛇は俺に向かうでもなく、脇に逸れ始めた。アーニー・マクラミンの隣りにいるハッフルパフ生に威嚇している。制御できていない。

女子生徒の悲鳴が上がる。スネイプ先生の声があった。

「不味い！ 離れろ！」

その時、シューシューと不思議な音がした。蛇の動きが止まる。音の出処はハリー・ポッターだ。ハリーが蛇に歩み寄ると、生徒の人垣がさつと割れた。

蛇とハリーは一言二言会話したかに見えた。その間に、スネイプ先生が蛇を魔法で消し去った。

「ポッター、貴様……」

ロンが大急ぎでハリーの手を取り、部屋を出ていった。ハイマイオニーも一緒だ。3人がいなくなった途端、生徒のひそひそ声が溢れ出した。

「アイツ、パーセルタングだったんだなア」

「ミカエラ、それって蛇と話せる人のこと？」

「アア、サラザール・スリザリンの能力として有名だ。つまりハリー・ポッターがスリザリンの継承者——」

「良いなあ……」

「は？」

「だって、蛇と友達になれるんだよ？ 最高じゃん」

妖精 VS 妖精（自称）

「コケーツ！ コツコツコツコケー！」

独特の臭いが漂う。俺とにらめっこをしている雄鶏が、赤い鶏冠を揺らした。忙しく首を振っている様は、俺に何かを伝えようとしているように見える。

「コケコツコー！」

「ジューダス、お前さん鶏に向かって何しちよるんだ？」

俺はこの小屋の主の方に振り向いた。黄金虫色の瞳は困惑の色を映している。

「鳥語の練習」

「よーしわかった。悩み事があるんだろう。成績か？ それとも好きな子でもできたか？」

「もうハグリッド、俺のことバカにしてる？ 俺は真面目に鳥語を習得したいんだけど」

「おうおう俺が悪かった。だからそんな澄んだ目で睨まないでくれ」

俺は再び雄鶏に向き合った。コミュニケーションを試みてから五時間が経つが、そろそろ絆が芽生えてきた気がする。

ミカエラは三十分で「頭痛が痛い」と支離滅裂な英語を残してどこかへ行ってしまった。最近、スキヤバースと一緒にいるのを見かけるし、ネズミ語を学んでいるのかもしれない。

ハグリッドは鶏に餌を撒き始めた。モジャモジャの口が開く。

「して、ジューダス。なんで鳥語なんちゅーもんを学ぼうと思ってるんだ？」

「ハリーが蛇語を話してるのが羨ましいから。コケーツ！」

「だったらハリーから蛇語を教われれば良くねえか？」

俺は雄鶏のトムから目を離し、ハグリッドに詰め寄る。森のような落ち着く匂いがするが、その程度では俺の憤りは収まらない。

「蛇はハリーが総取りしてるに決まってるじゃん。後から何匹でも紹介して貰える」

「そんなら犬とかでも……」

「爬虫類と来たら鳥類じゃない？ 哺乳類や魚類も魅力的だけどさ」
「そうか……。ジューダス、お前さんは『本気』なんだな？」
「ああ『本気』だ」

俺とハグリッドは見つめ合う。鶏の「コッコッコ」という鳴き声がした。数回の瞬きを挟み、ハグリッドはトムのそばにしゃがみ込む。

「俺には夢がある。もちろん今の森番もありがてえし、名誉なことだ。だけど、一度でも良いから『魔法生物飼育学』の先生をしてみてえ。あいつらの素晴らしさをみんなに伝えてえんだ」

「ハグリッド……」

「お前さんに気付かされたよ。ドラゴンとかアクロマンチュラみてえな花形も悪くねえが、こういう隣人にももつと目を向けるべきだってな」

「ハグリッド……！」

「俺もやる。やってやろうじゃねえか、鳥語の習得。そんで、学会を仰天させるんだ」

「ハグリッドおおおおお!!」

俺はハグリッドに抱きつく。ハグリッドは目を丸くしながら、優しく抱きとめた。熱い漢の抱擁である。

頭から雪を払って城に入る。あの後暗くなるまで、ハグリッドと鳥語を研究に熱中してしまった。やはり人間の言葉と違って難しい。

冷えた体を暖めるために、グリフィンドール談話室を目指していると、もの凄い勢いでアーニー・マクラミンが走ってきた。がっしりと肩を掴まれる。頬は紅潮し、眼光は鋭い。

「探したよジューダス！ 君、新たな犠牲者が出たって知ってる？」

ガツンと脳を殴られたかのような衝撃が俺を襲う。捻り出した声は震えてしまった。

「た、誰か襲はれし？」

「え？ 何？」

「ご、ごめん。驚きの余り古英語出ちゃった」

「……まあそういうこともある、かな？ とにかく！ ジャステインとほとんど首なしニツクが、石になつてたんだよ！」

「何だつてー!?!」

ジャステインというのは、ハツフルパフ生のジャステイン・フィンチⅡフレッチリーだろう。先日の決闘で、蛇に襲われかけていたのを覚えてる。

しかし、ゴーストのニツクまで石にされるとは。スリザリンの怪物は予想以上に化け物のようだ。

犠牲者はこれで二人と一体と一匹。不味いな、このままではジェノサイドルートもあり得るぞ。

俺たちはどちらからともなく、歩き出した。

「あれ？ そういえばなんでアーニーは、俺に教えてくれたの？」

「ジューダスが知り合いで一番強そうだから。先生とか上級生に言うのは、ちよつと気後れしてさ」

「する……のか？」

「何で疑問形？」

俺はミカがいなければ、一般的なホグワーツ二年生なのだが……。

アーニーはマルフォイと戦う俺を見て、内なるフレンズパワーでも感じ取ったのか？

アーニーが周りに人気がないことを確認して、声を潜めた。

「ここだけの話なんだけど、僕はハリー・ポッターがスリザリンの継承者じゃないかと思ってる」

「ゑ!?! なんでふポッター!?!」

「しーっ、声大きいって」

アーニーが人差し指を立てて、黙れのジェスチャーをする。

「ご、ごめん。でもどうしてハリーが？」

「ポッターつてパーセルマウスでしょ？ あれはスリザリンの継承者の標準装備なんだ。それにジャステインはハリーに、自分がマグル生まれだつて話しちゃってたし」

「それだけ？」

ぽかんとした表情を浮かべるアーニー。鳩が豆鉄砲を食ったよう

だ。

「そ、それにミセス・ノリスが石化する前に、ポッターとフィルチの間でゴタゴタがあったらしいよ。一年のクリービーも、ポッターが嫌がってるのに写真を撮りまくってた」

「なーんだ。それだけなら、まだハリーが継承者だって言えないよ。蛇語は頑張れば習得出来るし、ジャスティンがマグル生まれなのは、少し調べればわかることだろう？ フィルチだって、喧嘩の1つや2つぐらいするよ。コリンの件も、ハリーは撮影に快く応じてたじゃないか」

「む、むむむ……？」

眉間にしわを寄せて、アーニーは考え込む。その状態でも、消える階段に引つかからないのは、流石二年生だ。

廊下に水をぶち撒けて、路面凍結を目論んでいたピーブズを、俺が阻止して放送禁止用語を吐かれた所で、アーニーが顔を上げた。

「じゃ、じゃあジャスティンに蛇をけしかけてたのは、どう説明するんだよ!？」

「実は蛇を諫めてたかもしれないよ？ 案外、傍から見ると、細かいことは把握しきれないものだし」

「ぐぬぬぬ……」

そうこうしている間に、太ったレディまで到着してしまった。俺はアーニーに、力強く目線を送る。

「よしわかった。継承者について、先生たちも対応してるだろうけど、俺も動いてみるよ」

「ありがとうジューダス。何か手伝えることがあれば、僕にも言つてよ。それと、まだ僕はポッター継承者説を諦めてないから!」

「はいはい」

アーニーの後ろ姿を見送りながら、既に俺は継承者への対処法を組み立て始めていた。

「それで、スリザリンの継承者に対抗するのは、私のチョココメントに何の関係があるんですか？ 継承者のせいで休講になったからって、イ

かれすぎです」

レインが深緑の瞳を研ぎ澄ませて、俺を睨みつける。大勢のフクロウが鈴なりに止まっているフクロウ小屋は、異様な緊張感に包まれていた。

「実は俺、鳥語の勉強しててさ。チョコミントはカラスだし目立たないから、探すのを手伝って欲しいなーって」

「チョコミントはフ・ク・ロ・ウです！ しかもそんな危険なこと、させる訳にはいきません！」

「チョコミントは賢いから大丈夫だよ！」

「あなたにチョコミントの何がわかるんですか!？」

俺はチョコミントに目を向ける。濡羽色のイケメンなカラスだ。きつとハシブトだろう。

「さつき会話したから」

「ア→ホオー←」

「ほらチョコミントもやりたいてって」

「適当なこと言わないでください！」

全く、レインは変なところで融通が利かないんだから。もつとゆとり持っっていこうぜ？

レインがすぐそばの、左目に傷跡のあるメンフクロウを指さした。

「別にさつきから私たちを見てくるこのフクロウでも良くないですか？」

「その子はメアリー・スーのフクロウだから駄目」

「誰ですか？ その三文小説の主人公みたいな名前の人は？」

「俺のペンフレンド」

「あつ……ごめんなさい……」

まあ誰しも間違いやうっかりはある。過ちを改めてやる、これを友達という。

俺はチョコミントの鋭い目をを覗き込みながら、語りかける。

「啞啞ー！・ 啞啞←啞啞啞→啞啞ー啞ー！」

世界から音が消えた。圧倒的な無音が俺たちを包み込む。周囲のフクロウたちも身じろぎ一つせず、硬直している。

数秒とも、数十分間とも思える静寂の後、レインが『無』を打ち破った。

「後生ですから本当にやめてください。かなり恐怖を感じました」

「真顔で言わないでくれる？ 結構傷つくから」

「例えばペリタセラムを1バレル飲んで、あなたの心は壊れませんか」
1バレルは………約159リットルか。流石に真実薬をそんなに飲んだら廃人になるだろ。それとヤード・ポンド法は死すべし慈悲はない。

なおもチョコミントを未練たらしく見つめる俺。そして雨に打たれた子犬のような、愛くるしいと思われる目でレインをチラ見する。そんな俺を死んだ魚の目で見つめ返すレイン。月曜日のフィルチ管理人と、全く同じ動作で溜息をついた。

「諦めが悪いですね。是非ありません。チョコミントを貸しましょう」

「おおっ!？」

「ただし!」

レインが指を1本立てた。喜び勇んだ心に、急ブレーキがかかる。

「1つだけ条件があります——」

その条件とは、生真面目なレインが言ったとは思えない、驚くべきものだった。

深夜のホグワーツ城。夢の中では見慣れた光景を前に、俺は自分がハッキリと眠っていることを自覚していた。明晰夢だろうか。

どうやら俺はスキヤバーズに先導されて、どこかへ向かっているようだった。

気がつくと、オレは自然と鼻歌をしていた。曲はシューベルトの『魔王』だ。初めて聴いた時、魔王に連れ去られる子供がどうにも羨ましかったのを、俺は思い出す。

とある空き教室にスキヤバーズが入っていく。オレは用心してその中に入り、先客のみすぼらしい姿を矯めつ眇めつする。

先客——屋敷しもべ妖精が、キツと俺を睨んだ。しかしその右手

が、常に自らの太腿を抓って罰しているのを見るに、ここに来たのは主人の命令ではないらしい。

「ようイカレポンチ。派手に暴れた割には、随分とあつさり尻尾を掴まれたじゃねえか？」

「ド、ドビーはドビーの意思であなたに会いに来ました！ ドビーはハリー・ポッターをあなたのような邪悪な力から守らなければなりません！」

「チツ、やっぱり『素』でオレのことが見えてやがるな。これだから屋敷しもべは嫌いなんだよ」

自分のことをドビーと名乗った屋敷しもべ妖精は、さも悲痛な覚悟を背負っていますというような顔で、オレの前に立ちはだかった。その言動全てが、俺の神経を逆撫でる。

「動機なんかどうでも良い。結果的にテメエはジュ……オレを不快にさせた。その時点で大罪なんだよ」

まずは小手調べに無詠唱で失神呪文をドビーに放つ。予想通り、ドビーは指を鳴らして打ち消した。

「やはりあなたは危険な存在です！ ドビーはご主人様の命令に背いて、あなたを除かねばなりません！」

「ほーう、テメエの飼い主はオレの存在を知り、なおかつ黙認しているんだな？」

「ああ！ 言っではいけないことを言ってしまった！ ドビーは悪い子！ ドビーは悪い子！」

突然ドビーは顔を青ざめさせ、頭を壁に叩きつけだした。屋敷しもべ妖精特有の奇行、自罰だ。しかし戦闘中だということは辛うじて理解しているのか、オレの魔法は尽く打ち消される。

オレは教卓の下でコソコソと身を隠しているスキヤバーズに怒鳴った。

「おいスキヤバーズ！ 黙って見てないでお前も手伝え！」

スキヤバーズがネズミモードからおっさんモードに切り替える。

「しかしミカエラ様。少々、音が……。ダンブルドアに見つかる可能性もございますし……」

そしてスキヤバーズは一瞬にしてドブネズミに戻りやがった。スリザリンの継承者を迅速に特定したのは、評価に値する。だが信用性が皆無なため、駒としては全然役に立たない。

憤懣を魔法にのせて、ドビーに撃つ。

「ちくしょう！　なんでオレの周りはいっつもいっつもこうなんだ！

オラツクたばれ屋敷しもべ！」

「ドビーは死ぬ訳にはいきません！　ドビーには崇高な使命があるのです！」

「何が崇高な使命だ！　蛇の帝王の与太話を信奉する極右が！　お前らなんかへビウヨだへビウヨ！」

「ドビーはへビウヨではありません！　ドビーは自由を夢見る屋敷しもべ妖精でございます！」

一進一退。オレとドビーは互いに静かに戦うというハンデを抱えながら、ほぼ互角に無詠唱呪文を撃ち合っていた。

しかし、宿主からの魔力供給が薄いオレが、戦闘が長引けば長引くほど不利になっていくのは必至。

次なる一手、戦いにおける基本中の基本、精神攻撃を見舞うことにした。

「だがなドビー、テメエの使命のせいで、多くのマグル生まれが危険に晒されているんだぞ」

「そうなのでございますか!？」

大きな目を目一杯見開くドビー。その反応に、微かな引っ掛かりを感じる。

「ああそうだと。スリザリンの継承者だかなんだか知らねえが、テメエの行いはテロリストのそれだ」

ピタリと、否、ピタリとドビーは動きを止める。

「ドビーは継承者ではございません！　あなたこそ継承者の協力者でないのですか!？」

「何?！」

こちらを探るドビーの瞳には、眉をひそめたオレの顔が映っている。そのまま数秒、オレたちは膠着した。

オレは余りにも馬鹿らしく、滑稽な可能性に思い当たり、ゆっくりと振り返る。

「スキーヤーバーアーズーウ？」

「キイイイ!？」

しかしその頃には、スキヤバーズの背中は遙か彼方に消え去ってしまった。

クエスト：禁じられた森の採取ツアー

時刻は深夜2時。極東では草木も眠るウシミツドキと呼ばれる時間帯だ。そんな時間に、俺は眠っている太ったレディの前でとある人を待っていた。

目の下に隈を作っているミカエラが、とびきり大きな欠伸をした。最近ずつと機嫌が悪いが、寝不足なのだろうか。

「ふア〜ア。こんな夜中に、あの魔法薬マニアはどこに行こうってんだ？」

「さあ？　ここで待っててとしか……」

「つたく、オレがいねえ所で勝手に変な約束するなよ」

ミカエラは面倒くさそうに呟いた。いや、そうそうレインが危ないことをするはずもないし、別について来なくても良いのだが……。

それから、太った婦人がいびきを数十回した頃に、ミカエラが口を開いた。

「何か近づいて来てるな。透明マントかア？」

果たして、ミカエラの言った通りだった。俺の前の空間が突然破れて、レインの姿が現れたのだ。

レインは素早く周りに視線を走らせると囁いた。

「速くこの透明マントの中に隠れてください」

指示されるがままにマントに潜る。レインがすぐに歩き出したので、俺は置いていかれないように歩調を合わせた。

「レイン、透明マントなんて持ってたの？　これってかなり凄い代物じゃない？」

「これは死の秘宝のマントとは別物です。デミガイズの毛皮を加工した、いわば模倣品ですね。それでもかなり高額ですけど」

「厳つい」

「小学生並みの感想をどうもありがとうございます」

素直に感謝出来るのは良いことだ。俺はレインの成長を実感して、しみじみとした趣深い心持ちになるのだった。

そして城の出口で、ミセス・ノリスを思い出して一人静かに泣く

フィルチの脇を通り過ぎ、俺たちは『禁じられた森』の入口にやって来ていた。

数分前から薄っすらと予感していたが、本当にレインがここに連れてくるのは驚きだ。ミカエラの眠気も吹っ飛び、白い頬を紅潮させている。

「チョコミントを借りるためとはいえ、流石に尻込みしてしまふ。俺は堪らず口を開いた。

「こ、こんな所で何する気なんだ？」

「幾つか採取したい薬草があります。あなたには私の護衛をして欲しいのです」

レインが挑発的に俺に振り返った。

「どうします？ やめておきますか？ 今ならまだ間に合いますよ？」

「いいややるね。俺にはソウルメイトの加護も付いてるし」

「その妄言を聞いて安心した自分が嫌になりましたよ……」

「クハハハ。さアイカれた冒険に出発だな！」

レインはデミガイズ製の透明マントをしまうと、俺に籠を手渡した。この中に薬草を入れるつもりらしい。レインは一度、淡く光る下弦の月を見やると言った。

「では、行きましようか」

森に入ると、湿った特有の空気が俺たちを出迎えた。遠くで聞こえるミミズクの鳴き声や、頭上で羽ばたくコウモリの気配。ミカエラがそばにいる俺はどうとも感じなかったが、レインの曇り空のような頭はいちいちビクついた。

「大丈夫か？ レインの方がヤバいんじゃないか？」

「だ、だいじょうびです」

「絶対無理してるだろこのアホ」

ミカエラの指摘は、尤もだったが、頑なにレインは引き返すことを拒んだ。しかもレインは、光るキノコやチョコ色のミントみたいな草を見つけると、深緑の目を輝かせて駆けていく。俺は逸れないように

ついて行くので精一杯だった。

森の開けた所（レインによるとギャップというそうだ）で、ミカエラが立ち止まった。どこかに目を凝らしている。

俺はレインが石の苔をこそぎ取っているのを確認してから、話しかけた。

「どうしたの？」

「おい、あれ見てみろよ」

ミカエラが注ぐ視線を辿る。ギャップの外れに、十字に組み合わさった木の板がポツンと立っていた。近寄ってみると、比較的新しく作られたようだ。何か文字が刻まれている。

『十三の無垢なる魂、此処に眠る』か」

「十字教の墓のようだなア」

「十字教……」

俺は首にかけたロザリオを見る。思い返せば、俺は生まれてからずっと、十字教と何かしらの関わりがあった。父親は熱心な十字教徒だし、孤児院も十字教系だった。今も十字架を身に着け、聖書を枕代わりに使い、暇つぶしに口笛で賛美歌を吹いている。

なのに俺は、神の存在を信じていないどころか、神敵の総本山で学生なんかをやっている。悲劇を通り越して喜劇だ。

「これ、誰が作ったんだろうね」

「普通に考えればハグリッドだが………ダニエルもあり得るな」

「……………父さん、生きてるのに、他者を吊う優しさも持ってるのに、どうして俺のことは放って置くんだろうか？」

「ジューダス……」

それきり、俺たちは互いにおし黙った。俺はずっと見ないようにしていた、自分自身の内奥に潜む感情に翻弄されるしかなかった。ミカエラは手を出したり引つ込めたり、謎の動きを繰り返している。だが俺は気にも留めなかった。

ふと視線を感じて、樹上を見上げる。しかしバサバサと鳥が飛び立った後で、もの寂しく木の枝が揺れているだけだった。

「何黄昏れてるんですか。次行きますよ」

俺はレインの言葉で我に返った。次いで籠に苔の入った瓶の重みが加わったのを感じる。

レインは腰に手を当て、胡乱な目で俺を見ていた。

「……う、うん。わかったよ」

「しつかりしてください。こんなこと頼めるのはあなただけなんですから」

「それはあれか、俺をようやく親戚だって認めてくれたってこと？」

「最も遠慮が要らないってことですよ」

レインは月光を頼りに手帳を捲りながら答えた。俺たちは更に森の奥深くまで進んでいるが、どこまで探しに行くつもりなのだろう。

「あとどれくらい採れば良いの？」

「ウルフスツ………アコナイトがまだ採れてません。あれが一番必要不可欠なので、もう少し粘りましょう」

「了解」

アコナイトは去年、最初のスネイプ先生の授業で言及されていたからよく覚えている。トリカブトの別名だ。やはりスネイプ先生は、単にハリリーを意地悪な問題で苦しめたかったんじゃないんだ。生徒たちの記憶に残るように、高度な教育的判断をしたに違いない。

ミカエラが時折気遣わしげに、溶けた鉄色の瞳を向けてくる。俺がアコナイトのことを理解しているのか、心配してくれているらしい。口ではあーだこーだ言っても、優しいやつだ。

紫色の花弁があるかどうか、気を配りつつ、前を歩くレインに問いかける。

「時にレイン。なんでトリカブトなんて必要なんだ？」

「どどど、どうしたんですかいきなり？」

「ちよつと気になってさ。それにトリカブトって猛毒でしょ？ 間違つてレインに何かあつたら大変じゃん」

「鈍間ジューダス。まずは悪用するか気にしろよ」

まさかレインに限って悪用する訳がないだろう。ミカエラは人を疑い過ぎるきらいがあるな。

レインは蜘蛛の巣に引つ掛かりながら言った。

「そ、その辺は心配いりません！ 私、こう見えて取り扱いに慣れてますから！」

「なら良いんだけど……」

「やっぱバカだわコイツ」

頻りにバカバカ言ってくる幻覚はスルーするとして………ねえ、なんでそんなに悪口のバリエーション豊かなの？ 変な所でエスプリ効かせないでくれる？

俺は足元の小蜘蛛を踏んづけないように、注意深く歩く。しかしそのせいで、レインとの距離が離れてしまう。

「あ！ ありましたよアコナイト！」

レインが足取り軽く紫の毒花に走っていく。月明かりに照らされたそれは、ひどく幻想的だ。

俺は後を追う。

「やったなレイン！」

「ええ！ やりましたよジュ……ビショップ！」

「この野郎。まだ他人行儀か」

「アハハハハ」

「まあいつか。うふふふふ」

俺とレインは手を取り合って、トリカブトの周りを回る。二人共、歩き続けた疲労と深夜テンションでおかしくなっていた。

その時、ミカエラの鋭い警告が飛ぶ。

「おいトンチキども！ 囲まれてやがるぞ！」

「え？」

「どうかしましたか？」

気づかなかった。知らぬ間に俺たちの周囲を、大小様々な蜘蛛が取り囲んでいた。蜘蛛たちはギチギチと鋏を鳴らし、怪しい八つの目で俺たちを品定めしているようだ。

「落ち着いて聞いてくれ、蜘蛛の群団に包围された」

「ちよっ、マジじゃないですか！ ヤバいじゃないですか！」

「だから落ち着けっつて」

俺は内心慄いていたが『いつも冷静な頼りになる先輩兼親戚のお兄

ちちゃん』のイメージを崩さないために、必死に取り繕っていた。もちろん自然体でもイメージはそのままなはずだけど、念の為だ。

蜘蛛たちは、徐々に徐々に、包囲網を狭めていく。それを見たレインが、俺に縋り付いた。

「ジューダス！ 何とかしてください！ そういう契約でしょう！」

「こんな大勢には勝てません、人間だもの」
もう無理じゃん。あと出来ることと云ったら、できるだけ痛くないように食べてくださいってお願いするしかない？

レインが声を詰まらせながら言った。その瞳には涙。

「ご、ごめんなさい。わた、私がこんな所につ、連れてきたから。結局、私みたいなじん……に、生きる価値なんか……もう自分から死んだ方が……」

「死にたいって言うなぶつ殺すぞ！」

「だ、だつてえ……」

辛抱堪らなくなったのか、小さい蜘蛛が俺に飛びかかった。これがファーストペンギンってやつか……。

「アラニア・エグズメイ 蜘蛛よ去れ」

と思ったら蜘蛛がぶつ飛んだ。ミカエラが右手で銃を撃つフリをしている。

「抜け作。オレがいるのを忘れんな」

「まさかの時の友こそ真の友なんだよなあ」

「保険料は高くつくぜ？」

一瞬、蜘蛛が同族の吹き飛ばされざまを見て怯む。その隙にミカエラが包囲陣に風穴を開け、退路を確保した。俺はレインの手を取り、走り出す。

「助けてくれたのには礼を言います。ですがあんなことが出来るなら、最初からもつたいぶらないで欲しかったです。私を怯え殺す気ですかあなたは」

「フツ、能ある鷹は爪を隠す……」

「やかましいです」

レインは気丈に振る舞っているが、言葉に普段のキレがない。蜘蛛

がトラウマにならなければ良いのだが。

諦めの悪い蜘蛛たちは、なおも捕食せんと俺たちに追い縋る。しかしミカエラがシューティング感覚で打ち倒してくれているので、彼らの願いは叶いそうになかった。俺はレインに怪しまれないように、適宜呪文で応戦するぐらいで十分だ。

もはや作業である。初めのスリル満点、ドキドキスパイダーパンツクはどこへやら。たまに伏兵のごとく飛び出す小蜘蛛が厄介なぐらいだった。

話しながら逃げていたのが悪かったのか。レインが木の根に躓いて転んでしまった。たちまち蜘蛛たちが群がろうと這い寄る。

俺は焦って、滅茶苦茶に呪文を撃ちかけた。

「アラーニアエグズメイ！ アラーニアエグズメイ！」

「ひーふーみーよーいつむーななやー。大体50キルぐらいかア？」

主にミカエラの絨毯爆撃が功を奏し、無事に俺はレインを助けることに成功した。地面から引っ張り起こすと、レインは木に寄りかか

る。

「置いていってください」

「おい、何言って……」

レインは俺の叱咤激励を遮り、ローブを捲ってみせた。右足が赤く腫れている。

「足を怪我しました。もう走れません。こんな足手まといなんか切り捨てて、せめてジューダス、あなただけでも助かって——」

「そんなことできる訳ないだろ！ ほら、おぶってやる！」

有無を言わさずレインを背負い、走り出す。小柄とはいっても、数十キロの重荷をおぶったまま、暗い森の中を駆けるのは辛い。それでも俺は歯を食いしばり、耐える。

「ハアツ、ハアツ」

「む、無理しないでくだ——」

「うるせえ！ 苦しい時に助け合えないで何が友情だ！」

幸い、迫りくる蜘蛛はほとんどミカエラが排除してくれたので、俺は過負荷マラソンに専念できた。そして短いような長いような時間

を、がむしやらに走っていると、パタリと蜘蛛たちの追撃が止んだ。禁じられた森の外に出たのだ。入った時よりも傾いた下弦の月が、相変わらず俺たちを照らしている。俺はレインを降ろし、草の上に寝転がった。

「助かったな」

「助かりましたね」

「助けたな」

いやー、一時はヒヤツとした。禁じられた森に怪物が住んでいる噂は、前々から知っていたが、よもや鉢合わせるとは。これを予想できる人がいたら、そいつはノストラダムスだ。

俺は籠をチラリと見て、重大な過ちに気づく。

「あ、トリカブト採り損ねた。もう一回行く?」

「大丈夫です。何とか採ってきましたから」

そう言っただけでレインはトリカブトを一束取り出した。抜け目がない。

レインはしばらくその束を見つめて、口を閉ざした。内面の迷いを表すように深緑の目が揺れている。

「どつたの? もしや他にも欲しい薬草が——」

「違うんです。その、えっと、つまり……」

意を決してレインは、真っ直ぐに俺を見据えた。体が若干震えている。

「実は私、人狼なんです」

言い切った後に、レインは恐る恐る俺の表情を伺った。その姿は、拒絶されるのに怯えた昔の俺のようで……。

「そうか。打ち明けてくれてありがとう」

俺はそう答えることしか出来なかった。なぜなら………人狼について知らないから。

え? これどういう反応するのが正解なの? ま、まあ何か重大なことらしいし、受け入れてあげれば良いよな………?

俺は抱きしめるのも違う気がして、謎に握手しながら語りかけた。

「今まで辛かったよな。苦しかったよな。大丈夫、俺がついてる」

「はい………はい………」

「今晚の薬草も、それに関係するののか？」

「脱狼薬を生成する材料が足りなくて……」

「そうかそうか」

脱狼薬？ 俺の脳内を疑問符が埋め尽くす。無知って怖い。

その後、優しく慰めてたら急にレインが泣き出して大変だった。人狼であることを隠しているのは、相当にストレスだったらしい。

俺がレインをあやしながらレイブンクロー寮に送り届け、グリフィンドール寮に戻ったのが午前5時。ネビルが気持ち良さそうに眠っている横で、沈黙を保っていたミカエラがポツリと一言。

「お前、人狼が何かわかってなかっただろ」

親友は全てお見通しでした。

ミカの霊圧が……消えた……!?

全学生が渴望してやまない、クリスマス休暇がやって来た。ホグワーツに残るのも実家に帰るのも思いがままだ。学問に打ち込むもよし、趣味に没頭するのもよし、惰眠をむさぼるのも乙なものだろう。果たして無限の時間を得た彼らは、何を思い、何を為すのか……。ザツザツザツとヤスリで、目の前の木材を削る。透き通るようなクリスマスの朝の空気を吸いながら、俺はミカエラへのプレゼントの最終調整に取り掛かっていた。

ミカエラは昨晚も夜更ししていたらしく、今も空中で爆睡している。俺にとっては好都合だ。

去年は絵画だったから、今年は彫刻に挑戦してみた。肉体を持たないミカエラへの、俺の精一杯の慰めだ。19分の1スケールミカエラ像。気に入ってくれるだろうか。

ヤスリがけが一通り終わったので、あらかじめ用意していた筆と絵の具を取り出す。雪をバケツに詰め、インセンディオで水に変えれば、色を塗る準備は整った。

最初に着色するのは目が相応しいだろう。キラウエア火山の溶岩のようなオレンジ色の瞳は、ミカエラが靄時代からのトレードマークだ。

朝ごはんも忘れて、塗装に熱中する。大体二時間程で塗り終わったので、乾くのを待ってニス塗りだ。そんな調子で作業をしていると、お昼前には完成してしまった。

俺は大きく伸びをして、達成の余韻に浸る。

「ふいー。削んのが一番大変だったし、まあこんなものか」

昼ごはんの前に、日課である鶏のトムとの会話をしよう。俺はそう思い立ち、ハグリッドの小屋へ向かった。

「ふ、これは……」

鶏小屋の中は、大量の血で染められていた。たくさんコケコケしていたはずの鶏が一羽も居ない。俺が思わず後退ると、背中で壁のよう

な物体とぶつかった。

「ハグリッド、な、何があったの？」

「……殺された」

「えっ？」

「雄鶏がみーんな殺されちゃった！ しかも一晩で！ こんなむごいことがあるか！」

ハグリッドが顔を真っ赤にして吠えた。右手で石弓を振り回し、怒り狂っている。俺はそれに当たらないように、注意を払いながら問いかけた。

「トムは!? トムは無事なのか!？」

「あいつは良いやつだった……!？」

「おのれヴォルデモート!？」

こんなことをするのはヴォルデモート以外考えられない！ この世の悪いことは全部ヴォルデモートってやつのせいなんだ！

打って変わってハグリッドが口を閉ざした。巨体に似合わず、何かに怯えるように言った。

「例のあの人のことはちゃんと『例のあの人』って言うてくれねえか？」

「ゆのうふう？ ヴォルデモートはヴォルデモートでしょ。何をハグリッドは恐れているの？ 去年会ったけど全然怖くなかったよ？」

「ハハハ、面白え冗談だ。とにかく、Vから始まってTで終わる言葉は、金輪際発さないでくれんか。一々ドキツとしてちゃ世話ねえ」

「ハグリッド、それは恋だ」

「別の意味で動悸がしそうだな」

遠い目でハグリッドは言った。哲学的なこと——例えば肉まんとか——を考えていそうなヒゲモジャ顔だ。だんだんハグリッドがソクラテスに見えてきた。

俺は物置小屋からスコップを取り出しながら、口を開いた。

「吊うの手伝うよ」

「良いのか？ 飯時に」

「食欲なんて吹き飛んだよ」

俺が血染めの鶏小屋を掃除している間に、ハグリッドが外でキャンブフアイヤーを組み、その中に燃料をセットした。そして二人がかりで大量の亡骸を運ぶ。ピンクの傘を一瞥して、ハグリッドが言った。「ジューダス、お前さん火を点ける呪文は使えるか？」

「うん、出来るけど、ハグリッドが点けないの？」

「あー、俺はホグワーツを退学しちまってよ。魔法を使う訳にはいかねえんだ」

「そういうことなら……インセンデイオ 燃えよ」

轟ッ！ と火柱が立ち上がる。熱風が冷涼な空気を押し退けた。火炎が煌々とトムたちを照らす。

俺たちは無言で、次々と鶏を煉獄に投げ入れる。出来るだけ丁寧に投げているつもりだが、鶏は文句をつけているかもしれない。

肉が焼ける臭いが辺りに満ち、煙が天高く立ち昇った。全ての鶏を投げ入れた俺とハグリッドは、その様子を眺める。

俺は手を組んで祈りを捧げた。

「トム、ヘンゼル、グレーテル、マールヴオロ、アリス、ジャック、リドル、ババル、ゲルダ、カイ……………」

みんなの鳥面が脳裏をよぎっていく。昨日まではあんなに元気だったのに……。自然と涙が零れた。

「ちよつと待て、雄鶏にアリスやゲルダはおかしくねえか？」

「ハグリッドだって性別を間違えることはあるでしょ？」

「そんなことは……いや確かにノーバートはそうだったな……………」

ノーバート？ おそらくハグリッドが昔飼ってた犬かなんかだろう。去年のドラゴンなんて知らない。

火はトムたちを燃やし尽くすと、しばらくして消えてしまった。ハグリッドがしみじみと頷く。

「うん、うん、あいつらも満足しちやるだろうよ……………」

それから残った灰をかき集め、鶏小屋の片隅に埋めた。お腹を減らして出てきたファンクにも手伝ってもらい、三人がかりだ。終わる頃には太陽が山際に隠れかかっていた。冬の日は短い。

俺はハグリッドとファンクに振り返る。ハグリッドは夕日を背

負っていて、表情は見えない。

「ジューダス、今日は手伝つとくれてありがとう。今年のクリスマスプレゼントは期待してくれていいぞ」

「うん、正座待機しておくよ」

トムたちが死んでしまったのはショックだが、いつまでも引きずるのは彼らも本意ではないだろう。明るく生きていくのが、彼らへの供養になる。俺はそう自分に言い聞かせながら、ホグワーツ城へ歩いていった。

大広間では、既に多くの生徒が食事を取り終わっていた。席にしている人はまばらで、役目を終えた食器が魔法によってどこかへ消えている。

俺はグリフィンドールのテーブルに近づいた。二つの赤毛がヒョコヒョコと忙しく動いている。

「ロン、何してるの？」

「スキヤバースがいないんだ！ 二週間も！ こんなこと初めてだよ！」

パーシーが背筋をピンと伸ばして、歩いてきた。胸には監督生のPのバッチが光っている。

「僕はロンの管理が悪くて、逃げちゃったと思うんだけど……」

「そんなはずはないよ！ ちゃんと朝昼晩、餌はやってたし、たまにお風呂にも入れてた！」

「たまじゃあ駄目だ。僕は毎日ブラッシングもセットでやってたね」

俺は知っている。ロンが苦手な食べ物をスキヤバースに与えていたことを……。

「あれ？ でも何でパーシーが探すのを手伝ってるの？ 兄だから？」

「スキヤバースは元々僕のペットなんだ。それを譲ったっていうのに、ロンと来たら……」

「これは防ぎようがないよ！」

「だけど、年のはじめに杖も壊してただろ？ 流石に二度目は無理が

あるね。僕は今から、ママの吼えメールが恐ろしいよ」

「グツ……」

「とりあえずスキヤバーズを見かけたら、ロンに伝えるよ」

「ありがとうジューダス」

ロンとパーシーはハツフルパフのテーブルの辺りを探しに行った。食いしん坊のスキヤバーズなら、食べ物落ちてる食事終わりに出没するかもな。

俺はロンとスキヤバーズの行く末に合掌しつつ、テーブルについてた。たちまち金の皿が現れる。そしてその上に載っていたのは……。

「うげえ、フライドチキンか」

「フライドチキンの何が嫌なんだア？」

いきなり背後からミカエラが話しかけてきた。俺の皿を覗き込んでいる。びつくりするからやめて欲しい。

「な、何でもないよ。それよりミカエラ、遅かったね」

「遅えのはお前もだろ。ア、その杏仁豆腐食わねえなら貰うぞ」

「お構いなく……」

クリスマス・イブとあってか、お互いに遅くなった理由は問わずに食べ終わった。そして談話室でネビルやハーマイオニーと人狼ゲームをした後、俺は床に就いた。

因みに、俺は狂人の役でボロ勝ちした。

チク、タク、チク、タク………針が時を刻む音以外、何も聞こえない部屋。オレは前かがみで椅子に座っていた。視線は組んだ指に落とされている。

何の前触れもなく、気配が一人増えた。

「ホツホツホツ、奇遇じやの、ミス・ビシヨップ」

「オレに苗字はねえよ、プロフェッサー・ダンブルド」

視線を上げると、予想通りサンタな笑顔が目に入った。クリスマス・イブにはお誂え向きだな。

ダンブルドアはゆったりと部屋を見回す。

「儂らは示し合わせておらなんだが、今年も同じ場所で落ち合った。

不思議じゃのう」

「相変わらずとぼけるのが上手いな。そういうことなら、みぞの鏡でも持ってきたら良かったんじゃないか？」

「あれはもう君には必要なかろう」

オレはハツとしてダンブルドアを見た。アイスブルーの目が半月メガネ越しにこちらを見返している。内心を見透かされているようで、俺は思わず目をそらした。閉心術はあまり得意じゃねえ。

「彼のことじゃが……」

「わかってる」

一番側でジューダスを見ていたのだ。アイツが永くは保たないことも知っている。少なくとも、確実にオレの魔力は、アイツの魂を蝕んでいた。

ダンブルドアは困ったように眉を下げながら、口を開く。

「しかしこのまま彼に黙っておく訳にはいくまいて」

「どの口が言ってる？ お前がハリー・ポッターにしているのと何が違うんだ？」

室内に重苦しい沈黙が居座る。それで良い。オレはアイツの命を貪る寄生虫で、駆除されないように不都合なことは隠す臆病者だ。

「……人はみな、大切な存在には幸せになつて欲しいと願うものじゃ」
唐突にダンブルドアが語り始めた。教育者モードとか面倒くさいからやめろ。

「ああそうかよ。まア人外のオレには関係ねえ話だな」

「ホッホッホッ、面白いことを言う」

「何がおかしい？」

「君は人じゃよ。どうしようもなくのう」

「……………バツカじゃねえの？」

「そうじゃの、儂は大馬鹿者じゃ」

ニコニコとダンブルドアは微笑んだ。傍から見ればただの好々爺だ。オレはその真意を測りかねる。

……ダンブルドアは嫌いだ。会話しているだけで、こっちのペースを崩されてしまう。ヴォルなんちゃらが恐れるのも納得だ。

「……真実とは、美しいゆえに残酷じゃ。じゃから取り扱いには十分に注意を払わなければならぬ」

「だからお前もオレも、重要なことは何も教えねえんだろ」

「儂はのう、君に後悔して欲しくないのじゃよ。彼は真実に立ち向かう勇気を持った子じゃ」

「勘違いしてるようだからこの際言っておく。アイツはお前やハリ・ポッターみたい、逆境を乗り越えられる玉じゃねえ。実際、追い詰められてオブスキュラスなんつー化け物を生み出しやがった」

「それは彼にとって必要なことじゃろう？ 儂は思えてならぬ。彼がオブスキュリアルになるのは運命じゃったと」

「とうとう轟碌したか。運命だの神だのを言い出す輩に、碌なやつはいねえ。」

ダンブルドアは時計をチラリと見て、踵を返した。

「儂はこれから、厨房にホットミルクを頼みに行くが、君もどうじゃ？」

「行くと思うか？」

「連れないのう」

ダンブルドアは少し寂しげにそう言うと、去っていった。最後まで白々しい老人だ。

だがヤツの言うことも一理ある。いずれアイツは知ってしまうのだ。自分の短い生の終点と、その元凶を。

オレはダンブルドアとは逆方向の出口から、部屋を後にした。通いなれたグリフィンホール寮を目指し、宙を漂う。

それまでに手を打たなければならねえ。賢者の石はクソ親父の手に落ちたし、作るのは数年じゃ不可能。新しい方法を探す必要がある。

しかも目下のところ、スリザリンの継承者とスキヤバーズという、二つの障害もある。コイツらもそろそろ叩き潰さなきゃならん。

一応ドビーとは緩やかな協力関係を築いている。敵の敵は味方ってヤツだ。だがあまり信用できねえ。スキヤバーズの件もあるしなア。

「考えれば考える程、問題が山積みだなア。クソが」

太った婦人までもうすぐだ。今年はアイツ、クリスマスプレゼント
何くれるんだろうか。

オレは曲がり角を曲がる。その瞬間、血のように紅い瞳と目が合っ
た。

「大丈夫、君はもう何も考えなくて良いよ」

エクスプローションツ!

俺は突然の轟音によって目を覚ました。ズドグギヤーンツうぽぽぼう! というような爆発音だ。僅かな間、ベッドが軋みながら揺れる。

何だ何だ!? こんな夜更けに何が起きたんだ!? 俺はベッドの柵に掴まりながら、上半身を起こした。ネビルも顔を引きつらせて、ベッドにしがみついている。

「おはようネビル。いい目覚めだね」

「こんな起こされ方なら、アルジー大叔父さんに乗っかられた方がマシだよ!」

モーニングダイブしてくるなんて、随分とファンキーな大叔父さんだ。ロングボトム家は愉快だな。

とりあえず様子を見に行こうという話になり、俺たちは揃って寝室を出た。途端に隣室のハリーたちと鉢合わせる。ハリーが目を擦りながら言った。

「一体全体何が起こったの?」

「さあ? 俺たちも今起きたところだから」

シエーマスが目を爛々と輝かせている。そういやシエーマスは爆発狂だった。それでマクゴナガル先生はクディツチ狂だ。

「どデカい爆発を見る千載一遇のチャンスだ! 早く見に行こうよ!」

「で、でも夜の外出は減点されるんじゃないや……」

「ネビル! 君はそれでもグリフィンドールか!」

ネビルは必死にシエーマスを諫めるが、当のシエーマスはどこ吹く風だ。デイーンがやれやれと首を振っている。ロンがハリーに言っているのが聞こえた。

「絶対フレッドとジョージの仕業だ。スキヤバーズを百匹賭けたって良い」

談話室の外は、グリフィンドール生でこった返していた。点々と、生徒たちの杖明かりが星のように光っている。寝起きの太った婦人

が、気を悪くしたように顔をしかめた。

そんな喧騒の中で、俺は段々と不安を募らせていた。嫌な予感がする。さつきまで見ていた夢も、もう忘れてしまったが悪夢だったような気がした。

「ようシエーマス！」

「派手にやったなあ！」

人混みを掻き分けて、フレッドとジョージがやって来た。英雄を称えるように、シエーマスの肩を叩いている。刹那、ロンが叫んだ。

「二人がやったんじゃないの!？」

赤毛の双子は、キョトンと顔を見合わせた。まるで鏡合わせのようだ。

「へイ相棒！　こんなクールなことをやった覚えはあるか？」

「いいやないね相棒！　いつものロニー坊やの勘違いだな！」

今まで黙って聞いていたディーンが、徐ろに口を開いた。

「爆発狂でもない、悪戯狂でもないとする……」

徐々にみんなの視線が俺に集まっていく。え？　何で？

シエーマスが実になこやかに言った。

「友情狂以外ありえないよな！」

「やっぱ友達教の噂流してるのシエーマスだろ！」

俺はいつかの決意を胸に、シエーマスにフレンドパンチを見舞おうと飛びかかる。しかしネビルに羽交い締めにされてしまった。

「は！　な！　せー！」

「でもシエーマスの言っていることも筋は通つてると思うよ！」

「あつ？」

驚きのあまり、俺の動きが止まる。みんなが口々に言った。

「よくジューダスは爆破呪文を使ってる気がするし……」

「しかもウインガーディアム・レビオーサの言い間違ったやつ」

「ウインガード・レビオーサだけ？　シエーマス、使ってみてよ」

「あんな魔力効率最悪の欠陥呪文使うぐらいなら、コンフリンゴとかエクスパルスの方が早いよ」

「才能の無駄遣い」

順にハリー、ネビル、ロン、シエーマス、デイーンの発言だ。まさに言いたい放題。俺は反論を試みる。

「俺だって、好きで使ってる訳じゃないよ！ 知ってる呪文の中で一番火力出るのがこれなの！」

一同、疑惑の目。なんでやねん。

ロンが壊れかけた杖にセロハンテープを貼り直しながら、口を開いた。

「グリフィンボール爆発四天王の中には、犯人はいないみたいだ」

何だその不名誉な四天王は。どうせならホグワーツ人望四天王が良かった。

押し合いへし合い、俺はやつと爆心地に辿り着くことができた。生徒がぐるりと大きなクレーターの周りを囲んでいる。廊下の曲がり角がすっかり抉れていた。

……みんなと話している時は紛らわせることができた俺の不安も、今や無視できない程巨大になっていた。といのも、まるで半身を失ったかのような、謎の喪失感に襲われていたからだ。

「ん？」

ひらひらと紙切れが足元に飛んできた。俺は何とはなしに拾い上げる。煤けたただの画用紙だ。

そして俺は裏返して、目を見張った。

「んんーッ!？」

裏面にはオレンジ色の瞳と、黒髪の一部が描かれていた。見間違わずもない。これは俺が去年、ミカエラにプレゼントした絵の一片だった。

俺はただただ、その紙切れを見つめることしかできない。周囲からは音が消え、光が消えた。

「ジューダス、どうしたの？ 体調悪い？」

ある恐ろしい予想が浮かぶ。嘘だ。ミカエラがやられるなんて、ありえない。だってミカエラは俺の無量大数倍強くて、最強で、チートで……。

「静まりなさい！ 何の騒ぎですか！」

マクゴナガル先生の一声が、俺を現実につ張り戻した。ネビルが心配そうに俺の顔を覗いている。

「大丈夫？ 君、すっごく顔色悪いよ」

「た、だいじょうび、だから」

俺は手振りでもネビルの追及を押し留める。今、医務室にぶち込まれるだけは避けなければ。

マクゴナガル先生は、モーセのように生徒の海を割り、爆心地に歩いてきた。クレーターに目を丸くする。

「何なのですかこれは?!」

生徒たちが互いに見交わす中、パーシーが前に進み出た。水色のパジャマにPのバッチが目立っている。

「先生、まことに残念ですが、これはスリザリンの継承者の仕業です！」

「なんと！ 本当なのですかミスター・ウィーズリー？」

「ええ！ こちらを見てください！」

パーシーは名探偵のように、悠然と手をかざした。多くの人が、そこを見ようと前のめりになる。

「まだ乾いていない血です！」

「まあ、ではこれを調べれば犯人の正体がわかりますね」

「違います先生！」

微妙な空気が流れる。マクゴナガル先生の推論を一刀両断したパーシーは、意気揚々と推理を続けた。

「二見すると飛び散った血ですが、これは被害者のダイニングメツセージです！ これはS！ SはスリザリンのSです！ そしてH

！ これはHeir（継承者）のHと読み取れます！ つまりこの事件の犯人は、スリザリンの継承者なのです！」

どよめき上がる。ほとんどゴジツケのようなものだが、パーシーの勢いに大半の人が吞まれていた。

対して俺は、推理を冷めた目で見ていた。ミカエラなら、そんなメツセージを残す前に継承者を殴っているはずだ。首を傾げている

ハーマイオニーと目が合ったので、肩をすくめておく。

フレッドかジョージのどっちかが野次った。

「それで、スリザリンの継承者は誰なんだよ？ パース？」

「わからない」

ズコーラーと生徒たちがずっとこけた気がした。マクゴナガル先生が頭に手を当てて、ため息をつく。

「今から先生方で調査します。全員ベッドに戻りなさい」

「ええー？」

「何ですかフィネガン？ 一夜にしてグリフィンドールの点数を無に返しても良いんですよ？」

「すぐに戻らせて頂きます！」

マクゴナガル先生の脅しは、寮杯の欲しいグリフィンドール生には効果覿面だった。そろそろと太った婦人の方へ向かっていく。パーシーは残って調査に加わることを主張したが、ウッドに首根っこを掴まれて引きずられていった。

床にこびり付いた血を俺が眺めていると、ネビルに声をかけられた。

「行こうジューダス。マクゴナガル先生はやると言ったからには、やる先生だよ」

「うん……」

今日中には戻ってきて欲しいものだ。クリスマスプレゼントは、クリスマスに渡さなきゃ意味ないじゃないか。

夜が明けると、ホグワーツの全生徒は大広間に集められた。生徒たちのざわめきが飛び交っている。ラベンダーがパーバティに話しているのが耳に入った。

「ここだけの話なんだけど、パーシーとペネロピーが手を繋いでるのを見たのよ」

「ペネロピーって、レイブンクロウのペネロピー・クリアウオーター？」

「そう！ あの二人絶対デキてるわ」

こんなことがあっても平常運転とは恐れ入った。恋バナのどこが楽しいかは理解できないが、それが気晴らしになるなら是非とも混ぜてくれないだろうか。ねえねえ、ハグリッドの飼犬のフランクが、最近雌犬と一緒にいるだけどきー！

ダンブルドア校長が現れると、大広間は時の止まったように静まり返った。

「朝食前に集まってもらい申し訳ない。賢明な諸君なら、空腹を我慢するのは朝飯前じゃと思うがのう」

横でハグリッドがデカイ欠伸をした。手で隠しているつもりのようにだが、しっかりと公開されている。

「今朝発生した爆発騒ぎじゃが、調査の結果、被害者はゼロじゃとわかった」

主にグリフィンドールのテーブルで、再びざわめきが巻き起こった。それもそうだ。あれだけ大量の血が残されていたのに、誰も犠牲者が出ていないなんて考えられないだろう。俺以外は。

「現場に残されていた血痕についてじゃが、ケトルバーン先生の懸命な貢献により、といっても何の血か不明の状態で舐めるのはやめて頂きたいのじゃが、蛇の血じゃと判明した」

さっと大広間中の視線がハリーに集中した。スリザリンの継承者と言えば蛇、蛇と言えばハリー・ポッター。

「報告は以上じゃ。何か質問のある者は――」

ビシツと一本、手が上がった。誰かと思えばロックハート先生だ。ダンブルドア先生の返事を待たずして、白い歯を光らせながら言った。

「今回の爆撃犯、並びにスリザリンの継承者を私が倒してしまっても構いませんね？」

「もちろん構わぬ。では解散！」

ダンブルドアの投げやりな掛け声とともに、テーブルを朝食が彩った。ロックハートは満足げに座り直す。

クリスマス朝の朝食は、いつもより豪華だったが、どこか味気なかった。

グリフィンドール寮の寢室。俺は届いたクリスマスプレゼントの開封に精を出していた。何か別のことに熱中すれば、この確信めいた予感から逃れられると思ったのだ。

トレローニー先生から貰ったタロットカードを、ネビルのプレゼントト付近に寄せる。入学準備以来、長らく会っていないが元気だろうか。そろそろ実在を疑ってみた方が良さかもしれない。

俺はロツクケーキ（昨年比約2倍）をゴリゴリ食べながらフランス語の手紙を開いた。孤児院にはフランス人もよく来たから、自然とフランス語も覚えられた。そういう意味では、孤児院に感謝だ。

差出人はメアリー・スーと書かれている。去年は聖書を送りつけるという、たちの悪い冗談を仕掛けてきたけど、今年はどうだろう。

冠省

メリークリスマス。ホグワーツの冬はボーバトンより厳しいようだけど、まあジューダスのことだから元気かどうかは訊かないで okay。

この間相談してくれた『親友』君は、キミのプレゼントを喜んでくれたかい？ ボクはそれが気になって夜しか眠れないよ。昼寝の間を確保するために、即刻返事を送って欲しい。

あと、今年はボクの愛読書を贈ることにしたよ。マグルの本だけど、キミも気に入ると思う。暇な時間にでも読んでくれたまえ。聖書？ 神様が7日目に休んだ辺りから記憶がないね。

不一

追伸——そうだ、こっちではとってもいいニュースがあったのを書き忘れてた。心して聞いてくれたまえ。なんと、ニート……居候のRABが就職したんだ。帰省するたびに、ポールアンプロワに行けって言い続けた甲斐があるってものだよ。

『

付属の包装を解いてみると、一冊の本が姿を現した。題名は『ジキル博士とハイド氏』とある。作者はどうやらイギリス人のようだ。こ

れをフランス人に薦められるとは、中々数奇な巡り合わせだ。

オーガスタさんからはハゲタカの羽ペンを貰った。孫の友人にもくれるなんて、優しい人だ。

ヘクターさんの包み紙は、とても細長かった。俺がそれを開けようと悪戦苦闘していると、部屋の外を通りがかったウッドが飛び込んできた。

「ジューダス！ それ箒じゃないか！」

「うわ、本当だ」

青色のゴツイ箒だ。朝日を浴びて、鈍く光っている。

「ブルーボトルか。初めての箒ならいい選択だ。ファミリー用の箒だから、クディッチをプレイするには物足りないけど、移動手段なら最高だよ。安全で頑丈、おまけに防犯ブザー付きときてる」

ウッドが楽しそうに解説した。流星はグリフィンドール・クディッチチームのキャプテンだ。

「もしもこれに乗ってみて、クディッチに興味が湧いたなら、年に一度の選手選考に参加してみてくれ。ジューダスならトリツキーなプレイで、試合を引っ掻き回してくれそうだ」

「うん、覚えておくよ」

だがウッドの言う展開にはならないだろう。ミカエラがいたら、俺がブルーボトルに跨がる必要はないのだから。

チョココなんかねえよ

ミカエラは年が明けても、姿を見せることはなかった。

この頃になると消滅したという事実を、流石の俺も認めざるを得なかった。ある日突然現れたのなら、ある日突然消えても不自然ではないだろう。イマジナリーフレンドに相応しい幕引きだ。

親友のいない日々は何をしてもつまらない。だからバレンタインデーも、俺にとっては超絶どうでも良いことだった。

朝から大広間で、ロックハートが真っピンクのローブを着て、何やら騒いでいる。バレンタインだったら何だと言うんだ。俺はチョコレートなんか嫌いだ。チョコレートを好きだった人を思い出すから。仏頂面で朝食を食べていると、ネビルがおずおずと話しかけてきた。ここ2ヶ月、あまり会話が弾んだ記憶はない。

「おはようジューダス」

「……おはよう、ネビル」

「えーっと、何か悩んでる？ 近頃の君、とつても辛そうだ」

「大丈夫だよ、大丈夫」

俺は大丈夫だ。ミカエラがいなくとも生きていける。いつまでも親友に頼る弱い人間じゃない。

「僕で良ければ相談に乗るよ」

「相談することなんかないって」

「でも、このままじゃ駄目だよ。授業中も上の空だし……。みんな心配してるよ」

みんなって誰だ？ みんなとか言つて、そんなこと思ってる人はいないんじゃないか？ 多数派の専制を振りかざしているだけじゃないのか？ ……多数派の専制って何だ？

俺は思ったことを口にしようとして、飲み込んだ。否、飲み込まされた。真っピンクのロックハート教授がやって来たのだ。

「そんな顔をしたら、せっかくのバレンタインデーが辛気臭くなるじゃないか！ それじゃあ私のように、女の子たちからたくさんのチョコレートを貰うことは出来ないよ！ さあ笑って！ スマイル

！」

俺はグニーつと頬を掴まれる。作り物の笑顔に、果たして価値などあるのだろうか。

「これで良しー！」

「先生、やめてください」

俺がロックハートの手を振り払うと、ロックハートは目を丸くした。拒絶されるとは思っていなかったのだろうか。

「これは重症みたいだね。ミスター・フォーリー、今夜私の部屋に来なさい」

「え？ ですが先生にそんな権限は……」

「これは罰則さ。罪状は……バレンタインデーに辛気臭い顔をした罪」

「そんな横暴な」

俺は助けを求めてネビルを見る。しかしネビルは生暖かい目を返してくるだけだ。おいネビルうー！ こうして、俺のバレンタインデーは最悪の滑り出しを迎えた。

「生物を変身させるには、その生物の体内構造をよく理解しておく必要があります」

マクゴナガル先生による変身術の授業。先生が吊り下げられた大きなコガネムシの解剖図を、杖で指し示している。

「コガネムシの解剖図の模写を、宿題に出したのはこのためです。机にお出しなさい」

俺は一時間クオリテイの、精緻なコガネムシの解剖図が書かれた羊皮紙を取り出す。絵が描けるというのは便利なものだ。

だが描いている時も、描き上がった時も、全くと違って良い程喜びを感じなかった。以前はあんなに楽しかったお絵かきが、ちつとも楽しくないのだ。口笛も、彫刻も、モールス信号も同じである。何でだろう？

「……ビショップ！ ジューダス・ビショップ！ 何をぼーつとしているのですか！ 授業中ですよ！」

いつの間にかマクゴナガル先生が説明を終え、俺の机の前に立っていた。眉を吊り上げている。

「私は一年生の最初の授業で言ったはずです。ふざけた態度を取った生徒は、教室から出て行ってもらおうと」

「すみません、先生」

「もう一度はありませんからね？ ……ミスター・フィネガン、頼みましたよ？」

「任せてください！」

俺はギョツと隣の席を見た。去っていくマクゴナガル先生の背に、畏れ多くもサムズアップしているシェーマスが座っている。

驚いた。俺はたった今、自分の隣席に誰が着いているのかを知ったのだ。こんなことは初めてだ。

シェーマスは笑いながら俺の背を叩く。ダイナマイトが爆発した後のような、晴れ晴れとした笑顔。

「今は実技の時間だよ。この配られたコガネムシをボタンに変えろってさ」

そう言ってシェーマスは、瓶詰めのコガネムシに杖を振る。即座に瓶の内部が爆発した。

「あははっ、また失敗しちゃった。でも大丈夫。直前で『あ、これ駄目なやつだ』と思って、コガネムシに爆発が当たらないようにしたから」
シェーマスが言った通り、中のコガネムシは無事だ。ノソノソと動き回っている。

「そんな高等テクニク使えるなら、一発で成功してよ……」

「へ、変身術は難しいなあ」

明後日の方向を見るシェーマス。爆発と変身は勝手が違うらしい。俺は一つため息をつくとき、向こうでネビルに杖の振り方を教えているハーマイオニーを注視した。ハーマイオニーの杖さばきは完璧。見事、コガネムシはエメラルド色のボタンに変身した。

俺は目を閉じて、先程のハーマイオニーの杖の軌跡を反芻する。イメージが固まり、どう杖を動かせば良いのかがはつきりと脳内に浮かび上がった。俺はそのイメージに杖を委ねる。

異変はすぐに訪れた。コガネムシが深緑のボタンに変わったかと思うと、そのボタンを中心として、さぎ波のように瓶が、机がボタンに変化していく。俺は絶叫を発して、椅子から転げ落ちた。

「あ、あなやーッ!？」

「ぎゃあああああ!？」

シエーマスが共鳴しておっ立った。俺はその叫び声で肩を大きく跳ねさせる。驚きは二度刺す。なんて卑怯な。

机は足先まで深緑に染まると、ボタンでできたその身をジェンガの如く崩壊させた。ジャラララア! と爆音が教室に響き渡り、大量のボタンが四方八方にうねりとなって拡散する。

シエーマスは青ざめた顔で俺を見下ろしていた。その目には『ドン引き』という神聖四文字が如実に表れている。

ある一つのボタンがコロコロと転がり、マクゴナガル先生の靴に当たった。マクゴナガル先生は呆然とこの惨状を見ていたが、気がついたように表情筋を引き締める。

「グ、グリフィンドールに10点」

授業が終わり、俺は一人廊下を歩いていた。背後でドツと笑いが巻き起こったのが聞こえる。大方、ロンかシエーマス辺りが、何か面白いブラックジョークを披露したのだろう。だが俺はその輪に入っていく気分にはなれなかった。

思い返すのはさっきの変身術のことだ。俺はしっかりとコガネムシ『だけ』に魔法をかけたつもりだった。しかし、なぜか周りの瓶やら机やらにまで、効果が波及してしまったのだ。俺が椅子から転げ落ちなかったら、床にまで及んでいたかもしれない。

「魔力の暴走……?」

確かに、暴走に近い状態に陥っていた気がする。ボタンのかけ違いぐらいの、些細な差異で暴発してしまうような。そんな危うい予感。

孤児院にいた時にはよくあった。特に自分の特殊性を認識し、それを封殺してしまおうとしていた頃だ。丁度、ミカエラと出会ってから。パタリとなくなっていたのだが。

「ミカエラ?」

ミカエラが何か、魔力の制御と関係していたのだろうか。そういえば、ミカエラが居なくなってから、おかしい感覚に襲われることがあった。全能感というか、嫌悪感というか。

「んツ……!」

俺の左手から、仄かに黒と橙の靄が立ち昇ったかのように見えた。見えたただけだ。目をこすると、そんなものは消え失せていた。

これは例のアレなのかもしれない。一部の選ばれし14歳の少年が罹るやつ。生涯に暗黒の歴史を刻み込んでしまう、恐ろしい病気だ。……あれ? 俺って今何歳だっけ?

「くうツ! 左手が疼く……!」

「何やってんですか」

俺は頬に熱を感じながら振り返った。レインが腰に手を当てて、呆れたようにこつちを見ている。肩口で切り揃えられた灰色の髪も、深緑の瞳も、最近めつきり見かけていなかったので、いやに新鮮に感じた。

「内なるフレンズパワーが暴走しないように抑えてた」

レインはパチクリと瞬きを数回した後、吹き出した。手で口を隠して、笑いを堪ええようとしているが、堪ええ切れてない。レイブンクローの青いネクタイが、呼吸にに応じて上下している。

「ちよっ、どうしたの?」

「す、すみません。ふふっ、近頃ジューダスが元気がないと聞いていましたが、杞憂だったので。その、安心してしまっつて」

他寮他学年のレインに届くまで、俺は意気消沈していたのか? 単にミカエラが居なくてちよっぴり寂しいだけなのに?

レインは一頻り笑うと、ハンカチで目尻の涙を拭いた。泣くほど大笑いしたのか、この再従兄妹。

「レインは何か俺に用があったんじゃないか?」

「あ、そうでした。今から時間あります?」

「暇を持て余した神々の遊びごっこする程度には暇だな」

「めっちゃ暇じゃないですか。ついて来てください」

こちらに背を向けて歩き出すレインを、俺はほんやりと眺めながら後を追った。

実際、レインと会わなければ、俺は読書するぐらいしかやる事がなかっただろう。クリスマスにメアリーから貰った本も、佳境に差し掛かったし。

レインは前を向いたままポツリと呟いた。

「私、不安だったんです。あのことを告げたのが、ジューダスの負担になっていたんじゃないかって」

あのこと、とはレインが実は人狼だったことだろう。負担になるものか。イマイチ人狼が何なのか理解していないんだから。自分で調べようにもクリスマスから、別のことで頭が一杯だったからできなかった。

「……でも安心しました。ジューダスは私みたいな弱い人ではなかったですね」

「そうでもないさ」

俺なんかより強い人なんて大勢いる。ミカエラ、ハリー、ダンブルドア先生、ハーマイオニー、フリットウィック先生……。

レインは踏みしめるように階段を上がっていった。

「私はあの夜、ジューダスが手を握ってくれた時、とても嬉しかったです。初めて自分の存在が許された気がして」

「ヘクターさんには言ってなかったの？」

「セバスにしか伝えていませんでした。大叔父さんはあれで繊細な方ですから。知ってますか、ジューダス？ 私とあなたとグリム以外、フォーリー家の本家筋はみんな亡くなってしまうているんですよ。私はまだ幼かったので、詳しい事情は判然としませんが……」

「そうだったのか……」

だからあんなに血縁に拘っていたのか。ウサギの姿は、ヘクターさんの内面をえぐり出しているのかもしれない。

レインは7階に出て、廊下を3回ほど往復した。俺が突然の奇行に困惑していると、忽然と壁に扉が現れる。

「着きました」

一切躊躇わずにレインは扉の向こうに消えてしまった。仕方がないから俺も後に続く。

「ここは……」

フツフツと沸く大釜、ゆらゆらと立ち昇る湯気、人の血管の中をはいめぐる液体の繊細な力、心を惑わせ、感覚を狂わせる魔力……。

そこは魔法薬学に特化していると言っても過言ではないような部屋だった。本棚には多くの魔法薬の本が、隙間なく収められ、キャビネットには多種多様の瓶詰めのカニカが、静かに使われるのを待っていた。

「ここは必要の部屋です。使う人の求めているものを提供してくれませう」

「はえー」

ホグワーツにこんな素敵空間があったなんて。一年半通つても知らなかった。俺は地に伏せ、悔し涙を流す。

「何でイッチ年生のレインの方が、俺よりホグワーツに詳しいんだよおー！」

「私は、あの、ちょっとズルをしてると言うか……」

「ズル？」

徐ろにレインは、紅い装丁の本を取り出した。薄汚れていて、少し古めかしい。

「ジューダスのお母さんの日記です」

「俺のママの!?!」

「はい、あなたのママのです……」

俺は半ば引つたくるように、マイ・マザーの日記帳を開いた。後ろからレインが、申し訳無さそうな声音で言う。

「勝手に読んでしまつてすみません。あの、フィデスさんの部屋を掃除してて見つけまして、それで、ホグワーツがどんな所か気になつたんです。入学前でしたから……」

「気にするなレイン。俺も読む権利があるわけじゃないから」

「確かに……!」

そう、いくら息子といえども、親の日記を読む権利なんて何一つ

持っていないのだ。むしろ軽犯罪と言っている。だからレイン、何も気負うな。

『

8月1日晴れ

ホグワーツからの手紙が届いたので、今日から日記を書こうと思います。明日は入学の準備にダイアゴン横丁に行きます。今から楽しみです。

8月2日曇

ロンドンで汚らしい男の子を拾ったので、家に住めないかお父様にお願いしようと思います。

8月3日雨

男の子はダニエル・ビショップという名前の方です。持っていた聖書にそう書かれていたので間違いありません。お父様はマグルの孤児だろうと仰りました。

8月4日曇

ダニエルが私の杖で勝手に魔法を使いました。セバスはこれを見て、大慌てでお父様に伝えました。お父様は明日、ダニエルの杖も買っていくこうと仰りました。

8月5日曇

ダニエルは住み込みでフォーリー家の執事見習いになることが決まりました。ダニエルはウール孤児院から脱走していたらしく、それを突き止めたお父様が正式に引き取る手続きを取ってくださいました。セバスは朝からダニエルの教育に張り切っていました。

8月6日雨

従姉妹のソフィアが遊びに来ました。イケメン執事見習いがズルいと言ってきます。確かにダニエルはかっこいいですが、暇さえあれば聖句を唱えているのでうるさいだけです。

……

『

日記は毎日、文量は変動するが休まず書かれていた。俺の母さんはマメな人だったらしい。

「この中に必要の部屋の記述があつたんですよ」

「凄いけど、何か違和感があるんだよね」

「それは気恥ずかしいってことですか？　このお嬢様と執事が結ばれた結果がジューダスですから、過程を知るのは中々のものがあると思いますけど」

それとも違うんだけどなあ。何というか、形容し難い不自然さがあるというか。

俺は日記帳をしまうと、部屋の時計を見た。ロックハートとの罰則の時間はとつくに過ぎてている。

「あの、ジューダス——」

「ごめんレイン。先生に呼び出されてたの忘れてた」

「あつ……そうですか……頑張ってください」

ロックハートの部屋の前まで、大急ぎでやって来た俺は、3度戸を叩く。一拍して、入りなさいと声。

ロックハートは『私はマジックだ』を読んで待っていた。自分が書いたものを後から読み返すなんて、恥ずかしくないのだろうか。

「すみません先生。遅刻してしまつて」

「本来なら追加罰則だけど……私は寛大だからね。許そう」

このやり取りだけで、もう俺は疲れていた。今日は色々考え過ぎたのかもしれない。内容はバレンタインデーに全くそぐわないものだったけど。

疲労とは時に、発想のスパイスになるらしい。自律神経がぶっ壊れていた方が、面白いアイデアが浮かぶこともあるのだ。要するに、俺は狂氣的な罰則回避の方法を思いついたのである。

「ロックハート先生、これなんだかわかりますか？」

「それは……日記帳かな？」

「はい、俺の母の日記帳です」

ガタツとロックハートが椅子から立ち上がりかけた幻聴がした。

「そ、そのお宝……ゴホン、その日記帳を私に見せて、どうするつもりなのかな？」

「先生は母と仲良くしてくださいな。少しの間預かって貰えないかと思ひまして」

「日記帳を？」

「はい。ただ、今日は俺、もう眠いんですよね」

ベッドが恋しい。親友が恋しいんだよ俺は。

「眠いなら仕方ないね！ 罰則はなし！ 日記帳は私が預かろう！」

計略は成功。まんまと引っかけたロックハートは、俺を解放した。

しかし、なぜロックハートは俺を呼び出したのだろう。まさか俺を心配……？ いや、それはないか。

マジキチ☆ブレイクスルー

「……だりいー」

既に高く昇ったお日様の光を、鬱陶しく睨みながら俺は廊下を歩いていた。寝癖を右手で撫で付ける。昼過ぎまで寝坊してしまった。今日が日曜日で助かった。

あてもなくぶらぶらと歩いていると、俺はある違和感に気がついた。人がみんな、俺を避けていくのだ。レイブンクローやスリザリンだけでなく、グリフィンドールさえもである。ハツフルパフは言うまでもない。

ほら、今も向こうから来たチョウ・チャンが、顔を青ざめさせて俺を見たかと思うと、目を合わせないように小走りで行ってしまった。以前は俺が挨拶すると、にこやかに返してくれたのに。

俺はバルコニーに出て、湖と山々のパノラマを眺めた。2月の冷たい風が頬を刺す。淀んだ曇天が空の彼方まで続いている。

ああ、むしゃくしゃする。俺が何をしたっていうんだ。もういつそのこと、全部めちやくちやにしてやろうか。何もかも消し去りたいという、暗い欲望が湧き上がった。

「……何とも悲しい曲じゃ。これは『暗い日曜日』かのう？」

俺は振り返らなかつた。背後にいるのは見なくてもわかる。ダンブルドア校長だ。

『『暗い日曜日』がどうかしたんですか？ 俺はあの歌はあまり好きじゃありません』

「ホッホッホッ、面白いことをいうのう。今もジューダスが口笛で吹いておるじやろう」

「あっ！」

ドクンと大きく心臓が波打った。俺は気取られぬように耳を澄ます。

——哀惜に満ちた旋律。

確かに俺は、無意識に腹話術で会話しながら、『暗い日曜日』を口笛で演奏していた。

「えっ？　どんな状況だよ……？」

ダンブルドアが俺の隣に並ぶ。雲の向こうを見つめるようなアイズブルーの瞳。果たしてそこには何が写っているのだろうか。

「音楽とは何者にも勝る魔法じゃ。そうは思わんかね？」

俺は答えなかった。音楽でミカエラが戻ることはないのだ。ならば、少なくとも友情という魔法には負けているではないか。

湖畔の木が小さく見える。あそこで去年親友と話したことを、否が応でも思い出される。

「先生、ミカエラは……俺の親友は死んでしまったのでしようか？」

ダンブルドアはニツコリと笑い、杖を持った右手を左胸——心臓の上に置いた。

「ジューダス、ミカエラはここに生きておるよ」

「そんなの気休めにもなりませんよ。所詮は慰めの方便でしょう？」

俺の心の中に生きているう？　もしも本当なら、俺は心臓をえぐり出してでも会いたい。

ダンブルドアは茶目つ気たつぷりにウィンクした。

「じゃが、生きておると思っただ方が楽しいじゃろう？」

またしても俺は沈黙を保った。何度もそう思い込もうとして、しかし自分を騙しきれなかった。

ミカエラと出会ってからの二年間は、夢幻の類だったのではないか。最近の白黒の日々は、俺にそう感じしめる何かがあった。

ダンブルドアは銀色の懐中時計を一瞥し、半月眼鏡の奥を瞬かせた。

「おおもうこんな時間じゃ。儂は戻るが、くれぐれも風邪には気をつけるんじやよ」

「わかりました」

気配が消えた。俺は体感、9時間程そのまま景色を瞳に写していたが、チラチラと雪が降り始めたので振り返った。

足元に赤い毛玉が落ちていた。拾ってみると、手袋だとわかる。ダンブルドアの落とし物だろうか。

放置するのも忍びない。少々面倒だが、渡すのが優しさというもの

だろう。こう考えている時点で、俺は優しさを失っているのかもしれない。

時計塔を見ると、ダンブルドアが去ってから10分も経っていなかった。体感時間というものは、存外当てにならないものらしい。

数分前に校長が歩いた道を辿る。途中、スリザリンのセオドール・ノットとすれ違ったが、過度に避けられはしなかった。本当に『暗い日曜日効果』が働いていたようだ。

ある空き教室の前を通り過ぎた時、視界の端でチラリと何かが光った。俺は立ち止まる。さつきまで止まっていた心臓が動き出したかのように、鮮明に拍動が感じられた。芯から指先まで血が巡る。

俺は熱に浮かされたように空き教室に入った。中央に大きな鏡が座している。碧い瞳の下に濃い隈を作っている子どもが、狂気を帯びた目でこちらを見ている。もちろん俺だ。しかし問題はその隣の一

「ミカエラ……い！」

女の子にしては短すぎる黒髪、暴力的な光を宿したオレンジの瞳、病的なまでに白い肌——突然姿を消した親友が、そこに写っていた。

「ミカエラ……？」

ミカエラはただつまらなそうに、鏡の中の俺を眺めていた。死相の出てる俺を。

「こっち見てよお……」

俺が鏡に手をつくのに対応して、鏡の中の俺は手の平を合わせてくる。その顔は絶望に染まっていた。ミカエラに見てもらえてるのに、何て顔しているんだ。

俺の願いが通じたのか、ミカエラは俺を見た。そして、唇を動かす。

当然声はないし、あの汚い英語も聞こえてこない。しかし俺は正確に内容を把握していた。俺の108つある無駄特技の内の1つ、読唇術が火を噴いたのだ。

「Give birth to me again…… わかった

よ！ わかったよミカエラ！ 君をもう一度産めば良いんだね!？」

そうなんだろ!？」

気付いた時には、俺は空き教室を飛び出してた。入口にダブルドア校長が立っていたので、押し付けるように手袋を渡す。

「これ！・先生の手袋ですよね!？」

「お、おお。ありがとうジューダス。大事なクリスマスプレゼントを失くす所じゃった」

「どういたしまして！」

返事も程々に廊下を駆け抜ける。待っててミカエラ。絶対にもう一度産んでみせる。

「わからない……………」

寮の自室で、俺は腕を組んで座っていた。先程からミカエラと出会った時を、思い出そうとしている。だけど、その後の出来事が濃密過ぎて、すっかり記憶から抜け落ちてしまっていたのだ。

俺は右手で右脳の辺りを抑えた。頭が熱を持っている。

「痛い……………」

少し考え過ぎたようだ。頭痛が痛くて危険が危ない。

一旦休んだ方が良くかもしれない。俺は椅子にもたれる。ふと、机に置きっぱなしの本が目に入った。

「これでも読んで休むか」

読書は呼吸と一緒に。俺は薄めの本を手にしち上がった。

夕方の談話室。俺はパタリと本を閉じた。題は『ジキル博士とハイド氏』だ。

顔を上げると、ハーマイオニーと目が合う。少し離れた所で『幻の動物とその生息地』を読んでいたハーマイオニーが、いつの間にか俺の本を覗き込んでいたのだ。

「ごめんなさい、邪魔するつもりはなかったわ。ジューダスがあんまりにも夢中で読みふけていたから、気になっちゃったのよ」

「ああ、今読み終わった所だから。別に邪魔でもなかったよ」

「それなら良かったわ」

ハーマイオニーは安心したようにハキハキと言うと、チラチラと『ジキル博士とハイド氏』に視線を送った。読書談義をしたいのだから

うか。俺は現実逃避を終えて、ちよつとブルーなんだけど。

「それは『ジキルとハイド』ね。面白かったか教えて貰えないかしら。私、ステイブソンは『宝島』しか読んだことがないの」

「俺は逆に『宝島』を読んでないな」

「一読することをおすすめするわ。とつても面白い冒険小説よ」

「へえー。今度読んでみようかな」

「その時は感想を聞かせてくれると嬉しいわ」

ハーマイオニーは次はお前の番だと言うかの如く、好奇の眼差しで俺を見つめた。何でだろう、俺は物凄く『ジキル博士とハイド氏』の話をするのが嫌なんだが。こうなつてはしない訳にもいくまい。

「あー、この本も中々に面白かったよ」

「……それだけなの？」

「いや？ えーつと、二重人格つて知ってる？」

「それぐらい知ってるわ。一人の人間に二人の人格があることでしょ？ 『ジキルとハイド』はその代名詞になつてるわね」

「うん、物語はジキル博士の恩人とされているハイド氏にまつわる事件を、博士の親友のアタスンが調査することで進んでいくんだ。アタスンは最初、ジキル博士が容疑者のハイドを庇うのは脅迫されているからだと思っただけど……」

「実はハイドは博士の別人格だったということね！」

ハーマイオニーは手を打って言った。一瞬、周囲のグリフィンドル生の注目が俺たちを集まる。あまり目立ちたくはないんだけど。「当たらずといえども遠からずかな。要するに、この小説の面白い所は、二重人格の怪奇小説とも、アタスンを探偵役とした推理小説とも、博士とアタスンの熱い友情小説とも読めることなんだ」

「それは凄いわ！ 一石三鳥じゃない！」

ハーマイオニーはよつぽど本の話に飢えていたのか、実に良い反応を示した。グリフィンドルは体育会系が多いし、仕方ないことなのかもしれない。

「ハーマイオニー、ちよつとちよつと」

ロンがハーマイオニーを手招きしていた。表情は去年のように強

張っている。ハーマイオニーは神妙にうなずくと、極めて違和感少な
に談笑を切り上げにかかった。

「同学年でこういう話ができるのはあなただけだったから、とても楽
しかったわ。グリフィンドールの男子は本よりクディッチだし、女子
は甘ったるい恋愛小説で砂糖吐きそうなもの」

「ミートウー」

「それじゃあロンが呼んでるから私行くわね」

「シーユーアゲン」

「ちよつと適当過ぎない!?!」

ハーマイオニーは何か言いたげだったが、状況は切羽詰まっている
らしく、そのまま去ってしまった。一人残された俺は手元の本に視線
を落とす。

本の場面は丁度、ジキル博士の告白の手紙だった。ジキル博士は己
の『善を愛する性質』と『悪を欲する性質』の板挟みに苦しみ、その
果てにもう一人の自分、博士に代わって悪事を成すハイドを薬で作
り出したのだ。

「……似てる」

俺とミカエラに。動機も状況も違うが、自分を材料として新たな存
在を産み出す——大筋が酷似していた。

二重人格とイマジナリーフレンド。同じようで違う。だが、これは
ミカエラを産む手がかりになる。

俺はバネのように立ち上がった。高々と拳を掲げて。

「ヤクブーツをやるうー!」

スニッチを磨いていたウッドが、血相を変えて叫んだ。

「ついに気が触れたぞ! ハロウィーンのような被害が出る前に、
ジューダスを取り押さえろ!」

一斉に大勢の男子生徒が俺に飛びかかる。皆、悲壮な決意を目に宿
していた。

「離せ! 俺は薬物をキメなきやいけないんだ! お薬の時間なんだ
!」

パーシーが俺を羽交い締めにしようとす。耳元で怒鳴り声がう

るさく響いた。

「自棄になるんじゃない！ もつと自分を大切にしろ！」

（自家製の）脱法だからセーフだって！」

「どこがセーフだどこが！」

パーシーの手から逃れようと藻掻く俺の胴に、丸っこい体がぶつかった。ネビルだ。

「それだけは駄目だよ！ 僕は友達が薬中なんて嫌だ！」

「何泣いてんだよネビル！ ちよつと（親友の元に）トリップするだけじゃん！」

どんどん拘束が強まっていく。7人がかりでの捕縛包囲網。多勢に無勢だ。俺は怒りのあまり絶叫した。

「ぬわあああああ！ クスリイイイイイイイイイイ！」

その後、俺が解放されるまでに小一時間かかってしまった。別に俺は危ないおハーブを吸う気なぞ毛頭なかったのだが、話しても中々信じて貰えない。むしろ熱弁を振るえば振るう程、精神鑑定を勧められるのだ。なんて理不尽。

そしてパーシー率いる違法薬物取締機関グリフィンドール部の追求を躲し切った俺は、必要の部屋を訪れていた。

「クッスリー♪ クッスリー♪ バツベルツのクッスリー♪」

俺は本棚を鼻歌交じりに検分していく。『アモルテンシアで ^{I get a true love} あややとーやー』『魔法薬之書』『とりかえばや薬物語』『罪と罰と真実薬』『上級魔法薬・改訂版』『薬品棚を追放されたおできを治す薬、人体で覚醒するく今更戻ってきてと言われてももう遅いく』
「ラインナップ頭おかしいだろ！」

全く、必要の部屋って訪れた人の必要なものを出してくれる魔法の部屋じゃなかったのか？ 俺は軽く失望した。

その時、歴史が動いた。

「『薬でもう一人の自分を作る方法くドツペルゲンガー・タルパ・イマジナリーコンパニオン他く』これだ！」

勝手に殺すな

それから俺は、薬作りに没頭した。本を参考にしながら、試行錯誤していく。煮たり、焼いたり、揚げたり……時間は矢のように過ぎていった。

必要の部屋で俺がいつものように、乾燥トカゲの尻尾を切り刻み鍋に放り込んでいると、控えめにドアが開いた。

「やつぱり、ここに居ましたか……」

レインだ。脱狼薬の調合でもしにきたのだろう。俺は紫色に煮え立っている鍋を掻き回しながら、口を開く。

「ああ、ここにっつて凄く便利だよね」

レインは猛獣に近づくかのように、そろりそろりと歩を進めた。今にも消え入りそうな声で、語りかける。

「ジュ、ジューダスは何を作っているんです?」

「……魔法薬学のテスト勉強だよ。学期末試験まで近いでしょ?」

レインがテーブルに置かれた様々な材料に、素早く目を走らせた。唾を飲み込んだのか、喉が小さく動く。

「……そ、それにしても材料が特殊ではないですか? 2年生には難し過ぎると思うのですが」

「スネイプ先生は本格派なんだよ。そういうレインだって、イツチ年生で脱狼薬なんて代物を調薬してるじゃん」

「私の場合はいかに道がなかったというか……」

髪の毛をイジりながら伏し目になるレイン。俺はレインから目を離し、牛の肝臓を切り刻む。トントントントツと軽快なリズムを刻みながら、肝臓は細切れになっていった。

「ちよつ!? 何ですかその包丁さばき!? よく指無事ですな!」

「孤児院では短時間で大量に料理を作らなきゃいけないからね。自然と身についたよ」

「それにしても残像が見えるスピードは異常ですよ……」

レインは信じられない目で、高速に振り下ろされる包丁を見つめていた。何を驚いているのだろうか。猫の手にすれば、指は絶対安全な

のに。

そして、肝臓を大鍋にぶちこみ、暫くの間置いておく。すると色が紫からシヨッキングピンクに変化した。

「精神分裂薬……？」

知らぬ間にレインが『薬でもう一人の以下略』を手に取っていた。俺は出来上がった薬をフラスコに詰め、光にかざす。フラスコに歪んだ俺の顔が写った。

「その本によると、完成すると薬は真っ赤になるらしいんだけど、何度やってもピンク止まりなんだ」

「手順は間違っていないませんか？ 材料を入れる順番でかなり変わってきますよ」

「正しいはず……はず……？」

レインはパラパラと本を捲る。そしてあるページで手を止めると、声を上げた。

「あっこれじゃないですか？ マジックマッシュルーム」

「そのキノコなら入れたよ」

俺は小さな白いキノコを取って見せる。レインはキノコを受け取ると、間近で観察したり、匂いを嗅いだりした。眉根を寄せ、数秒の沈黙。

「……これ、ただのマッシュルームですよ」

「マジで？」

「マジです」

俺は膝から崩れ落ちた。マッシュルームを手に、天を仰ぐ。頬を熱い涙が伝った。

「ああキノコ、あなたはどうしてキノコなの？」

いつも通りレインは冷ややかな目をして……いない。レインは深緑の瞳を潤ませ、膝を折った。ずいっと身を寄せ、俺の手を取る。何か近い。

「わかります！ わかりますよその気持ち！ 材料を間違えるなんて、あり得ないぐらい初歩的なミス！ だからこそ悔しい！ おふざけの1つもやりたくありませんよね！ ジュリエットはやり過ぎです

が、私も枕に顔を突っ込んで叫ぶぐらいはしたことがありますよ！
ええ！」

俺は語気と比例して握力も増加していくのを感じた。レインは一息で言い終わると、慌てて手を離れた。

「す、すみません。いきなり手を掴んだりして……」

「ん？ 別に良いよ？」

俺は徐ろに立ち上がり、鍋の火を消す。グリフィンドールの赤いネクタイを直し、漆黒の杖をポケットに収めた。レインが不思議そうに、瞬きを2回した。

「どこか行くんですか？」

「マジックマッシュルームを持ってそんな人の所にね」

「~~え~~？ ハグリッドがいない？」

ハグリッドの小屋前。ケトルバーン先生は、フアングの皿にミルクを注ぎ、大義そうに腰を伸ばした。

「アイタタタ。ハグリッドはスリザリンの継承者の嫌疑がかかって、アズカバン送りになった。何かと話が合ったから、残念じゃ。知らないかったのかね？」

「ええ、友達作りに忙しくって」

レインはジト目で俺を見た。そういえば、ここに来る時も「ジューダスが何をしでかすかわかりませんから。監視です」と言っていた。信頼はゼロに等しいようだ。

フアングは一心不乱にミルクを舐めていた。

「それは良いことだ。俺も五体満足の頃はブイブイ言わせておったわい」

ケトルバーンは義手を撫でながら、包帯に覆われていない方の目で俺とレインを見た。魔法生物に突っ込んで行くから、しよっちゆう怪我をしているという噂は本当らしい。

「君はミスター・ビショップだね？ そして君はミス・フォーリー」

「ええ、そうです……」

レインは不可解な面持ちでうなずいた。多分俺も似たような顔を

していると思う。俺たちが名乗った記憶はない。ケトルバーンが、懐かしむように目を細めた。

「ヘクターは儂が危険生物をイギリスに持ち込むたびに、決まって取り締まってくる闇祓いだった。当時は煙たがったりもしたが、今となつては良きライバルじゃよ」

俺は去年贈られた写真を思い出す。仏頂面で勲章を一杯付けたヘクターさんが、ケトルバーン先生を追い回してる姿。想像に難くない。

レインが棘のある口調で言った。

「いや、教師が逮捕とか普通にアウトじゃないですか」

「せいぜい罰金刑じゃ。本当に危険な代物は……おっと、うっかり口を滑らせる所だった」

既に口を滑らせているのは俺の気のせいだろうか。いや、気のせいではない。

ケトルバーンは、俺たちの視線から逃げるように口を開いた。

「よ、要するにだ。儂がヘクターの数少ない縁者である君たちの用件を、ハグリッドに代わって聞くのも吝かではないということだ。素晴らしいことだと思わんかね？」

俺とレインは顔を見合わせた。ハグリッドならマジックマッシュルームを持っていそうだし、用途も聞かずに渡してくれるだろうと思つて俺はここに来た。

しかしケトルバーン先生は、ハグリッド同じくらいイカれているが、ハグリッドよりは倫理観がありそうだ。

「そこまで言ってくださってありがとうございます、先生。しかし俺たちはハグリッドにクリスマスのお礼をしに来ただけですから」

「5月にかね？」

「はい……ロックケーキは雪解け水でふやかしたぐらいが食べごろですから」

俺は完璧な言い訳を披露し、その場を立ち去った。次はスネイプ先生に頼みに行こう。

城へと戻る道で、レインはポツリと呟いた。

「最近のあなたは、何だかおかしいです」

その言葉がいやに大きく聞こえた。耳をこじ開けて、無理やり鼓膜を震わせているみたいだ。俺はその違和感に振り向かずに行った。

「人は変わるものだよ。成長途中の俺たちなら尚更にね」

駆け寄ってきたかと思うと、レインが俺の肩を掴んだ。強制的に向き合わされる。深緑の瞳に驚くほど無表情な子どもの顔が浮かんだ。

「この間まで鬱々としていたのに、今度は変なことに熱を上げたり……絶対におかしいです。あなたはそんな乱高下するような人じゃない。常にテンション高止まりの、絵に描いたような楽道家です」

「最近の俺はシリアスな俺なんだよ」

「このままではあなたは道を踏み外します。そんな予感がするんです」

俺は身をよじったが、レインは手を離そうとしなかった。段々と脳みそに血が昇っていくのを感じた。

「離してよ」

「嫌です。精神分裂薬を何に使おうとしているんですか？ スネイプ先生がそんな危ない薬を作らせるなら、私はダンブルドア先生……はいませんから、マクゴナガル先生に報告します」

「何だって?! ダンブルドア先生がいない!?!」

今度は俺がレインの肩を掴む番だった。レインは一瞬、肩を跳ねさせたが、大きくうなずいた。

「本当に薬に取り憑かれていたんですね。良いですか？ ハーマイオニーとペネロピー・クリアウオーターが、継承者に襲われました。その責任を取らされて、ダンブルドア先生は出ていったんです」

俺はガツンと頭を殴られた気分だった。夢から醒めたようだ。

「そ、それで？ 継承者はどうなったんだ？」

「ロックハートは『ハグリッドが犯人だ！ 危機は去った！ 第二部完！』って言ってますが……私はそうは思いませんね」

俺は特大の羞恥心に襲われた。ホグワーツが大変な時期に、俺は何をしていた？ 悲劇のヒロインぶって、妄想の世界に閉じこもった挙

げ句、スネイプ先生から危険物を盗みに行くつもりとしていたのだ。できることなら、叫びながら全裸で湖に飛び込みたい。

目の前で佇むレインを見る。毅然としているようだが、その体は小さく震えていた。彼女も覚悟を決めて、キチガイと化した俺に向き合っている。そのことに気づいた瞬間、俺は頭を下げずにはいられなかった。

「ありがとう……！」

「ど、どうしたんですか!? そんな日本人みたいにお辞儀して!?!」

「君のお陰で、大事なことを思い出せたよ」

失われた命は求めても帰ってこない。過去に囚われていると、未来を取りこぼす。こんな簡単なことに気づくのに、俺は随分と遠回りしてしまった。

「やっと次に何をすべきかわかったよ」

俺は顔を上げて、笑いかけた。久しぶりに心から笑顔になれた気がする。つられるようにレインも微笑んだ。

「力になれて良かったです」

空はどこまでも青く澄み渡っていた。イギリスの空じゃないみたいだ。

待ってるスリザリンの継承者。ミカエラとコリンとハーマイオニーとジャステインとペネロピーとミセス・ノリスの仇、必ず取ってやる。

そう決意したのは良いものの、スリザリンの継承者を俺はぶっ飛ばしあぐねていた。捜査しようにも、夜間の外出はこれまで以上に取り締まられていたのだ。

俺は談話室の机に突っ伏し、唸った。昼間、ルーナと一緒に捜査してくれたネビルが言った。

「まあまあ、焦っても良いことはないよ」

「ネビルは石にされるのが怖くないのか?」

突然、ネビルは立ち上がった。ゴトンツという音と共に、机に乗っていたインク瓶が倒れ、真っ黒い洪水がぶちまけられる。俺とネビル

は大急ぎでダムを建設し、インクを拭き取った。

「何やってんのさネビル」

「ご、ごめんね……でも僕が伝えたかったのは、石にされるのはとっても辛くて苦しいんだってこと！ ペトリフィカス・トタルスを発明した魔法使いは、世紀の大悪党だよ！」

ネビルや、去年の呪文かけ直しをまだ根に持っていたのかい？

「去年のはごめんて……ん？」

「生徒は全員それぞれの寮に戻りなさい。先生方は大至急お集まりください——」

魔法で拡声されたマクゴナガル先生の声だ。ネビルが首を伸ばして、キョロキョロと見回した。

「何かあったのかな？」

少しして、そろそろとグリフィンドール生が、肖像画を抜けて入ってきた。ただでさえ過密だった談話室の人口密度は鰻登りだ。ガヤガヤと話し声が大きくなる。

生徒たちの列の最後尾にはパーシーがいた。表情は硬い。

「グリフィンドールの生徒がスリザリンの継承者に襲われた」

パーシーの声は小さかったが、グリフィンドール生のざわめきを止める程の厳粛さがあった。室内は猫の子一匹いないようだ。アンジェリーナ・ジョンソンが辺りを憚るように、僅か言った。

「誰が襲われたの？」

「ジニーだ」

フレッドとジョージが、同時に息を呑んだ。俺はまたしても何もできなかつた事実には、気が狂いそうだった。冷静になるために、ガンツとテーブルに頭を叩きつける。

「ジューダス、気持ちにはわかるけど落ち着こう？」

ネビルに抱き起こされ、俺は渋々顔を上げた。額に手を当てる。痛い。

パーシーは、唇を噛み締めながら言った。胸のPのバッチが、鈍く光る。

「明日にも、僕たちは家に帰されるかもしれない。覚悟はしておいて

くれ」

みんなが沈痛な面持ちで首肯した。俺はウッドが悔しそうに箒を磨くのを眺めていた。パーシーが言葉を続ける。

「これから点呼をする。アリシア・スピネット」

「はい」

俺はぼんやりと点呼の様子を眺めた。なぜか俺は点呼の順番を飛ばされた。

「ネビル、なんで俺呼ばれなかったの？」

「もうジューダスはいるってわかってるからじゃないかな……頭ゴン結構目立ってたし……」

そういうものか。パーシーは次の名前を読み上げた。

「ハリー・ポッター」

沈黙。どこからもハリーの声は聞こえてこない。パーシーが焦燥を隠さずに呼びかけた。

「ハリー？ いるなら返事をしてくれ！」

どこからともなく、囁き声が広がった。パーシーは顔を青ざめさせる。最悪の予想に気がついたようだ。

「まさか！ ロン！ いるかい！」

再度静寂。大抵ハリーとロンはセットでいなくなる。パーシーはますます顔を蒼白にした。

「ということは……ジューダス！」

「いるから！ めちゃくちゃいるから！」

パーシーがほつと安堵の息を吐いた。イマイチ釈然としない。

「よし、念の為ハリーとロンが隠れていないか、手分けして探そう」

グリフィンボール生総出での搜索。探索範囲は寮の中だ。俺は一人で入り口付近を探していた。

辺りには誰もいない。脱出して継承者を探しに行くチャンス到来だ。俺は細心の注意を払って、肖像画を通り抜けた。

「あら？ こんな時にどこへ行くの？」

太った婦人が話しかけてきた。俺は至って平然と振り返る。

「ちよつと雉撃ちに」

「あら、ごめんなさい」

俺は婦人が『トイレなら寮にある』という事実思い当たる前に、全力で駆け出した。

しんと静まり返った廊下を走っていると、俺はとある問題に直面せざるを得なかった。というのも……。

「スリザリンの継承者ってどこにいるの……?」

計画性皆無！ 思い立ったら即実行！ それが俺の人生！ はあ……どうしよ……。

そして俺が角を曲がった時、事件は起きた。

「チッ、ユッ、ウッ、ツッ!?!」

足裏の柔らかい何かを踏み潰す感触。甲高くて汚い悲鳴。俺は恐る恐る足を上げた。

「ス、スキヤバース——!?!」

拳で妨害する29歳

「良かった、無事だ……ロンにぶつ殺される所だった……」

スキヤバースは苦しげに藻掻いていたが、暫くすると復活した。何かを恐れるように身を竦ませながら、媚びるような視線を俺に送る。「ど、どうしたんだよスキヤバース？」

ミミズのような尻尾をくねらせると、スキヤバースは駆け出した。10メートル程進んだ所で、立ち止まって振り返る。俺を待っているようだ。

「ついて来いってこと？」

スキヤバースに導かれるままに、俺は歩き出す。階段を下がって2階へ行き、慎重に歩を進めた。角を左に曲がろうとすると、2つの足音が聞こえる。俺とスキヤバースは手近な部屋に駆け込んだ。

ここはトロフィー室のようだ。俺は室内の沢山のトロフィーの1つになったつもりで、静かに座り込んだ。棚に背を預ける。足音はドンドン近づいてきた。

「……ミネルバ、本当にロックハートに任せて良かったのか？」

ケトルバーン先生だ。俺は息を殺して、耳を澄ます。マクゴナガル先生の声。

「あの者には良い薬でしょう。もつとも、恐れをなして逃亡するかも知れませんが」

「違くない。ダンブルドアは何のつもりであのペテン師を雇ったのか、儂にはとんとわからんな」

「きつと深い考えが……」

2人の音は遠ざかっていった。完全に聞こえなくなってから、俺は廊下に顔を出し、右左右と安全を確認する。スキヤバースに向かって親指を立てた。

「オールクリアだ」

俺たちは隠密作戦を再開した。幸いにも、最大の脅威であるピーブズにも遭遇せずに、スキヤバースの目的地に辿り着いたかに見えた。俺は入り口を呆然と見る。

「あ？　んん？」

女子トイレである。スキヤバースは躊躇わずに突入していった。あいつメスだったのか。

兎にも角にも、ここまで来てしまったのだ。俺は頬を叩いて、未知の領域へと足を踏み入れた。

中央の蛇口台の前でスキヤバースは待っていた。なぜかポツカリと大穴が開いている。底が暗くて見えない程に深い。

「これに飛び込めって？」

スキヤバースは大きく肯った。地獄への片道切符が発行された瞬間である。

「今度は誰？　アラ、見ない顔ね」

トイレの奥から半透明の女の子が浮いてきた。近場の便器に座ると、ジロジロと俺を眺め回す。

「俺はジューダス・ビショップ。スリザリンの継承者をぶっ飛ばす者だ」

「あなたが変人で有名のジューダスなの!?　見た目は案外マトモね」

俺は全部マトモなのだが……。しかしここで論戦を繰り広げる時間はない。俺は口を開く。

「ハリー・ポッター見なかった？」

「見たわよお。この目でしつかりと。確か10分ぐらい前だったかしら。勇敢にも飛び降りていったわあ」

ゴーストは頬に手を当てて、うっとりと言った。俺は空気が大穴に流れ込んでいるのを確認すると、縁に足をかける。

「教えてくれてありがとう2人とも。生きて帰ったら何かご馳走するよ」

「いや、あたしはゴーストだから食べれな……」

「それバンジー」

俺は鳥のように羽ばたき、重力に従って自由落下を始めた。最後にスキヤバースと目が合った気がした。

矢庭に衝撃。乾いた音を立てて俺は下に着地した。痛む尻を払い、

立ち上がる。何気なく地面を見た。

「うわっ」

辺りは小動物やら何やらの骨でびっしりと埋まっていた。趣味の悪いクツシヨンド。俺はなるべく音を立てないように、忍び足で先へ進んだ。

中は洞窟のように薄暗い。どこかで水滴の落ちる音が、規則正しく響いていた。謎の骨が定期的に俺の心臓を驚かせた。

暗がりから、突如真っ白い大蛇がぬつと現れた。俺は絶叫を飲み込み、飛び上がる。

「た、ただの抜け殻か……」

改めて見てもデカイ。スネイプ先生10人分ぐらいはあるのではないだろうか。こいつがスリザリンの怪物なのかもしれない。

俺は抜け殻を跨いで乗り越える。少し進むと、遠くに人影が見えた。追いついたのか？

逸る気持ちを抑え、あくまで静かに駆け寄る。近づくとつれて、人影がハッキリとしていった。よく手入れされたブロンドの髪、目立つローブの後ろ姿。

「先生、いたんですね……!」

ゆつくりとロックハートは振り返った。俺の姿を認めると、爽やかな笑みを浮かべる。

「やあ、ミスター・ビショップ。こんな所でどうしたんだい？」
「継承者をぶっ飛ばそうと思ひまして……」

俺はロックハートの背後に目を向けた。瓦礫で道が塞がっている。行き止まりだ。

「それは危ないなあ。私が代わりにぶっ飛ばしておくから、君はもう戻りなさい」

ロックハートは一步、俺の方へ足を踏み出した。その手にはテープで補強された折れた杖が握られている。ロンの杖？

俺は口の中が渴いていくのを感じた。何かが妙だ。俺はロックハートに合わせて、後退った。

「先生、ハリーとロンは一緒ではないのですか？」

「んー？ 知らないねえ。談話室にでもいるんじゃないかい？」

その時、視界の端に赤毛が入った。ロンがうつ伏せで倒れている！

「ロンー！」

「オブリビエイトー！」

俺が叫ぶのとロックハートが杖を振るのは同時だった。緑の閃光を間一髪の所で避ける。ロックハートは上半分が消し飛んだ杖を、忌々しげに睨んだ。

「チツ、これだから貧乏人は」

残った柄をロックハートは放り捨てた。軽く右手を振る。逆噴射の衝撃を受けていたようだ。

俺は茫洋と目の前の男を眺めていた。疑問が勝手に口を衝く。

「あなたは、誰？」

ロックハートは口の端に嘲笑を浮かべた。この状況がおかしくつて堪らないと言わんばかりに。

「クツクツク、面白いことを訊くなあ。私はギルデロイ・ロックハート、勲三等のマーリン勲章を授与され、闇の力に対する防衛術連盟の名誉会員で、週刊魔女のチャールミングスマイル賞を5回連続で受賞した男さ」

また一步、ロックハートは近づいてきた。俺は一步分距離を取る。本能はとつくに警鐘を鳴らしていた。逃げろと。

「あなたはロックハート先生じゃない」

「ふーむ、やはりナルシストになりきるのは至難の業らしいな。気持ち悪い副作用も出るし……」

この男は何を言っている？ この男の目的は何だ？ どうすればロンを助けられる？ ハリーはどこだ？

「ロンとハリーは無事ですか？」

「大丈夫。そのウィーズリーは失神させたただけだ。もつとも、別のウィーズリーとポッターは死ぬだろうけどね」

ロックハートの言動が、ますます俺を混乱させた。男は悦に入るように、目を三日月型に細める。

「ああ、他人の不幸は蜜のように甘い。夜が明ければ、ホグワーツは終

わりだ」

この男と話しても無駄だ。幸いこつちには杖がある。俺はロックハートに杖を突きつけた。

「退いてください。俺はこの先に行かなければならない」

「無駄さ。この瓦礫はどうにもならないよ」

俺は杖を持っていない左手を瓦礫にかざした。意識を手の平に集中させる。黒い渦が集まっていった。そして――

「ミカエラパワーッ！」

黒と橙の竜巻が、瓦礫の山を砕き、道を切り開いた。俺はダラリと腕を垂れ下げる。結構疲れるなこれ。

呆氣にとられていたロックハートは、手を額に当てた。

「奴がいなくても使えるのかい？ 興味深いな」

「じゃ、俺はこれで」

何か言っている気もするが、事態は一刻を争っている。俺は極めて自然にロックハートの前を通り抜けようとした。

「待つんだ」

ロックハートが立ち塞がる。俺は精一杯の敵意をこめて、睨みつけた。

「もう一度言います。退いてください」

「聞き分けの悪い子は嫌いだよ」

ロックハートは拳を握りしめた。俺は危険を感じて飛び退く。遅れて拳の風圧。

「おっと、失敬」

「何で邪魔するんですか!？」

ロックハートは顎に手を当てて、言った。

「んー、ダンブルドアへの当てつけ、かな？ やられたらやり返す的な」

「動機が軽い！」

しかし絶好のチャンスだ。俺は動きを止めているロックハートに、杖を向けた。

「インカーセラス！ 縛れ！」

縄が畝りながらロックハートへ飛んでいく。ロックハートはため息をつくくと、瓦礫の石を拾って、投げつけた。縄が石を縛る。

「危ないなあ。こっちは杖持ってないんだからさあ」

ロックハートは踏み込んだかと思えば、一瞬で間合いを詰めて来た。俺は半狂乱になって、滅茶苦茶に杖を振り回す。

「な、な来そーッ！ インカーセラス！」

縄はロックハートを掠りもしなかった。眼前に迫る、恐ろしい笑み。

「どこ狙ってるんだい？」

衝撃。俺は吹っ飛ばされ、地面に叩きつけられた。腹パンされたと気づいたのは、その後だ。

「い、痛い……」

「君は弱い、余りにもね。これで継承者と戦うつもりだったんだから、とんだお笑い草だ」

俺は痛む身体に鞭を打ち、ヨロヨロと立ち上がる。良かった、右手の杖はしっかり持つてる。

ロックハートは勝利を確信しているようだ。愉しむように、ゆつくりと接近してくる。

「どうしたんだ？ さつき瓦礫を砕いたアレを使えば良いじゃないか。出し惜しみか？」

使わないんじゃないんで使えないんだ、と言いたかった。ミカエラパワーは制御も発動も難しい。ちよつとでも気を抜くと暴走してしまいそうだし、気を張り詰めると出てこないのだ。

弱腰になればやられる。俺は再度、ロックハートに杖を振るった。

「ウインガード・レビオーサ！ 爆破！」

易易とロックハートに躲かされてしまった。小馬鹿にしたような笑みを浮かべ、拳を振り絞る。

「まるでバカの一つ覚えだね。少しは学習したらどうだ？」

またしても腹パン。執拗に同じ場所を殴ってくる。俺はロックハートの足元に崩れ落ちた。

漆黒の杖が、地面に転がる。ロックハートはヒョイとそれをつまみ

上げた。

「随分と短い杖だね。知ってる？ 20センチよりも短い杖の持ち主は、人格破綻者が多いらしいよ」

「ハア、ハア、やめろ……」

俺は必死に手を伸ばす。大切な杖を取り戻すために。ロックハートの皮を被った何者かは、喜色満面に俺の手を踏みにじった。

「よし、君の大事な杖で、君のホグワーツでの記憶を刈り取ってあげよう。この身体は忘却呪文だけは得意なようだしね。オブリビ——」

徐々に杖の先に緑の光が集まっていく。絶体絶命のピンチ。しかし俺はそれを前にして、全く別のことを思い出していた。

『——月桂樹の杖は主人以外が使おうとすると、こうして雷を落とす性質があるのじゃ——』

漆黒の雷撃がロックハートの脳天を襲った。一面が明るく照らし出され、不規則に影法師が踊る。

「アババババババ——!?!」

ドサリと仰向けにロックハートは倒れた。白目を剥き、気を失っている。よろめきながら立った俺は脈を測り、呼吸の有無を確認する。

「生きてるならヨシ——」

ロックハートの様子はおかしかつた。きつと誰かに錯乱呪文か懐柔呪文でもかけられたのだろう。多分。

俺は杖を拾い、労るようにローブで土埃を拭う。先に広がる闇を見据えた。

「ありがとうミカエラ、オリバンダー。この幸運、無駄にするもんか」

バジリスクタイム

暗闇をひた走っていると、俺は広い空間に出た。巨大な老人の顔面像の前で、青年が一人佇んでいる。床には、さっきのロンのように倒れているジニー。

「誰だ!？」

「……それは僕のセリフじゃないか？」

青年は困惑した顔で言った。しかし俺の胸元のロザリオを見咎めると、目を細めた。

「その十字架……なるほど、君は忌々しいビショップの息子か」

「そうだ。そして君はスリザリンの継承者だ。友達の仇！ ぶっ飛ばしてやる!」

俺は即座に掴みかかろうとしたが、体が動かない。青年が手で押し留めるジェスチャーをしたのだ。

「まあ待ち給え。話でもしながら、魔法界の英雄が殺される様を見ようじゃないか」

青年が杖を振ると、豪華な椅子が2脚現れた。俺は強制的に座らされる。パチャパチャと水溜りを踏む足音と、何かが這いずる音が聞こえた。

「この音は?」

「ハリー・ポッターがバジリスクから逃げている音だよ」

「何だとおっ」

俺は藻掻くが、見えない手で押さえつけられたかのように動けない。椅子がガタガタと鳴った。

青年は俺の対面の椅子に腰掛けた。深く背もたれに身を預ける。その間もガタガタが鳴り続けたのは言うまでもない。

「さて、落ち着いた所で自己紹介といこうか」

「全然落ち着いてないよ?」

「僕はトム・マールヴォロ・リドル。君は?」

「……アルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドアだ」

リドルと名乗った青年は、乾いた笑い声を漏らした。しかし空気は依然、張り詰めたままだ。目が笑っていないし、むしろ赤い。

「僕の前でその名を吐くとは、流石は父親と同じグリフィンドールということか。ジューダス」

「あれ？ 俺、名乗りましたっけ？」

「ああ、君は正直に話してくれなさそうだからね。心を覗いたんだよ」俺は一気に頭が冷えるのを感じた。どうやらリドルはチーターのようだ。

リドルは少し身を乗り出し、俺と目を合わせた。赤い目の輝きが増していく。

「フッフ、ジューダス、君がどう打開しようと考えているのか当ててあげよう。……ん？ 何だこの鶏は？」

困惑感丸出しでリドルは眉尻を下げた。珍獣を眺めるような目で、目の前に座っている男を見る。俺は聖母も裸足で逃げ出す笑顔で言った。

「トムって鶏を飼ってたから、名前聞いて思い出したんだ」

リドルは全身を小刻みに震わせた。ゆっくりと椅子から立ち上がる。顔は憤怒の色に染まっていた。

「貴様……！ この僕を……！ この僕を畜生扱ったこと、後悔させてやる……！」

ハリーの杖をリドルが空中に振るうと『Tom Marvolo Riddle』の金の文字列が空中に浮かび上がった。ゆっくりと文字は移動していき、別の意味を形作る。『I am Lord Voldemort』俺は息を呑んだ。

「フッフ、やつと気づいたようだね……。そう、僕は泣く子も黙る闇の帝王だ……」

「ハリーにもドヤ顔でやってそう」
「き、貴様あ……！」

再びリドルの顔が赤みを帯びる。頬はヒクヒクと引きつり、爆発寸前だ。しかしそれこそが俺の狙いでもある。名付けて、闇の帝王激おこぶんぶん丸作戦。成功すれば冷静さを欠くこと間違いなしだ。

「余程死にたいようだな。ハリー・ポッターは後回しだ。
『^{バジリスク}シューシュー』」

リドルがシューシューと言うと、どこからともなく大蛇が這い出てきた。鋭いハリーの声が響く。

「ジューダス！ 目を閉じるんだ！ バジリスクと目を合わせちゃいけない！」

「オーケー、でも何で？」

「死ぬ！」

「それは不味いや」

俺は可及的速やかにハリーの言葉に従うことにした。素早く瞼を下ろす。これで視界はゼロだ。

何か大きなものが近づいてくる気配を感じる。俺は躓かないようにゆっくりと後退った。リドルの勝ち誇った声。

「終わりだ、ジューダス。『^{あの狂人を殺せ}シューシュー』」

俺は高音で口笛を吹いた。2時の方向から反射した音が耳に入ってくる。俺は正反対の向きに飛び退る。

「何ッ!？」

リドルの反応から察するに、上手く避けられたようだ。俺はソナーのように口笛を駆使して、バジリスクの位置を把握した。これなら目が見えなくても回避はできる。リドルのイライラした声が漏れた。

「ええい、小癩な。アバダ——」

「させるか——！」

「邪魔をするなポッター！」

ソナーは揉み合うハリーとリドルを正確に知らせていた。俺は後転してバジリスクの噛みつきをすり抜け、叫ぶ。

「ハリー！ バジリスクに弱点はないの？」

「弱点？ そんなのある訳……雄鶏だ！ 雄鶏の鳴き声が弱点だった！」

「無駄さ！ 雄鶏はそのジニーがみんな殺したからね！」

雄鶏の鳴き声か……。ハグリッド、やっぱり鳥語は義務教育にすべきだ。俺は雄鶏の鳴き声を出した。

「クックドゥードゥルドゥー！」

辺りが静まり返った。バジリスクが狼狽える気配がする。俺は続けて言った。

「ココリコー！」

バジリスクが尻尾を巻いて逃げていく。リドルの悲痛な叫びが反響した。

「なぜ貴様は雄鶏の完璧な声真似ができるんだ!？」

俺は目をパツチリ開き、リドルを見据えた。ハリーと取っ組み合いをしていて、もみくちやになっている。俺は拳を振りかぶって駆け出した。拳は黒い靄を纏っている気がする。

「これが種族を超えた友情の力だからだー！」

思い切りリドルを殴り抜いた。ハリーがパツと手を離すと、リドルの身体が後ろによろめく。リドルは頬に手を当てて、俺を睨みつけた。瞳孔が開き切っている。

「殴ったな！ この僕を！ ダンブルドアにも殴られたことないのに！」

「今のはミカエラの分！ 次はハーマイオニーの分！」

「や、やめろお！ こっちに来るなーっ！」

リドルの放った緑の閃光が俺の顔の横を通り抜けた。俺は肝を冷やす。あれ当たったら絶対駄目な奴だ。

ハリーが遠くを指さしたかと思えば、急いで目を閉じた。

「またバジリスクが来たー！」

「俺に任せて。コケー！」

しかしバジリスクが退散したような雰囲気はない。俺は口笛ソナーで状況を確認し、ハリーの手を引いた。刹那、バジリスクの尾がハリーの居た場所を通り過ぎる。

「雄鶏の鳴き声が効かない!？」

「僕が2度も同じ手を食う程愚かだと思ったか？」リドルが言った。

俺はハリーの手を引いて走り出した。狙いをつけづらいようにジグザグで駆ける。リドルの高笑いが木霊した。

「せいぜい僕を楽しませてくれよ！」

「助けて……誰か助けて……」

ハリーは眩き続ける。まるで夢遊病者だ。俺は望みをかけてトムの鳴き真似をするが、やはり無意味に終わった。詰みである。

「ああ畜生っ！ ミカエラがいれば……」

その時、どこからか美しい音楽が聞こえてきた。リドルの哄笑がピタリと止む。ハリーが言葉を漏らした。

「フオークス？」

不死鳥はハリーの肩に留まると、俺の杖に顔を近づけた。玉のような大粒の涙が、一滴杖に落ちる。ドクンと心臓が高鳴った。この懐かしい気配は……！

『バジリスク、待て
『シユーシユー』』

俺の杖から、手から、全身から、夜空のような黒と橙の靄が滲み出る。それらは渦巻きながら一つになり、人の形を紡いでいった。漆黒の髪、全てを焼き尽くすような目。俺は呆然と彼女を見る。

「ミカエラ……！」

「完全復活って所かア？ ん？ 何泣いてんだよ、ジューダス」

「だって、だってえ……」

俺は止めどなく流れる涙を拭い、気合で止めた。人間、極限状態では何でもできるものだ。

ハリーは突然、あつと声を上げた。

「き、君はあの写真の！」

「アア、オレはミカエラ。はじめまして、主人公クン？」

ミカエラはそう言ってお辞儀するやいなや、バジリスクの方へ向かって手を握りしめた。怪物が悲鳴を上げ、悶える。目潰しが決まったーッ！

「今のはちよつとした挨拶だ。クリスマスの時はよくもやってくれたなア」

ミカエラは三流悪役のように口角を吊り上げた。リドルが齒ぎしりする。

「貴様は僕が直々に殺したはず……まさか……！」

「クハハハ、不死身なのはお前だけじゃねえってこった」

ミカエラが高速でリドルに飛んでいく。両手から嵐が吹き荒れ、リドルに肉迫した。リドルが咄嗟に杖を振ると、嵐は左に逸れ、サラザール像の顎を削った。

「貴様！ この像がどれほど貴重なものかわかってるのか!？」

「スリザリンのプライベートルームが重要文化財イ？ 笑わせるな」

『あの小娘を八つ裂きにしろ
「シユューシユュー」』

リドルは命令したかに見えたが、当のバジリスクは頭を持ち上げて右往左往するばかりだ。苛立たしげにリドルは叫ぶ。

『何をしている！ 臭いでわかるだろう！ 殺せ！
「シユューシユューシユューシユュー」』

そこからは怪獣バトルが始まった。バジリスクの毒牙をミカエラが躲し、お返しに魔力の奔流を太い胴に叩き込む。そこにリドルの失神呪文の横槍が入った。軽く吹き飛んだミカエラをフォークスが優しく受け止める。

「痛えなあ」

「逝つてくれると僕は楽だけどね」

俺とハリーは流れ弾に当たらないように、部屋の隅に隠れていた。すぐ近くの壁を死の呪文が焦がす。冷や汗が頬を伝った。

ハリーが這いつくばって、俺に顔を寄せた。緑の目はある種の覚悟を宿したかの如く、静かに光っている。

「ジューダス」

「何？ 俺は今路傍の石ごっこで忙しいんだけど」

「何か僕らで助けられることはないかな？」

「助けられること？ 俺たち一般人があの間に入って出来ることは、ミンチになって美味しく頂かれることだけだよ」

「だからってこのままミカエラに任せるだけで良い訳ない！ 見て！」

ミカエラはリドルとバジリスクのコンビネーションを前にやや劣勢のようだ。フォークスも大蛇の気を引こうとしているが、ミカエラと微妙に噛み合っていない。

それもそのはず。ミカエラの真骨頂は膨大な魔力を背景にしたゴ

り押しだ。上手く呼吸を合わせないと、あつという間にフレンドリーファイアを食らってしまう。だから、ミカエラは攻撃を控え目にせざるを得ない。

俺たちは徐ろに立ち上がった。頷き合い、拳を握りしめる。右手の杖が勇気を与えてくれた。

「うおおお——！」

雄叫びを上げ、どちらからともなく走り出した。バジリスクの尾がドンドン迫ってくる。あと百メートル、あと数十メートル、あと——

「いや、危ねえーッ！」

俺は寸での所で前転回避した。普通に薙ぎ払ってきたぞあの蛇。ハリーが直撃して吹き飛ばされるのが、視界の端に入る。しかし振り返る余裕はない。

バジリスクが鎌首をもたげ、大きな口をあぐりと開いた。血のような赤で目の前が一杯になる。シューシューと先端が二股に分かれた長い舌が、出たり入ったりしている。目のあつた場所は虚ろで、それが不気味さに拍車をかけていた。

「アホジューダス！　なんでこっちに来た!？」

食われる間隙で俺は空に攫われた。チューベローズのいい匂いがする。ミカエラだ。オレンジの瞳は細められ、少し怒っているようだ。

「ミカエラを助けたくて」

「いいか、頭が鶏並みに足りねえジューダスにもわかるように言つてやる。お前はオレの弱点なんだよ」

「つまり俺はアキレスの踵と同じだってこと？」

「やかましい。下のリドルを見てみる」

リドルは俺たちを見上げて、実に爽やかな笑みを浮かべていた。その顔にどこか薄ら寒さを感じているのは、俺だけではないだろう。

「そんなに君はジューダスが大事なんだね。スリザリン像のお返しだ」

バジリスクと緑の閃光が、一齐に俺を目掛けて襲いかかる。ミカエ

ラは旋回しながら避けまくった。抱き締められる力が強まるのを感じる。

「ごめんミカエラ。俺なんかが出しゃばったせいで」

「謝るな。どの道、ジューダスがそばに来なきや、魔力不足でオレの魂は今度こそ木っ端微塵だった」

やっぱりミカエラは優しい。嘘をついて俺を慰めようとしてくれているのだ。俺はローブを切り裂いた緑の軌跡から目を背けて、口を開く。

「本当にミカエラが戻ってきてくれて良かった……」

「バカ野郎。オレは簡単には死なねえよ。この半年間落ち込み過ぎだろ」

俺はバツとミカエラの顔を見上げた。飛行に集中しているのか、白い喉から顎までしか見えない。みるみる俺の顔に熱が集まっていく。

「あ？ 見てたの？」

「さあな。お前とその杖が、オレの魂を現世に繋ぎ止めた、とだけ言うておく」

もうあの時期は黒歴史なんだけど。ミカエラにまで知られてたとか……。辛すぎる。

そこでにわかにミカエラは急停止した。ふと、下を見ると、剣を手にしたハリーがバジリスクに切りかかっていた。一時的にリドルの意識が俺たちから外れる。

「ジューダス、今がチャンスだっつのはわかるな？」

「俺は領いた」

「いちいち口に出さなくていいから」

ミカエラはため息にも深呼吸にも見える謎呼吸をした。やっぱりイマジナリーフレンドはエキセントリックなのだろうか。

「まあ良い。ちよつとお前の身体借りるぞ」

「えっそれってどういう……」

その言葉と同時に、繭の如く靄が俺たちを包み込んだ。肌を這っていく混沌。視界がミカエラで塗り潰される。

「本当は使いたくなかったんだがな。あの極太蛇をぶつ殺すにはコレ

しかねえんだ。気張れよ」

俺は自分が魔法に変換されていく、奇妙な感覚に襲われた。徐々にオブスキュラスと一つになっていく。しかしそこに不安はなかった。元々の姿に戻るだけなのだから。

衝撃波とともに視界が開ける。『俺たち』は変わらず宙に浮いている。闇の魔力の化身として。

『継承者ぶっ殺』

急降下。バジリスクに体当たりせんと迫る。しかし蛇のようにバジリスクは避けてしまった。何だよ蛇のように避けるって。バジリスクは蛇だろ。勢い余って床に激突。

「正体を現したな！ 化け物め！」

リドルは魔法で剣を操作し、ハリーと切り結んでいる。しかしハリーの輝く白銀の刃で、面白いようにスパスパと剣は両断されていた。何でだろうか。お前本当にグリフィンドール生かア？ アレは伝説のグリフィンドールの剣だぞ。なるほど、そういうことか。

……先程から俺とミカエラの思考が統合されているようだ。ノイズが混じって戦いに集中できない。うるせえなア！ コツチはキチガイの戯言を直接垂れ流しだぞ！ キチガイって誰？ ……お前もう黙れ。

このままでは何も始まらないので、とりあえずミカエラパワーをバジリスクに向かってぶっ放す。……なア。バジリスクの脇腹が抉れた。強い。おいちよつと待て、ミカエラパワーって何だ？ ……………無視すんなよ！

「バジリスクっ！」

リドルがハリーから目を逸らす。そこをハリーの袈裟斬りが決まった。痛そう。ざまアねエな。

バジリスクが最後の抵抗と言わんばかりに暴れる。俺たちは自在に変形して攻撃をいなし、魔力の塊を叩き込んだ。

「キシヤア——ツ!!」

断末魔。バジリスクの巨軀が爆ぜる。強敵だった。汚ねエ火花だ。バジリスクの牙が一本、ハリーの足元に転がる。

「ハアハア、リドル……」

「中々やるじゃないか、ポッター……」

向こうでは腕を抑え、苦痛に顔を歪めるリドルと、息も絶え絶えなハリーが睨み合っていた。牙を拾ったハリーがフラフラと、日記帳の方へ歩く。ハリーの意図に気づいたリドルが、顔を真っ青にして叫んだ。

「やめろ！ ポッター！」

血塗られた牙が、ドス黒い日記帳に突き刺さった。

その後、リドルの日記帳が完全破壊されたのを見届けた『俺たち』は気絶した。次に目を覚ましたのはマダム・ポンフリーの医務室。いつの間にか合体は解除されており、直ぐ側の空中で寝顔を見せるミカエラの姿があった。

……それにしても、あの力、あの全能感。癖になりそうだ。

「こんばんはジューダス、体調はどうじゃ？」

音もなく現れるダンブルドア校長。今ので俺の寿命が一分は縮んだと思う。

「スーパールウルトラハイパーミラクル元気です」

「それは良かった。後でミス・フォーリーとミスター・クリービーには真っ先に顔を見せてあげなさい。毎日お見舞いに来ておったからさう」

「レイン・クリービーが!? いい後輩を持ったなあ」

ニッコニコでダンブルドアは俺へのお供物を眺めている。メツセージカードの話題で、俺の雄鶏の鳴き真似の方が身の心配よりも人気なのは何なんだ。

「先生、一つ、いや二つ、やっぱり三つぐらいお尋ねしてもよろしいですか?」

「いくつでも構わんよ」

「ロックハート先生のことなんですけど……」

「あのペテン師がどうかしたって?」

ミカエラも起きたらしい。寝ぼけ眼を擦っている。

「俺、リドルの前に様子のおかしいロックハート先生と戦ったんですよ」

「ロックハートはいつも様子がおかしいだろ」

「これがその時の傷です」

俺は腹パンされた所を見せようと、病衣を捲る。だがお腹には痣一つなかった。おのれマダム・ポンフリー！ 名医過ぎる！

「ギルデロイはほとんどの記憶を失って、聖マング魔法疾患傷害病院に入院したのじゃ」

ミカエラがポンと手を打った。

「アアそういうことか、ロックハートは分霊——」その可能性も考えたが、痕跡は全く見つからなんだ」

「となると、一気に迷宮入りだなア」

俺の頭越しによくわからない会話を繰り広げないで欲しい。寂しいだろうが。

ダンブルドアはアイスブルーの瞳で俺を見据えた。俺の碧眼とは微妙に色が違う。

「早速答えられなくてすまないのう。ギルデロイが記憶喪失になった今、真実を知る方法は限られておるのじゃ」

「まあ仕方ないですよ。ハリーとロンとジニーはどうなったのですか？」

「三人とも無事じゃ。今も学期末パーティーを楽しんでおるよ」

俺は布団を跳ね除け、ベッドから飛び上がる。大慌てでスリッパを突っかけ、そして盛大にすっ転んだ。

「おいおい、どうしたアホのジューダス」

「年に一回の学期末パーティーだよ!? 況や参加せんや!」

ダンブルドアが苦笑交じりに口を開く。

「既にポピーの許可は取っておる。存分に楽しんできなさい」

「ありがとうございます先生！ 行くよ、ミカエラ!」

俺はミカエラを伴い、ゆっくりと歩き出した。病衣の襟を整え、寝癖を撫でつけながら——

「バカ、その格好のまま行く気か?」

——流れるように回れ右をした。

クリフハンガーの聖人 一級フラグ建築士

フォーリー邸の一室。テーブルを挟んで、二人の漢が頭脳戦を繰り広げていた。

「チエック」

グリム・フォーリーの置いたルークが、俺のキングに王手をかける。俺は頑固者の白キングを何とか説得して、ルークの射程圏外に逃れた。

俺とグリムは魔法使いのチェスで遊んでいた。親睦を深めるため、俺から提案したのだ。

「チエック」

今度は黒のナイトが、俺のキングに肉薄する。対戦前の俺は、手加減をしてあげようなどと考えていた。しかし、すぐに過ちだったと気付かされた。グリムはすこぶるチェスが上手い。

俺は数少ない生き残りである、ビシヨップに賄賂を渡してナイトを討ち取らせた。

「チエック・メイト」

そのビシヨップを、ポーンから成ったクイーンが轢き殺した。俺は必死に勝ち筋を探すが、どう見ても詰みだ。

「降参降参。いやー、グリムは強いなー！ 本当に人生一周目？」

チェス盤を挟んでちよこんと座っているグリムが、深緑の瞳を左上に逸らした。

「……いっぱい遊んでるだけだよ」

「本当かー？ 俺も親友に鍛えて貰ってたんだけどなー」

「……お義兄………ジューダスはサクリファイスをしなさ過ぎだよ。全部を守ることなんてできないんだから」

「これまた親友と同じことを言われてしまった」

ミカエラに見られなくて良かった。5歳も年下の子に、チェスでボコボコにされたなんて知られたら、何を言われるかわからない。最悪

ミカエラの鬼畜ブートキャンプが開催されてしまう。

グリムが俺の背後をじーっと見つめる。何事かと俺が見つめ返すと、少年は奥歯に物が挟まったように言った。

「……その親友の人って……いや、何でもない」

「ドチャクソ続きが気になるんだけど?」

「……あのロングボトムの人かなって思ったただだから」

「ああーネビルかー」

ネビルも俺の親友だ。というか俺の基準が、一言でも会話交わしたら友達、二言目で親友だからな。

となると、ネビルよりも付き合いの長いミカエラは何なのだろうか。大親友? ソウルメイト? イマジナリーフレンドはそのままだし……。

俺が自分の中でのミカエラのポジションについて真剣に考察していると、グリムがおずおずと口を開いた。

「その、ジューダスは、もしもこの世界が5分前に創られていたとして、あり得ると思う?」

「随分唐突だな」

「……親友についてだけで、こんなに時間かけてるジューダスなら、どう思うのかなって」

もしも世界が5分前に創られていたとしたら、か。俺は腕組みをして、天井を仰ぐ。難しい問だ。

グリムは白のビショップを弄びながら、チラチラと俺に注意を傾けている。

「俺は5分以上前の記憶がある。だから世界は5分前に創られてはいない」

「その記憶も5分前に創られたとする」

「ええっ!? そんなのあり!?!」

嬉しそうにグリムは首肯した。それに合わせてサラサラの灰色の髪が揺れる。

対して俺は、密かに闘志を燃やしていた。これはグリムからの挑戦状だ。この世界が5分前に創られたなどという、ふざけた仮説を破れ

るか試されているのだ。なんて恐ろしい子。

「じゃあ歴史！ 歴史が昔から続いているから——」

「その歴史も5分前に創られたとする」

「おい！」

やりたい放題じゃん。ビンズ先生キレるぞ。あの人、キレた所見たことないけど。

俺はのつぽの古時計を眺めながら、眉間にシワを寄せて考える。哲学やってる大昔のギリシャのおっさんたちも、こんな気持ちだったのだろうか。

ゆつくりと古時計の分針が6から7を指した。そこで俺は会心の一撃を思いつく。

「はい！ グリムがこの質問をしてから5分経ったので世界は5分前に創られていますーん！」

「僕が質問をしたという記憶も5分前に創られたとする」

「うおい！」

おのれ世界！ 貴様のせいでこの説まで破壊されてしまった！

俺は机に突っ伏し、目を瞑る。ああ、この世界は5分前に創られてしまった。俺たちが今まで積み上げてきたものは、全部無駄だったのだ。道は続かない。

後頭部に軽い衝撃を感じて、顔を上げる。訝しげにこつちを見るグリムと視線が交差した。チョップしたのはグリムではない？

視線を斜め上にスライドさせると、呆れた顔のミカエラが浮いていた。いつの間に来ていたのか。

「アホ、その説を証明しろって言ってみろ」

「その説を証明してみせてよ」

グリムは一瞬、間の抜けたように目を丸くした。そして自信満々な俺の表情を見て取ると、クツクツと喉を鳴らす。

「そう。この説は反駁できないが、証明することも不可能。神でなければわからない……」

「ん？ どうしたグリム？ 急に黙り込んで」

「……何でもないよ。それよりほら、今度は別のゲームしない？ ゴ

ブストーンなんてどう?」

「イイネ!」

後からやって来たレインも交えて、俺たちはゴブストーンを楽しんだ。ゴブストーンとは、マグルのおはじきみたいなもので、負けた者にはくっさい液体を吹きかけられるという罰ゲームが待っている。

大体何時間遊んだだろうか。すっかり日が暮れてしまった頃、ガチャリと大部屋のドアが開いた。特注の椅子型小箒に乗ったウサギが、ひよっこり顔を出す。

「うわ臭っ! 何だこの悪臭は! 亡者でも出たのか!?!」

「あー……」

俺はあたりを見回す。部屋の至る所にシミが付いてしまっていた。ミカエラが苛立たしげに頬杖をついている。多分ゲームに混ざれなかったからだろう。初めは渋っていたレインの白衣もビショビショ。グリムと俺は言わずもがなだ。

ウサギの雷が落ちた。

「何で室内にゴブストーンがあるのだ! 常識はどうなってるんだ常識は! 貴様ら禁じられた室内で平気で遊んでるではないか! わかってるのか!?!」

「……ごめんなさい」

さつきまでの浮ついた気持ちは吹き飛んだ。たしかに軽率だったかもしれない。俺たちは皆一様に肩を落として謝る。ヘクターが大きく息を吸った。

「セヴァアアアアアアアアアス!!」

「御意」

糸目の屋敷しもべ妖精、セバスがバチン! と大きな音を立てて現れ、たちまち部屋の惨状をなくしてしまった。すっかり元通りだ。

「レイン! グリムをシャワーへ!」

「はい大叔父様」

レインが沈んだ顔差しで、グリムの手を引いた。思い足取りで、部屋を出ていく。

戸が閉まると、ヘクターはセバスに目配せをした。セバスが頷き、

指を鳴らす。またたく間に俺と衣服が清められた。え？ 何で二人を風呂に行かせたの？

「ありがとうございます」

「座りなさい」

俺はヘクターの言葉に従い、椅子に腰を下ろす。ヘクターの鋭い眼光は、真つ赤な目になっても健在で、自然と俺の背筋を正させた。

「まずは誤解を解いておこう。俺は怒っていない。室内ゴブストーンは俺もクラウチとやったことがある。めっちゃ楽しかった」

「ええ……？」

「俺はな、ジューダス。お前さんに警告をしておこうと思つてな。あの子らに盗み聞きされぬように、あえてこういう態度に出たのだ」

「そ、そうだったんですか……？」

「チエツ、つまんねーの」

ヘクターの後ろで待機していたミカエラが舌打ちした。怒られている所で、後ろから笑わせようとしたようだ。

「ジューダスは自分が育った孤児院を覚えているか？」

「うーん？ あまり覚えてないです」

ハブられたり、ぼっちだったりした気もするが、ホグワーツ生活をエンジョイし過ぎて忘れてしまった。辛い記憶は孤児院と一緒に消え去ったのだ。

「俺ら闇祓いがマークしているとある宗教団体があるのだが、実は孤児院がその傘下だった可能性が出てきてな。何か仕掛けてくるとは考えられんが、まあ、念のため頭の片隅にでも留めてくれんか」

「はあ……俺は大丈夫ですけど、レインたちに教えても良かったんじゃないですか？」

ヘクターが窓の外を眺めた。空は相変わらずの英国的曇り空だ。

「バカ言え。最近は笑顔を見せることも増えたが、元来レインはストレスを溜め込む気質なのだ。そつとしておくのが良い。まだまだグリムは幼いしな」

「はあ……」

何だこれは？ デジャヴか？ レインもヘクターは繊細だから、人

狼のことを話していないと言っていた気がする。お互いがお互いを豆腐メンタルだと思っている……

ヘクターは長い耳をピクピクと動かした。狼と兎。

「どうもこの所キナ臭くていかん。ジューダス、今朝の日刊預言者新聞は読んだか？」

「……よ、読みましたよ」

「お前はクロスワードパズルとウィーズリー家のエジプト旅行しか読んでないだろ」

呆れたように言ったミカエラ。俺は顔をしかめて抗議の視線を送る。

他にも読んでるし！ 読者投稿欄には毎回、詩とかエッセイとか色々書いて送っている。だからそれが採用されていかチエックしているのだ。新聞は違うが、孤児院時代から続く習慣だ。

「ならシリウス・ブラックがアズカバンから脱獄したのは知っているな？」

「も、もちろんです」

え？ 誰？ ていうか何で俺もちろんなんて言っちゃったの？ バカなの？

助けてくれー！ とミカエラに目で訴える。暫く無言で見つめ合っていたが、ミカエラがガシガシと後ろ髪を搔いた。以心伝心。

「まったく、シリウス・ブラックは逃走中に親友だったピーター・ペティグリューと12人の哀れなマグルたちをぶつ殺した、ヴォルデモートの腹心だ。その後はお縄になっていたんだがなア」

つまりとっても悪い人ってことか。マジかよ！ シリウス最低だな！

「奴には気をつける。復讐でお前さんらを狙ってくるかもしれない」

「エ？ 何ですか？」

「シリウスをアズカバンにぶち込んだのは儂だからな。現役時代最後の大仕事だった」

「へー…… へえっ!？」

ヘクターさんって実は凄い人？ 俺は改めてウサギを見る。凄く

もふもふしている……

宿題したり、必要な物を買って荷造りしたり、ホグワーツの知り合い全員に手紙を送ったりしていると、あつという間にホグワーツに行く日がやって来た。皆で身支度を済ませていると、来客を知らせるベルが鳴る。

少し経って、セバスに案内されて魔法使いが二人入ってきた。長大な杖をついた男が、眼帯のような青い目をグルグルとさせる。

「久しぶりだな、ヘクター」

「マッドアイではないか。こんな朝早くにどうしたのだ？」

「魔法省はお前を護衛する必要があると判断した。シリウス・ブラックが捕まるまでの間、俺とこのトンクスが警備に当たる」

「ニンファドローラ・トンクスです。よろしくお願いします」

シヨツキングピンクの髪をした魔女が、ヘクターと握手を交わした。絵面がちよつと間抜けなのは仕方がないだろう。

「ま、待て！ 俺はそんなこと聞いていないぞ！」

「言ってもどうせ断られると思ったからな。緊急措置だ」

「しかし俺だって元閹祓いだ。死喰い人崩れに遅れはとらん」

「その身体で何を言っておるんだ」

「クソう……」

マッドアイと言われた男は、青い目で俺たちに視線を走らせた。一瞬ミカエラに目を留めたように見えたが、偶然だろう。

「申し遅れた、俺はアラスター・ムーデーイ。見ての通り閹祓いだ。キングズ・クロス駅まではトンクスが責任を持って送り届けよう」

「よろしくね」

「よろしくお願いします。俺はジューダスで」

「私がレインです」

俺たちはトンクスとハンズシエークした。横文字にすると格好良くなる不思議。

「それじゃあ行きましようか」

「俺も見送るのだ！ これっ、邪魔をするな！」

付いてこようとしたヘクターの首根っこを、ヒョイツとつまみ上げるムーディー。

「早く行け。ヘクターは儂が抑えておく」

「ちよつと待ってください」

俺はムーディーに駆け寄り、胸のロザリオを掲げて見せる。

「二年前に父の形見を送ってくださいあってありがとうございます」

「うん？ 儂はそんなもの送っておらんぞ。そのネックレス調べた方が良いんじゃないか？」

なにそれこわい。朝からホラー展開はやめてくれませんか。

「今のところ何ともないので遠慮しておきます」

「後悔してからでは遅いぞ。油断大敵!! ……と言いたいところが、確かに形見のようだな」

ムーディーは感慨深そうに十字架を眺めた。

「しかしそうか、お前はビショップの息子か。一度も祈らないから気づかなかった」

年々俺の父親像がマジキチスマイルしている聖職者で固まっていたくんですが。

ミカエラが時計を見て口を開いた。

「うっかりジューダス、そろそろ行かねえとまた遅刻するぞ」

「時間なのでもう行きますね」

「……ああ」

ヘクターがムーディーの手の中でジタバタしている。

「二人とも！ 今年のクリスマスは帰ってくるのだぞ！」

俺とレインは適当に返事をし、トンクスに連れられて屋敷を出たのだった。

君は幸せを吸い取るのが得意なフレンズなんだね！

屋敷の外には空色の車が止まっていた。トunksがトランクにテ
キパキと荷物を詰める。俺は箒のブルーボトルを、燃やそうとするミ
カエラをかいぐつて手渡した。

「姿現しで行かないんですか？」

「出来ないこともないんだけど……この人数と荷物の量で姿現しは不
安ね。下手するとバラけちゃうから」

「闇祓いの人でも姿現しって難しいんですね」

「……んー、私はまだ闇祓いの資格を取ってないから、厳密には候補生
なのよ。この送迎も修行の一環」

闇祓いって魔法省入ればなれるものでもないのか。

レインが後部座席にチョコミントを持って座ったので、俺は助手席
に乗り込んだ。

「魔法使いでも運転出来るんですか？」

トunksが手間取りながらエンジンをかけ、ハンドルを握った。不
敵に口角を吊り上げる。

「当たり前よ。ブーン！ キキーツ！ ってするだけじゃない」

「ええ……」

トunksがアクセルを踏んだ。唸り声を上げて、車が弾丸の如く発
進する。みるみる石垣が近づいていく。ちよつ、ぶつかる——！

——直前で車体がありえない角度で曲がった。体が窓に押し付け
られる。チョコミントが抗議の鳴き声を上げた。

「唾唾唾人間唾唾しろー！」

なんとなく怒っているのがわかる。ゆっくりな鳥語ならばリスニ
ング出来る程度には、俺のスキルは上達していた。

地面に轍を作りながら、車は急停止した。シートベルトが肩に食い
込む。赤い髪の毛のトunksが深く息を吐いた。初めから赤い髪だった
だろうか。

「魔法の車を貸してくれた魔法省に感謝ね」

「レイン大丈夫かー？」

俺は後部座席に振り返る。足を組んで座っているミカエラの隣で、レインが鳥籠を抱きしめていた。

「……ダイジョウブデス」

「それならヨシ！」

声に抑揚がなかったが、本人が大丈夫って言っているんだから大丈夫だろう！ 多分！

「トunks、俺、ゆつくりドライブしたい気分なんです」

「奇遇ね、私もそう思っていた所よ」

それからは安全運転で快適なドライブを楽しんだ。俺の口笛に合わせて、トunksが妖女シスターズの歌を歌ったりした。

しかし、平穏を乱す事態が起こった。あおり運転だ。

現場は他に走っている車の見えない道路。信号待ちをしていたところに、クリーム色の車が車間距離を侵し散らかしながら迫ってきたのだ。そこからは付かず離れずの距離を保っている。

レインが訝しげに言った。

「トunks、あれがシリウス・ブラックですか？」

「わからない。ただのバカなマグルかもしれないわ」

「そっちの方が楽ですね」

あおり車は並走したかと思うと、突然至近距離に車体を寄せてきた。トunksが咄嗟にハンドルを切る。

「危ないわねっ！ 調子乗ってんじゃないわよ！」

轟くクラクション。しかし相手が怯んだ様子はない。どうしたものかと悩んでいると、後部座席から手が伸びてきた。ミカエラだ。

「窓開けてコイツを外に見せろ」

ミカエラが握っていたのはカエルチョコレートだ。そんなもので何ができるのかと思った、次の瞬間。チョコがゴツい銃に変身した。

「ああ、そういうことか」

ドアの側面についているレバーを回し、窓を開ける。涼やかな風が車内に吹き込んだ。俺は身を乗り出して、いかにも車を蜂の巣にできそうな機関銃を見せつける。

矢庭にクリーム色の車が、回転しながら急停止した。姿がどどん

小さくなっていく。

「流石ね！ それはマグルに最も効果的な手だわ！」

トンクスが爆笑しながらルームミラーを見ていた。俺は鏡越しにミカエラに微笑むと、銃だったチョココを口に含んだ。

車はロンドンの市街地に入った。トンクスが時計塔を見る。

「このペースじゃ間に合わないわね。近道を使うわ」

そう言つてトンクスがハンドルを切った先は狭い路地だ。どう見てもこの車が通れる幅ではない。

「あ？ 車検入ってるんですか？」

後部座席からミカエラが身を乗り出し、俺たちの座席に手をかけた。チョココレートの吐息が鼻孔をくすぐる。

「まア見てろよ」

どういう原理か、車は壁にこすれることもなく路地を走り抜けていった。魔法の力つてスゲー。

キングズクロス駅に到着したのは発車十分前だった。大急ぎでカートに荷物を乗せ、人混みの中を駆け抜ける。俺たちが駆け込んだ直後、列車が発出した。

ホームで手を振っているトンクスに、手を振り返す。いつの間にかトンクスの髪の毛は淡い緑色に変わっていた。特技は毛染めのようだ。

「ジューダス」

「はいよ」

「お姉ちゃんがいたらあんな感じだったんですかね」

「そうかもな……」

レインさん？ ここに、はとこのお兄ちゃんがいるんだけどなー？

おかしいなー？ お姉ちゃん必要ないんじゃないかなー？

「プツ、お前は兄貴じゃねえんだとよ。クハハハッ」

隣で思いつきり煽ってくるミカエラ。とりあえず俺は、彼女に与えるカエルチョココレートの量を減らすことを決意した。

駅が見えなくなると、俺はコンパートメントの確保に向かった。しかしどこも埋まっっていて、中々落ち着けない。諦めてトイレに籠城するか。

その時、近くのコンパートメントの扉が開いた。

「やあドラコ！ 久しぶり！」

「げ」

噛み潰した苦虫でうがいした後のような表情のドラコ。俺は背後のコンパートメント内を覗き込む。クラブとゴイルがお菓子を貪っていた。

「相席良いかな？」

「断る、このコンパートメントは三人用だ。……おい！ 訊きながら身体を振じ込むな！」

「照れんなよドラコ。こっちまで照れちゃうじゃん」

「だからその呼び方やめろ！」

入口を三人がかりで固められてしまった。これでは相席できない。俺は渋々引き下がる。また友達探しか。

ミカエラがマルフォイのオールバックを見ていた。細められている橙の瞳。

「どうしてあんなに拒絶されてんに話しかけんだよ。お前バカかア？」

「拒絶……？ 何のこと……？」

「やっぱバカだわ」

少なくとも、マルフォイの遠回しな友情表現を拒絶だと間違えるミカエラが言えた義理ではないと思う。

「ジューダス、こっちこっち」

少し歩くと、ネビルが手招きしているのが目に入る。俺はスタスタと足を速めた。

「やあネビル。こっつて何人用？」

「急にどうしたの？ だいたい四人ぐらいで使うものだと思うけど……」

ネビルのコンパートメントは、ネビル以外誰も使っていなかった。

俺は笑みを浮かべてネビルの肩に手を置く。

「……孤独の一匹狼だね」

「やめて！　せめて孤高って言ってよ！」

「じゃあ黄金の暴帝とか？」

「何だよそれえ！」

俺にもわからない。ただ、孤高という言葉に連想されて出てきたのだ。他意はない。

何はともあれ、俺は安住の地を手に入れた。荷物を下ろし、甘い物を広げる。当然ミカエラ用だ。

「ジューダスって甘党だったっけ？」

「まあ似たようなものだよ」

「へー……」

そう言つて、思い出し玉を握るネビル。もちろん玉は赤赤と光る。いつものことだ。

「あれ？」

「忘れ物があるみたいだね」

「またばあちゃんにしばかれる……！」

ネビルが半泣きで手荷物を検めだした。俺はカエルチョコのおまけの偉人カードを数える。かなりの枚数が集まっていた。

ダンブルドア、ダンブルドア、マーリン、ダンブルドア、ハツフル
パフ……

「なんかダンブルドア多くね」

俺はミカエラに頷いた。アルバス祭だ。

ホグワーツ特急が進むにつれて、天気は崩れていった。ネビルの失くし物の正体が、スペアの思い出し玉だと判明した頃には、分厚い雲が日光を遮り、風雨が窓に打ち付けていた。

ネビルが俺の構える二枚のトランプの間で、指を右往左往させていた。煌煌と灯るランプに照らされ、俺のジョーカーが笑った。隣のクラブの5が引き抜かれる。

「やったー！　僕の勝ち！」

「持ってけ泥棒！」

俺はハツフルパフの魔法使いカードを投げ渡した。賭けババ抜きに負けたのだ。

「これで創設者コンプリート……ん？」

ネビルがカードを眺めて、顔を綻ばせていると、列車のランプが消えた。車内が闇に包まれる。

「何が起こったんだろう？」

「またヴォルデモート？　こう毎年騒ぎを起こすとか、闇の帝王は結構暇なのかな」

「アイツの仕業だつて断定してんじやねえよ」

ネビルが杖を手に立ち上がった。コンパートメントの外に、恐る恐る顔を出している。

「僕、様子見てくるよ」

「じゃあ俺も……」

そこでローブの裾を弱々しく引っ張られる感触がした。振り向くと、オレンジ色の目が不安げに揺れている。

「ま、待てジューダス。行くな」

ネビルのシルエツトがへっぴり腰で外に出ている。

「ジュ、ジューダス？　来ないの？」

「えーつと……」

俺は腰を浮かせかける。後ろから小さな声。

「あつ……」

静かに元の位置に戻った。

「俺は残るよ。荷物の番が要るでしょ？」

「そ、それもそうだね。ひつ、一人で行ってくるよ……」

手探りでネビルが去っていく。俺は杖を用意しながら、ミカエラに目を向けた。体操座りでうずくまっている。

「どうしたんだよミカエラ。らしくないよ」

「ヤツラが来る…… ヤツラが来る……」

「あ？」

段々と室温が下がっていく。冷気がドアの隙間から這い寄ってきた。気持ちも沈んでいく。

薄ら寒いものが迫ってきている感覚がする。俺はパニックになり
そんな頭を必死に抑えつけた。

魔法の言葉『ミカエラがいれば大丈夫』

「ああああああ……………」

ミカエラの周囲を黒と橙の靄が渦巻いていた。バチバチと稲妻の
ような音が鳴っている。そこで俺はスツと自分が冷静になるのを感じた。

このままでは良くない。ミカエラを苦しめている何者かが攻撃し
てくる前に、ミカエラ自身が魔力を解き放つてしまう予感がした。

落ちて着かせなければ。俺はミカエラの方ににじり寄っていくと、背
中から優しく抱きしめた。

「もちつけー。間違えた、おちつけー」

こうしてみると、ミカエラが小さくなっていることに気づいた。
…………いや違う、俺が成長しているんだ。彼女は出会ったときから変わ
らないまま。

去年、ミカエラがやってくれたように、俺はゆっくりと頭を撫でる。
サラサラと黒髪が手を滑った。

「またオレのせいでみんな死ぬんだ………… みんな…………」

「大丈夫、根拠ないけど大丈夫だから」

小刻みに震える背中を優しくトントンと叩く。バタービールを吐
く時にスネイプ先生に手伝ってもらったことを思い出した。

「はアっ、はアっ、はアっ」

ますますミカエラの呼吸が乱れていく。過呼吸に近い。俺は一度
ミカエラと呼吸を合わせ、浅くする。安心させるように、少しずつ深
い呼吸にしていく。

コンパートメントのドアが音もなく開く。スライド移動して入っ
てきた、かさぶただらけのお客さんに目を向けないようにしながら、
俺は耳元で安心間違いなしの言葉を囁き続けた。

「カエルチョコレート、かぼちゃジュース、杏仁豆腐…………」

その時、まばゆい光がコンパートメントの暗闇を切り裂いた。かさ
ぶたマン（ウーマンかもしれない）に銀色の光が直撃する。彼もしく

は彼女は、たまらず逃げ出した。

「君、大丈夫かい？」

くたびれたコートを羽織っている男性が、心配そうな目で俺を見ていた。俺は親友を撫で続けながら、口を開いた。

「大丈夫です」

「あー…… これは重症みたいだね……」

男性の後ろから入ってきたネビルが言った。

「ルーピン先生、ジューダスはいつもこんな感じなので大丈夫ですよ」

「そ、そうなんだ。なんというか、個性的だね」

「先生、俺は没個性的ですよ」

「ずっとパントマイムしている人のセリフじゃないね」

俺はピタリと硬直した。腕の中のミカエラが、不思議そうにこつちを見てくる。どんどんミカエラの顔が紅潮していく。

「いいいいつまでこうやってんだよ気色悪いなア！」

ロケットのようにミカエラが発射し、天井に張り付いて動かなくなった。耳が赤い。

ルーピンが苦笑いしながら、茶色いものを差し出す。板チョコ？

「食べなさい。いくらか落ち着くよ」

「あ、ありがとうございます」

チョコを食べている間に、先生は先程の化け物の説明をしてくれた。デイメンターといって、アズカバンという監獄の看守をしている。今年からブラック搜索のためにホグワーツに配置されるらしい。

ホグズミード駅に到着したので、ぞろぞろと汽車から降りる。さつきから目を合わせてくれないミカエラに、先生から貰ったチョコの半分を手渡した。

「……サンキュ」

空飛ぶ馬車に乗り込み、ホグワーツ城へ。大広間のグリフィンドールのテーブル席につくと、シエーマスが肘でつついてきた。

「ジューダス、吸魂鬼も友達にできたよな？」

「あ、し忘れてた」

「畜生ーっ！」

テーブルに突っ伏しながら、ガリオン金貨を転がすシエーマス。金貨をキャッチしたコリンが言った。

「僕たち、賭けてたんだ。師匠がディメンターを友達に出来るかどうかって」

「ジューダスならあの連中でもいけるって信じてたのにー」

「ごめんな期待に沿えなくて」

「なんで師匠が謝ってるの……」

例によってイツチ年生がやってきて、組分け帽子が運ばれてきた。帽子が歌い出すと、ミカエラも口を開いた。

「……きつきは見苦しい所を見せたな」

「全然」

「お前がいなきや、オレは暴走していたと思う。その、ありがとな」
「どういたしまして」

歌が聞こえねー。しかし「ミカエラ、その話後で良い？」とは言えない雰囲気だ。

「ハハッ、散々お前に偉そうな面しといて、ディメンター1匹に何もできなあって、とんだお笑い草だろ？」

「そんなことないよ。俺も危うかったし」

「だけどなア——」

結局、ミカエラと話してて組分けは何が何だかわからなかった。気がついたらダンブルドアがいただきますの号令をしていたのだ。

でもまあ、親友の元気が戻ってたから良いか。

英雄の誕生（笑）

翌朝、俺とミカエラは朝食をとり到大広間に来ていた。向こうのスリザリンの一団で、マルフォイが何やら面白いことをしているのか、どつと笑い声が上がった。俺は光に集まる蛾のようにそちらに行こうとしたが、ミカエラに首根っこを引っ張られたのでそれは叶わなかった。

「ありやア昨日ポッターがデイメンターで気絶したことを喜んでるだけだ。ほっとけ」

ミカエラが今朝の日刊予言者新聞を広げながら言った。紙面のシリウス・ブラックが険しい顔で周囲を睨みつけている。

「ブラック脱獄、ホグワーツに吸魂鬼配備、ねエ……」

「どうすれば吸魂鬼と友達になれるんだろう」

「やめろ」

「え？ どうして？」

ミカエラが深い深いため息を吐いた。目頭を揉み、ジトツとオレンジ色の瞳を俺に向ける。

「ヤツラはこの地上で最低最悪の闇の種族だ。そこにある関係はただ一つ。魂を吸う者と吸われる者、これしかあり得ねエ」

「でも同じく闇の種族のミカエラとは友達になれたじゃん」

「それは事情が違うだろ。つか、オレは闇の種族じゃねエ！」

ミカエラが『自分は善良な妖精』という死に設定を熱弁していると、ネビルが満たされたお腹をさすりながらやって来た。

「おはようジューダス。一時間目はハグリッドの魔法生物飼育学だよね？」

「おはよう。えーつと……占い学じゃなかった？」

ネビルは「あっ」と少し間の抜けた声を出すと、顔を青ざめさせた。「すっかり勘違いしてた！ 急いで準備しなくちゃ！」

走っていくネビルの背中を眺めながら、ミカエラは口を開いた。

「オレたちもさっさと食って行くか」

「占い学の教室ってどこだよ」

ミカエラのぼやきは尤もだった。教室があるという北塔は入ったことがなく、いざ階段を登ってみると、無限に続くのではないかと思うほどに終わりが見えなかった。

「流石トレローニー先生。心眼が曇らないように、こんな高い塔の上で暮らすなんて」

「お前はどこに感心してるんだ」

額の汗を拭いつつ、ポニーに跨った騎士の絵を通り過ぎようとする
と、大声が聞こえてきた。

「其処なるはマーリンの探求者、フィデス・フォーリーであるか？ は
たまた油を注がれし者、ダニエル・ビショップか？」

見ると、小さな騎士がこちらをじつと見つめていた。そろそろ慣れ
てきた間違われ方を訂正すべく、俺は立ち止まる。

「どちらも否！ 我は友情の求道者、ジューダス・ビショップ！ フィ
デスとダニエルが倅なり！」

「なんで騎士のテンションに合わせてんだよ」

「相手と調子を合わせた方が親しくなりやすいつて、ハーバーオック
スブリッジなんちゃら大学の研究で証明されてるんだよ」

「混ざりすぎて訳わかんねえことになってるぞ」

ポニーは、俺の名乗りにびっくりしたのか、嘶いて走り去ってし
まった。見事に落馬した騎士は、うめき声を漏らしながらも、すつく
と立ち上がると、剣を抜いた。

「その意気や良し。抜け、汝が刃を。我が名はサー・カドガン！ 真に
二人の子であるか、互いの剣に問おうではないか！」

「心得た！」

杖を抜きながら、絵の騎士と向かい合う。踊り場の空気が張り詰め
ていく。

「いざー！」

「尋常に！」

「勝負！」

カドガン卿が剣を構え、こちらに突進してくる。さながら遍歴の騎

士のようにその刺突をいなし、足を払って、倒れ伏した騎士の眼前に杖を突きつけるという幻覚を見たところで、視界が急転、天井が眼前に。俺は自分のローブの裾を踏んでずっこけたのだ。

呆れ顔で覗き込むミカエラの周りを、お星さまが廻っている。だとすれば、漆黒の髪は夜空か？

「絵の中の人間と戦ったのはお前が初めてだ。そのことを踏まえて言わせてくれ。お前何やってんだよ……」

ミカエラの手を借りて、俺は立ち上がった。カドガン卿は兜のバイザーを抑えて、蹲っている。ミカエラにどういことかと視線を投げかけると、彼女は頭痛を堪えるような仕草をした。

「^{第四の壁}透明な壁にぶち当たって、すっ転んだ挙げ句、地面とキスしちゃっただけだ。問題ねえ」

「ああ神よ！　なぜ二次元と三次元を分けて創り給うたのだ！」

俺の慟哭が辺りに響き渡る。どうして、世界はこんなにも残酷なんだ！　たった一次元違うだけで、剣を交えることも出来ないなんて！

「心配には及ばぬ。我が友ジューダスよ！　高貴な魂、鋼鉄の筋肉はこの程度で挫けはせぬ！」

「カドガン卿！」

「汝が彼の者らの子であることは、アツパレ、只今の決闘により証明された。なれば汝は朋友同然である！」

隅で草を食んでいる太ったポニーに跨がろうとして失敗し、頼もしいことを言ってくれるカドガン卿。俺は朋友という言葉に頬を緩めた。

「では問おう！　何故決闘で証明されたのかを！」

「それは——「ジューダス!?　何でここにいるの？　急がないと遅刻しちゃうよ！」

ネビルがゼーハー息を乱しながら、階段を駆け上がってきた。俺は古い学が控えていることを思い出し、血相を変えてカドガン卿に頼み込む。

「カドガン卿、折り入って頼みがあります。北塔への道を教えてください」

「あいわかった。我が朋輩よ、我に続け！ 叩けよ、さらば開かれん。さもなければ突撃し、勇猛果敢に果てるのみ！」

ガチャガチャと派手な音を立てながら、絵から絵へと走っていくカドガン卿を、俺たちは追いかけた。騎士にチェスボードをひっくり返されて憤慨する紳士たちを尻目に、狭い螺旋階段を登る。そして、上の方で人声が。やっと教室に辿り着いたのだ。

「さらばじゃ！ 我が戦友よ！ 我が金剛力が必要ならば、何時如何なる時も馳せ参じようぞ！」

カドガン卿に礼を言い、垂れ下がっているはしごを駆け上る。薄暗い、独特な匂いが漂う教室に行き着くと、俺は急いで席に座った。近くのシエーマスに小声で訊く。

「ギリギリセーフ？」

俺の顔に薄い影が差す。俺の机の前にトレローニー先生が立っていたのだ。シエーマスがニヤツと笑った。

「残念、ギリギリアウトだ」

トレローニー先生は、二年前と変わらない大きな丸眼鏡越しに、俺を見つめた。

「すみません先生、実は——」ああ！ 皆まで言わないでくださる？

わたくしにはわかりません。あなたは道中、大いなる脅威、未知との遭遇を果たしたのでしょう？」

俺は直近の大いなる脅威、未知との遭遇を考える。確かに、カドガン卿は強敵だったし、初対面だ。一応当てはまったので、頷いてみることにした。

ラベンダー・ブラウンが大袈裟に息を呑んだ。教室がざわめく。ネビルが不安げにロンに囁いた。

「ロン？ どういうこと？」

「トレローニーが、二人が遅刻していることに気付いて、原因を予言したんだ。そしたらおったまげー。ドンピシャ大当たりってわけさ」

全然おったまげてない声色で、冗談めかすロン。トレローニーは満足そうに頷くと、霧の向こうから聞こえるような囁き声で言った。

「やむを得ない事情がありましたので、今回は咎め立てることはしま

せん。並大抵の努力では、予言は打ち破れませんわ。皆さんも、お気を付けあそばせ?」

パーバティ・パチルが身を掻き抱き、ハーマイオニーが眉間にしわを寄せた。

「それでは続けましょうか」

中断していたらしい、お互いのカップの底の紅茶の模様を読み取り、予言し合う授業が再開した。俺はネビルと自分のカップに、高いところから紅茶を注いだ。ミカエラが俺の紅茶に大量の角砂糖をぶち込んで、勝手にホット一息吐いた。

「もうどこでその技術を身に着けたのかは気にしねえ。美味けりやアそれで良い……」

「ジューダス、これ凄く美味しいよ……」

新しいカップを取り出して紅茶をアクロバティックポアしつつ、俺はネビルが飲み干したカップを覗き込む。そこにはネビルのペットのカエル、トレバーの絵が写っていた。

「ええ!? 何でトレバー? 何でトレバー?」

必死に教科書『未来の霧を晴らす』を捲り、意味を見出そうとするネビル。俺は安心させるように、その肩に右手を置き、左手で淹れたての紅茶を飲み干す。

「大丈夫。それ、俺が描いたやつだから。結構上手でしょ?」

「大丈夫??? え、あ、そういう…… ええ!」

目を丸くして、ネビルは俺とカップの底を見比べ続ける機械と化した。ミカエラが俯き、カップの底で親指を立てるカドガン卿を認めると、微妙に嫌そうな顔をした。

「肝心の俺のカップは…… 良し、出来てる出来てる」

底には、ウサギのヘクター、カラスのチョコミント、ニワトリのトム、太ったポニーが、ブレーメンの音楽隊よろしく積み重なっていた。かわいい。

「まあ、あなたのカップ……」

トレローニーがカップを持ち上げて、なにやら目を細めている。どうしたのかと、様子を窺っていると、突然、目をかつ開いてこう言っ

た。

「これは……ロバ？ いや、馬ですわね。ウサギとニワトリ、それから……始祖鳥？ これは凄まじいカップですわ！」

教室中の耳目が集まる。占い師はシヨールをはためかせ、厳かに嘯いた。

「ウサギは恵み、ニワトリは黎明の宣告や、存在を世に知ら示すことを表します。その下に早馬、つまりこれらが、急激に訪れるということですね。そして変化の節目、起源を暗示する始祖鳥……」

「そ、そんなわけねえだろ。チョコミントが、ククツ、始祖鳥……クハハハツハハア！」

ミカエラは爆笑しっぱなしだった。そんな中でも、俺は予言を一言一句聞き漏らすまいと、神妙に耳を傾けた。

「ミスター・ビショップ。変化の時は近い……心して備えておくことですよ」

「承知しました！ トレローニー大先生！」

その後、ハリーが死亡宣告されたり、ネビルが不名誉な予言をされたりして、占い学は終わった。次の授業の変身術では、マクゴナガル先生が、占いに否定的な見解を示していたが、俺は首を傾げざるを得なかった。

昼食にクワトロピザのチーズを引いていると、ハリーが隣に座ってきた。チラチラと遠慮がちに俺の右上の虚空を見ながら、口を開く。

「ジューダスたちはどう思う？ あの……」

「予言について？」

チーズを30回噛んで飲み込むと、俺はハリーに向き合った。ハリーがおずおずと頷く。

「うーん、俺は正しい気がするよ。俺のイマジナリーフレンドもそう言ってるし」

「言ってるねえよ」

「あ、ごめん。言っていないって」

ハリーは落ち着かないようにキョロキョロと辺りを見回した。バ

ジリスクと戦った時に姿は見えただが、やはり慣れないのだろう。

「まあ、占いなんて、結局は受け手の問題だよ。ハーマイオニーも似たようなことを言ってたんじゃない？」

「そうだね…… ありがとう」

ハリーはロンに呼ばれて、向こうに行ってしまった。ミカエラが腕組みをして、呟く。

「英雄様は大変だな。案外、お前みたいな道化の方が気楽なのか？」

「道家？ タオが何だつて？」

「さてはオメエ話聞いてねえな」

魔法生物飼育学は、今年からハグリッドが受け持つ事になった。ケトルバーン先生がいなくなってしまったのは寂しいが、元気にドラゴンの生息域で余生を謳歌して欲しいと思う。

青空の下、初めにハグリッドは、『怪物的な怪物の本』を開くように指示したが、本と友達になつていたのが俺だけだったので、他は誰も開けなかった。マルフォイが気取つて言った。

「どうやって教科書を開くんですか？」

「ジューダスみたいにな、優しく撫ぜりやー良かったんだ」

「こ、こいつは例外でしょう！」

次に、ハグリッドはヒツポグリフを連れてきた。とても美しい魔法生物だ。何やら俺の右上を睨んでいるので、すぐさま挨拶しに行こうとしたが、グリフィンドールの面々に取り押さえられた。

「は、離せえ！」

「ジューダス！ 今回は不味い！ 親の仇でも見るかのような殺意の高さだ！」

「死に急ぐなあ！」

それでもなお藻掻く。ああ、ハリーがバックビークとあんなに楽しそうにしている。それからマルフォイも、じゃれつかれて怪我を……

怪我？

「大丈夫かー！ マルフオイイイイイイ！」

「ビショップ！ 僕の側に近寄るなあああ！」

ヒツポグリフからも、マルフオイからも引き離され、俺は朝まで部屋で沈んでいた。ミカエラが俺のベッドに寝転がりながら、何やら本を読んでいる。

「ミカエラー、俺は何がいけなかったんだろう？」

「アー、多分、ヒツポグリフに近づけなかったのはオレのせいだ」

「ゑ？」

「だってオレ、魔力お化けだし」

「そっかー、それなら仕方ないね。それなら……」

その時、バンッとネビルが飛び込んできた。手には日間予言者新聞を持っている。

「ジューダス!! 『ジューダス・ビショップと賢者の石』発売決定って
どういうこと!?!」

「ゑ？ ええー!?!」

無知無知

『ジューダス・ビショップと賢者の石』

訳がわからないし、わかりたくもない。とにもかくにも、この著者不明の奇怪な本は出版されてしまった。誰の話題にも挙がらずにひっそりと埋もれていくという俺の予想に反して、瞬く間にベストセラーになり、大きな反響を呼んでいるらしい。

莫大な魔法力の制御に悩む『ジューダス・ビショップ』という少年が、真の友情を求めて『ダムストラング専門学校』に入学し、紆余曲折を経て、復活を目論む闇の魔法使い『ゲラート・グリンデルバルド』とそのしもべから賢者の石を守る、というものだ。

どうせなら俺の名前を『ニユート・スキヤマンダー』ぐらいにぼかしてくれたら良かったのにと、何度思ったことか。

それと本当に不可解なのが、ミカエラが存在が抹消されているなど多少のズレはあるが、俺をストーカーしているとしたか思えないほど話が正確だということだ。

一方で、良いこともあった。この本を機に友達がグツと増えたのだ。

「やあ、セドリック。今までクイディッチの練習してたの？」

箒を持って廊下を歩くハツフルパフ生に声をかける。彼のガールフレンドのチョウ・チャンが『賢者の石』のファンで、それを通して知り合った。

セドリックは瞳に燃える闘志を宿して、柔らかな笑みを浮かべた。

「ああ、今シーズンの開幕も近いからね。君には悪いけど、今年のクイディッチ銀杯はハツフルパフが頂くよ」

「首を洗って待っててくれ」

「それはどちらかと言えば僕のセリフじゃないかな……」

セドリックに別れを告げて、闇の魔術に対する防衛術の授業に向かう。今日はルーピン先生の最初の授業だ。曲がり角を曲がると、曇り空のような髪のレイブンクロー生とバッタリ出くわした。レインが辺りを見回しながら、口を開いた。

「すみません、靴、もしくは青いネクタイを見かけませんでしたか？」
「見てないけど…… どうかしたの？」

レインは言葉を精査するように、深緑の瞳を宙に向けた。

「ルーナの私物が失くなってしまいました……」

「そういうことなら」

俺は窓から顔を出し、空を飛んでいるカラスに声をかける。

「唾唾唾唾唾唾（ねえ、今時間ある？）」

カラスが羽ばたいて、窓の棧に着陸する。よく見るとチョコミントだった。一年前はスラツとしたフォルムだったが、ここ最近の怠惰な生活によって、見る影もない。

『おっちゃん今忙しいねん。しよーもない要件やったら承知せえへんで』

『そうには見えないけど……』

『フアングっちゅー鈍臭い犬がおんねんけどな、今からそいつ飯の時間やねん。せやからそれを搔っ払わなあかんのや』

『何だよ?!』

『あの犬っころにどっちが上か教育すんねん。自慢やないけど、おっちゃん、恐竜の末裔やねん。空も飛べへん二足歩行に尻尾振ってる輩と、どっちが偉いかなんて、自明やろ?』

『ジューダス、チョコミントと何て話してるんですか?』

レインが優しい眼差しを俺たちに投げかけている。俺は目を擦った。陽光を浴びたその姿は、レイブンクローのローブを着ていることも相まって、母との血縁を感じた。

「驚かないのか? レインは」

「愚問ですね。あまり私を舐めないでください」

聖マンゴを受診することを真剣に進められたロンの時とは対照的だ。レインはチョコミントの嘴の下を撫でた。

「あなたならそれぐらいはやってのけるって、知っていますから」

チョコミントが気持ちよさそうな鳴き声を漏らした。

『ああ、気持ち良すぎだわ。今ならご主人のために何でもやってまうわ』

『チョココメント、靴と青色のネクタイを探して欲しいんだけど……』
『自分、それは卑怯やわ。もうおつちやん張り切って探すしかあらへんがな』

黒黒とした翼を広げ、チョココメントが朝の透き通った空に飛び立っていった。俺は口角を上げて、レインに振り返った。

「チョココメントも探してくれるって」

闇の魔術に対する防衛術のクラスに俺がやってきた時には、まだルーピン先生はいなかった。羊皮紙と教科書を机に出して待っていると、両隣にシエーマスとディーンが座ってきた。シエーマスが俺の肩を組みながら言った。

「おはよう新たな有名人」

「やめてよ、俺は慎ましく友達を作っていききたいの」

「矛盾してるよな？ 今の言葉」

ディーンが例の本を左右に振った。

「それは無理な相談だろうね。多分ジューダス、僕たちの世代で生き残った男の子の次の次くらいには有名だから」

「むしろハリーの次が誰か気になる。凄腕クイディッチ選手のビクトール・クラムとか？」

「おいおい、あの爆発的な美貌のフラワー・デラクールをお忘れか？」

ディーンとシエーマスは暫く沈黙した後、声を揃えた。

「じゃあ友達教祖のジューダス・ビショップは四番目か」

「何か他の三人と比べて肩書き弱くない？」

「あ、それならギャグ小説の主人公も追加で」

「そこはハートフル友情冒険小説たまにシリアスもあるよ、であれ！」
おのれはまだ見ぬ作者め…… 本格ミステリとして書いていればこんな扱いにはならなかったものを……

俺が血の涙を流していると、ラベンダーとパーバティが、何やらすっごいニコニコしながら歩いてきた。ラベンダーがディーンの手を持って本を取り上げた。

「ジューダス、あなた、何か気付かない？」

「エ？ 何のこと？」

「予言よ！ 予言！ 全てトレローニー先生の仰った通りだわ！ あなたの存在が急速に世に知らされた……」

「その変化は恵み…… ねえジューダス、何か良いことあった？」

パーバティがそう二の句を継いだ。痛いほど期待を感じる。俺はポンと手を打った。

「そう言えば新しく友達が出来たな」

シエーマスが鼻で笑った。

「朝からダイナマイトな冗談だ。トレローニーが本当の占い師だつて？ そしたら何だ、次回の占い学もネビルは遅刻で、ハリーは今年中に爆死、ロンはスネイプとダンスパーティーか？」

心なしかトレローニーのように、ラベンダーが声のポリウムを三段階落とした。

「ええ、ダンスパーティーはわからないけれど、今回の件でその確率は高まったわ」

「高まつてたまるか」

デイーンが彼女の手から『ジューダス・ビショップと賢者の石』を取り返した。

「もつと丁寧に扱ってくれよ。これ13シツクルもしたんだから」

「やあ、みんな」

ルーピンがやっと来たようだ。みすばらしいローブに身を包み、くたびれたカバンを教卓の上に置いた。

「教科書はカバンに戻してもらおうかな」

ルーピンに連れられて、俺たちは職員室にやって来た。今日は実地訓練をするそうだ。道中悪戯をしていたピーブズを華麗にルーピンが退治している時、ミカエラが窓から入ってきた。

「ミカエラ、どこ行ってたの？」

「ちよつとホグズミードにな。あの馬鹿げた本の作者をとつ捕まえ、印税を巻き上げようと思ったんだが……」

「見つからなかったと」

「まあな。ホグズミードにはいねえのかもしれない。でも面白え情報は手に入ったぞ。あのお前のキチガイ沙汰が書かれている本だがな、どれか一つだけ違法ポートキーが混ざっているらしい。陰謀の臭いがするだろう？」

「陰謀臭くはあるけど、面白くはないよ！ 本当なら回収騒ぎになっているはずだし…… 魔法省仕事しろ！」

「噂程度じゃ役所は動かねえよ」

そうこうしている内に、古い洋筆筒がポツンと置いてある部屋に着いた。ルーピン先生がその脇に立つと、激しく筆筒が揺れ、前に踊りだしてきた。

「ボガートだな」

ミカエラが忌々しそうに洋筆筒を睨みつけた。ルーピン先生とハーマイオニーの説明によると、ボガートは相手が最も恐怖するものに変身する形態模写妖怪らしい。そして退治する方法は笑い、つまりボガートに滑稽な姿をさせれば良いとのことだ。

「その呪文はリディキュラス 馬鹿馬鹿しい！ さあ、私に続いて――」

皆が自分の一番怖いものを考えた後、ネビルから順に実戦が始まった。ネビルの前に現れたスネイプ先生はネビルのお祖母ちゃんの格好になったし、ロンの眼前の巨大蜘蛛は足をもぎ取られた。部屋中が笑いの渦に包まれる中、俺は自分が恐怖するものが何か、未だにわからずにいた。

ヴォルデモートだろうか？ デイメンター？ バジリスクか？ それとも孤児院の人たち？

どれも正解で、どれも間違っているように感じられた。怖いことは怖い。でも孤独じゃなければ立ち向かえる。ミカエラが倒してくれる。

それなら俺が一番怖いものは『孤独』ということになる。しかしボガートが概念に変身できるのか、甚だ疑問だ。

ふと横のミカエラを見る。彼女が畏れていることは何だろう？ もう二年弱の付き合いになるのに、俺はそんなことも知らない……

いや……

あるじゃないか。ミカエラが怖いものが！ デイメンターだ！
これならミカエラがいても勝てない。つまり俺も怖い！

デイメンターを滑稽にするには…… あの闇夜の衣を蛍光ピンクに、瘡蓋だらけの手をファンシーなステッカーでデコレーション、極めつけは冷気じゃなくて紙吹雪を放出…… 完璧だ。

「ジューダス！ 君の番だ！」

ルーピン先生に呼ばれて、前へ進み出る。ボガートはシエーマスによつて声の出ないバンシーにされていたが、俺を見咎めると、その容貌を変じた。

「さあデイメンターちゃんのおでま…… へ？ 嘘でしょ……？」

現れたのはデイメンターではなかった。ヴォルデモートでも、バジリスクでも、ましてや孤独という概念でさえなかった。そこには、嗜虐的な笑みを浮かべるミカエラの姿があった。ゆつくりとこちらに近づいてくる。

「リ、リデイキュラス！ リデイキュラス！」

何度呪文を打つても、ボガートの歩みは止まらない。空気が轟音を立ててかき乱される。その両手には黒と橙の靄が逆巻き、徐々にミカエラを飲み込んで巨大な渦へと変貌した。

「退け、アホ」

ミカエラが俺の肩をぐいっと引っ張って、場所を代わった。するとボガートは様々な子どもの死体が変わった。

「……馬鹿馬鹿しい」

忽ち死体が動き出し、揃ってスリラーを踊り始めた。ゾンビがゾンのダンスをするのは、どこか滑稽だ。周囲から笑いが溢れた。誰もが俺が退治したのだと思っっているようだった。

続いてボガートがハリーに向かおうとしたが、ルーピン先生が間に割って入った。何やら丸いものに変身したかと思えば、気の抜けた風船になってボガートは弾けて消えてしまった。

そして、ルーピン先生から課題の指示が出され、授業はおしまい。俺はミカエラを探した。しかし、彼女の姿はどこにもなかった。

『何やそない思い詰めた顔して。どしたん、話聞こか?』

湖の畔で黄昏れていると、チョココミントが隣に降り立った。胡桃を頻りに突いている。俺はそれに杖を向けた。

「ウインガード・レビオーサ」

胡桃の殻が爆発し、こんがり焼けた中身が飛び散る。すかさず鳥は啄んだ。

『おおきに。ほんで、どないしたん?』

『なんて言えば良いんだろう…… 絶対ありえない人に、実は恐怖心を抱いていたことに気づいちやって、それがその人にもバレちやって…… ああもう、わかんないよ……』

『それは災難やなあ…… おつちゃん思うに、こういう哲学的なことは、ご主人のお友達の嬢ちゃんに訊くのが一番やで』

『ルーナに?』

『せや、あの子な、実は誰よりも賢いねん。おつちゃんが保証したる。それと、ほれ』

チョココミントが示した方向を見ると、何とルーナの靴とネクタイが木に吊るされていた。俺はチョココミントに礼を言い、それらを拾うと、レイブクロタワー塔に向かった。

レイブクロタワーの寮は、高い塔の上にあった。それはつまり、何段もの階段を登らなければならぬことを意味する訳で。俺は息も絶え絶え、両手で膝をついた。

「ジューダス? 大丈夫ですか?」

予めチョココミントに手紙を持たせて呼び出していたので、レインとルーナが寮から出てきた。俺は汗を拭って答える。

「おかしいな。体力落ちたのかな?」

「まだそんなこと気にするような年じゃないでしょ」

ルーナの言葉に頷きたいが、本当に体力が落ちたとしか考えられないのだ。以前カドガン卿と走った時は、こんなに疲れなかったのに。

「ああそうだ、これ、ルーナのもでしょ？」

靴とネクタイを差し出す。ルーナは破顔した。

「ありがとう。あんた、良い人だね」

「礼ならチョココミントに言つて。彼が見つけてくれたから」

「チョココミントつて、レインのペットでしょう？」

レインが力強く首肯した。それ以上何も言わないのを見て取ると、ルーナは可笑しそうに声を漏らした。

「わかった。チョココミントには後で、ナッツでもあげるよ。そのほうが嬉しいだろうから」

「あまりチョココミントに食べさせないでくださいね。あの子最近運動不足なんですから」

訊かなきゃ。俺は自分の唇を舐める。ルーナに向き合う。

「ルーナは、恐怖心はどこから生まれると思う？」

「それはまた突然だね」

俺は二人に、闇の魔術に対する防衛術の一件を語った。もちろん、ミカエラの正体は伏せて。

ルーナは考え込んでいたが、暫くして口を開いた。

「私が怖いって思う時は、それが何かわからない時かなあ。物が失くなって、初めは怖かったけど、ナーグルの仕業だつて知ってからは怖くないもん」

「それは本当にナーグルのせいなんでしょうか……しかし、恐怖が無知から生じるというのは私も同意します」

そうか、知らないから怖いのか。確かに、俺はミカエラのことを知っているようで、知らなかったのかも知れない。

「ありがとう二人とも。俺、頑張ってみるよ」

未知を既知に変えてやる。ミカエラのこと、謎の本のこと、両親のこと。ああ、なんて世界は謎だらけなんだろう！

知らないということを知らなければ知ることができないことを、俺は知ったのだった。

藪をつついてバジリスクを出す

思い立ったが吉日だ。早速、俺は周囲に取り巻く謎を解明するべく、行動に移した。まずは比較的情報を得られやすそうな両親に狙いを定める。

トロフィー室を漁ってみたが、ダニエル・ビショップやフィデス・フォーリーと印字されたメダルや杯は見つけられなかった。リドルとかポッターばかりだ。ヘクター・フォーリーの名がハツフルパフの名誉チエイサーとして表彰されていて、ちよつとほっこりした。

他にも図書室の閲覧等、一人でできることは試してみたが、収穫がほとんどゼロのまま十月の終わりまで来てしまった。かくなる上は両親と接点のあった人物から直接情報を得るしかない。

しかしよく考えると、俺の親と深い関わりがあった人が誰かなかなか思いつかない。ダンブルドア校長は一年生の頃にダニエルについて言及していたから何か知っているだろうが、そう簡単にお目にかかる立場の人ではない。何やらフィデスと先輩後輩の仲だったロックハートは聖マンガだし、他の先生に至っては交際があったのかさえも定かではない。

うんうん唸って寮の自室を歩き回っていると、僅かに開いた扉の間からにわかにはスキヤバースが飛び込んできた。間髪を容れずに、黒髪の少女がけたたましい開閉音を奏でて入室する。サデイスティックに喉を鳴らしながら、じりじりと哀れな老ネズミににじり寄った。「クハハハ……い……とうとう年貢の納め時だなア、スキヤバースウ。オレを裏切った責任、取ってもらおうぜエ？」

悲愴な喚き声を上げ、縦横無尽に部屋を駆け回るスキヤバース。空中から迫るミカエラの白い手を避けようと必死だ。魔法を使えば一瞬で捕らえられるのにあえてしないのは、彼女がこの状況を楽しんでいるからだろう。うん、いつも通りだな。

スキヤバースはベッドの下やら窓の棧やらを駆けずり回った挙げ句、俺のローブの足下に潜り果せた。床に降り立ったミカエラがオレンジ色の瞳を爛々と輝かせて、目の前で屈み込む。俺の足を盾にして

魔の手から逃れようと画策するネズミと、埃が舞うのも構わずに滅茶苦茶に手を突っ込む少女の、熾烈な攻防戦が俺のローブの裾で繰り広げられている。勝手に。

「ちよつと！ 二人ともやめてよ！ せっかくさつき掃除したのに埃っぽくなってるから！」

俺はミカエラを手で制止し、スキヤバーズの太った背中を掴まみ上げた。親友が上目遣いで睨み付けてくる。

「おいジューダス、邪魔すんなよ。コイツはオレのことを嵌めやがったカス野郎だ。然るべき罰を与えなきゃならねえ。例えばアバダとか」

スキヤバーズの甲高い叫び声が一オクターブ上がり、藻掻き方もより一層激しくなった。懸命に指を噛んで脱出しようとするネズミを俺はミカエラに差し出し、真っ直ぐに短髪の少女を見据えて口を開いた。

「ミカエラ、スキヤバーズは確かに一度は君を裏切ったかもしれない。でもこの子が俺を秘密の部屋まで導いてくれたんだ。俺たちが今こうしていられるのはスキヤバーズのお陰なんだよ」

「はア!? てことは、オレが復活できたのも……」
「部分的にそうだよ」

滅茶苦茶首肯するスキヤバーズを見下ろし、バツが悪そうに後ろ髪を掻きむしるミカエラ。メンタリストジューダスが見るに、殺意八割感謝二割といったところか。

「ダアーツもう！ しゃーねえなア。今回はこのバカに免じて見逃してやるよ」

「ありがとうミカエラ」

「お前に感謝される筋合いはねエアホンダラ。本ツ当に脳天気なんだからよオ…… わかったならさつきと失せろドブネズミ」

解放するや否や、一目散にスキヤバーズは逃げていった。怖い思いをしたのだろう、可哀想に。後で何か美味しいものを食べさせてあげよう。

俺が噛まれた跡から滴る血を舐めていると、突然ミカエラから手を

掴まれた。

「貸せッ！　ったく、結構ガツツリいかれてるじゃねえか。やっぱりあのクソネズミに磔の呪文くらいかけておいた方が良かったんじゃないかア？」

「駄目だよ酷いことしちゃあ。最近コンプラ厳しいんだから」

「まーた訳のわからんこと言いやがって。ちよつとジツとしてろよ。――エピスキー癒えよ」

ミカエラが手をかざすと、たちまち傷口が塞がれ元通りになった。ニヤリと会心の笑みを浮かべる。

「これで良しと」

「ありがとうミカエラ」

「へへっ、お前に感謝されるまでもねえよ。こんくらい朝飯前だ」

人差し指で鼻の下を擦る親友。今なら何を訊いても許されそうだ。俺はずっと気になっていたことを口にする。

「ミカエラ、ボガートのことなんだけど……」

「アア？」

途端にミカエラは顔を顰める。明らかに不機嫌になってしまった。もう日にちも経ったし、大丈夫だと思っただけど……。

「その、何かごめんね……」

「謝んなカス、業腹だ。お前がオレのことを恐れるのは当たり前だろ。バケモン飼ってるようなモンだからな。喜ぶのはハグリッドぐらいだろうよ。逆に、よくここまでその感情を隠してきたなア？」

誤解だ、大きな誤解だ！　俺は咄嗟にミカエラの小さな肩を鷲づかみ、必死にその溶鉄の瞳を覗き込む。

「違うよ！　俺はミカエラを怖いと思ったことなんて一度もない！」

「みんな初めはそう言うんだよ。今も小心翼翼々としてんだろ？　オマーの手から伝わるその震えが何よりもの証拠だ」

「違うー！」

「何も違わない。無理すんなよ。お前が壊れちゃったら、それこそオレは悔やんでも悔やみ切れないんだからよ」

涙目の自分が映る瞳は、どこまでも冷めていた。諦観。一体何がこ

の少女をそこまでの絶望に駆り立てるのだろうか？ 初めての友達とすら、心は通じ合えないのだろうか？

静かな、されど嫌に耳に残る声で、彼女は言った。

「オレ、ジューダスに期待しすぎてたのかもな。心の奥底で、いつの間にか願っちまつた。お前ならオレを恐れない。お前ならオレを受け入れてくれるって」

「現にそうしてるじゃないか！」

「アア、表面上はな。でも、ボガートが白日の下にさらしちまつた。もう戻れないんだよ。その恐怖感と付き合ってくしか、道はねえんだ」

何も言えない。本当は怖くなんかないのに、伝えなきゃいけないことがあるのに、今のミカエラには何を言っても嘘だと一蹴されてしまいうそで……。怖くて口が開かない。

「まア、別にお前がオレにビビってようがいまいが、関係性は変わんねえだろ。宿主と悪霊、そうだろ？」

「あと親友ね！」

「クハハハ、そんな設定もあつたな」

「設定じゃないって！」

さつきまでの鬱屈とした空気が霧散し、いつもの雰囲気は帰ってきた。そうさ、例え少々誤解されたからって、俺たちの絆が切れることはない。そう自分に言い聞かせて、俺はミカエラと笑い合った。

「して、何用だ我が盟友ジューダスよ。よもやこの百戦錬磨の金剛力を振るう時が来たのか？」

翌日、俺は古い学の教室がある塔の階段の踊り場にいた。今日はハロウィーンで、俺たち三年生が初めてホグズミードに行く日でもある。そんな日に学校に残っているのは、もちろん俺の両親の情報を得るためだ。ちなみに目の前でポニーに跨がっているのは我がサー・カドガンである。

「カドガン卿、質問があるんだけどいい？」

「なるほど、むしろ神算鬼謀の智略をご所望か。遠慮せずに問うてみよう。快刀乱麻を断つがごとく、いかなる問題も解決してみせようぞ

！」

カドガン卿が槍を高く掲げ、ナポレオンのようにポニーを嘶かせる。当然、思いつきり落馬するまでが様式美だ。

「あ痛たた」

「カドガン卿大丈夫!？」

「うむ、心配には及ばぬ。それよりも早く教えるのだ。そなたの質問とやらを」

「えーと、俺の両親のことについて教えて欲しいんだけど……」

「どうしたのだ藪から棒に。まあ良い。ふむ……」

手を拱いて考える絵画の中の騎士を、俺は固唾を?んで見守った。振り落としたポニーが草を食み終えて昼寝をする頃になって、やっとカドガン卿は語り始めた。

「興味深い御仁だった。そなたの父ダニエルは信仰心が篤く、それゆえ慈愛に満ちていた。あれはそう、我とピーブズめの328度目の決闘の時だ。我が剣が彼奴をまさに刺し殺さんとした瞬間、ダニエルは勇敢にも彼我の間に割って入り、こう申したのだ。『争いに関係しないことは人の誉れである、すべて愚かな者は怒り争う』とな。我は矛を収めた。彼奴もかの御仁の人徳に敬服したのだろう、黙して去って行ったのだ。まっこと、天晴れな御仁よ」

「は、はあ……」

なんだか聖書的一幕にありそうな話だ。しかし、本当にたった一言であの傍若無人なピーブズを押さえられたのだろうか。ピーブズからの嫌われようから察するに、一悶着あったのは確かだろう。というか、絵とポルターガイストが決闘なんて現実的に考えておかしくないか？

「そなたの母は…… すまぬ、率直に申すとあまり印象に残っていない。常に物憂げな表情をしていおった。端的に形容するなら深窓の令嬢であるな。ただ……」

「ただ?？」

「どこか悪魔に魅入られているかのような仄暗さも漂わせておったよ
うな気もする。……すまぬ、かくのごとき曖昧な答えしかできぬ」

「いやいやいや、真剣に答えてくれてありがとう」

「代わりと申しては何であるが、この塔の頂上に引きこもっているかの占い師に訊くのが良かろう。我が記憶が正しければ、そなたの母とも交友があったようだ」

カドガン卿に礼を言つて、俺は石造りの階段を上がる。父の話はイメージ通りだった。平和を愛する敬虔な十字教徒。だが母はどうか？ 父親の印象が強すぎるのかあまり話題には上がらないが、カドガン卿とロックハートの評価は真逆だ。清廉潔白なのか、腹に一物隠していたのか。日記から推察すると、レインに似た雰囲気的人物のようだが。

はしごを登って古い学の教室に着く頃には、俺の息はすっかり上がってしまった。額の汗を拭い、乱れたローブを整える。ミカエラがいれば間違ひなく煽られていただろうが、彼女は朝からどこかに行ってしまったている。閉め切られたカーテンの隙間からお情け程度に注ぎ込まれた陽光が照らす部屋は、やはり薄暗い。

「ごきげんよう、ミスター・ビショップ。あなたがいらつしやることをお待ちしております」

深山から木霊してきそうな聞き取りにくい声。腕輪をがちやつかせて、トレローニー先生が教室の奥から現れた。唐突に声をかけられたのに内心ドギマギしつつ、俺は口を開いた。

「こんにちは先生。その、なぜ俺のことを……?」

「昨夜夢でお告げがありましたの。明日、迷える子羊が訪れるであろう……と。あたくし、すぐにあなたのことだとわかりました」

「流石ですね!」

トレローニーは気分を良くしたのか、スパンコールをヒラヒラとさせながら水晶玉の前に腰を下ろした。対面に座るよう俺を促す。

「あたくしが占って差し上げましょう。神妙になさって?」

「はい、先生」

背筋を伸ばしてご託宣を待つ。トレローニーは礼の胡散臭い占い師っぽい手の動きをしながら、濁りようなもないほど透き通った水晶を注視している。ようやくお香の独特な匂いに俺の鼻が慣れてきた時

にも、何の影も霞も現れないままだったが、先生は構わずに占い始めた。

「あなた、何かをお探しですわね。そしてそれはご自身の根幹に関わっている」

「はい、そうです……!」

「将来をグリム——死神犬が過っています。濃密な死の気配……しかしリングゴ、あなたは困難を乗り越え求めていたものを手にする……」

「マジですか!？」

「十字架の影が視えますわ。これは……林、いや森かしら。あなた、森の中の十字架に心当たりがあつて?」

「滅茶苦茶あります!」

「そう……そこに答えはございます……」

「ありがとうございます! 行ってきます!」

喜び勇んで立ち上がり、回れ右をして走り出す。うおおおおお! ついに手掛かりを掴んだぞ! やっぱトレローニー先生はすげえや!

「お待ちになって」

霧の奥深くから聞こえてきたとしか思えない声に引き留められて、俺は元の席に戻る。トレローニー先生は普段よりも三割増しの神秘的な微笑を湛えた。

「予言とは恵みをもたらす一方で、時に身を滅ぼしうるものです。逸る気持ちもわかりますが、冷静になって行動することをお勧めいたしますわ」

「了解です先生!」

「それと、ここにいらつしやつたということは授業の質問でもおありになったのではないですか?」

「いえ、そうではないのですが……実は俺の母のことについて伺いたく……」

「まあそうでしたの」

先生は立ち上がって紅茶を二人分用意すると、一口飲んでから話し

始めた。

「あたくしがフィデスと出会ったのはちょうどこの教室でしたわ。当時のあたくしは七年生で、彼女は一年生でした。かなり年齢が離れていましたが、深遠なる古い学の虜になっていたあたくしたちは意気投合、得がたい友人となりました。在学中は同じレイブンクローでしたからよくお話していましたし、卒業してからも手紙を繁く送り合っておりまして」

「とても仲が良かったんですね」

正直羨ましい。俺もこの学校に入ってから今まで、友達と仲良くなることを欠かしたことはないけれど、ここまではつきりと言い切れるかという自信がない。以前はミカエラと即答できたと思うんだけどな……。

「それで、母はどんな人だったんですか？」

「フィデスは、そうですね、とてもお心配りのできる方でした。落ち込んでいる方がいらっしやればすぐにその方が一番喜ぶことをして、たちどころに立ち直らせていましたわ。周囲からの信頼も厚かったと記憶しています」

「はあ…… あのう、何か悪い噂とかは……」

「全くございませんでした。ただ、強いて言えばですけれども…… 酷く未来を恐れていらしたようですわ」

「未来……？」

「ええ、ですが、これは古い学を修めた方にはよくあることです。あたくしも自分の予言が外れて欲しいと何度願ったか知れませんか。なので忘れてくださいまし」

ふんわりと柔らかな落ち葉を踏みしめ、木漏れ日の中を歩く。野草の落ちついた匂いが俺の肺を満たし、小道を素早く横切る茶色い小動物が目を楽しました。おそらく赤リスだろう。

俺は現在、禁じられた森に一人で分け入っている。理由はトレローニー先生の予言にあった十字架を見にくためだ。禁じられた森は無論禁じられているから禁じられた森だ。入っているのが見つかれ

ば減点や罰則は免れない。にもかかわらず、なぜ大胆にもこの強行軍をしているのか。それは今日がハロウィーンかつホグズミードの日で、先生や生徒たちの大部分は向こうに行ってしまったているからだ。監視の目が薄い絶好の校則破り日和という訳である。

目的地はレインの薬草探訪で訪れたこともあつてすぐに到着するかに思われた。しかし現実には甘くない。前回は愛すべきはこのナビゲートと最強の心友の守護があつたが、今回は己が身一つが頼りだ。当然、道に迷つたり、オーグリーに追いかけて回されたり、ケンタウロスに冥王星がいつになく大きいと話しかけられ続けたりした。

心身がへとへとになりながら、やつとこのことで開けた空き地に辿り着いた。安堵するのも束の間、十字架の前に寝そべる大きな黒い山くすんだ毛並みを見て取るに、野犬なのは間違いない。いびきをかいて気持ちよさそうに眠る大型犬を起こさないように、抜き足差し足、側を通る。よしよし、犬は気づいていない。

そんな時に、ポキリと不吉な音が鳴る。反射的に片足を上げて地面を見れば、二つに折れた小枝が視界に飛び込んできた。背後から聞こえる低い唸り声。急上昇する心拍数。

跳ね上がって振り返れば、つぶらな瞳と目がかち合う。伝える感情は怒気一色で話し合いの余地はなさそうだ。けれどもここまで来て尻尾を巻いて逃げるのは少々癪だ。いつでも戦略的撤退ができるように足のポジションニングを済ませた俺は、微かな勝ち筋をたぐり寄せるために目を皿のようにして眼前の獣を観察する。

犬は姿勢を低くして飛びかかる準備は万端のはずだが、一向にその様子はない。強く吠えられるのは正直かなり怖いのが、威嚇するだけに留まっているようにも見える。また体の大きさからは考えられないほど痩せこけていて、さつきから頻りに腹の音が鳴っていた。俺は警戒を解かずに、トレローニー先生の予言を反芻する。

「死神犬、試練、リングゴ……つまりこういうことでは？」

俺はおやつに持ってきていたリングゴを鞆から取り出し、黒い犬の方へ放り投げた。やにわにかぶりつくワンちゃんが、瞬く間に食べ終えて切なそうにこちらを見つめた。予備のリングゴを手前に投げる。犬

はおいしそうに食べる。

しばらく投擲と食事を繰り返すと、犬は満足そうに体を丸めた。どうやら交渉成立のようだ。俺は柔らかくなった犬の視線を背に受けて、十字架の前にひざまずいた。

『十三の無垢なる魂、此処に眠る』

両手を組んで目を閉じる。どうか、何かしら起きて良い感じに俺の両親のこととか俺のことがわかりますように……。

そよ風が頬を撫で、木々のざわめきが全身を包み込む。後ろでがさがさと犬が草を揺らした。かなりの時間祈ったが、何も起こらない。ダニエルの一人や二人降臨してくれると思ったんだけどなあ。

ふと瞼を開くと、犬が十字架の根元を掘っているのが目に入る。俺は慌ててその背にしがみつき、墓荒らしを止めさせようと試みた。

「ちよちよちよちよ、それは駄目だって！」

尚も掘り続ける犬畜生。幾重にもそこを鼻で嗅ぎ、ここ掘れワンワンする始末だ。これもトレローニー先生の予言なのかもしれないと思いつき、父や関係者各位に心の中で謝罪しつつ、俺はため息を吐いて盗掘に加わる。

やがて、かなり腐食の進行した金属の箱が顔をのぞかせた。ある種の防御魔法が仕掛けられているらしく、触ると一斉に魔法陣が展開してきたが、俺の瞳を走査するとなぜかロックが解除された。俺は中身に入っているであろう遺骨に祈りを捧げ、恐る恐る蓋を開ける。

「なにこれ」

出てきたのは、何らかの骨でもなければ、ありとあらゆる絶望と一握りの希望でもなかった。俺は白い靄が入った試験管を手に取り、目の高さまで持ち上げる。ためつすがめつ眺めてみるが、一体全体なんなのか見当もつかない。

犬が興奮して俺に吠え立てた。何やら伝えようとしている模様。ジェスチャーを頑張って読み解くと、この脱色したフカヒレの出来損ないみたいなのを頭にぶち込めば良いらしい。そんなことあるか？

半信半疑で綿飴を掬うように杖でフカヒレを絡め取り、こめかみに

杖先を当てる。ひんやりとしたものが入り込んできたかと思えば、俺は真夜中の森に立っていた。

突然の出来事に目を白黒させつつ辺りを見回す。場所は同じようだ。しかしさつきまで一緒にいた黒い犬のクロ（今名付けた）がおらず、代わりに二人の男女が佇んでいた。俺はにこやかに手を振って話しかける。

「いやー、今宵は美しい星空ですね。ところでつかぬことお尋ねしたいんですが——」

「ダニエル！ いつになったらわかってくれるの！」

我が渾身の時候の挨拶を無視して、灰を被ったかのような髪の少女が叱責した。対面の少年は静かに微笑むばかりだ。そのことがまずまず彼女の苛立ちを募らせるようで、こっちまで痛くなりそうな音量の歯ぎしりが聞こえてくる。

「憤怒は七つの大罪の一つですよ。どうか押さえてください、フィデス」

怒濤の展開に脳みそが追いつかない。ダニエル？ フィデス？

ということとはつまり、俺は過去に戻っちゃった……ってコト!? あの試験管はデロリアンか何かか？

置いてけぼりの俺を突き放すように両者の会話は進んでいく。

フィデスは頭を振り乱し、激流のごとく言葉を責め立てる。

「そうやって！ いつもあなたは神神神神！ どうしてもっと自分を大切にすることができないの？ もう三年生よ！ そろそろ魔法を使いなさいよ！」

「それはできません。私はホグワーツの生徒である以前に主の僕です。邪な術を使うことは許されていないのです」

俺と同じロザリオを握り、涼やかな顔で答える白髪の少年。どうも彼はホグワーツ『魔法魔術』学校の生徒でありながら、入学してから全く魔法を使わずに過ごしてきたらしい。いや、どうやって生き残ってきたんだよ。

「いくらあなたが祈れば思った通りの結果を起こせるといっても、限度ってものがあるのよー！」

「なぜです？ 出席やレポートはちゃんとこなしてますし、実技試験も杖と呪文を使っていないだけで他の生徒と遜色ありませんよ？」

「そういう問題じゃない！ あなた、このままだと死んじやうのよ？」
碧眼に涙を溢れんばかりに溜めて、フィデスはダニエルに詰め寄った。当の聖人はというと、満面のマジキチスマイルだ。

「天上の主の元に清廉潔白で帰れるのなら、本望です」

乾いた音。少女の右腕が勢いよく振り抜かれていた。笑みを崩さぬまま、ダニエルが紅葉型に赤く染まった頬を手で押さえる。もう片方の手で十字を組み、厳かに呟いた。

「ああ、慈悲深き我らが父なる主よ。哀れな少女をお赦してください」

再び殴打。黄金の目をフィデスに向けたまま、彼は後ろに倒れ込んだ。続けて馬乗りになり、フィデスは腕を振り上げた。何度も、何度も。

「ほらっ！ 早くっ！ オブスキュラス出しなさいよ！ さあっ！」

ダニエルは無抵抗で拳を受け入れている。その整った顔を濡らす、血と彼女の涙。無限ともいえる時間が流れた後、もはや弱々しく上下させることしかできなくなったフィデスの握り拳を優しく受け止めて、顔面を腫らした少年は立ち上がった。

「もうやめてください、フィデス。衝動のままにかような悪霊を解き放つてはいけません」

「でも、その濁った魔力をだせばあなたは長く生きられるのよ！ 本に書いてあったわ！」

「その情報が正しいとは限りません。それに——カハツ……！」

父が咳き込むと、その口元から黒と橙の靄が吐き出された。フィデスが背中をさする。止めどなく零れ落ちる瘴気を眼前にして、俺は呆然と呟いた。

「ミカエラ……？」

そこで幻のような光景は消えた。辺りに父と母の姿はなく、空き地はいつの間にか夕日に照らされてオレンジ色に染まっている。クロもどこかに行ってしまったようだ。割れた試験管が物寂しく光っている。俺は一人立ち尽くした。

「ってことは俺、もうすぐ死ぬの……?」